

異世界国家アルキマイラ〜最弱の王と無双の軍勢〜 試読版

序章

彼方かなたに見える進軍の土煙に彼は不敵な笑みを零した。

敵軍の総数はざっと二千。構成としてはオーガを中心とした鬼族の連合。

先頭に立つ赤い肌のオーガが敵将らしく、独自言語オルガドで喚きながらひたすら突撃を命じている。

「——ハ。たかが二千で攻めてこようとは、我が国は相当に見くびられているようだな」

敵軍の咆哮ほうこうを受け止めた青年は嘲笑あざわらうように口を開いた。

その姿は魔物ではない。人間だ。しかも何ら戦う力を持たぬ弱い人間だった。しかし迫りくる魔物の軍勢を前にして怯む様子など欠片かけらも見せず、不敵な笑みを崩そうともしない。

「お前たちもそうは思わないか。なあ？」

チラと振り返る青年。そこにもまた魔物の群れが存在した。しかも二千などという少数ではなく数万を超えようという規模でだ。その先頭に立つ青年は気負った様子もなく魔物の群れに声をかけ、叙事詩に謳うたわれる軍神のように右腕みぎうでを翳かざす。

「それでは数年ぶりに揃そろった八大軍団のお披露目だ。諸君、派手に行こう」

青年の名はヘリアン。

超大国アルキマイラを率いる王にして神、支配者にして絶対者。

最弱の人間でありながら魔物の軍勢を従える——万魔ばんまを統すべし王である。

第一章 ユメのような世界

『Tactics Chronicle』

それは第四世代型仮想現実体感型ゲームとして〈全感覚投影式〉を採用し、世に数多生み出された作品のうちの一つである。

ゲーム世界を五感で楽しむことのできる〈全感覚投影式〉は爆発的とも言える速度で普及したが、その中でこの作品が埋もれず人気作となったのは『幻想世界の現実化表現』が並外れてハイクオリティだったからに違いあるまい。

なにせ国家運営型戦略シミュレーションロールプレイングゲーム——大雑把に言えば箱庭ゲームという主流層から外れたジャンルでありながら、PVを公開しただけでメインの購買層はおろか主婦や女子高生の予約すら勝ち取ってみせたのだ。その作り込みの凄まじさは推して知るべしだろう。

——そりゃ買うわ。

ゲーマーを自称するならこれを買わずに何を買うのかとすら彼は思う。

それほどまでにあのPVは素晴らしく、彼の少年心を鷲掴みにしていた。そして際限なく高まっ

た彼の期待感に「タクティクス・クロニクル」は見事応えてみせたのだ。

初めてプレイした日のことは今でも鮮明に思い出せる。

発売日初日の早朝、ダイブポッドに身を横たえた彼——三崎司ことキャラクター名【ヘリアン】は一人の王として夢のような世界の大地に降り立った。

そうして視界に飛び込んできたのは見渡す限りの大草原。次いで感じたのは春風のような薫りと土の匂い。背の高い草を風が撫でていく音は細波にも似た響きで鼓膜を震わせ、興奮のあまり握り込んだ拳は確かな感触として脳を刺激する。

その圧倒的な『幻想世界』の存在感は、当時中学生だった三崎司へ身震いするほどの感動を与えた。「さあ、国興しを始めよう。俺たちの冒険はここからだッ！」

そんな馬鹿丸出しの台詞を叫びながら、ワクワクする気持ちを抑えきれない幼子のように草原を駆け出したあの日のことは永遠に忘れまい。

かくして、三体の配下を率いたヘリアンは「タクティクス・クロニクル」への記念すべき第一歩を踏み出したのだった。

——それから現実時間で数年経った現在。

ヘリアン王が率いる国【アルキマイラ】は、時に発展し、時に滅びかけたりしながら激動の時代を生き抜き、紆余曲折を経て世界の覇者たる超大国へと成長を遂げていた。

そして今日も今日とて飽きもせずゲームにログインしたヘリアンを迎えたのは、建国一五〇年を祝いに首都へ集結した国民の数々だった。

「おおー。さすがに壮観だな」

アルキマイラの国王——ヘリアンは感嘆したように息を零した。

城のバルコニーから見下ろした演説用の大広場には、世界中に散らばっていた各軍の将が自らの軍勢を率いて続々と集結しつつある光景が広がっている。

しかし、そこには一人として人間は存在しない。その全てが、魔物だ。しかもエルフやドワーフといった亜人種などは序の口として、悪魔や鬼人、妖精に魔獣、果てはスライムや死霊といった不定形の人外種族が出揃っていた。

それもそのはず。このゲーム「タクティクス・クロニクル」には「人間の王が魔物の国民を率いる」というファンタジー要素が組み込まれており、国民はその全てが魔物なのだ。

従って城下町を人外が闊歩しているのはごくごく当たり前の日常光景なのだが、様々な種族が整然と行進して広場に集結していくその様子は、自分の為してきた成果が目に見えるようで感慨深いものがあつた。

「ん、第八軍団も到着したか。やつぱりドラゴンは目立つな」

上空から舞い降りてくるのは竜種の姿だ。

一体でも街を焼き払えるほどの脅威である竜種が、群れ単位で大広場へと降下していく。

これだけでもアルキマイラの保有戦力の強大さ、ひいてはその脅威度が測れるというものなのだが、精鋭軍が集結する『建国祝賀祭』の開催直前というタイミングで無謀にも戦争を仕掛けてきたオーガ一派は何を考えていたのだろうか。

いやまあ、ボスオーガに積まれていた人工知能が特に阿呆あほうだったとしか言いようがないのだが。

「けど、わざわざ喧嘩けんか売ってきたんだからせめて軍団長ぐらいは使わせろよな。全滅させる前に降伏されちゃったし、不完全燃焼感が半端はんぱない」

唇くちびるを尖とがらせるヘリアンだが、まあ祭りの前の催しだったとでも思うか、と気分を切り替える。

なにせこれから行われる『建国祝賀祭』は超大国アルキマイラの一大催事だ。ネガティブな感情を抱えたまま開催を迎えるのは勿体もったいないにも程がある。

それから執務室にて装備を儀典用に切り替えつつ時間を潰つぶした後、各軍団が整列を済ませているのを〈地図マップ〉で確認した。演説効果イベクを高める各種舞台装置も設置完了済み。満を持した。

——となれば、そろそろ『彼女』が来る頃合ころあいだらう。

国王側近という役職に指定したN P Cの行動パターンを知り尽くしたヘリアンは、執務室の扉に向き直ってカウンントダウンを口ずさむ。

「五……、四……、三……、二……、一……」

ゼロカウンントとともに、コンコン、と控え目なノック音。

ヘリアンの入室許可を受けて扉を開いたのは、予想通りの人物だった。

「失礼」いたします、【ヘリアン】様」

静かな声で告げ、入室してきたのは二十歳前後の女性だ。

銀糸のような長髪を首の後ろで束ね、前髪から覗く切れ長な瞳ひとみには琥珀色の光が浮かんでいる。

そしてその頭頂部には、獸人種の特徴である三角形の狼耳が銀髪の間から飛び出していた。腰からはフサフサの大きな尻尾が生えており、緩々とした動きでそれが左右に振られている。

彼女こそ、国王側近にして第一軍団の長——月狼のリーヴェだ。

「建国祝賀祭」の【式典】【準備】が【完了】しました。【壇上】へ【移動】してください」

〈鍵言語〉と呼ばれる幾つかの重要単語を組み合わせ、AIにより自動生成された台詞を口にしたリーヴェは、国王であるヘリアンに対し【丁寧なお辞儀】の動作を実行した。

「うむ、出迎えご苦労。それでは【壇上】へ【移動】する。【付いてこい】」

「【承知】いたしました」

口頭で発した〈鍵言語〉に従い、執務室を出たヘリアンの後ろを第一軍団長が追従する。

高性能なAIに最初はひたすら感心したものだ、とヘリアンはプレイを始めた日のことを懐かしんだ。

どうにも一五〇年目という節目の建国祝賀祭を迎えて感傷的になっているのかもしれない。

（今年の演説はどうすっかなー）

歩きながら演説の台詞を思い浮かべていく。

そこまで凝らずとも『演説』というアクションがもたらす効果はルールに基づき定められているのだが、そこを拘ってこそそのロールプレイだ。

（よし、今回は少佐風でいくか。演説といえばあの人だしな）

壇上まで向かう廊下でヘリアンがそう心に決めた時——ソレは起こった。

「……………うん？」

視界の端にノイズが走る。

装置ダイフボッドとの接続率が落ちたのか、と訝いぶかしんで設定仮想窓を覗き込むが数値は正常値のままだ。はて、と首を傾かしげる。

すると今度は耳障りな音が聴覚を刺激し始めた。

「おいおい、何でもまたこのタイミングで……。せつかくの式典イベントだったのに、しつかりしろよ運営さん。自国ウチだけじゃなくて他国でも建国祝賀祭やつてるところ多いハズなんだけど？」

まあしばらくすれば直るか、とヘリアンは溜息ためいきを吐きつつ立ち止まる。

そしてそのまま待機し、障害が沈静化するのを待とうとした——その時だ。

「——ッ!? な、なんだ!?!」

突如として平衡感覚が狂った。

まるで旧時代のスフィア式洗濯機に放り込まれたかのような感覚に晒さらされ、上下左右の認識すら危うくなった。まともに立つことすら困難になり、たまらず廊下に座り込む。そこへ一瞬の浮遊感の後、高所から着地したような衝撃が身体全体を襲った。

しかしそれが境目だとしても言うように平衡感覚が元に戻り、ノイズもまた徐々に収束の気配を見せ始める。それからたつぷり三十秒ほどかけて、ようやく視界と聴覚が安定した。

「やっと収まった……何だったんだよといったい。バグか？ まさか天災イベントじゃないだろうな」
愚痴ぐちりながら立ち上がる。

せつかくの晴れの日に水を差すようなイベント発生はいただけくない。

「ヘリアン様！ ご無事ですか!?!」

駆け寄ってきたリーヴェがヘリアンの体を上から下まで注意深く見る。どうやら怪我^{けが}をしていないか診ようとしているようだ。

「ん？ ああ【大丈夫】だ。【気にするな】」

すぐにNPC^{リフレクション}が行動を起こしたということは今の現象はバグ^{バグ}の類ではないだろう。

ということは天災イベントである可能性が高い。

先ほどの衝撃から察するに大地震か、はたまた隕石^{隕石}の落下か。発生箇所によっては広範囲の施設に大被害が出て、復旧に時間がかかる上に市民の幸福度が下がるパッドイベントの一つだ。

よりにもよって今日かよ、と眉間^{みけん}に皺^{しわ}を寄せながらヘリアンは城の外を見やる。

そして廊下の窓から見える景色が一変している事実を知った。

「……………へ？」

城下町は健在だ。それはいい。ざっと見た限りでは倒壊した建物は見当たらず火の手も上がっていない。勿論クレーターの類も見受けられない。

では何が問題かと言えよその外だ。

城下町を覆^{おほ}う城壁の向こう——ただ広い草原が広がっているはずのその場所が、鬱蒼^{うつそう}とした深い森で染められていたのだ。

まるでどこぞのジャングルか樹海の様相を呈している。

「え、なんだこれ。地形干渉系の極大魔術か？ いや、でも今は第三軍団と第四軍団が首都に駐屯してるんだぞ。あいつらの都市結界を突破できるような極大魔術なんて単体詠唱じゃ絶対無理だろ。しかも第六軍団までいるんだから、共鳴詠唱や儀式詠唱なんてアホみたいに目立つものを事前に察

知できないはずはない……とくれば」

これは敵対勢力の仕業しわざではない。

それなのに、いきなり首都が森に覆われてしまったという事は。

「天変地異イベント？ いや、神の試練イベントか？」

どちらにしても碌ろくでもないことに変わりはない。

「ヘリアン様……こ、これは……!？」

少し後ろに立つリーヴェエが慄おのいたかのように戸惑いの声を発した。

その様子から察するに、どうやら精神系バッドステータス【恐怖】に陥おとっているようだ。

……珍しい。

彼女は【人物特徴】に【勇敢】を持っているので高い耐性があるはずなのだが、それでもなお

【恐怖】に陥おとれるような影響度の高いイベントということか。これは厄介だ。

「落ちてけりーヴェエ。一旦【執務室】に【戻る】。【付いてこい】」

〈鍵言語〉で追従するようリーヴェエに指示し、足早に執務室に向かう。

部屋に着くなり、サイドテーブルに鎮座するドでかい宝珠に手を触れてすぐさま起動。

まずはこのイベントの影響範囲がどこまで及およんでいるのかを確認すべく、最も手近な拠点の

担当官たにとうくわんに接続アタセしようとして、

「？ アクセス不能？ いや、そもそも接続先の選択リ肢ストが出てこない？」

何故なぜだろう。このようなことは今まで一度も起きたことはなかった。

アクセス不能なのはまだいい。接続先の宝珠が破壊されていたり、敵対勢力により妨害ジヤムシツクされてア

クセスできなくなったことは前にもあった。だが、接続先としての選択肢そのものが出てこないというのはどういうことか。

ヘリアンは訝しみながらも〈地図〉を開く。

「——ハアップ!」

ない。なかった。いや〈地図〉自体はあったのだが、そこには支配下に治めている拠点が一つたりとも表示されていなかったのだ。

それどころか首都以外の全域が『未探索地域』を示す灰色で埋まっている。〈地図〉の中心部にボツンと首都が描画されているだけで、残りは灰色一色に染め上げられてしまっていた。

あまりに予想外の結果にしばし啞然とする。

「これってまさか……強制転移か？ 探索してない未開の地に飛ばされた？ 嘘だろオイ」

強制転移はごく稀に発生するバッドイベントの一つだ。

自然災害的に発生し、個人や部隊が一瞬で別の座標に飛ばされる。戦争中に雪中行軍させていた奇襲部隊が数百キロ彼方に飛ばされた時などは、あまりの不運に思わず絶叫したものだ。

しかし都市丸ごとが転移させられたという事例は聞いたことがない。

ましてや未探索地域に、それも国の要である首都だけが強制転移させられるなどという暴挙は絶対でありえない——と断言したいところなのだが。

「……………やりかねないな、あの運営チームなら」

なにせ病的なまでの作り込みが売りのゲーム会社だ。良くも悪くも変態技術者と名高い開発チームは、自由度の高さと作り込みの細密さを極めて高い水準で両立させてこの世界を創った。

そうして強固に築かれた舞台の上で多種多様なイベントが展開されているわけなのだが、ファンタジー世界に静止衛星軌道砲などを密かに実装していた名物ディレクターがトップを務めているような運営チームである。

過去に開催されたイベントの前科もあり、どんなに奇天烈な展開だろうが「アイツらならやりかねない」と思わせる謎の信頼感があつた。

「あ……兎にも角にも情報収集からだな。現状把握できないとどうしようもない」

果たしてこれが神イベントと称賛されるものか、あるいは糞イベントと唾棄されるべきものなのか。その判定は後の自分に任せればよいことだ。

そうと決まれば迅速に対応を開始せねばと、まずは傍らの国王側近へ向き直り命令を下す。

「リーヴェ。どうやら【我が国】の【首都】は【強制転移】させられたようだ。となれば、まずは国の現状を把握する必要があるだろう。私はこれから【各軍団】へ最低限の【指示】を送る。【お前も】また【各軍団長】と【連絡】を取り、【現状】を【把握】すべく【情報収集】に努めよ」

「……ッ！ 承知しました。ご随意に」

深く礼をして立ち去るリーヴェを見送り、タッチパネル式の空中投影ディスプレイを表示させた。命令発信用の〈戦術仮想窓〉を呼び出し、各軍団へと矢継ぎ早に指示を出す。

第一軍団は従来通り王の補佐。

第二軍団は住民の安否確認と、治安維持に従事。

第三軍団は怪我人の治療、および外壁に沿った首都結界の点検と維持。

第四軍団は魔術による都市外の遠視と調査。

第五軍団は第二軍団の支援と、損壊した施設があれば第七軍団と共に応急処置。

第六軍団は第四軍団と協力して内外の情報収集に専念。

第七軍団は各施設の点検と修復。

第八軍団は首都圏内の上空から偵察と周辺警戒。

だが、いずれの軍団も国外を刺激するような行動は固く禁じる。

まずは国内の現状把握を最優先。

これを基本方針として、後は各軍団長の指示に従い臨機応変に対応。

一通りの命令を発信した後、ヘリアンは椅子の背もたれに体重を預け、天井を仰ぎ見る。

「さーて……こちらら節目の建国祝賀祭を潰されたんだ。それに見合うだけのイベントを期待させてもらうぜ、運営さん？」

誰もいない執務室で、ヘリアンは挑発的な笑みを浮かべて呟いた。

2.

さて、軍団に指示を出し終えたのでとりあえずやるべきことはやった。

一刻も早く現状把握をして次なる行動に移りたいところだが、未だ各軍団は情報収集作業の最中だ。仮想窓には知っている情報しか可視化されないの、現状把握をするためには配下たちがある程

度の情報収集を終えるまで待つしかない。

「けどまあ、何もしないでいるってのも苦痛なわけで」

新たに〈通信仮想窓〉を開錠。目の前に浮かべた半透明の仮想窓には、過去に接触した他のプレイヤー——他国の王の名前が並んでいる。

誰かと会話を^{チャット}して、情報収集兼暇潰^{ひまつぶ}しのなんちゃって外交でもしていようとプレイヤーリストを呼び出してみたわけだ。が、

「あれ？」

リストに表示された全てのプレイヤー名が灰色で表記されていた。

これは自分以外の全プレイヤーがオフライン状態であることを意味している。

しかし多くの国で建国祝賀祭が行われているはずの今日この時に、一人もオンラインプレイヤーがいなかったのはいったいどういうことなのか。

はて？ と首を傾げているところへ、コンコンと控え目なノック音。

「ヘリアン様、リーヴェです。現時点の調査結果についてご報告に参りました」

「入れ。【入室】を【許可】する」

音もなく開かれる執務室の扉。

するりと入ってきたリーヴェの背筋はいつも通りピンと伸びていたが、頭頂部の狼耳がへにやりと力なく折れている。どうやらあまり良くない報告のようだ。

「それでは早速ですがご報告申し上げます。まず首都の外ですが、完全に森に覆われていました。しかも第六軍団からの情報によれば、何らかの幻惑効果が森全体に展開されているようです」

「^{フィールド}地形効果による幻惑^{ジャミング}効果か……。それじゃ第四軍団の人員を回して改めて調査させるかな。安全

第一で、魔術使つて遠くから」

「第四軍団長自らが既に試したそうですが、幻惑効果の解析に手こずっているらしく即座に結果を出すのは難しいとのこと。さらなる調査のためには足を使う必要があります」

「なんだ、既に試した後か。それなら森への地形適性を考慮して、エルフ系種族を中心に臨時の調査隊を編成……、え？」

「承知いたしました。第四軍団長に追つて指示を伝えます」

——ま、待て。

「次に第八軍団所属の竜族による航空偵察……というより、空からの遠視の結果についてですが、周囲一帯には一面の深い森が延々と広がっているようです。北東方面だけは比較的緑が薄いようですが、首都結界範囲内に限定した低空からの観測ではこれ以上の確認が難しいとのことでした」

——待ってくれ。

「また、第八軍団の竜どもが『もつと高度を上げさせろ。もしくは首都結界の外へ直接偵察に向かわせろ』などと喚^{わめ}いていましたので、殴つて黙らせておきました。国外を刺激するなどの王命をきちんと理解できていなかったようです。後々の再教育は第八軍団長に引き継ぎました」

——だから、待てて。

「続いて国内の治安に関しまして。国民が突然の異常事態により浮き足立っていましたが、第二軍団と第五軍団の働きにより現在は平静を保っております。ただ、最近併合したオーガの一派が……」

「——待て、リーヴェ」

声は震えていただろう。

王の振る舞いではなかったとも思う。

けれど、これ以上黙っていることなどできなかった。

「……? はい、何でしょう。何か問題でも?」

リーヴェは怪訝けげんそうな表情を浮かべている。それは見たことのない感情表現エモーションだった。

既に彼女の【恐怖】の精神状態バグドステイクス異常は解消されて【平静】に戻っているはずだというのに、未だに初見の感情表現エモーションを見せているのはおかしい。【平静】時の感情表現などは全パターンとうに見飽きたはずだ。

しかし、それすら些細ささいなことで割り切れてしまうほどの大きな違和感があった。

なにせ先ほどからの会話では、入室許可外にヘリアンは〈鍵言語〉キーワードを発していない。それなのにリーヴェはヘリアンの独り言の台詞に反応し、会話が成立していたのだ。

——ありえない。

昨今のAIがいくら優れているとはいえ、完全に人間のように振る舞える領域にまでは至っていない。「タクティクス・クロニクル」においても、幾つかの決まり事ルールを人間側が守ることによって、まるで人間とAIが自由に対話しているように見せかけているにすぎないのだ。

故に人間であるヘリアンが、機械であるリーヴェとこうまで自由なコミュニケーションを成立さ

せている事実は、どう考えても異常な出来事だった。

「い、いや、落ち着け……落ち着くんだ」

自分に言い聞かせるように呟く。

こういった通常では考えられない事態に遭遇した場合、まず行うべきはGMへの緊急連絡だ。

ヘリアンは仮想窓を操作し、即座に管理者呼出のコマンドを実行する。

しかし反応がなかった。

コマンド実行に成功したとも失敗したとも表示されず、まるで何も行われなかったかのように仮想窓は沈黙を保っている。

「……………シ、設定仮想窓…開錠。選択…離脱。即時実行！」

現実世界に戻るための離脱コマンドを発声操作——反応なし。

慌てて直接操作で設定仮想窓を操り、緊急離脱のコマンドを手動実行——反応なし。

「いやいや待って待って……おかしいって。なんで応答がないんだ。これ緊急用コマンドだぞ!？」

最初から手順をやり直し、改めて緊急用管理者呼出を即時実行——反応なし。

副作用を覚悟の上で強制終了を即時実行——反応なし。

足が震える。嫌な汗が止まらない。

「ヘリアン様？ 顔色が悪いようですが、どこかお加減でも……」

尻尾を力なく垂らしたりヴェエが心配するように顔を覗き込んでくる。

体調不良かと訝しむリーヴェエは「失礼いたします」と断りを入れてから、ヘリアンの前髪を掻き

上げて額にその手を触れさせた。

そうしてヘリアンが額に感じるのは、冷たくしっとりとした女性らしい掌てのひらの感触。

——恐る恐る、リーヴェの顔に右手で触れた。

「え？ ……あ、あの？」

戸惑ったような仕草に表情の変化。自然すぎる反応に加えて初見の感情表現エモーション。

頬ほおに当たった指先からは特有の柔らかさが感じ取られ、彼女の体温も伝わってくる。

……そこまではまだいい。

〈全感覚投影式〉は感触や温度といった五感をプレイヤーに伝達可能だからだ。『柔らかさや温度を感じとる』という点については以前から実現できていた。

しかしそれはあくまで上辺だけのものであり、一定未満の感覚しか得られない味気のないものだったはずだ。家庭用ゲーム機の性能限界やコストの問題から、また仮想現実を本物の現実だと錯覚してしまわぬようにとの配慮から、『作り物の感覚』しか得られないよう調整されている。

だと言うのに、伸ばした右腕に当たる彼女の吐息は何だ。

右手が触れる首筋から感じ取れる鼓動は何だ。

徐々に紅潮こうしょうする頬の自然な色合いは何だ。

女性特有のこの甘い香りは何だ。

……ありえない。こんなことは絶対にありえない。

表現しようと思えば技術的には可能なのだろう。

だが、ここまで緻密な情報を娯楽として積み込めるかと問われれば断じて否だ。

一キャラクター単位にこんな莫大な情報量を持たせようものなら、秒間数千ペタフロップス程度の計算速度ではとても処理が追いつかないはずだ。最新のスパコンだつて対応できたものか怪しい。そこまで思考が至った時、ふと頭を過ぎったキーワードがあった。

先日書店に行つた際に見かけた広告。そこに書かれていたとある文言。五〇年ほど前のネット小説で爆発的に流行して一世を風靡し、最近再加熱しつつあるジャンル。たしか、不運な事故や神様のミスの被害に遭い、日常から切り離されて、漫画やゲームに似た世界に飛ばされるだとかいう――

異世界転移。

ゾツ、と血の気の引く音を初めて聞いた。

背筋に氷柱を刺されたかのように寒い。勝手に呼吸が荒くなる。気持ち悪い。立っていられない。視界が歪んでいる。吐き気が止まらないんだ。

「へ、ヘリアン様……ッ!？」

ふらつくヘリアンの身体をリーヴェが抱き止める。

彼女の顔に浮かぶのは、いつもの鋭い目つきからは想像もできない表情だった。

先ほどまで赤みがかつていた頬は青白く、その瞳からは相手の身を氣遣う感情が窺える。

しかし感情表現を超えた現実的すぎるその仕草と表情は、ヘリアンからすれば受け入れがたい現実を突きつけられているようで、もはや不気味にすら感じられた。

「な……なんでも、ない」

辛うじてそんな言葉を口にする。

馬鹿げている。アニメや漫画の見すぎだ。異世界なんてあるわけがない。アレはあくまで創作物だ。己おのれの中の常識がそのような反論を並べ立てるも、一方で目の前の現実を説明可能な論理的仮説は組み上がらない。

「お座りください。すぐに第三軍団長を呼んで参ります。それまでどうか——」

「なんでもない！ 呼ぶな！」

咄嗟とっさに口にした制止の言葉は、意図せず怒鳴り声となった。

ビクッ、とリーヴェが身体を震わせる。

「あ、いや……本当に、なんでもないんだ。少し立ち眩くらみがしただけ、だから、放っておいてくれ」
取り繕うような言葉。いや、実際にただ取り繕っただけの台詞だろう。けれど今の精神状態で誰かに会うなどできるわけがなかった。

……もしかしたら、国王側近という役職に指定したNPCのAIだけが改良されたのかもしれない。

それならば、プレイヤー一人につき一体のNPCだけならば、現在の一般商業用技術でも人間的な振る舞いをさせることができるのかもしれない。まだその可能性が残されている。だから他のNPCに会うわけにはいかなかった。

とにかく落ち着きたい。頼むから冷静になるための時間をくれ。こんな状態で誰かに会うのは色々と無理だ。

「か、各軍団に指示は出した。今はその報告待ちだ。お前も……軍団長からの報告を再度取り纏めておけ。ある程度の情報が集まり次第、改めて報告を聞く」

「……しかしそれよりも、一旦休息を取られたほうが」

「大丈夫だ」

リーヴェの表情は焦燥の色が強くなっている。

心から主人を氣遣っているかのようなよくなってきた表情。 こわいみ 声色。台詞。

……やめてくれ。ゲームにない仕事を、これ以上見せつけないでくれ。

「せめて診察だけでも……」

「くだい！ 大丈夫だと言った！ 退出して情報を取り纏めておけ！」

主人の怒声にリーヴェは身をすくめた。

その姿に、頭の隅に追いやられた理性が余計な仕事をして、まるで叱られた子犬のようだと連想してしまふ。

「……失礼いたしました」

物言いたげな——最後までヘリアンの身を案じるような表情を見せながら、しかし肅々と頭を下げてリーヴェは退出した。そうして執務室に残されたのは、身を氣遣ってくれる配下を怒鳴りつけて追い出した、虚ろな王の姿だけだ。

「……設定仮想窓…開鏡。選択…緊急離脱。即時実行」

反応はない。

「……設定仮想窓…再開鏡。選択…緊急用管理者呼出。即時実行」

反応はない。

手動操作で一度設定仮想窓を閉じてから再表示させ、改めて離脱ログアウトと管理者呼出のコマンドを実行したが、それでも、やはり、なんの反応もなかった。

3.

それから三十分は経つただろうか。

あるいはまだ三分程度しか経っていないのかもしれない。

クッションの利きいた椅子に体重を預けて天を仰いだまま、ヘリアンはそんな益体もないことを思考する。

……いい加減、現実逃避も限界に近い。

正常かも怪しい頭を無理矢理に稼働させ、現状を説明することのできる可能性を列挙する。

「……可能性その一。「タクティクス・クロニクル」をプレイ中、バックグラウンドで革新的なバージョンアップが実施されてA Iが超絶進化。五感に関しても同様に、バージョンアップによって知覚可能な情報量が莫大に増えた」

否定否定。不可能だ。技術面をクリアできると仮定しても、バックグラウンドで処理するとすれば何十時間かかるか分かつたものではない。

また五感に関しては完全に規約違反だ。特に触覚と味覚に関しては現実リアルに寄せすぎないよう、一定までの感覚しか感じられないよう厳しく法規制されている。現実世界の社会生活に著しい悪影響

を及ぼす危険性を指摘されてのことだ。仮想現実体感型ゲームの黎明期^{れいめいき}、まだ規制内容が正しく整備されていなかった頃にかんりの社会問題となったこともあった。

故に、運営会社がここまでリアルな五感情報を取得できるようにバージョンアップを行うことなど絶対にありえない。「タクティクス・クロニクル」のサービス停止どころか、企業の存亡^かに関わる一大事件にもなりかねない暴挙だからだ。

「可能性その二。壮大なドッキリ。これは実は現実世界であり、俺はゲームと似たような場所へ寝ている間に拉致^ちされた。さっきのリーヴェは本物の人間で、犬耳とフサフサ尻尾はただのアクセサリ。つまりはよくできたコスプレ」

否定^{ネガティブ}。無意味だ。たかが一般人へのドッキリのためにゲームそっくりの城を用意してどうなる。それに先ほどのリーヴェの耳と尻尾は完全に違和感がなかった。挙動についても不自然なところはなく、ごくごく当たり前のものとしてそこに存在していた。

そもそも、仮想窓^{ウインドウ}を開くことも各軍団に指示^{オーダー}を飛ばすことだってできたのだ。言うまでもなく、そんな魔法のような真似^{まね}は現実世界ではできない。

「可能性その三。これはゲーム中だが、俺の意識は別の専用サーバに転送されている。そしてそのサーバでは別バージョンの「タクティクス・クロニクル」が稼働中。そのスパコン並みに高スペックな専用サーバで、俺は何らかのテストターとしてこんな馬鹿げた体験をさせられている」

否定……はできない。まだその可能性は残っている。

企業の倫理規定や仮想現実体感型ゲーム特有の厳しい規制に著しく抵触してはいるものの、そこに目を瞑^{つむ}れば技術的には可能かもしれない。人間のように振る舞える高性能AIが積まれているのも、

体温や肌の感触や脈動などといった莫大な情報データの保有者もリーヴェ一体だけだとすれば、データ容量や演算処理能力的にも実現不可能ではないように思える。

だが、それを立証するには確かめなければいけないことがある。あくまでリーヴェだけが例外である、という事実を確定させなければいけない。

「――」

ヘリアンは執務機の引き出しから純銀製のナイフを取り出した。

ややあってから左手を顔の前に翳かざし、まるで本物そのものであるかのような現実感を持った掌をじっと見つめる。

そしてその掌にナイフの刃を押し当て――「頻り躊躇ひとしまつてからスツと横に引いた。

「痛ッ……」

痛みが走る。まるで希釈されていない本物の痛み。これも規約違反だ。〈全感覚投影式〉でのダメージ表現は多少の衝撃や刺激を感じる程度に抑え、痛みミにまでは達しないよう制限すると規約に明記されている。

だが今更この程度の規約違反は予想の範疇はんちゆう。むしろ問題は、この後。

「血が出てきた……」

一本線の切り傷から流れ出る赤。拳を強く握ればあつという間に溢あふれてきた。滴したたる赤に鼻を近付ければ血の臭においが鼻腔びこに届く。現実リアルと寸分違わぬ圧倒的な現実感。

これにより、莫大な情報量を与えられたキャラクターデータは「リーヴェ」のみではなく、少なくとも「ヘリアン」を含めた二体以上が存在するという事実が確定した。

故に可能性その3もまた、否定だ。

「可能性その4……………夢オチ」

なんとか絞り出したその可能性は否定したくない。左手の切り傷がジンジンと痛むが、以前夢の中でほったたを思い切り掴つても目覚めなかったことがあった。今回も同じ類だと思いたい。だって、もう、これぐらいしか、可能性が残っていない。

この可能性を取り除いてしまえば、ありえないはずのこの現実を直視するしなくなる。

「……………」

そうして項垂れているところへ、コンコン、とノック音。

本日三度目のその音は、どこか遠慮がちな響きに聞こえた。

「【入れ】」

「……………失礼、いたします」

〈鍵言語〉を使って入室許可の意を伝える。

静々と扉を開けて入ってきたのは、予想通りリーヴェだった。

表情こそ澄ましているが、頭頂部にある三角形の狼耳はペタンと伏せてしまっており、ふさふさの銀尻尾も力なく垂れ下がっている。……………その原因は考えるまでもないだろう。

「……………その、改めて情報を取り纏めて参りましたので……………ご報告を、と」

「ああ——いや、その前に言うべきことがある」

ビクッとリーヴェが肩を揺らした。

悪戯をして主人に折檻される前の子犬のようだった。

「……リーヴェ、すまなかつた。先ほどの私は気が動転していたようだ」

「えっ?」

「首都丸ごとの転移などと、このような異常事態は私としても少なからず衝撃的だったようだな。お前には悪いことをした。許してくれ」

謝罪の言葉を述べる。

そして頭を下げようとしたところで、ギョツとした様子のリーヴェに制止された。

「い、いえッ! 私が、その、差し出がましいことを申ししてしまっただけの話で、ヘリアン様が謝るようなことではありません! 私こそ申し訳——」

「いいや、謝るべきは私だ。オマエにとっては心地が悪いだろうが私の謝罪を受け取ってくれ。これは私にとって……俺にとって、必要なことなんだ」

リーヴェの台詞を遮り、押し付けるようにして謝罪する。

……別に、異世界転移などという馬鹿みたいな現実を受け入れたわけではない。

どうせこれは夢だ。こんなことはありえない。なら十数分もすれば眠りから覚めることだろう。

だが一方で、夢だからといって好き勝手やっつていい道理もない。少なくとも先ほど自分がリーヴェに対して怒鳴りつけたのは完全に八つ当たりだった。人としてなあ、あで済ませてよいことではない。なので謝罪する。至極当然のことだ。

それに万が一——考えたくもないが、仮に、万が一の話として、これが夢ではない『何か』だとしても王らしく振る舞っておくに越したことはないだろう。

精神衛生上の観点からも、そのぐらいの保身は図っておいて損はないはずだ。

「……………」

なおもリーヴェは何かを言いたげな様子だ。

しかしふと何かに気付いたように鼻を鳴らし、その視線をやや右下方に向ける。

彼女の視線を追えば、そこにはナイフで切り傷を作ったヘリアンの左手があった。机に隠れて彼女からは見えていないはずだが血の匂いで気付かれたらしい。

さすがは狼獣人系の【月狼^{マナガリム}】だ。

今の今まで気付かれなかったのは、主の勘気を蒙^{こうむ}ったことで気が動転していたのだろうと察せてしまい、八つ当たりをした罪悪感が胸に刺さる。

「ああ、これか？」

左手を軽く上げて傷口を見せる。

するとリーヴェは澄まし顔から一転、今にも泣き出しそうな表情になった。

女の涙など見慣れていないヘリアンは慌てて口を開く。

「い、いや、大したことない！ 手違いで少し切っただけだ。気にしなくていい」

「……その、またしても差し出がましく恐縮なのですが……どうか、治療を……」

「大丈夫だ。こんなものは唾^{つば}をつけていれば治る。そんなことよりも現状把握を優先したい」

リーヴェの顔を見ていられず『これからのことについて話したい』と無理矢理に話題を変えた。

「あえて繰り返すが、現状の把握が最優先だ。各軍団長は今どうしている？」

「現在はそれぞれヘリアン様が各軍団に下された命令に準じ、各々の軍団を指揮していますが……」

「そうか。なら……各軍団長を謁見^{えつけん}の間には集めることは可能か？ 十五分ほどだけでいいんだが——」

「可能ですッ！」

前のめりで返事がきた。眼前までリーヴェの顔が迫る。睫毛の本数まで数えられそうな距離だ。……何が彼女をそうさせるのか見当もつかないが、必死すぎやしないだろうか。

「そ、そうか」

ほんの少し引きつつ集めるべき軍団長を告げ、十五分後に謁見の間に参集させる旨を伝える。

「承知いたしました！ つきましては、まずは手近な第三軍団長から呼んで参ります！」
失礼いたします、と深い礼をしたリーヴェが足早に執務室を出ていくのを見送る。

何が彼女をそんなに必死にさせるのかと首を傾げようとして、去り際の台詞に思い至った。

「ああ、なるほど……。どうにかして俺を第三軍団長に会わせようとしてたってことか」

第三軍団長は治療魔術のスペシャリストだ。

王が拒絶した以上は執務室まで連れてくることはできないが、謁見を開くとあらばその機会に乗じてどうにか治療を、ということだろう。

「設定通りの忠犬だな。いや、アイツは狼だけどさ」

随分と再現性の高い夢だ、などと考えながら未だ出血が続く掌を見る。

「やっぱり先に治療を頼んでおいた方がよかつたかな……無茶苦茶痛くなってきた」

そんな情けない台詞を口にしたがら適当な布を掌に巻きつけておいた。

一介の学生でしかない自分には医学の心得などないが、とりあえずの応急処置にはなるだろう。謁見までに夢が覚めてくれれば、と願いながらしばし謁見室の椅子に体重を預ける。

しかし無情にも時は流れ、謁見の時間がやってきた。

「タクティクス・クロニクル」はファンタジー要素を取り入れたS L R P Gだ。

そのため、普通の史実戦争ゲームと比較すると多数の相違点が存在する。

代表的な例としては配下の育て方如何によつては無双ゲーが可能という点だろう。それこそ大國の軍団長クラスの配下ともなれば、雑兵相手に単騎がけて一騎当千を体現することも可能である。しかしその一方、王本人の戦闘力は皆無だ。

生命力をはじめとした各種身体能力は現実世界の人間並みかそれ以下であり、これを成長させることもできず、しかも攻撃力に至つてはシステムのゼロに設定されている。

要するにこのゲームでは、配下が強い一方で王自身は最弱の存在として定められているということだ。

そしてそんな人間の王が従える国民は、弱肉強食の理に生きる屈強な魔物たちであり、何が言いたいのかというと『万が一叛逆されようものなら、ヘリアンの命運はそこで尽きる』ということである。——つまりは、超怖い。

「よく集まってくれた、軍団長諸君」

そんな恐怖心などおくびにも出さず、ヘリアンは居並ぶ軍団長に向けて鷹揚に告げた。

ビクビクしながら喋るなど王らしくないぞと自分に言い聞かせ、必死にありもしない威厳を演出

する。

そしてやはりというべきか、リーヴェ以外のキャラクターも「人格」を有しているように見受けられた。先ほど左手を治療してくれた第三軍団長の立ち振る舞いも、明らかにチャチなAIの挙動ではなく、固有の「人格」を持った存在そのものでしかなかった。

「……できれば腰を据えて話をしたいところだが、残念ながら今の我々には時間の余裕がない。早速だが本題に入るとしようか」

前置きの言葉を簡単に述べ、ヘリアンは居並ぶ軍団長に視線を向けた。

アルキマイラの軍勢は合計八つの軍団から構成されており、各軍団にはそれぞれトップとなる軍団長が存在する。軍の最高司令官は国家元首であるヘリアンだが、王から個別に命令がなかった場合の裁量や細かい指示については各軍団長に任されていた。

そして今、ヘリアンの目の前に跪ひざまずいているのは全八人中四人の軍団長の姿だ。

——第一軍団長。

各方面における国王補佐が主任務の少数精鋭部隊、別名「親衛軍」の長。

国王側近、並びに総括軍団長の任に就く【月狼】のリーヴェ。

——第二軍団長。

獣人族や騎士職を中心とした陸戦戦力を保有する、別名「獣騎士団」の長。

純白の全身鎧フルプレートアーマーで身を固めた獅子頭の騎士である【剣獅子】の balan。

——第三軍団長。

回復と援護のスペシャリストが集められた、別名「聖霊士団」の長。

腰まで届く黄金色の髪が特徴的な【神代の白妖精】のエルティナ。

——第六軍団長。

ちゆうほう

諜報活動や情報戦を一手に引き受ける魔族中心の軍、別名「妖魔軍団」の長。

深い瞳と妖艶な出で立ちが目を惹く【夢魔女帝】のカミィラ。

以上が、謁見の間に参集された軍団長の面々である。

第一〜第三軍団長はヘリアンがゲーム開始当初から連れていた魔物が転生進化したもので、比較的落ち着いた性格をしていることもあり参集することにした。そして第六軍団長のカミィラは、情報戦に秀でた軍団長ということでメンバーに加えている。

他の軍団長については、性能重視で採用した結果故か個性が強いこともあり、引き続き任務に集中するようにと伝達して謁見参集の命は下さなかった。いきなり八体全員に会う勇氣はない。

「集まってもらったのは他でもない。既に知ってのことだろうが、我が国は今、未曾有の事態に直面している。ついてはこれの対処について話したい」

「……ハッ！」

四つの声が同時に応じた。

まるで練習でもしていたかのように完璧に揃っていて、こんな状況だというのに僅かに心地よさを覚える。

……練習、してないよな？

「まずは、我が国を襲った異変についてだ」

大学のプレゼンテーションシヨン講義で学んだスピーチ術を思い出しながら喋る。講義を受けている最中は使いた所が少なそうだと感じていたが真面目に受講しておいてよかった。

自分を見る四対の視線が否が応にも重圧を与えてくるが、決してどもったり下をむいたりしてはいけない。胸を張って堂々と喋る。スピーチ術の基本中の基本だ。

「草原に囲まれていたはずの我が国は現在、深い森に覆われている。こんな現象は建国以来今までなかった。ついでには現状把握が最優先となるが……リーヴエ、【現在】の【状況】を【説明】しろ」
「ハッ、それでは順を追って説明させていただきます」

念のために〈鍵言語〉を使って指示を出したが、リーヴエの返事には〈鍵言語〉が含まれていなかった。やはり〈鍵言語〉に拘るのは意味がないらしい。

ここから先は、NPCではなくPCを相手にしているつもりで対応したほうがいいだろう。

「まず、街の外は完全に森に覆われていることは既に報告しましたが、外壁の大門から延びているはずの整備済の街道が完全になくなっていくことが分かりました。従いまして、首都ごとどこかに切り取られて飛ばされた……つまりは転移現象である可能性が高いものと思われまます」

調査によれば東西南北の大門共に全て同様とのことだ。

それも森に埋まって見え辛くなっているわけでもなく、外壁を境界線とするように綺麗に途切れしている状態らしい。

「続きまして都市内の状況ですが、建築物の損壊は殆どありません。一連の騒ぎで怪我人が数人出ましたが、第三軍団の医療班により全員治療済みです」

国内はとりあえず落ち着きをみせているようだ。

時間経過と共に幾つもの問題が噴出するであろうことは想像に難くないが、今現在緊急に対処しなければいけない問題はない。ならば、

「喫緊の問題は国外か」

「はい。国外を刺激しないようにとのご命令でしたので遠距離からの調査に留めていますが、どうにも森そのものが幻惑効果を有しているようで成果が芳しくありません。魔術、スキル共に妨害されています。空中からのスキルを使用しない遠視の結果によると、北東方面に何らかの人工物があることは分かったのですが、それ以外は深い森に覆われています」

「なるほど……」

腕を組み、唸る。

今の自分たちの置かれている状況が分からない中、下手な手を打ちたくはない。今後外部に対してどのような働きかけをするか、それを決めるための情報が欲しい。

「我が国が今ここにあるという事実が、外部に知られていないと仮定しよう」

転移されてから既に一時間以上が過ぎているが他勢力からの接触はない。恐らく現時点では、アルキマイラの存在は他勢力に気付かれていないはずだ。

「存在を知られていない、というのとは大きなアドバンテージだ。私はこのアドバンテージを自ら不用意に手放したくはない。外部にどのような勢力があり、それがどの程度の脅威であるのか、何もかも分からないこの状況下では尚更だ」

「タクティクス・クロニクル」では情報を軽んじた国は大抵滅んだ。国を動かすにあたっては、確

度の高い情報が必要になる。

「周辺に何の脅威もなく好き勝手にやっても誰にも存在を知られない……などという希望的観測を前提に行動するのは危険だ。故に当面の目標としては、我が国の存在を隠したまま現在の状況を調査し、周囲の情報を可及的速やかに入手することとする。まずこれについて異論はあるか？」

決して臆病おくびょうになっていないわけではない、ということが伝わってくればと祈るような気持ちで軍団長の面々を見る。

幸いなことに誰ひとりとして異論の声を上げる者はいなかった。

「ではここから先はそれを念頭に置いての話とする。魔術による遠距離調査を続行させていたはずだが、その後の首尾はどうだ？ 森が幻惑効果を帯びているとのことだが、魔術の精鋭集団である第四軍団でも突破できないのか？」

「はい。第四軍団長より報告を受けていますが、幻惑効果の術式の基礎構成が既知の術式と全く異なる体系で編まれているらしく、解明には時間がかかるとのことです」

術式うんしき云々うんぐんに関してはさっぱり分からないが、今すぐどうこうできるわけではないらしい。

魔術に特化して育成した第四軍団長は、平時に於おいては研究分野を担当している才女だ。その彼女が現時点では解決の見通しすら立てられていない以上、魔術面のアプローチによる早急な調査は叶かなわないだろう。

「ただ、力技で突破してもいいのなら是非とも試したいとのことですよ。試しに訊いてみたところ『軍団総動員の儀式魔術で森ごと消し飛ばすか、更に強力な地形干渉系魔術で性質を上書きしてしまえばどうとでも……！』などと宣のたまっていました」

それは力技も力技、完全なゴリ押し戦法だ。鍵穴に合う鍵が見つからなかったので錠前自体をぶっ壊します、と言っているようなものである。

そして困ったことに、力技を好むのはなにも第四軍団長に限った話ではない。軍団長クラスの魔物は大抵、有り余る力を持つ故か力尽くで解決しようとする傾向が強く、リーヴェですら些末な面倒事に対処する際には肉体言語を活用することが多かった。

もしも【脳筋】という【人物特徴】が存在するならば、軍団長たちのうちの半分以上がその【人物特徴】を所持していることだろう。なんでこんな性格のヤツばかりを軍団長にしてしまったのかと頭が痛くなる。

過去の自分に対して『もっと慎重に考えろ』と罵倒したくなる衝動を堪えつつ、リーヴェに答えた。

「力技は却下だ。周辺に脅威となる勢力がいたらこちらの存在を自らバラすことになる。既にバれている可能性もあるが、派手な目印を作ってわざわざその可能性を確定させる必要はないだろう。周りの状況が分かれば考慮に値するが、現時点では下手な手は打てん」

「そう仰ると思います、『自重しろ賢い脳筋』と告げおきました。改めて力技の禁止令がヘリアン様から下された旨、正式に通達しておきます」

「……う、うむ」

何故かリーヴェが尻尾を振り始めた。

表情こそ澄まし顔のままだったが、ふさふさの尻尾が微かな音を立てながら左右に振られているその様子に『褒めて褒めて』と迫ってくる大型犬を連想する。そして彼女の横に跪く第二軍団長が

迷惑そうに顔を顰めていたりした。

……まあ、なんだ。なにはともあれ感情が察知しやすいのは助かる。その反応から相応しい対処方法を読み取りやすいからだ。

リーヴェと意見が一致していたということは、力技の自重は国にとって正しい選択なのだろう。

「空からの目視では、北東方面に人工物らしきものが見受けられる……だったな」

「はい。首都結界範囲内の高度では詳細は不明でしたが、森の中に建造物らしきものが見受けられるとのことですよ」

ふむ、と顎に手を添えて一つ頷く。

さも思案を巡らせている最中というポーズを取りながら、ヘリアンはここまでの自分の言動を思い返した。

(ここまでは王らしく振る舞えてるよな……?)

居並ぶ軍団長の様子をチラリと窺うが、気を悪くした者はいないように見受けられた。しかしそれも希望的観測だ。あまり当てにはならない。緊張に神経を削りながら、ヘリアンは内心で冷や汗を流す。

——これほどまでにヘリアンが配下の顔色を窺うのには理由がある。

なんとこのゲーム、配下による【反乱】がシステムとして存在するのだ。

一度捕獲に成功すれば忠実な仲間になってくれる某有名ゲームとは違い、一度仲間になったから

と違って裏切らない保証がない。【幸福度】が極端に低い状態が続いたり、【忠誠心】が一定値を下回れば容赦なく反乱を起こされる可能性がある。

そして自らの王たり得ないと判断されたが最後、そこに残るのは『強大な魔物』と『貧弱な人間』の構図のみである。

これでも長年一緒の時間を過ごしてきた仲間だ。そう簡単に裏切られたりしないと信じたいが、転移して以降リーヴェ以外の軍団長とはまともに会話すらしていない。

またゲームと同じ性格であるという保証も、同様に忠誠を誓ってくれているという保証もないわけであり、過信は禁物——いや待て、これはゲームだ。もしくはゲームの夢を見ているだけのはずだ。だから大丈夫だ。何が大丈夫なのかは分からないがとにかく大丈夫だ。そうでなければいけない。

これ以上の思考は危険だ、とヘリアンは頭を振って意識を切り替える。

「大体分かった。あくまで国外を刺激するリスクを回避して調査を行うなら、足を使う必要があるということだな。ならば第六軍団長、国外調査についてはお前に一任しても構わないか？」

第六軍団長——【ナイトメアエンプレス夢魔女帝】のカミィラが顔を上げた。

ヴィクトリア調のゴシック服を着こなし、妖艶な雰囲気漂わせる女性型魔物。外見年齢こそ十七歳前後と少女に近いものの、身に纏う空気は完全に「女」のソレだ。紅い瞳は覗き込めば堕ちてしまいうるに深く、その顔の造りは美貌というよりも魔貌に近い。

また身長に比べて胸が極めて大きく、紐が緩められた胸元からは窮屈そうな谷間が露出している。微笑みを浮かべた彼女から腕を組まれようものならその誘惑を断れる男などいないだろう。

しかしながら今はその魔貌を僅かに撃め、困ったように眉尻まなじりを下げていた。

「我が君よ。他ならぬ我が君のご命令とあらば妾わらわと我が軍団は全力を尽くす。それは当然のことなのじゃが……森を探索できるかと問われれば、少々問題があると云わざるをえぬ」

問題？

カミーラ率いる第六軍団は、他国への諜報活動や情報戦のために作った軍団だ。こと情報収集という分野に関しては他軍団の追隨を許さない。その長であるカミーラの言う問題とは……。

「力不足を告げるようで申し訳ないのじゃが……妾を含め、第六軍団に所属する魔物は未探索区域の調査などしたことがない。自信があるかと問われれば、首を縦に振りづらいのじゃが……」

おずおずと申し訳なさそうにカミーラは告げる。

一方、ヘリアンは頭を抱えたい気持ちで一杯だった。

(やっちまった……)

確かに彼女らは諜報や情報戦のスペシャリストだが方向性が違う。

冷戦時代に創設した第六軍団の活動範囲はあくまで対仮想敵国を想定したものであり、人を介する諜報活動を主戦場としていた。そのため、彼女らの諜報能力および情報戦能力はそちらの方面に特化しており、誰も踏み入ったことのない未探索地域の探索は専門外なのである。

情報分野に特化しているというキーワードだけに着目して第六軍団に任せようとしたヘリアンのミスだ。

「あ、いや、無論人員が割き辛い状況であるのは妾とて理解しておるのじゃ。他に適任者がいなければ、妾の第六軍団で何とか——」

「いいや、お前の懸念はもつとものことだ。この場において正直な発言は好ましい。お前の忠言を嬉しく思うぞ、カミーラ」

王らしく、と呪文のように心中で呟きながらヘリアンは台詞を組み立てる。

冷静になったつもりだったが、あくまでつもりでしかなかったらしい。いつもなら考えられないような凡ミスを犯してしまった。これ以上は一つのミスも許されない。

「では問おう。第一軍団長、第二軍団長、第三軍団長。お前たちは昔、未探索区域の調査をしたときのことを覚えているか？」

「ヘリアン様と共に世界に降り立った直後の出来事を、忘れるはずありません」

「無論覚えております、主上」

「わたくしも昨日のことに思い出せます」

問われた三人はそれぞれ肯定の意を返した。

ヘリアンが訊いたのは最初期の話……ヘリアンが三体の魔物を引き連れてこの世界に降り立ち、右も左も分からない世界を歩いて探索していた頃の話だ。

その出来事が彼女らの中でどのように解釈されているのかは分からないが、覚えているというならば経験者に任せた方がいいだろう。

一般兵士を使うことも考えたが、動乱期を生き延びた未探索区域の調査経験者はごく僅かな上、ゾロゾロと集団で彷徨っては他勢力にこちらの存在を悟られるリスクが高まる。

ならばまずは確実な生還が見込める少数精鋭を国外に出し、その結果如何で今後の行動を再考すればいいだろうと結論する。

「よし——では第二軍団長については引き続き国内の治安維持と、有事の際の防衛に備えてくれ。現在の状況下で治安維持担当からお前を外すわけにはいかん」

治安維持を命じられた第二軍団長—— balan が肅々と頭を下げた。

【月狼】と並ぶ獣人系の最高位種族の一つである【劍獅子】の balan は、見た目としては全身鎧を身に着けた二足歩行のライオンだ。

また【騎士道精神】という人物特徴を持っている騎士団長は集団指揮のプロフェッショナルであり、防衛に徹するなら八大軍団長随一の性能を誇る。加えて【規律】の人物特徴も有しており、浮き足立っている国内の治安維持という観点から見ても彼以上の適任者はいなかった。

「そして未探索区域の調査担当は第一軍団長と第三軍団長の両名とする。しっかりと頼むぞ」

「——ハッ、承知いたしました！」

二人の女性軍団長により、拝命の声が返される。

唱和の声が小気味よいが、同時に少々気負いすぎているようにも感じられた。

今後のアルキマイラの命運を背負っているようなものなので無理もないのかもしれないが、過度の【緊張】は基本性能を低下させる。それは未知の領域を探索するにあたって憂慮すべきことだった。

何の戦闘能力も持たない身ではあるが、彼女らの緊張を解きほぐすぐらいなら自分にもできるだろうとヘリアンは考える。そしてできることがあるならすべきだ。部下を激励し、その能力を最大に發揮できる精神状態に整えるのは、上司である王の仕事の一つだろう。

「そう気負わずとも、最初期の探索と同じようなものだと考えればよい。あの頃のことを思い出せ。

最初期の探索と比べて違いがあるとすれば、 balan がいないことだけだ」

フォローのつもりで告げると、頭を下げていたリーヴェとエルティナが驚いたように顔を跳ね上げた。二人揃って驚愕の表情を浮かべている。

(……な、なんだ？ 配下を氣遣おうとしたことがそんなに意外だったのか？)

思わず氣圧された。

が、一度口を開いたからには最後まで言い切る必要がある。

ままよと台詞を続けた。

「加えてあの頃と比べれば、お前たちの実力は比較にならないほど向上している。氣負わず、いつも通りの実力を發揮すればいいだけの話だ。私はお前たち二人の力を信賴している」

……台詞を言い切ったが、どうだろうか。

内心で冷や汗を垂らすヘリアンの目前、真つすぐに視線を向けてくる二人の軍団長は何らかの覚悟を決めたかのように、唇を固く引き結んだ表情で再び頭を垂れた。

「委細、承知いたしました」

その返答には先ほど以上に力が籠められていた。

しかも心なしか、先ほどより強い緊張感を漲らせているように感じる。

……やばい。失敗したか。

緊張感を解すどころか悪化した氣がする。

だが覆水は盆に返らない。もうこのまま突っ走るしかない。

「だ、第六軍団については、国内の情報収集および情報統制を引き続き行え。他の軍団と連携し、

支援が必要な者がいればすぐに伝達できるよう連絡網の整備を任せる」

「承知いたしました、我が君」

艶やかな笑みを浮かべつつ第六軍団長のカメラは首肯した。

その蠱惑的な仕草は平時であれば主君の視線を奪うことに成功したかもしれないが、今のヘリアンはそれどころではなかった。

「では、これにて謁見を終える。国外調査については十五分後に北の大門からの出撃だ。リーヴェとエルティナは準備を。他の軍団長については引き続き各々の任に当たれ」

告げるなり椅子から立ち上がる。

心情的には逃げるようにして、ヘリアンは謁見の間を後にした。

5.

——王が謁見の間を去る。

しかしその足音が消え去ってもなお、四人の軍団長は微動だにせず頭を垂れ続けた。

そしてそれから更に十秒ほど経った頃、ようやく誰ともなく深い息を吐き、止めていた呼吸を再開させる。

ヘリアンは確かに緊張感に呑まれかけていた。

だが実のところ、それは居並ぶ軍団長側とて同様のことであつたのだ。

なにせついで先ほどまでそこにいたのは万魔ばんまを統べしアルキマイラの絶対者だ。しかも国王側近であるリーヴェだけは例外として、他の配下は王と直接言葉を交わす機会すら稀有けうである。

衛星都市で任についていた第六軍団長第六軍団長に至っては、王の姿を直接目にしたのすら数年ぶりのことだったのだ。各軍団を任された組織の長といえど、緊張に身を固めるのは致し方ないことと云えよう。

身をほぐすようにしながら各々は服従の姿勢を解いていく。

そして「フゥ」と艶つやのある吐息を零した第六軍団長のカミーラが、おもむろに口を開いた。

「いやしかし、緊張はしたが我が君はやはり凛々りんりしいのう。このような状況でなければもつと話をしたかったのじゃが」

先ほどまでの謁見の記憶を反芻はんじゆするように呼び起こし、愛しい王の姿を自らの脳裏のうりに投影したカミーラはうっとりとした表情を浮かべる。

「不謹慎だぞ、第六軍団長」

「じゃから『このような状況でなければ』と言っておろうが、石頭」

そんな彼女に水を差すようにして苦言を垂れたのは騎士団長を自任するブランドだ。

彼は人物特徴に【真面目】と【頑固】を持って居ることもあり、『お堅い男』として知られていた。

「その鎧よろいと同じぐらい堅いんじゃないの？」とは、ここにはいないとある軍団長の言である。

「第一、ヌシらがズルすぎるのじゃ。首都に常駐しているヌシら三人ならば我が君との謁見も慣れておろうが、妾が拝謁を許されたのは三年ぶりぞ。少しぐらい余韻よゐんに浸っても罰は当たるまいて」

「主上が首都常駐の軍団長に我ら三人を選ばれたのは致し方なからう。他の軍団長は色々な意味で癖が強い。主上が運用しやすいまともな軍団長など、我ら、始まりの三体、ぐらいなものだ」

「始まりの三体」とは、ヘリアンがゲームプレイ開始時に連れていた初期魔物のことだ。

「タクテイクス・クロニクル」ではプレイ開始時に漏れなく三体の初期魔物が与えられるが、これは完全な無作為抽出形式であり、どんな魔物が当たるかは分からない。ヘリアンの場合は小さな狼獣人が一体、低位の魔猫が一体、白妖精が一体という構成だった。

唯一白妖精だけは当たりだったものの、他二体は平凡以下の能力しか持たない最下級種族である。

しかし最初の三体に愛着を抱いたヘリアンは根気強く育成を続け、転生進化させることで一線級の魔物へと育て上げた。今ではそれぞれ【月狼】【剣獅子】【神代の白妖精】といった最高位の種族になり、軍団長を務めている。

そして彼はこの三体の魔物に、始まりの三体、という大層なアダ名をつけていたのだった。

アダ名をAIが認識できるよう、わざわざゲームの辞書機能を使って単語登録までしていたりする。

「フン、自らまともなどと嘯くでない。ヌシは男故に知らぬであろうが、色々知っている妾から言わせればリーヴェエの趣味趣向はまともとは言いがたいぞ。エルティナも怪しいところがある」

「あらあら。それはどういう意味ですか、カミィラ？」

落ち着いた口調で問い掛けるのは第三軍団長のエルティナだ。

おっとりとした雰囲気纏った彼女は人物特徴に【慈愛】や【協調的】を持っており、何かと癖の強い各軍団長らの間を取り持つ『優しいお姉さん』である。

エルフ族らしい整った顔立ちと佇まいはそれだけで十二分に美人の領域にあるが、人物特徴の【氣品】が更に拍車を掛けていた。たとえ同じエルフ族であろうとも、彼女の佇まいには感嘆の溜息を漏らすことだろう。

そんな彼女はどこからともなく二枚の座布団を取り出し、徐おもむろに床に敷いた。

「どういう意味も何も——」

「正座」

「ぬ？」

「正座です、カミーラ」

自らも座布団の上に座した彼女は幼子を諭すように、ポンポン、と対面の座布団を叩いた。表情は慈愛溢れる微笑みのままだ。

「……なにゆえ正座なのじゃ？」

「いいから、正座ですよ」

「いや、じゃから——」「カミーラ？」

ニッコリ笑顔のまま、エルティナは同僚の名を口にする。

「……………」

しばしの無言の時間。

そこに筆舌に尽くし難い圧力を感じたカミーラは、対面へ静々と正座した。

エルティナは八大軍団長の中で、最も優しい人物である。

そして同時に八大軍団長の中で、最も怒らせてはいけない人物でもあるのだ。

「さあ。お話ししましょうか、カミーラ。わたくしのどこが怪しいのですか？」

「いや、どこもなにも……ヌシは女子おなごが好きじゃろうに」

「それは誤解を招く言い方ですね。わたくしはちゃんと殿方が好きですよ？ ただその一方かたで可愛い女の子を愛めでるのも好きなのです」

「その時点でもはや普通ではなかる……。いや、妾は仕事柄しかと理解があるが、一般常識に照らし合わせるんじゃな」

「いいえ、そんなことはありません。普通です。女の子同士が仲を深めるのは至って普通のことです。その証拠に陛下もそのようなことを眩くらかれていた時がありましたよ」

「ぬ。我が君がか」

愛しき主の情報にカミーラが食いついた。

もしもこの場にヘリアンがいれば「違う、違うんだ、アレは隣国の王フレイヤが振ってきた十八禁エロゲームの話に乗ってあげただけであって何も本気では……！」などと言いついては、幸か不幸か彼は今この場ばにいない。

故に、王に対し忠誠心とは一線を画した感情を抱くカミーラは——至って真剣に——王の趣味趣向きゆうについて心のノートにメモをした。

脇わきで聞いていた balan もまた「主上が仰るのならその通りなのだろう」と己の持つ常識を上書きする。この国では良くも悪くも悪くもヘリアンこそが法であった。

「それですなカミーラ。女の子の泣きそうになる寸前の顔は、とても尊いものなのですよ？」

「……うん？」

メモを終えたカミィラは小首を傾げる。何やら雲行きの怪しい気配を感じた。

「勿論、泣き顔なんでものは見たくありません。女の子の泣いている顔ほど、痛ましいものはありませんから……」

目を伏せたエルティナは、胸に手を当てて祈るようにして呟く。

憂い顔で言葉を綴るその表情は聖母のそれだ。

「もしもこの手の届く範囲に涙を流す少女や幼子がいるのなら、わたくしに許される限りの力を振るい、全力でその涙を止めて差し上げたいと思います。心から、そう思います」

「う、うむ」

「けれど泣く寸前の——そう、いわゆる、半泣き」の女の子の表情はとても愛おしいのです。その涙を止めて差し上げたくなり、抱き締めて慰めたくもなり……そしてなにより、その愛らしい顔をずつとずつと見守っていたくなるのです」

聖母は慈愛の微笑みを浮かべたまま「だって」と言葉を繋げ、

「この世に、半泣きの女の子、以上に可愛い生き物なんて、存在しませんから」

断言だった。

迷いなど一切ない、心からの言葉だった。

その聖母の微笑みを前にしたカミィラはしばし固まる。

「……………」

まとも？ と視線を向けたその先には、全力で目を逸らすバランスの姿があった。

「そ、それはそうと、さつきからやけに静かだなりーヴェ。何か気になることでもあるのか？」

逃げおつたな、というカミーラの眩きを無視した balan は隣の同僚に水を向ける。

「……? おい、リーヴェ。聞こえているのか?」

「ん? ああ……」

しかしやけに反応が鈍い。どこか上の空のようにも窺えた。balan が彼女に話を振つたのは咄嗟の防衛本能に基づいてのことだったが、思いもよらぬ反応の鈍さに訝しむ。

そういえば、と思ひ返せば先ほどカミーラがリーヴェの趣味趣向について触れていた際も無反応だった。リーヴェの気性からすればそれはおかしい。最低でも何らかの反論はしているはずだ。

さすがに不審に思つた軍団長たちの視線がリーヴェに集中する。

「どうしたのですかリーヴェ。どこか具合でも?」

「いや…… 国外調査の件なのだが。どうしてもヘリアン様のあのお言葉が引つ掛かつていて、な」

「…… やつぱり、貴女もそう思いましたか?」

おっとりとした表情を引き締めてエルティナは思う。陛下のあの言葉はやはりそう、う、う、う意味なのだろう、と。

「ヌシら二人が同意見ということとは、妾の気のせいでもないようだよ」

「やはりア、い、はそういうことか。主上らしいと言つてしまえばそれまでだが……」

「我が君が決められたことならば、妾らは従うまでじゃ」

早急に情報網の整備を行わねばな、と眩きカミーラは立ち上がる。

「それはそうと、リーヴェやエルティナもそうじゃが balan よ。いつまでもこんな所にいてもよいのか? ヌシは見送りの準備を早急に整えねばなるまいて」

「む。確かにお主の言うとおりだ。急がねば」

「その間の治安維持の指揮については第五軍団長の方で代行するよう、妾の方から蝙蝠を放つておこうぞ。構わぬな、総括軍団長？」

「ああ、許可する」

八大軍団長を纏める、総括軍団長の地位にあるリーヴェが頷いて答えた。

彼女は第一軍団の長だが、同時に総括軍団長も兼任している。

第一軍団は国王補佐を主任務とする少数精鋭部隊のため、その規模はさほど大きくない。

自軍団がごくごく小規模であり、また副団長が第一軍団の実務的な指揮を執っていることもあり、自軍の運用で彼女が手を取られることは少ないということだ。

「では吾輩は早速準備に移るとしよう。見送った後に儀典用装備のまま警邏に就くわけにもいかぬ故、時間は少し多めに見積もっておいてくれ」

「そのぐらゐのことは妾として分かつておる。そう細々と小言を垂れるでない」

辟易とした様子のカミーラを他所に balan は足早に謁見の間を去った。

カミーラもまた身体を霧に変え、風の速さで自軍団の下へと向かう。

「さ、わたくしたちも急ぎましょうか、リーヴェ」

「そうだな」

残された二人は国外調査のための支度をなるべく、重要な装備を格納している宝物庫へと足を運ぶ。彼女たち以外に誰もいない王城の廊下で歩みを進めながら、リーヴェは不意に口を開いた。

「……エルティナ。私は実を言えば、ヘリアン様は本調子ではないのではないかと懸念していた。

首都ごとの強制転移などという未曾有の事態に混乱されているのではないかと」

「無理もないでしょう。わたくしたちも皆が皆して呆然としていたぐらいですから。あの第八軍団長でさえ愕然と立ち竦んでいたぐらいですし、陛下が衝撃を受けられるのも無理からぬ話でしょう」

「いや。そうではなかったのだ、エルティナ」

リーヴェは頭を振って答えた。罪を告白するかのような心境で彼女はエルティナに告げる。

「ヘリアン様は転移の直後も平然としておられた。その証拠に転移現象の直後であるにもかかわらず、矢継ぎ早に各軍団に適切な指示を施し、慌てるばかりだった私にも指針となるご命令を下された。アレがなければ慌てふためいた私はしばらく何もできないままだったか、突拍子もないことを仕出かしていたに違いない。現に執務室でヘリアン様が体調を崩された際にも、私は無闇矢鱈に騒ぎ立ててヘリアン様の不興を買った」

苦い記憶だ。王に怒鳴られたことなど、逼迫した戦場での命令時を除けば覚えがない。それだけに先ほどの執務室での出来事はリーヴェに少なからずショックを与えていた。

「だが、ヘリアン様はどのような状況に陥ろうともやはり偉大なる王だった。あの方は他の誰でもなくこの国の、万魔の王なのだ。故に我らは今まで通り王の駒であらばいい。王自らが突き進まれる道を切り開くための一個の力として働けばいい。そのことを先ほどのヘリアン様の言葉でようやく思い出すことができた」

「……そう決めつけるのは早計ではないでしょうか。陛下とて体調を崩されることだってあるでしょう。現に先ほどわたくしが診察した際も、かなりのストレスを感じられているご様子でした。貴方が陛下を心配したこと自体は間違ったことではなかったと思いますよ？」

「それについては後でゆっくり話そう。私から話しかけておいてなんだが……誰かに言っておきたかったのだ。すまない」

「気にしないでください。これもわたくしの役割ですから」

エルティナはたおやかな微笑みを浮かべる。いつも通りの、見る者の気分を落ち着かせてくれる優しい笑みだ。

彼女がいてくれてよかった。

リーヴェは心底そう思いながら、深呼吸を一つして気持ちを切り替える。

「——よし。では私はヘリアン様の遠征用の衣装を準備する。王自ら先陣を切つての出撃だ。心してかかるぞ、エルティナ」

「ええ。外での脅威が不明な以上、いざとなればわたくしたちが陛下の盾となる覚悟で臨む必要があります。ですがそうならず、皆が揃つて無事に帰国できるように頑張りますよ、ね、リーヴェ」
そうして二人の軍団長は、どこか悲壮なまでの覚悟を伴つた表情で足早に宝物庫を目指した。

6.

一方、執務室に戻ったヘリアンは頭を抱えていた。先ほどの謁見での軍団長らの反応がイマイチに思えてならなかったからだ。王らしい振る舞いを心がけたものの早くもミスを犯し、その後のフォローも不発に終わった印象が強い。

ならば追加のフォローを行うか、または別の方法で失態を取り返さねばならない。繰り返すが覆

水は盆には還らないのだ。ミスを犯したという事実を自分の中で流せないならば、建設的な今後の対応方法を考える必要がある。

「……できれば、優しい王様像を維持したい」

これでも善王の路線を貫いてきたはずだ。

国内は当然として、属国の治安についてもかなり気を使ってきたと自負しており、他国への侵略戦争もたった一度の例外を除けば起こしたことがない。基本的には売られた戦争を買って他国を併合し、大国への道を進んできたのだ。決して残酷無比な霸王として振る舞ってきたわけではない。ならば、そのイメージを保つためにはどうすればよいか。

たとえば、どのような危険が潜むかも分からない未探索領域へ大切な配下を送り出すにあたり、王としてどう振る舞うべきか。

「……危険地帯に少人数で行ってこいと命令しといて、見送りにすら出向かないのは違うよな」
調査自体は絶対に必要だ。下した命令は間違いではないと思う。

だが、だからといって危険地帯に踏み込もうとする配下に対し、黙って送り出すのは違うだろう。命令しておきながらこんなことを思うのは偽善かもしれないが、それでも今までヘリアンが歩んできた道には『黙って配下を死地に追いやる』などという選択肢は転がっていない。

「できることからやろう……具体的なフォローについて考えるのは、まず二人を見送ってからだ」
これも王として大事な仕事のはずだ。

それに打算で語るならば、王自らが見送ることにより二人の【士気】が上がるかもしれない。そうすれば儲け物だ。激励のために使う僅かな時間を対価に、彼女らがより良い成果を持ち帰っ

てくる可能性を引き上げることができる。

「そうと決まれば行動だ。手足を動かせ、現場へ出る。自分の耳で聞き、自分の目で見届けるべし」
ゼミ担当だった教授の口癖を真似る。教授曰く、人の上に立つ者には必要な行動らしい。

蘊蓄の好きな教授で話が長いのが玉に瑕だったが、聞き流さないでよかったと心底思う。人生、何が自分の役に立つか分からないものだ。

……まさか二十歳にも満たない年齢で、最高権力者になるとは予想だにしていなかったが。

そんなことを考えつつ、ヘリアンは第一軍団所属の親衛隊に囲まれながら北東外壁の大扉前に向かう。そして現場に到着するなり、予想外の光景を目の当たりにして目を瞬かせた。

「……なんだこれ」

首都を護る都市結界。それが正常に起動していることを示す光の脈動が走る大扉。その前に設けられた広場には、装飾過多な装備を身に纏う魔物たちが集まっていた。

実用性よりも外見の華やかさを重視した装備で身を飾る彼らは、広場から大門までの距離を二列に分かれ整然と立ち並んでいる。

大門から外に出るには自然、向かい合わせのまま微動だにしない彼らの間を進むことになるだろう。それはどう見たところで、出立を見送るための儀仗隊でしかなかった。

「……なにやっつてんだコイツら。こんなイベントやっつてないで各方面の治安維持に労力を割けよ……本当なら第二軍団長だって出撃させたいところなんだぞ」

ヘリアンは傍らの親衛隊には聞こえないように愚痴を零した。

いくら軍団長が二名も出撃するからといってもこれは大袈裟すぎる。平時ならともかくとして、

この緊急時に行くべきことではないだろう。

ましてや儀仗隊のこの顔つきといったらなんだ。多大な誇らしさの中に僅かばかりの悲壮さが透けて見える。まるで貴人を死地に送り出すかのような。縁起でもない。

「ヘリアン様」

「陛下」

ヘリアンに声をかけてきたのは、調査隊に選出した【月狼】^{マナガルム}のリーヴェと【神代の白妖精】^{エンシエントエルフ}のエルトイナだ。二人とも実用性一択の装備で身を固めている。

そしてその傍らに控えていた侍女は静々とヘリアンの周囲を取り囲み、仕立ての良い純白の布を掲げて周りからの視線を遮った。

「ヘリアン様、外套をお預かりいたします」

断りを入れたリーヴェは主人の外套を慎重な手つきで外す。

すかさず歩み寄ってきた侍女の一人が傍らに跪き、敬々しく両手を捧げるようにして外套を受け取った。そして別の側仕えが手にした黒のビロードで誂えられたケースに、まるで聖遺物を扱うかのように慎重な手つきで収める。

「……………えっ?」

ヘリアンは思わず声を漏らした。

なんで外套を脱がされたんだろうか。

あまりに流麗な動作に疑問を持つ暇もなかったが、あの外套は国の紋章が背中に刺繍されている国王専用の装備であり、ひいては王であることを証明する外套だ。

それが敬々しくも脱がされ持ち去られたという事実は、果たして何を意味するのか……？

「失礼いたします、陛下」

エルティナは深く一礼した後、嫌な予感に身を凍らせたヘリアンの背に回り、新たな衣装に袖を通させた。実用性と華美のバランスを際どいところで両立させた丈夫そうな外套だ。

続けざま、あれよあれよという間に身体の各所に軽い材質で作られた軽手甲などが装着され、靴は竜の鱗を合成したグリーブに履き替えさせられた。

そして侍女たちが掲げていた布が一斉に畳まれ、その中心が再び周囲の視線に晒される。そこには遠征用の装備でしっかりと身を固めたヘリアンの姿があった。

完璧な仕事を終えた侍女たちは静々と退き、その場には遠征用の装備を身に纏った三人の姿だけが残される。

(……待ってくれ)

ヘリアンは内心で滝のような汗を流す。

幸いにも反逆の意思表明ではなかったらしいが何故いつもの外套を脱がされたのか。何故遠征用の装備に着替えさせられたのか。

そして何故、リーブエとエルティナは自分のやや後方両脇に立って——つまりはヘリアンを先頭に据えるかのような立ち位置に付いたのか。

「ヘリアン様、我が身命に賭しましても御身をお守りいたします。たとえこの先に何が待ち受けていようと、御身だけは必ず守り通す所存です」

「卑小な身ではありますが、わたくしも陛下と御国のために全力を尽くさせていただきます。道中、

覚悟を以って任務に当たります」

前者がリーヴェ、後者がエルティナの台詞だ。

毅然きぜんとそんな決意を告げる二人を前にして、ヘリアンは完全に硬直ワカズする。

「……………」

いやいや待て待て。なんだこれ。

誰か冗談だと言ってくれ。

だって本気で意味が分からない。

これではまるで、国王自らが国外調査に乗り出すかのようなシチュエーションではないか。

ヘリアンは慌てて自分の発言を思い返すが『我自らが国外の探索に出向いてくれようぞ』などという勇ましくもイカれた台詞を口にした覚えはない。

(…………いや、そういえば)

謁見の間での記憶を正確に呼び起こす。

たしか、始まりの三体ゴに対して、このゲームをプレイした最初期時代に未探索区域の調査をしたことを覚えていたかと確認を取り、そして『覚えていた』との返答を受けた。その後、治安維持のために必須なバランを外し、残されたリーヴェとエルティナで調査に出るよう指示したのだ。

その際、失言のフォローのために二人に告げた台詞は確か……

『そう気負わずとも、最初期の探索と同じようなものだと考えればよい。あの頃のことを思い出せ。最初期の探索と比べて違いがあるとすれば、バランがないことだけだ』

最初期の探索と同じ。

違いがあるとすれば、バランがないことだけ。バランがないことだけ。バランがないことだけ。バランがないことだけ。つまりは——

——三体の魔物と共に最初期の探索を行っていたヘリアンもまた、今回の調査隊のメンバーにバツチリ含まれているということにならないだろうか？

「……………」

ギギギギギ、と油の切れたブリキ人形のような動きで振り返る。

両脇後方に控えるのは覚悟を決めた表情をしているリーヴエとエルティナ。

再び正面を向く。

視界の中央には外の森へと続く大門、両端には大門までズラツと並んだ儀仗兵。

自分の服装を見る。

その身を包むのは装飾華美な紺と白銀の外套ではなく、頑丈に作られた地味な色あいの遠征用装衣。

「総員傾注！ これより、国王陛下御自らが率いし国外調査隊のご出陣であるツ！ 儀仗兵総員、

掲げえええええ——— 剣ッ!!」

獅子頭の儀仗兵——何故かバランがいた——の叫びに応じて居並ぶ全儀仗兵が動いた。

独裁国家の規律正しい軍隊のように一糸乱れず踵かかとを合わせ、黄金造りの装飾剣が天高く掲げられる。まるで一枚の中世絵画にも似た荘厳さがそこにあった。

……逃げられるような空気じゃない。

助けを求める一心で、ヘリアンは一縷の望みを窺めてリーヴェを見る。

しかしそこには厳しい顔をしながらも『王自らが先頭を切つてこの苦難を切り開こうとする御姿。さすがはヘリアン様』みたいなキラキラとした瞳の国王側近がいた。

勘違いです、と告げることができたならどれほど幸せだろうか。

「フム——未探索区域の調査など久々だな。あの頃を思い出す」

嗚呼。だというのに、この場の空気に負けて澄ました台詞を紡ぐこの口が憎い……ッ！

「では征こうか。リーヴェ、エルティナ」

二人の軍団長を伴いアルキマイラの王が大門へ向かう。

その場に集う誰もが誇らしげな顔で出立する王の背を見送った。

そしてさも予定調和だと言わんばかりの態度で堂々と歩みを進めながら、ヘリアンは内心で力の限りに絶叫する。

（なんでだよ！俺なんか悪いことしたか!? 国王自ら先陣切つて強行偵察とかどう考えても頭おかしいだろ！誰か止めろよ！何がどうしてこうなった!?）

——こうして、アルキマイラの勇敢なる王ヘリアンは。

僅か二名の供を連れて、どのような危険が潜むかも分からない国外への第一歩を踏み出すのだった。

第二章 ハーフエルフの少女

鬱蒼と生い茂る深い森。陽の光は大樹に遮られ、日中であろうと薄暗い。

時折葉の隙間から差し込む光が一条の線となって落ちてくるその様は、もはや林や森というレベルではなく密林といった方が表現として相応しいだろう。

(……樹海かよ)

ヘリアンは代わり映えのしない風景にうんざりしつつ、黙々と歩みを進める。

既に国を出てから一時間以上は経過しているが一向に景色が変わらない。どこを見回そうとも深い緑で視界が染められている状況だった。

ただでさえそんな地形だというのに、この森特有の幻惑効果とやらが状況の悪化に拍車をかける。なにせ僅かに距離を離すだけでお互いの位置が分からなくなりかけた。

物理的には絶対に見える位置にいるはずなのに、しかしそこにいるはずの相手の存在が認識できなくなるといふ異常現象が発生したのだ。

リーヴェやエルティナは『見づらくなる』程度だったらしいが、ヘリアンに至っては『完全に見えなくなる』というレベルである。人工物らしき物が観測された北東を指してはいるが、ヘリアンだけであれば今頃は見当違いの方向へ進んでしまっていたことだろう。

それでも一行が北東に向けて真つすぐ進めているのは、ひとえに同行者が優秀なためだった。

「人の手が全く入っていないようだな」

「ええ。けれどそれにしては妙ですね。森の音が殆ど聞こえませんが」

同僚の呟きにエルティナが答える。

リーヴェの髪が銀糸ならばエルティナは金糸だ。僅かな陽光に晒される度にキラキラと煌くような光を放っている。その美しい金髪から突き出ているエルフ特有の長耳で周囲の状況を探ろうとするも、成果は芳しくない。

「生物の気配が酷く希薄です。鳥や蟲たちですら殆どいないというのはさすがに……」

「ああ、異常だな。私の鼻でも主立った生物の存在を感じ取れない」

両者が口にするように、ここまで一行は誰にも出会うことはなかった。人どころか獣すら姿を見かけない徹底ぶりに、いったいどんな秘境に飛ばされたのかと気が滅入る。

ヘリアンはまるで見通しの立たない状況に早くも帰りたくなかったが、今更帰還するのは色々無理だった。わざわざ儀仗兵を集めて見送った王がちょっと森を散歩した程度で帰ってこようものなら、王の威厳とかそういうものが死ぬ。せめて何らかの成果は持ち帰らねばなるまい。

「……ん？」

「ヘリアン様」

「これは……」

三人がほぼ同時に声をあげた。

とある一点から明らかに空気が変わったのだ。

先ほどまではかなり薄暗かったというのに、人間にさえそうと分かるほど森に差し込む光量が増している。

「陛下、森の幻惑効果が極度に弱まりました」

エルティナの報告を受け、ヘリアンは状況証拠から推論を組み立てる。

「……この一角だけ幻惑効果の範囲外なのか？ もしくはここを境界線として、ここから先は普通の森になっている？」

後者だとありがたい。

十分な視界も得られない状態で、これ以上神経を尖らせたまま歩き回るのは御免被りたかった。

前者でもまあいい。

少なくともここで一息つくことができる。三十分歩き通しなのはインドア派の自分には堪えた。ましてや舗装もされていない樹海での神経を張り詰めた行軍により疲労感が凄まじい。

……ゲームではプレイヤーの疲労などという項目はなくいつまでも歩き続けることができたはずなのだが、それはあえて考えないようにする。

「——ッ、ヘリアン様」

突如としてリーヴェがあらぬ方向へ顔を向けた。

狼系の獣人特有の鋭い嗅覚で他者の存在を感じ取ったのか、ヒクヒクと鼻を動かしている。
ヘリアンはすかさず（戦術仮想窓）を呼び出し（地図）を表示した。

空中に投影された半透明の（地図）に周囲何メートルかの地形が表示される。

そして東の方角には一つの光点が灯っていた。

(光点の色は白……敵味方不明のユニットか)

リーヴェが感知した何かが白い光点として〈地図〉に表示されたのは、その存在を知ったことになったからだ。

近接範囲——プレイヤーから五〇メートル以内にいる味方ユニットが察知したことにより自動的に〈情報共有〉が働き、結果として〈地図〉に白い光点が反映されている。

そしてその光点は猛烈な勢いで移動を開始した。しかもこちらの方角に向かって真つすぐにだ。どうやら存在を感知したのはこちら側だけではないらしい。

「……来るか」

「はい」

近接格闘職を極めたリーヴェと、治療・支援系の最高峰に位置するエルティナが静かに武器を構える。

軍団長であるこの二人なら大抵の相手には対処できると信じたいが、この地におけるファーストコンタクトだ。何が起きてもおかしくない以上、何が現れても即応できるよう気構えが必要となる。そうして神経を尖らせるヘリアンの前に、三十秒と経たずしてソレは姿を現した。

「グルルルルウァ……ッ！」

藪を突き破って現れたソレは、一言で表せば巨大な狼だった。

身の丈五メートルを超える巨体に灰色の体毛。

口端から覗く大きな白い牙は鋭く、赤色の瞳が獐猛な光を帯びている。

大昔の名作映画に出てきた山犬だとかいう森のヌシを二回りほどスケールアップすればこのよう

な姿になるだろうかという、人間など一呑みにできそうな怪物だった。

(ファーストコンタクトがこれかよ!?)

ゲームではこの程度のサイズの魔物などいくらでも見てきた。それこそ配下の中には数十メートル級のドラゴンもいるぐらいだ。高層ビルのような巨人だっている。

だが、今見ているこれは圧力が違った。

風が運んでくる獣の体臭。

規則正しくも荒い呼吸音。

明らかに攻撃的な意図を宿した赤い瞳。

飛びかかる隙を窺う前足の挙動。

タイミングを計る尾の動き。

ゲームには存在しなかったそれらの仕草は、圧倒的な現実感リアリティを伴ってヘリアンの脳髓を串刺しにした。

『何が起きても対応できるように』などという気構えはとうに碎け、危機感だけが思考を圧迫する。

そうして硬直したヘリアンの視界の中、(地図)に灯る光点がその色を白から赤に変えた。

一行が山犬モドキを敵と認識したための変化だ。

赤い光点は対象が『敵』だという事実を示している。

敵——自分たちを食い殺そうとする明確な『敵』。

それを意識した瞬間、足が震えた。

「リ——」

絶り付くように配下の名を呼ぼうとした——その次の瞬間。

ヘリアンの傍らから生じた凄まじいまでの圧力が山犬モドキを串刺しにした。

その余波を受け身を竦めたヘリアンの視界の先、山犬モドキは一瞬その場で飛び上がったと思いきや「キャイン、キャウウツ——」と悲鳴をあげて背を向ける。そしてそのまま振り返ることもなく、尻尾を巻いて逃げ去っていった。

それはどこからどう見たところで、完全な負け犬の姿だった。

「雑魚ですね。殺気を飛ばしただけですが、逆らえない相手と理解したようです」

何のこともないように呟くのは狼獣人系の頂点に立つ【月狼】のリーヴェだ。

どうやらウチの国王側近さんはあの怪物を雑魚呼ばわりできる戦闘力をお持ちらしい。

……いや、冷静に考えれば手塩にかけて育ててきた第一の配下であるリーヴェが、森を徘徊する野良魔獣より強いのはごくごく当たり前の話である。

しかし一方で、一般的な人間サイズであるリーヴェがあんな怪物よりも遥かに強いという事実**に**強い違和感を覚えてしまったのだ。

より正確に言うのなら、こんな華奢な女性が馬鹿でかい怪物に勝利するその絵面を想像できない、とても表現すべきだろうか。ゲームなら当たり前の光景だったというのに、今の自分は目の前の出来事をうまく消化できないでいる。

……これも突然感じるようになってしまった不可解な現実感による影響だろうか。

ある程度冷静になったつもりだったが、やはりまだ混乱しているのかもしれない。

そんなことを考えていると、今度はエルティナが何かに反応した。笹ささの葉に似た長い耳がせわしなく動くその様を見て、ヘリアンは強制的に意識を切り替える。

タクティカルウインドウ（戦術仮想窓）・再開錠。リオープン（選択・地図）

思考操作で再表示した〈地図〉マップには、エルティナからの〈情報共有〉データ共有が行われた結果として新たに二つの白い光点を灯していた。北東にかなり離れた位置に灯ったそれらは、二つとも移動を続けている。先を行く光点を追いかけるようにして後ろの光点が続く形だ。

「陛下」

「北東に何かいるな。二体か」

「はい。共に移動しているようですが、わたくしたちの方角には向かってきておりません」

「……先を行く一体が追い立てられているようにも見受けられる」

眩くと、エルティナの笹耳が跳ねるように動いた。

「なんだ？　何が聞こえた、エルティナ？」

「……微かに、悲鳴のようなものが」

「——ッ！　向かうぞ、急げ！」

駆け出す。足の疲労のことは無視した。

悲鳴が聞こえたということは、つまり人がいるということだ。

そして状況からして先を行く光点——追いかけている方が人だろう。追いかけている方については分からないが両者間の距離はさほどもない。急ぐ必要がある。

駆け出して五歩もしないうちにリーヴェとエルティナが横に並んだ。人間であるヘリアンと魔物である彼女たちの運動能力の差は歴然である。が、それはそれとして彼女たちが明らかにペースを落として並走してくれているという事実には、男としてのプライドが少しばかり傷ついた。

（いや、そんなくだらないことを考えてる場合じゃないだろ！ 急げ！）
自分を叱咤（しつた）しつつた走る。

先ほどの場所から移動したが、視界の明るさは保たれていた。どうやら『あの地点を境界線として普通の森になっている』という推察の方が正解だったらしい。

しかしそれでも人間の目には十分暗い上、足場も悪い。ただでさえ歩きにくい密林という地形に加え、一歩踏み込むごとに腐葉土に足を取られそうになる。なかなか詰まらない対象までの距離がもどかしい。

追われているのが何者かは分からないが、人であるからには意思疎通が可能だということだ。そして、この何も分からない状況下では貴重な情報源でもある。逃がすわけにも、そしてそれを追っている何かによって死なれるわけにもいかない。

「はっ、はっ、はっ……！ く、そ……リーヴェ！」

五〇メートルも走らないうちに息が乱れた。

ただでさえ足場の悪い山道に、大した運動もしていない自分だから当然の結果だ。

荒れた呼吸の中、なんとかリーヴェの名を口にし、先行させるための命令を下そうとして――

「承知しました！ 御身、失礼します！」

そんな台詞（せりふ）と共に、何かを勘違いしたらしいリーヴェに抱え上げられた。

しかも右手一本で両足を抱え、右上腕部で背中を保持し、左手はその身体を揺らさぬようヘリアンの肩に添えられる形でだ。

第三者から見れば、それはまるでお姫様抱っこ（パリエーション）のようにも映っただろう。

「……………」

言いたいことは山ほどあったが……そしてヘリアンのプライドに致命傷に近いダメージが入ったが、その痛みと引き換えに移動速度が一気に増した。先ほどより数倍以上、風圧を感じるような速度で白い光点（ポイント）の方角へと直進する。

彼（ひが）の距離はもうほど近い。正面の小丘を越えれば視界に入るだろう。そしてその小丘を越えた。開けた視界に飛び込んだきたのは、遠くにポツンと見える人影とその背を追う獣の姿。両者の間隔はもう数メートルほどもなかった。

一刻の猶予もないと悟ると同時、考えるより先に言葉が走る。

「エルテナ！ 【追手】の【魔獣】を【足止め】しろ！」

咄嗟（とつさ）に〈鍵言語〉を使つてしまった。

しかし文章としてその命令は伝わっている。

応えは魔術行使という形で現れた。

無詠唱で放たれた風の刃が両者の間の地面を裂き、それに驚いた追手が後ろに飛び退く。

間髪を入れず二射目。

再び形成された風刃の数は十三。

立て続けに射出され、今にも零（ゼロ）になりそうだった両者の距離が更に引き離される。

(間に合った……！)

そこでようやく追われていた方の姿が分かる距離まで近付けた。

頭からローブを被っていて顔は分からないが、姿の輪郭から見て取るに小柄な体格の人型だ。

彼、あるいは彼女もまたこちらの存在に気付いたのか、驚いた様子でこちらに振り向く。

そして追手はやはり獣の類だ。

黒い犬型。先ほどの山犬モドキと異なり標準的なサイズ。まるでドーベルマンのようなその姿。

しかし目は妖しげな朱色に染まっており、身体のおちこちに不気味な紋様が浮かんでいる。

明らかに魔獣だ。しかも初見の魔物。脅威の度合いが分からない。

「リーヴェ、降ろせ！」

抱えられていた手が離され、重力に従ってヘリアンの足が地面についた。

駆け抜ける速度をそのままに両足で地面を削りながらの停止。

頑丈なグリーヴに履き替えていてよかったと、靴裏で地面を削る感触を得てそんな感想を思う。

そして手を離したリーヴェは、ヘリアンの前に躍り出て壁になる位置を保持した。

どうやら彼女は自分の護衛につくことを選んだようだ。

傍を離れる気配がない。

ならば今自由に使える手駒はエルティナのみ。

選択肢は限られると高速で思考。

悠長に考えている暇はない。

様子見をしている余裕もない。

敵の強さも分からない。

それでいて対処を即断する必要がある。

ひとまずは救助を最優先に、牽制けんせいの魔術を撃たせると結論。

「エルティナ！ そのまま風刃で牽制射！ 敵を近付けさせるな！」

「風よ、刃と成って走れ——《風の刃》」

完全詠唱によって三度放たれた風の刃。

移動せず詠唱に力を割けた成果として、今度は三十に及ぶ風およの刃が乱れ飛んだ。

速射性重視の下級魔術とはいえ、牽制には十分。

これで敵の反応を見て対策を——

「……………あれ？」

——取るまでもなかった。

風刃の前に逃げ場をなくした魔獣は避けることも耐えることもなく、風に刻まれてあっさりと無力化された。数十の肉片と化した魔獣の成れの果てがぼとぼとと地面に落ちる。

「……………え、終わり？ やったのか？」

アンデッドの可能性を考慮して警戒するも、風に刻まれた大型魔獣が再び動き出す気配はない。どうやらこれで本当に決着のようだ。

あまりにあっさりとした結果に、しばし呆気あっけに取られる。

「か、風の上級魔術……………？ え、でも、触媒もなしに、そんな……………」

そこへ、僅かに幼さを残した聞き慣れぬ声色こゝろごゑが耳に届いた。

視線を向ければ自分と同じように呆然ぼうぜんとしている姿がある。追われていた「誰か」だ。呆然としている理由は自分とは異なるようだが、ともあれ。

「女だったのか」

ヘリアンの声に肩を跳ね上げ、慌てて少女が振り向く。

その拍子に頭に引っかけていたローブが外れて顔が露あらわになった。色白な肌と西洋系の整った顔立ちに加え、特徴的な長耳が目に映る。笹ささの葉にも似た形状の耳を持つその種族は――

「エルフ、か？」

――ヘリアンの傍らに控えるエルティナと、同系統の種族だった。

2.

ヘリアンに問われた少女は咄嗟とつさという反応で頭から布フクロを被った。

しかし今更隠しても意味がないと察したのか、数秒して諦あきらめたようにその耳と素顔を晒す。

「……助けていただいて、ありがとうございます」

少女はペコリと頭を下げる。その動きでセミロングの金髪がローブから零こぼれて落ちた。ランクは分からないが、外見的特徴からしてエルフ系統の種族であることは間違いない。

白い刺繻ししゅうが施された緑基調の胴衣に、ナイフを差すためのベルトを二本巻きつけたその恰好。更には実用性を優先させたキュロットを身につけ、いかにも丈夫そうな革のブーツを履いた姿からは、どこか森に生きる民を連想させられる。

一通りその姿を改めた後、ヘリアンが内心に生んだ想いは安堵だった。

(よかった、言葉が通じる。しかも敵対的じゃない！)

「タクテイクス・クロニクル」では、搭載されている高度言語解析機構により日本語や英語などといった一般的な言語は自動翻訳される。それは【共通語】として取り扱われ、ほぼ全ての種族に通じるという設定があった。少女の言葉が分かるということは、彼女も【共通語】を使っているということだろう。

そしてヘリアンにとって初めて遭遇した他者相手に言葉が通じるという事実は、どことなく安堵をもたらしてくれるものだった。

(……まあ夢だしな、これ。言葉が通じて当然か)

心中で呟く。

まるで誰かに言い訳をしているようだと考えかけてしまい、頭を振ってその思いを追い払う。

「無事でよかった。悲鳴が聞こえたのでな。怪我はないか？」

改めて見た少女の顔は、容姿に優れたエルフ種らしく整った顔立ちをしていた。

緑色の瞳にどこか優しい光を宿している一方で、細い上がり眉が芯の強さを感じさせる。

またその口元はキュッと引き締められており、優しさの中に鋭さをも併せ持っているように感じられた。

エルフの推定年齢ほどアテにならないものはないが、仮に外見通りならば中学生か高校生になったばかりの年齢層だろう。

しかしヘリアンが一步步寄り寄って声をかけるなり、少女は険しい表情を浮かべて一步退いた。

(……怯えられている?)

何故だろうかと一瞬考え、両隣を見るなり得心した。

リーヴェとエルティナが明らかに警戒した表情で少女を注視していたからだ。

敵対的——とまでは言わないが、一挙手一投足をも見逃さないとというような鋭い視線を向けられれば少女が尻込みするのも当然だろう。

「不躑ですまない。彼女たちは、その……旅の仲間だね」

なるべく優しい口調をイメージして話しかけた。まずは相手の警戒心を解かなければ話にならない。

「……旅人？」

「ああ。三人して森を彷徨っていてね。久しぶりに人に会えたよ」

いや参った、と頭をかきながら少女に微笑みかける。

笑顔は円滑なコミュニケーションを築く上での第一歩であり基本中の基本だ。これで幾分かだけでも警戒心を解いてくれればありがたいと内心で画策する。が、

「……………」

結論。

駄目だった。駄目駄目だった。

むしろ先ほどよりも一層警戒心を強くしたのか、少女は身を庇うようにして胸元に手を寄せる。

(……だよな。俺の笑顔の価値なんて所詮こんなもんだ……)

思わず地面に『のの字』を書きたくなったが、根性で笑顔を維持する。

僅かに頬が引き攣ったかもしれないが見逃してほしい。

「お二人はエルフと獣人、ですか？」

「ん？ あ、ああ。右の彼女がエルティナで、左がリーヴェだ」

「……ご紹介に与りましたエルティナです。よしなにお願いします」

何故か自己紹介前に一瞬間があつた。

しかもリーヴェは僅かに会釈しただけで名乗りすらしていない。

それどころか『少しでも妙な動きをすれば容赦はしない』みたいな視線を向けていたりする。

主の守護を最優先にしているがための反応なのかもしれないが、警戒心が露わにすぎる二人の態度にヘリアンの笑顔が再び引き攣った。

せつかく少女の方から話しかけてくれたと言うのに、これでは台無しだ。

「——申し訳ありません。少々不躰でしたね」

謝罪します、とエルティナは少女に頭を下げた。

人物特徴に【気品】を有するエルティナの所作は洗練されており、腰を折って頭を下げる様にもどことなく優雅さがある。

しかしその様子を見た少女は心底驚いたように目を見開いた。エルティナが微笑みかけると、少女の顔に浮かぶ驚きの度合いが更に増す。激しく動揺しているようにも見受けられた。

……もしかして見惚れているのだろうか。

人物特徴に【美人】を所有していることもあり、エルティナは男女ともに人気がある。

同族である少女からしてもエルティナは目を奪われる存在なのかもしれない。

……よし。エルティナにぶん投げよう。

ヘリアンは少女の会話相手を従者に押し付けることにした。

正直、仮想空間でならまだしも現実世界での社交性はさほど高くない自分である。ぶっちゃけコミュ力には自信がなかった。

それに冷静になって考えてみれば、自分などよりも同族であるエルティナの方が少女としても話しやすいかもしれない。今後どのようなアクションを取るにせよ、まずは初接触した相手と良好なコミュニケーションを取ることが肝要だろう。

そうして己の心に結論を生んだヘリアンは、この場をエルティナに譲るべく一歩退こうとした。

しかしそれよりも僅かに早く、柔らかな微笑みを浮かべていたエルティナが楚々とした所作でヘリアンの背に身を隠す。

……え？　今なんで後ろに下がったんだ？

「けれど、わたくしと彼女はとある事情により人と話すのが苦手なのです。申し訳ありませんが、わたくしたちは少々控えさせていただきますね？」

……エルティナさん!?

ヘリアンは思わず左の従者に振り返る。せっかく会話相手を押し付けられると思ったのにアツサリ裏切られた。いや、自分が勝手に期待してただけでエルティナ自身にそんな気はなかったのかもしれないが期待していた分だけショックが大きい。上げて落とされた気分だ。

そんな心境を知る由もない少女は、エルティナの発言を受けて再びヘリアンへ視線を合わせた。完全にロックオンされた事実を悟り、ヘリアンの頬の引き攣りが三割ほど増す。

「彼女たちは……貴方の奴隷どれいですか？」

「へっ？」

再び少女からの問い掛け。

予想外の質問内容に素で反応してしまったヘリアンは慌てて取り繕う。

「い、いや、彼女たちは旅仲間だ。そんな関係じゃない」

清い関係だ。

いや、主従という関係が清いかどうか分からないが、少なくとも無理矢理従えているわけでは無い……はずだ。

「……何故、ハーフエルフの私を助けてくれたのですか？」

警戒心を隠そうともせず、更に一步下がりがら少女が問い掛けてくる。

「ん……？ 君はハーフエルフなのか？」

「——……ッ！」

少女はあからさまに顔を顰しかめた。

言わなくてよいことを口にしてしまったという、痛切な後悔の表情だった。

ハーフエルフとは、文字通りエルフと他種族との間に生まれたハーフ種のことだ。一般的な創作物では人間とエルフの間に生まれた子供のことを指す場合が多い。

しかし「タクティクス・クロニクル」においては少々異なる。このゲームでは【配合】という機能システムが採用されており、特定の種族では両親の特性を併せ持つハーフ種を作ることが可能だ。一方

で王^{フレイヤ}しか人間が存在しないこのゲームの特性上、配合の相手は人間ではなく亜人種や人型魔物に限定される。

また【配合】は軽々しく行えない。両親が【転生】できなくなるというデメリットがあるからだ。加えて種族の掛け合わせによっては成功判定率が著しく低くなってしまう。しかし、成功さえすれば両親の素質を受け継いだ子供が生まれるという大きなメリットがあった。

ヘリアンも当然のようにこの機能^{システム}を活用しており、このゲームでは混合種^{ミックス}や混血種^{ハイブ}の魔物など別段珍しくもない。

「……ええ、そうです。私はハーフエルフです。——助けたことを後悔なさいますか？」

しかし、何故か少女は諦観^{ていかん}に似た笑みを見せた。

まるで『エルフと勘違いしたから助けてくれたのでしょうか？』とでも言いたげな諦めの表情だった。そんな少女に、ヘリアンは首を傾^{かし}げて訊く。

「何故だ？」

「え？」

「何故、君がハーフエルフなら、助けたことを後悔することに繋^{つな}がるんだ？」

「……………えっ？ あ、あれっ？」

陰りのある笑みはどこへやら。少女は年相応の表情で戸惑った様子を見せた。

なるほど確かに、言われてみれば彼女の笹耳はエルティナよりも短い。他種族の血が混ざっているハーフエルフというなら納得だ。そしてただそれだけの話である。

だが、どうやら目の前の少女にとつてはそれだけの話ではなかったようだ。目を白黒させた表情からそれが読み取れる。いったいハーフエルフならばどんな問題があるというのか。

「——知れたこと。その者らが穢れた種族であるためだ」

背後から第三者の声がした。

咄嗟に振り向く。バラバラになった魔獣の骸の奥に、いつの間にか一人の男が立っていた。

白い肌長い笹耳。またしてもエルフ種だった。ただし今度は男だ。耳の長さも通常のエルフと同じであり、ハーフエルフではないことが見て取れる。

リーヴェとエルティナは随分前からその存在を感じていたのか、男が声をかけてきても慌てた素振りも見せず、静かに警戒体制を維持していた。

「見慣れぬ姿だが、只者ではないな貴様ら。私の獵犬をこうも容易く屠るとは信じられん。見たところ、そのエルフは我らが輩ではないようだが……」

「獵犬……。なるほど、あの魔獣はアンタの従魔だったのか」

道理でリーヴェが近付いても逃げ出さなかったわけだと納得する。

あの巨大な山犬モドキでさえ尻尾を巻いて逃げたというのに、あの犬型魔獣は逃げる素振りがなかった。それは山犬モドキとは異なり、野良ではなく従魔だったからなのだろう。

「思わぬ獲物がかかったものだ。この辺りは深淵森にほど近いというのに、まさかこんな人間が紛れ込んでいようとはな」

「深淵森……？ いや、それより、さっきの言葉はどういうことだ？ 穢れた存在？ もしかして彼女のことが」

「然り。何だ貴様、惚けているのではなく本当に知らんのか？」

エルフの男は「無学にも程があるだろう」とでも言いたげな、侮蔑の視線を向けてきた。

「ハーフエルフとは、我ら神と精霊に愛されし貴きエルフト、不純で野蛮な数だけが取り柄の人間との間に生まれ堕ちた種族だ。つまりは貴きエルフの血脈に人間の血が混入した『穢れ』の種族というわけだ」

「違います、私たちは穢れの種族ではありません！ 人間にもエルフにも良いところはあります。私たちはその両者の間に生まれただけです。穢れた存在などと言われる筋合いはありません！」

「戯けたことを。よくもそのような穢らわしい口を利く。聞くだけでこちらの耳が腐るわ！」

男が歯を剥いて答えた。

見目麗しいエルフだろうが嫌悪感が浮き出た表情は人間と大して変わらず、等しく醜い。

だが、ヘリアンがそれを気に留めることはなかった。

いや、それどころではなかったと表現したほうが正しい。

エルフの男が言った「人間との間に生まれた」という台詞が、ヘリアンに衝撃を与えていたのだ。だってその台詞はおかしい。常識的に考えれば、そんな台詞が出てくるのは異常だった。

——何故ならこのゲームには『人間』という種族のユニットなど存在しない。

より正確には、『プレイヤー』以外に人間はいないのだ。

エルフやドワーフなどの亜人種や人型の魔物は比較的多いが、国民は全て魔物に該当する。

人間という種族は「タクティクス・クロニクル」においては特別なものであり、プレイヤー王専用の種族とされていた。

しかし、男は当然のようにハーフエルフの片親を人間だと断定した。しかも数が取り柄とまで口にしたということは、多くの人間が存在するということだ。明らかにゲームの設定と乖離かいりしている。

(……いや、それは今考えるべきことじゃない)

今回の目的は情報収集だ。考察なら後でいくらでもできる。それに目の前で修羅場しゅらばが繰り広げられているのに、悠長に悩んでいる場合ではないだろう。

そのように自分を説得したヘリアンは、視線をぶつけ合う少女と男の間に割り込むようにして問いを放つ。

「アンタは何故彼女を追ってたんだ？」

「フン。戯れよ。街を陥おとしてやったはいいものの、ドブネズミのように逃げ散った者どもがいるのでな。猟犬どもの狩りの練習台に使ってやっているとわいわけだ」

「街を陥とした……?」

話がきな臭くなってきた。

「ハーフエルフどもが集たかって作った街だ。穢れた存在の分際で街を作り住むなどと、ましては国を名乗ろうなどと驕り高ぶるにも程がある。故に我ら純粹の血族たるエルフが有効活用してやろうと言うのだ。無論、穢れを浄化してからだがな」

「……浄化、というのは」

「知れたこと。穢れた血を祓はらうということだ」

「血を祓う……まさか、元から住んでたハーフエルフを追い払うということか？」

「……やれやれ。貴様ら人間は、こんなことまで説明せねば伝わらぬのか。ほとほと呆れ返る」

再びの侮蔑の表情。

先ほどの会話からある程度読み取れたが、やはり人間もエルフの蔑視対象らしい。

「悪いが俺たちは旅人でね。この辺には初めて来るんだ。このあたりの情勢もよく知らないんで、無知なのは勘弁願いたい」

「ほう？ 無知であることを認めるとは、人間にしては殊勝ではないか。他の人間どもは、我らが口を開く度に怒り喚く猿のような奴らばかりだというのに……ああ、旅人といったか。ならば猿は猿にしても、別系統の優れた猿ということか」

……いちいち貶さなければ会話ができないのだろうか。

しかし数的不利なこの状況において侮蔑の感情を隠そうともしないということは、それほど実力に自信があるということかもしれない。だとすれば刺激して敵対するのは下策だ。ここは何を言われても怒らず、冷静に対処しなければいけない場面だと気持ちを整える。

その傍らで、堪りかねたように少女が声を張り上げた。

「いい加減にしてください！ 人間は人間です、猿じゃありません！ それに人間にも良い人はいます。森を害することなく、森と共存する道を選ぶ人間だっているんです。人間を知りもしないで馬鹿にしないでくださいッ！」

「穢れは黙っているろ！ 耳が腐ると言っておろうが！」

その罵倒に、ハーフエルフの少女は痛切な声色で叫んだ。

「だったら……だつたらせめて私たちを放っておいてください！ 私たちは森の外れに住んでいるだけじゃないですか！ それもこんな、深淵^{アビス}森と荒野にほど近い場所まで追いやられて……それで必死に生きてるんです！ なのに何故、貴方たちは——ッ」

「——もういい。目的は捕獲^{アサヒ}だつたが限界だ。永遠にその口を黙らせてくれる。我の獵犬を台無しにしてくれたその愚か者どもと一緒に死ぬ」

言つて、エルフはその手に何かを握り込んだ。瞳に劍呑^{ケンノム}な色が混ざる。

「放^{フエル}つ疾風^{ルジビエ}の矢^ア！」

エルフの男は小石のような物を投擲^{トウテキ}すると同時、エルフは力ある言葉を叫んだ。その言葉を鍵として小石は緑色の煌めきを放ち、光は鋭利な疾風と化して奔^{ハシ}る。

ヘリアンが認識できたのは小石が光を放つところまでだった。咄嗟の動作で少女の前に身を投げ出し、両腕で顔を庇う。頭の片隅で『何をやっている。死ぬ気か』との自問が聞こえたが、気付いたときには身体が動いてしまっていた。内心で激しく後悔するがもう遅い。

かくして目の前に迫る魔力を孕^{はら}んだ暴風は、無力なヘリアンへと無慈悲に襲いかかり、

「《神護^{アウストリ・アロケシ}の風》」

エルティナの展開した防衛魔術によってあっさりと霧散した。

柔らかな蒼色^{あお}の風がヘリアンたちを包み、外部から干渉せんとする一切^{いっさい}の現象を碎き散らす。

必殺を確信していたのか、その光景を目にしたエルフが目を剝いた。

「な、に……ッ!？」

「《戒め^{トウメイ}の蔓》」

続けさまの省略詠唱。エルフの男の足元から太い蔓が急成長し、その四肢を囚える。そして身動きの取れなくなった男に対し、リーヴェが矢のように飛び出した。

——因みに。

この時、エルティナとリーヴェは他勢力との初遭遇という出来事の重要性を理解していた。だからこそ決して下手を打つまいと交渉には一切介入せず見守っていた。

主の命令が下らない限りは現状維持に努めるべきと考え、エルフの口から垂れ流された主への不敬な言動にも我慢した。

なにせ他ならぬ主が聞くに堪えない罵詈雑言に耐えながら情報収集に徹しているのだ。自分たちが感情に任せて力を振るい、それを台無しにしているはずもない。

故に我慢した。我慢に我慢を重ねた。リーヴェは喉元にまで迫り上がってきた攻撃衝動を抑え込み、エルティナは笑顔の下に敵意と嫌悪感を隠した。

しかし相手が主に手を出してきたとなれば話は別である。

自らの主人に対し攻撃を加えてきた『敵』を許せるはずもない。

そして攻撃された以上、主人が屈辱に耐えながら続けていた交渉も決裂したと見ていいだろう。

——つまり、もう我慢をする理由が何一つない。

故にエルティナの魔術によって行動の自由が奪われた『敵』に対し、リーヴェは一撃必殺のその拳を繰り出して——

「——待て！」

主の制止の声。

飛びかかっていたリーヴェは咄嗟に急制止ブルレキをかける。

致死の拳は男の顔面に到達する直前にどうにか停止した。

拳が巻き込んだ大気が風圧となつて、男の長髪を滅茶苦茶めちゃくちやに掻き乱みだす。

風がやんだ後には、何が起こったのかも分かっていないような男の間抜けた表情が残った。

(……………や、やばかった)

ヘリアンは内心で胸を撫なで下ろす。

一瞬でも制止の声が遅れていたら男は死んでいただろう。

防御力がどの程度か分からないが、エルフは頑丈さに優れている種族ではない。

先ほどの魔術の威力から推察する力量としては、対単体戦闘において屈指の攻撃力を誇るリー

ヴェの拳を食らつて無事で済むとは到底思えなかつた。いきなり他勢力の者を殺すところだつた。

「は？ な、なんだこの蔓は？ 今、なにが……」

「——おい」

死にかけたという事実を未だ呑み込めていない様子の男に対し、ヘリアンは告げる。

意図せず、自分で思ったよりも低くドスの利いた声になった。

「今のは見逃してやる。我々はそちらと敵対する意図はない。仕掛けてきたのはそちらで、我々は

ただ降りかかる火の粉を払っただけだ。いいな？」

主の意思に応じたエルティナが四肢を拘束していた蔓を解く。しかし男は未だ状況を理解できて

いないのか、困惑した表情を一行に向けたままだった。

「な、なに？」

「見逃してやると言っている。失せろ」

ヘリアンは鷹揚に顎をしゃくって明後日の方向を指す。

リーヴェとエルティナに見られている以上、下手に出て『戦う意思はありません。お願いですから退いてください』などは口が裂けても言えない。目の前のエルフよりも、連れてきた軍団長たちに軽んじられる方が遥かに怖かった。

しかも、二人は今も剣呑な空気を発している。それが向けられているのは目の前のエルフであって自分ではないのだと分かっている。怖いものは怖い。一刻も早くこの緊迫した状況をなんとかしたい気持ちで一杯だった。

有り体に言えば、ヘリアンは現実的すぎる『暴力』の前に、完全に腰が引けていたのだった。

「き、貴様……たかが人間のくせに誰に向かって口を利いている！ 私は栄えあるノーブルウッドの狩人長——」

「お前が誰かなど興味がない。もう一度言う、失せろ。それとも本気で事を構える気か？」

「……クツ」

男は怒りに顔を紅潮させたが、戦っても敵わないという事実が判断できる程度の冷静さは残していたのか、歯噛みしながらも去っていった。

森の奥へと男の姿が消えるのを見届け、ヘリアンは思わずホッと安堵の息を吐く。

「あの……」

そして、背から差し込まれた幼さの残る声に一瞬で硬直した。

「おかげさまで助かりました。ありがとうございます」

「あ、ああ。無事でよかった」

振り向いた先には助けたハーフェルフの少女の姿がある。

……やばい。どうしよう。少女の存在が完全に意識から抜け落ちていた。あろうことか彼女の前で自分がリーヴェエたちの上位者であるかのような振る舞いを晒してしまった。

咄嗟に名乗った旅人設定がこれでは台無しに……いや、まだなんとかなる。二人が荒事担当で自分が交渉担当なんだと説明すれば誤魔化せるかもしれない。

そうするとヘリアンのポジションが『二人のうら若い女性に守られている軟弱男』というなんとも情けないことになってしまうが、この場を乗り切れるならプライドとかもうどうでもいい。だから頼むから誤魔化されてくれ。

「じ、実は彼女らは腕利きの護衛でね。情けないことに腕に自信のない私はずばら交渉とか雑用係なんだ、ハハ……」

……え、笑顔だ。笑顔と勢いで誤魔化せ。

いやしかし、さっきは同じようなことをして失敗したんだ。だが立て続けのイベントでオーバーヒート気味の頭では代案も思いつかない。

な、なにか他にいい手は……。

「プツ……アハ、アハハハッ」

そうしてヘリアンの額に汗が浮かび始めた頃、唐突にハーフェルフの少女が笑いだした。

しかも先ほどまでの能面のような表情とは裏腹に年齢と相応の子供のような笑顔でだ。

「アハハツ、フフ……ご、ごめんなさい。だって、エルフにはあんな強気だった人がハーフエルフの私なんか困ってるだなんて、なんだか可笑しくって。フフ」

息も絶え絶えにそんなことを言ってくれる。

……いや、たしかにちよつとばかり言い訳がましかったかもしれないが、こんな中学生みたいな少女に内心を見透かされたというのはシヨックだった。

立て続けの精神ダメージに、しばし打ちひしがる。

散々笑ってスッキリしたのか、晴れやかな顔で少女は口を開いた。

「失礼しました。それと無理しなくていいですよ。さっきのエルフに対して言ってみたに、普通に喋しゃべってくれて構いません」

……いや、そっちの方が演技なんだが。

むしろ王様スタイルより、優しいお兄さんスタイルの方がまだしも自分のデフォルトに近い。

（つて、あれ？ これってもしかして……俺はこの子の前でも王様スタイルに寄せて、かつ旅人設定で喋らなきゃいけないようになったってことか……？）

明らかに難易度が増した気がする。いい加減に泣きたくなった。少女が普通に喋ってくれるようになったことだけがせてもの救いだ。

散々笑ってくれたおかげか、随分と警戒心を解いてくれたように思えるので怪我の功名こうみやうと思うことにする。というか、それでも思わないとやってられない。

「私の名はレイファと申します。二度も助けていただいて本当にありがとうございます」

「いや、気にすることは無い。襲われていたのを見かけたから咄嗟に助けただけの話だ。それに二度目は私たちに降りかかる火の粉を払っただけなのだから、君が礼を言うようなことではない」

「そうだとしても助けていただいたことに変わりはありません。ですので、御礼を言わせてください」少女はペコリと頭を下げる。

一纏めに括っていた金髪が尻尾のように跳ねた。

「それと。助けてもらっておいて失礼ですが、一つお願いがあります」

「む……？ 何だろうか？」

ヘリアンは頭の中で身構える。

ここで迂闊な返事はできない。先ほどのエルフと少女の話から察するに、相当に厄介そうな事情を抱えていそうだと窺い知れたからだ。どうにも種族間の差別意識を起因とする抗争の真つ只中らしいが、事はそう簡単な話でもないのだろう。

そんな状況下で少女が申し出た『お願い』。

いくらヘリアンでも、リーヴェとエルティナの戦闘能力を目当てとした協力依頼だということは容易に想像できた。

だが、軽はずみに手は貸せない。

先ほどのエルフは恐らくただの斥候役だろう。なにせ大した実力者でもなかった。しかし本陣の兵士は、どう考えても先ほどのエルフより高い戦闘力を持つているに違いない。

ましてや敵の数も分からない状況だ。規模は？ 装備は？ 練度は？ 技術レベルは？

何もかも分からず、どの程度の戦力を所持しているのか見当もつかない現状、この問題に首を

突つ込むわけにはいかなかった。

故にヘリアンはその『お願い』を毅然として断ろうと腹に力を籠め、少女の続く言葉を待ち——
「貴方のお名前を教えていただけますか？」

呆気に取られた。

虚を衝かれたヘリアンは口を利くことすらできず、しばし呆然と立ち尽くす。

(……マスケか、俺は)

自覚するのは猛烈な羞恥の感情だ。

言われてみれば従者二人の紹介はしたものの、自分自身は名乗ることさえしていなかった。

そんな最低限の礼節さえこなせていない身の上で、よくもまあ問題事に対する警戒だの保身だのを考えたものである。

彼女はそんなこと欠片も考えていなかったというのに邪推した結果がこれだ。

本気で落ち込み、一頻り自分自身を内心で罵倒するヘリアンだったが、その間も少女はただじつと待っていてくれた。毒気を抜かれたような苦笑を一つ零して、少女に右手を差し出す。

「名乗りが遅れてすまない。ヘリアンだ」

自然体で名乗れたと思う。

転移してから以降、初めて自然に話せた気がした。

「改めまして、レイファです」

握り返される手。

ハーフエルフの少女——レイファの顔には、よく似合う微笑みが浮かんでいた。

自己紹介と握手を終えたヘリアン一行は、少女を先頭に森を歩く。

訊けば、この近辺に少女の住む集落があるとのことだった。

エルフの奇襲を受け街から逃げ延びた人々が集まり、かれこれ三週間ほどそこで生活を共にしているらしい。

「——では、先ほどのエルフは」

「ええ。街を襲ったノーブルウッド王国のエルフです」

集落に向かう道中、情報収集を兼ねて先ほどのエルフの男のことについて話をする。

早速面倒事に遭遇してしまったものの、情報源となる人にこんなにも早く会えたこと自体は僥倖（あやうきごころ）だった。最悪の場合は日が暮れるまで歩こうと、誰にも会えずじまいすらありえたのだから。

「ええと、君たちの国の名は……」

「ラテストウッドです。国といっても、都市一つと幾つかの集落しか持たないような都市国家……もつと行ってしまえば寄り合いみたいなものですけどね。三〇年程前にとあるハーフエルフが中心になって、建国したんです」

この場合の都市国家とは、一つの都市と周辺地域のみを領土としている小国家のことだろう。

現在のアルキマイラも城と城下町だけが強制転移させられた状態なので、事実上の都市国家状態になってしまっている。

「三十年……割と最近の話なんだな」

「ハーフエルフ自体が最近の種族ですしね。ハーフエルフの数が急増したのは今から百年ほど前の話で、それ以前は存在自体がかなり珍しかったそうですよ」

ハーフエルフの少女が言うには、そもそもハーフエルフが生まれる土壌がなかったらしい。

地理的な関係上、人間の生活領域にほど近いエルフの国はノーブルウッドになるが、人間蔑視の感情が根強い彼らと人間の間では子供など作られるはずもない。

大森林の奥深くに住む、人間蔑視の感情がない他国のエルフがごく稀まれに森の外に出て、その中の更に少数派が人間と夫婦関係になり、子供——つまりはハーフエルフを産むようなケースしかなかったとのことだ。

百年前までは。

「百年ほど前に、種族間戦争が起きたんです」

ノーブルウッドを中心とするエルフの集団と、人間の連合国との種族間戦争。

エルフの軍勢は緒戦こそ魔術による奇襲攻撃で勝利したものの、その後は人間の数の力に押されて敗戦に次ぐ敗戦という屈辱を味わうことになる。

そもそも戦場が悪かった。開戦の場となった主戦場は大森林から東に広がる荒野で、一生を森の中で終える者さえいるエルフたちは荒野への地形適性が低かったのだ。そして敗戦の中でノーブルウッドの女王をはじめとした多くのエルフが捕まり、エルフたちは人間の連合軍による数の暴力に押され、大森林まで後退せざるを得なくなった。

しかし森に入ってからエルフは、その能力を十分に発揮し、天然の罨むなや森の従魔を使い連合軍

の進撃を食い止める。そこで膠着状態となり、開戦から五年後、停戦協定が結ばれた。

——では五年間もの間、人間に捕まっていたエルフの女性らはどうなっていたか？

答えは定番通りというわけだ。人間の美的感覚からして一様に美しいエルフの女性性は戦利品として貴族や高位軍人などに下げ渡され、性奴隷同然の扱いを受けることとなった。戦争を仕掛けたのはノーブルウッド側らしいが、それでも聞いていて胸糞悪くなる話には違いない。

停戦に伴い大半のエルフは本国に返還されたが、その中には陵辱されて身籠っていたり、人間との間にできた子供を出産していた者が多かった。

——少なくとも、ハーフエルフの集団がで上がる程度には。

「それが私たちの祖先です。祖先といっても、私の世代でまだ四世代目なんですけどね」

ただか百年少々しか経ってませんから、とレイファが補足する。

由来からしてかなり酷いものだったが、レイファの表情には特に陰りのようなものはない。少なくともヘリアンの洞察力では陰りを見破れなかった。

「けれどハーフエルフがエルフに受け入れられることはありませんでした。まあ当然ですよ。彼等は人間を嫌ってましたから、人間の血が混じっている私達は嫌悪の対象だったんでしょう。むしろ今では人間よりもハーフエルフの方を強く嫌うようになってしまいました」

「……では人間の、ハーフエルフに対する反応については？」

「そつちも似たようなものです。けどエルフよりはマシですね。私たちに好意的に接してくれるエルフはこの付近では一人もいませんが、森を訪れる人間の中には好意的に接してくれる人もいます。いきなり攫おうとしてくる人間もいますけどね。でも、良い人がいないわけじゃないんです」

現に私も助けてもらえましたし、とレイファは微笑む。さっきまでの警戒した素振りはどこへやら、随分と心を開いてくれたものだ。それだけ厳しい立場だったのかと重い気持ちになる。しかし色々と言いついてしまったが、聞くに連れて様々な乖離点が浮き彫りになってきた。

——まず、ゲーム「タクティクス・クロニクル」では、そんな歴史はない。

少なくともヘリアンのいたワールドNoⅢでは、そのような歴史は発生しなかった。

エルフ種のN P Cの集団はいたが、ゲーム時代の百年前にそんな戦争が起きたことなどない。

当時の自分が知らなかったエリアで起きていた可能性はあるが、他国を併合する中で入手した各国の【歴史情報】にもそんな記載はなかった。

国名も同じくだ。ノーブルウッドもラテストウッドも、ヘリアンは聞いたことなどない。

つまり、ここが自分たちが従来いたワールドではないという事実がこれで確定したということになる。

また人間の国などというゲームの根幹的前提条件を無視した国家がある以上は、従来から稼働する別サーバなどにデータを移された可能性もなくなったわけであり……いや、そうじゃない。今すべきことは情報収集だ。考察は何もかも後回しでいい。余計なことは考えるな。

「……先ほどのエルフの態度については理解できた。ノーブルウッドのエルフたちはラテストウッドのハーフエルフを目の敵にしているということだな」

「ええ。私たちは静かに暮らしたいだけなんですけどね。私たちの首都が人間の生活領域にほど近

く、いざとなれば人間との戦争の際に盾にできて、更には深淵アビス森の付近という悪条件も重なってか、これまでは手を出されることはなかったんですが……」

しかし状況は一変する。

三週間前、ノーブルウッドは突如としてラテストウッドを襲撃したのだ。

「開戦の理由は？」

「分かりません。そもそも宣戦布告なしの奇襲だったんです。街を攻め落とされた後にようやく発表された声明では『高貴な血族にて街を正しく統治するべく立ち上がった』と主張しているらしいですが、到底それを信じる気にはなれません」

そもそも攻め落とされたラテストウッドの都市は大樹と石造りの合の子らしく、森に拘こたわるエルフたちが殊更しじやう欲ほつしがるとは思えないとのことだ。

エルフたちの住処すまがに木材以外の素材が使われることは稀で、多くの者が大樹の中で暮らしている。「人間と再び戦争をするつもりで、国境線に近い私たちの都市を前線基地として活用する狙ねらいかという考えも浮かびましたが……」

「百年前は殆ど敗戦だったんだらう？ 今から人間と戦争を始めたとして、エルフ側に勝ち目はあるのか？」

「ないとは言いませんが、難しいでしょう」

訊けば、百年前と比べて人間が数を増しているのに対して、ノーブルウッドの民は殆ど増えていないらしい。百年前も数の暴力の前に圧おさされて負けたのだから、今戦ったところで更に苦戦を強いられるであろうことは想像に容易い。

「だから、彼らが都市を本気で欲しがっているとは思えないんです。そもそも都市を欲しがる理由が見当たりませんから。それに都市を占領したいだけなら、逃げ延びた私たちを捕らえようとする理由に説明が付きません」

そういえば、さっきのエルフも『目的は捕獲だ』と言っていた。

確かに都市が欲しいだけならハーフエルフを追い出せばそれで済む。いくらハーフエルフ憎しとはいえ、都市外に逃げ出したハーフエルフの一人ひとりまでも捕まえようとする理由はない。

「宣戦布告抜きで首都を急襲されたということは、国王……かそれに当たる指導者は？」

「女系王族なので、指導者は女王ですね。ラテストウッドの女王は王配と共に行方不明です。エルフほど魔術が得意ではありませんが、それでも皆を纏め上げて建国した実力者ですから亡くなってはいないと信じたいです。ですが集落に逃げ延びてきていない以上、恐らくはエルフたちに囚われているでしょう」

首都を奪われた上に指導者も行方不明。これはもう完全に負け戦だ。この状況で打てる手があるとすれば、逃げ延びた手勢を纏めた上で他勢力と同盟を組んで反撃というのがベターだろう。

だが彼女らは、人間からもエルフからも差別を受けているハーフエルフだ。だからこそ寄り集まって国を作ったのであって、頼れる存在が他にいないかと問われれば答えに詰まるだろう。

自然、気が重くなる。

可哀想にとは思うが迂闊に手は出せない。なにせ自分の国として未曾有の大異変に晒されている真つ最中なのだ。最低限でも現状把握が済むまで、新たな問題を抱え込むような余裕はどこにもない。

余計なことは考えるなと自分を戒め、情報収集に努める。

「ちなみにレイファさん。エルティナについては」

「レイファでいいですよ」

「っこり笑顔を向けられる。」

助けた際の能面のような表情とのギャップに、不覚にもクラッと来た。

……幾らなんでも一気に好意的になりすぎじゃなからうか。

「あー……ではレイファ。エルティナなんだが、彼女はノーブルウッドの住民じゃない。私もハーフエルフに差別意識はないし、こっちのリーヴェについても同様だ。その点は信用してもらっていい」隣を歩くリーヴェとエルティナが首肯する。レイファは朗らかに頷いた。

「はい。信用させていただきます」

釘を刺すような台詞にも聞こえるが、他意はなさそうだ。一応は信用してもらええているらしい。

ちなみに一行がこのあたりの情勢について全く知らない理由については、遠方からの旅人だからという設定で押し通した。頭の天辺から足の爪先までジロジロと見られることになったが、レイファは何も訊かず先ほどの説明をしてくれていた。後から色々と突っ込まれそうで怖いのが、何も訊かれない以上は現状維持だ。色々と無用な補足説明をしようとして自らボロを出すこともないだろう。

またエルティナは二人の会話に相槌を打つ程度で、リーヴェに至っては完全に無言状態だ。

設定にボロが出ないよう、会話は完全にヘリアンに任せざる態勢である。

「あ、ちょっと待ってもらっていいですか？」

「ん？ 構わないが」

「あと十分ほど歩けば集落に着くんですが、皆さんを連れて行くと集落の皆が驚いてしまうと思う

んです。なので混乱を防ぐために、先触れを出したいと思ひまして」

「ああ、それは助かる。気を使わせてすまないが是非とも頼む」

騒ぎになるのは御免なので素直に嬉しい申し出だ。

笛でも使つて呼ぶのかと思つて見ていると、レイファは懐から翠色の石を取り出して地面に置いた。そして近くに落ちていた小枝を使い、置いた石を中心として地面に何らかの紋様を描いていく。

慣れた手付きで描かれていくその幾何学的な紋様は――。

「……陛下、魔法陣です。念のためにご警戒を」

レイファに聞こえない程度の声量でエルティナが囁く。やはり魔術行使の準備だ。

ゲーム「タクティクス・クロニクル」では、幾つかの儀式魔術の中に魔法陣を描いて発動させるものがある。レイファが行使しようとしている魔術もその類なのだろう。

仲間を呼ぶための合図でも打ち上げるのかと思つたが、それにしては随分と仰々しい気がする。

「お待たせしました。今から仲間を喚びますね」

……今から仲間を喚ぶ？

言葉のニュアンスが引つかかった。

「もしかすると……これは召喚陣なのか？」

「ええ。お互いに仲間だと認識している者を召喚する魔術なんです。魔力を増幅させるために陣が必要でして。お待たせしてしまいました」

「……仲間の召喚？」

なんだそれは。そんな魔術は「タクティクス・クロニクル」には存在しない。

召喚魔術自体は存在するが、魔力で編まれた召喚獣しか喚び出せない代物であり、生きている既存のキャラクターを喚び出すことは不可能とされている。キャラクターの瞬間移動——即ち転移については【転移扉】を介したファストトラベル機能でしか行えないはずなのだ。

しかし、目の前の少女は魔術で仲間を喚ぶことが可能であると言う。

そういえば、先ほどのエルフの行使した魔術にしてもそうだ。小石を投擲して風魔術を発現したようだが、あの魔術も初見のものだった。「タクテイクス・クロニクル」をやり込んでいるヘリアンが知らない魔術などそうそうあるものではない。これはいったいどういうことだ。情報を集めれば集めるほどに既知の知識との乖離点が増えていく。

困惑するヘリアンを他所に、レイファは魔術行使のために目を瞑り、祈るようにして手を組んだ。従者の二人は未知の魔術行使に対し、何が起きても即応できるよう密かに身構える。

「我は乞う。誘うは幽き呼聲。友よ。我が友よ。汝もまた我を輩と認むるならば、我が聲を標に今此処に來たれ——我は輩を導く者」

詠唱と共に魔法陣がエメラルド色に光り輝き、それは結びの一言で中心地へと収束した。

光は一際眩い輝きを残滓として消失し、後に残ったのは妙齡の女性の姿だ。

「レイファ様！ ああ、ご無事でよか——ッ、エルフ!？」

魔法陣から現れた——恐らくはハーフェルフの——女性は背に携えていた弓を咄嗟に手に取り、流れるような動きで矢筒から矢を抜き番える。

「おやめなさい、ウエンリ！ この方々は私を助けてくださった旅人の皆様です。今すぐ弓を下ろしなさい」

「し、しかし、その獣人はともかくソイツらはエルフと人間です。危険です、お下がりにください！」
「私は弓を下ろしなさいと言いました。これは命令です」

レイファに窘められた女性は、一行に対する警戒の視線はそのままに渋々と弓を下ろした。まだ弓も矢も握ったままだったが、そこが彼女の妥協点だったのだろう。

——しかしそんなことよりも、ヘリアンは別の問題に頭を抱えなくなった。

喚び出された女性がレイファの言葉に従ったということは、レイファは彼女よりも目上の存在であるということになる。だがどう見てもレイファは彼女より年下だった。レイファが外見年齢が十五歳程度なのに対し、喚び出された女性の外見年齢は二十代半ばに見える。これまで接してきたレイファの性格からして年上相手には敬意を払うのが普通に思えるが、目の前の光景は全くの逆だ。

しかも、現れた女性は彼女に対し『レイファ様』と呼んでいた。

ならば喚び出された成人女性より若輩であるにもかかわらず当然のように命令を下し、かつ彼女から敬われているように見受けられる少女の身分とは——？

「申し訳ありません。今の集落では殺気立っている者も多いものでして。不躰な真似をしてしまい、重ねてお詫び申し上げます」

「いや、それは構わない……構わないんだが、レイファ。一つ訊きたいことがある」

「はい。何でしょう？」

ニッコリと、レイファは友好的な微笑みを浮かべる。

ヘリアンは背中に嫌な汗を流しながらも訊いた。

「君の……フルネームを教えてくださいませんか？」

「喜んで。私のフルネームは『レイファリムラテストウッド』と申します」

レイファリムラテストウッド。

ハーフェルフの国の名もまた、ラテストウッド。

国の名を自らの姓かばねに戴く人物などそうそういるはずもない。

つまり、ただのハーフェルフだとばかり思っていた少女の正体は。

「もう少し歩けば私の国に着きます。何もないような集落ですが、せめて助けていただいたお礼だけはさせていただきます。一個人として、そして王族としても歓迎させていただきます」

純粹に見えていた笑顔が、今は怖い。

先ほどまでの会話における言葉の全てに何らかの裏が窺められていたようにさえ感じられた。まずいことになった、とヘリアンは今度こそ頭を抱えた。

第三章 ラテストウッド、そして――

結論から言えば、ヘリアンたちは集落の人々から歓迎はされなかった。

集落には石造りの家と、朽ちた大樹をくり抜いて部屋を設けたような作りの家がある。家屋の数は百を超えているだろうが二百には満たない。

そして家屋の間を縫うようにして、テントに似た作りの仮設住宅が幾つも建てられている。しかしながらテントといっても立派なものではなく、あくまで間に合わせに作られた簡素なものだった。集落というよりも難民キャンプのような様相を呈^{てい}しており、そこではエルフの国であるノーブルウッドに襲われ、逃げ延びた人々が狭い集落の中で身を寄せ合^あって暮らしていた。

そんなところへ敵対種族であるエルフを連れた人間が現れたとして、歓迎されるわけがないのは自明^{こゝろわり}の理だ。むしろ石を投げつけられなかっただけマシだと思える状況である。

そしてそんな最悪の空気を払ってくれたのが、ここまで案内してくれたレイファだった。

「この方々は私の命の恩人です。彼らへの無礼は私に対する侮辱である^{しごころえ}と心得なさい」

彼女は集落の人々に対し、懇切^{こんせつていねい}丁寧^{ていねい}にここまでの経緯^{けいゐ}を説明する。

これにより集落の人々は「他ならぬレイファ様の命の恩人ならば」と、ヘリアンたちの滞在にあ

る程度の理解を示してくれた。

そうして後に残ったのは『二人の美女を引き連れている凡庸な青年』というなんとも珍妙な旅人への胡乱げな視線だけだ。どうにも黒髪黒眼の人種は彼らにとつて珍しいらしく、遠巻きに視線を集めるヘリアンは見世物小屋のパンダにでもなった気分を味わった。

そしてやはりといふべきか。レイファはラテストウツドの王族だった。

しかも女王の第一子であり、王位継承権第一位を持つ第一王女だ。現女王が生死不明の状況のため、彼女が暫定女王として民を纏めている立場らしい。また彼女には妹が一人いて、生死不明の両親を除けば王族に連なる者は彼女ら二人だけだという。

そんな重要人物である彼女が、何故、森の只中に一人きりでいたかといえは——

「——現女王の救出？」

「はい。理由は分かりませんが、ノーブルウツドのエルフたちは逃げた私たちを殺すのではなく生け捕りにしようとしています。ならば私の両親、即ち我が国の現女王と王配も生かされている可能性が残されています。とはいえノーブルウツドの守りも堅牢。まずは精鋭班で先行偵察を行うべく忍び込もうとしたのですが……」

集落のとある天幕の中。

ラテストウツドの重鎮と共に車座になって座るヘリアンは、その理由を耳にして首を傾げた。

ちなみにリーヴェとエルティナはヘリアンの後ろに控えて立っている。レイファは座るように促してくれたものの、主の護衛として立って控えることを望む二人は礼儀正しく謝辞していた。

「精鋭班？ 何故そこに君が入っている？ それに他の者たちは？」

「私は先ほどお見せした、仲間を召喚する魔術^{マジック}を有しています。運良く現女王たちが捕らえられている場所にまで忍び込めたら、そのまま仲間を喚^よんで強行脱出しようという作戦でした。ですが結局は街の外壁を越える前にノーブルウッドの兵士に見つかって、あの様^{さま}です。他の者たちは……私を逃がすための囿^{おとろ}になって捕まりました」

「……なるほど……」

聞けば聞くほどに厄介な状況のようだ。

話の流れからして、あの召喚魔術を操れる術士は彼女しかいないと思われるが、王族が——それも暫定女王自らが出撃しないといけないということはよほど切羽詰まった状況下にあるのだろう。

……国王自ら国外調査に出ている自分に言えた義理ではないかもしれないが。

「——もし、客人よ」

腰を落ち着けて会話を交わしている中、尖^{とが}った声が飛んできた。

口を挟んできたのは先触^{さきぶ}れのために召喚された先ほどの女性だ。

レイファの説明によれば、彼女は集落の防衛を任されていた戦士長補佐らしい。精鋭班として出撃した戦士長を失ったため、現在では彼女が戦士長を務めているとのことだ。

その彼女が、少々険の混じった視線をヘリアンたちに向けていた。

「客人らは、少々レイファ様への礼儀が欠けているのではないか？」

「……ウエンリ」

窘^{たじな}めるようにレイファが女性の名を口にする。

それでも彼女——ウエンリは口を噤^{つぶ}まなかつた。

「言わせてくださいレイファ様。……客人よ、レイファ様を助けてくれたことについては心から礼を言う。だが先ほどから黙って見ていればレイファ様に矢継ぎ早に質問をしてばかりではないか。不躰にすぎるのであろう。そもそも何故客人らは旅人であるというのに、このあたりの情勢に関して無知なのだ。本当に客人らは旅人なのか？」

「ウエンリ、不躰なのは貴女です！ ヘリアン殿たちは厚意から私を助けてくださいました。そのような勘繰りは、それこそ礼儀に欠けている行為でしょうに」

叱責されるウエンリだが、それでもヘリアンを見る瞳の陰は消えない。同席している護衛のハーフェルフたちから向けられる視線も似たようなものだった。

まあ確かに怪しいだろう。怪しまれるのは分かりきっていた。

だからヘリアンも集落までの道中でない知恵を絞りながら、それなりの対策を考えてきたのだ。

「なるほど。ウエンリ殿の懸念はごもつともだろう。私たちがエルフたちの……ノープルウッドの手先ではないかと怪しんでいる、というところか」

「……そこまでは言っていない。ただ、客人らが旅人という主張には違和感を覚えたまでだ」

「そうか。しかし我々が旅人なのは事実だ。もつとも、普通の旅人かと問われれば微妙なところではあるがね」

「どういう意味か」

「我々は深淵森からやってきた」

「——ッ!?」

場が一気にざわめいた。

深淵森とはレイファとエルフ男との会話の中で出てきた単語だが、会話の流れから察するに幻惑効果を帯びていた。あの森のことだろう。

そしてハーフェルフの国ラテストウッドは人間との国境の近くにあ、人間の領域は東にあるらしい。更に聞いた話によればエルフの国ノーブルウッドは北西に位置し、ラテストウッドは深淵森と人間の国境線近くの森にまで追いやられているという。

ならば深淵森とは、アルキマイラが転移させられた土地の、あの不可思議な森のことに違いない。「き、客人らは魔王の手先だとしても言うのか!？」

過敏に反応するウエンリ。

今にも立ち上がって弓矢を構えてきそうな形相だったが、ヘリアンは冷静に——見せかけながら——首を振って否定する。

「深淵森には魔王がいるのか？ それも初耳だな。というのも、我々はとある古城を探索中にいきなり見知らぬ森に飛ばされたのだ。おかげで仲間と散り散りになり……かれこれ五日も森を彷徨っていたのだよ。なにせ人に会ったのさえ久々でな。深淵森という名も先刻知った。この辺りの情勢に疎いことについては致し方ないことと理解してもらいたい」

「……何の荷物も持ち合わせていないように見受けられるが、その軽装備で森を五日間も生きてきたと仰るか？ それも随分と……それこそ集落という拠点を持つ我らよりほど身嗜みが整っているようだが」

言葉の上でこそ質問形式だが「馬鹿にするのも大概にしろ」と言いたげだ。

だが、その答えはヘリアンも想定済みだ。

むしろその反応を期待していた。

「うむ、身嗜みについては気をつけているのだ。毎日キャンプを張って、丹念に湯浴みゆあびをしている」
「……ほう。客人は笑えない冗談が随分とお好きなようだ。湯浴みとは随分と優雅ゆうがなことだな」

ウエンリがヘリアンを睨にらむ。

妙齡の女性から険の籠った視線を向けられるとなかなかに迫力があつた。
というか、普通に怖い。

危うく震えそうになる膝ひざを押さえつけながら、ヘリアンは澄まし顔を懸命に維持する。

「ではそんな客人らに是非とも答えてもらいたい。貴方がたはどこに、キャンプを張るような荷物を、ましてや湯浴みなどという悠長なことを行う器材をお持ちだということのか？」

「ウエンリ！ いい加減に……！」

「ここにだよ、ウエンリ殿。——リーヴェ、エルティナ」

指を鳴らして合図する。ここでハズせば間抜けもいとこだが、天幕の中に入るまでの間にコッソリと仕込みを済ませていたのでその心配はない。

合図を受けたリーヴェとエルティナはそれぞれ懐ぶくろから小振りの袋を取り出した。

袋の口を開けておもむろに引き出されたのは、キャンプを張るための天幕と柱だ。

「な、なんだこれは！ こんな嵩張かさばるものをいったどこに!?!」

「あの袋の中にだ。遺跡を発掘している最中に偶然見つけたものでね。仕組みは分からないが、容積以上の物を収納できる袋だ。おかげで重宝おもたけしている」

それから出てくるわ出てくるわ、明らかに袋に収まり切らない量のあれこれが次々と地面に置かれ

ていく。啞然とするハーフエルフたちを尻目に、あつという間にキャンプセット一式がその場に揃った。

この袋は〈魔法の小袋〉という名の魔法道具だ。

その効果は『容積以上の物質を格納できる』というV R R P Gは有り触れた代物だが、高品質で大容量が格納できる〈魔法の小袋〉はそれ自体が貴重品とされている。二人の持つソレはアルキマイラの中でも最高品質の代物だ。

「ご覧の通りだ。実際に目で見てもらわなければ信じてもらえないと思ったのでな。見た目が軽装備でもどうにか森で生き延びられたのはこういうことだ。食料もあの袋の中に入っている」

ウエンリたちは呆然と、その場に並べられたキャンプセットを眺めていた。自分の眼で見ても理解が追いついていないらしい。

——ここだ。ここを逃してはならない。

「そんな些細なことよりも建設的な話題をさせていただきたいな。我々は情報を欲している。恩着せがましいようだがレイファ殿を助けた対価に話を訊かせてもらうぐらいは許して欲しいのだが？ それに僅かばかりだが、食料を都合することも可能だぞ」

新たに袋から取り出されたのは熱々の鶏肉のソテーだ。

香ばしい匂いを漂わせるソテーからは湯気が立ち昇り、まるで今しがた調理されたばかりのようにも映る。そしてそれはある意味間違っていない。この〈魔法の小袋〉には『保存』の術式が付与されており、格納された物の状態を長期保存する効果があるからだ。このソテーも、宮廷調理師が腕を振るって作り上げた直後に格納された代物である。

食欲を掻き立てる芳しい香りがテントの中に満ちると、ゴクリ、と誰かの喉が鳴った。やはりと

いふべきか、この集落ではあまり豊かな食生活はできていないらしい。

続いてヘリアンはリーヴェたちに清涼水を取り出させた。

この場にいる全員に配り、毒が入っていないことを証明するためにヘリアンが一口飲んでみせる。一見ただの水にしか見えないが、これは回復効果を保有するれっきとした消費アイテムだ。ゲーム「タクティクス・クロニクル」ではプレイヤーには意味のない効果だったが、心なしか足の疲れが軽くなった気がする。

促されたハーフェルフたちは、恐る恐る清涼水に口をつけ始めた。

そしてその度に「信じられん」「本当に水だ。しかも冷えている」「それまたただの水ではないぞ」「悲から癒されるようだ」「なんだこの水は」などと口々に呟く。

中には美味しさのあまり一気に飲み干してしまい、他の者がチビチビと味わいながら飲んでいる姿を恨めしそうに見る者もいた。

「失礼だが、ハーフェルフは肉も食べられるか？」

「え……あ、はい、食べられます。食事の嗜好は人間とほぼ同じですのぞ」

「ではこれも何かの縁だ、少々ご馳走させていただこう。リーヴェ、エルティナ、皆様に食事を」
告げると、従者の二人はそれぞれの袋から同じ料理を取り出して一同に配り始めた。

対するハーフェルフたちに動きはない。それどころか《魔法の小袋》から次々と物が取り出される様子に、凝視するか啞然とするばかりだった。そうして彼らが茫然自失としているうちに、会話の主導権を一気に掌握する。

——これが、ヘリアンがない知恵を絞って捻り出した作戦だった。

〔魔法の小袋〕という魔法具の衝撃が抜けないうちに次々と畳み掛けたのもそのためだ。

集団による猜疑心を『荷物もなしに森を彷徨っていた』という一点にあえて集中させ、その上で魔法の小袋というインパクトの強烈な小道具を使い、物証を示して彼等の疑いを否定する。

冷静に考えれば他にもヘリアンたちの旅人設定には怪しいところはあるはずだが、驚愕の衝撃が抜けないハーフエルフたちには咄嗟に考えが及ばない。

ちなみに、これは大学で学んだ詐欺のテクニクである。

……いや、学んだというか、ゼミの蘊蓄好きの教授がべらべらと喋っていたことの一つだ。

講義で教わったわけではないのだが教授が話し上手であり、かつ「学生に何を教えてんだアンタ」と呆れたことが印象深かったこともあって、丁寧に説明されたその手法をヘリアンは憶えていた。

手法の名前こそ忘れたが「猜疑心を否定してみせた際の衝撃が強くなるよう演出すれば時として意外なほどに効果を発揮する」と教授は自慢げに説明していた。

まさか実際にこの手法を使うことになるとは夢にも思わなかったが……ともあれこれで『威厳を保ったまま旅人設定を押し通す』という超高難度ミッションをクリアできたはずだ。

更に、暫定女王の救出という功績を盾にして情報提供の要求を拒みにくい空気も演出した。

これで要求を拒もうものなら、女王の命とはそれほど安いものなのかという話になってしまふ。そしてそんなわけがない以上、ハーフエルフたちはこの要求を呑まざるを得ない。

「食事をしながらで構わない。少々話をさせてもらっても構わないだろうか」

後は勢いだ。彼等に冷静になられてはまた蒸し返されてしまう。

そうなる前に多少強引でもささやかな食事提供という形で恩を売り、情報収集をして、その後は適当な理由をつけて一旦本国に帰還だ。

ここまでの時点である程度の情報は入手したため、これ以上有益な情報が得られずとも穩便に彼らと別れて帰国が叶えばそれでよしとする。

食事をしながらの会話はどうかとの思いが一瞬過ぎたが、食事の席を使った外交は現実でも一般的にある。だから大丈夫だ。多分。兎にも角にも会話の主導権を逃してはならない。

「まずは先ほど言っていた、魔王の手先という発言についてだが……」

「姉様ー、入るよー」

ヘリアンが質問をしようとしたその時、入り口の布をバサッと払って小さな姿が駆けてきた。

波打った髪をハーファアップにしたその少女は「入るよ」と言った時には既に天幕内に侵入している。

大きな垂れ目が印象的な、小柄な子供だった。外見年齢としてはレイファよりも幼く見える。日本であれば中学生になったばかり、といった年齢だろうか。

珍しいことに髪の色は真っ白だった。

肌もまたレイファと同様に透き通るように白く、極めつけに着ているチュニックまで白い。

『白の少女』という単語がヘリアンの脳裏に浮かぶ。

「——リリファ」

窺めるように声をかけたのはレイファだ。

よく見れば、天幕に入ってきた少女と顔立ちが似ている。

なんとなしに見比べていると、視線に気付いたレイファが少々恥ずかしそうに視線を下げた。

「妹のリリファです。すみません、後で言い聞かせておきますので。——リリファ、姉様たちは大事な話をしているのです。外に出てなさい」

「んー……。ねえお兄さん。お兄さんが旅人さん？ エルフから姉様を助けてくれた人？」

リリファは姉の言葉を無視して話しかけてきた。

見た目は大人しそうな子だが、天幕に遠慮なく入ってきたことといい割りとは図太い性格をしているらしい。

妹のその態度に、レイファが形の良い眉を跳ね上げた。

「構わない。レイファ、殿」

危うく呼び捨てにしかけて取り繕う。

本人から呼び捨てでいいと許可は出ていたが、正体が分かった以上これまでと同様に呼び捨てにすることはできない。

「リリファ殿だったな。君のお姉さんを助けたのは私の連れ……リーヴェとエルティナの二人だよ。私は弱いから戦えないんだ」

「ふーん……」

リリファはヘリアンの背後に控える二人をチラリと見る。

エルティナは静々とお辞儀をし、リーヴェは目礼で応えた。

リリファはそれを見て不思議そうに首を傾げる。

そして「んー？」と唸った後、何を思ったのかテクテクとヘリアンの傍に身を寄せ、ペタンと

しゃがみ込んだ。

(……な、なんだ?)

意図の読めない行動。リリファはヘリアンの傍らに座ったまま、エメラルドのような緑の双眸でジッと見上げてくる。純粹無垢な子供のような仕草だった。なんとなく気まずさを覚えたヘリアンは間を持たせるため、新たにリーヴェから受け取った清涼水のボトルをリリファに手渡す。

小さな両手で受け取ったリリファは手の中のボトルに視線を落とす。そしてこれまた何を思ったのか「ウン」と一つ頷いて、ヘリアンに一層身を寄せた。

ますます意味の分からない行動にヘリアンは眉を顰めるしかない。

そしてリリファは意を決したかのようにヘリアンの顔に視線を向けた。それは折しも喉の渇きを覚えたヘリアンが水を口に含むと同時に、

「ねえねえ旅人さん」

「ん？」

「おっきいおっぱい好き？」

噴いた。

「ブフォッ!? ゲホッ、ゴフ、ゲッホ……!」

しかも気管に入った。

大惨事だった。

リーヴェが慌ててヘリアンの背中をさする。

「リ、リリファ! 貴女はいきなり何を言っているのです!」

「だって旅人さんは人間でしょ？　だったらおっきい方がいいのかなって」

「意味が分かりません！」

レイファが妹に怒鳴るが、ヘリアンも完全に同感だった。

質問の意図も意味もまるで分からない。

「こら、待ちなさい！」

リリファを捕まえようとレイファが手を伸ばすが、リリファは小柄な身体を活かしてササッとヘリアンの陰に隠れる。ヘリアンの背中にピツタリくつつくような形だ。

ヘリアンはロリコンではない。断じてロリコンではない。神に誓ってロリコンではないのだが、つい今しがたのリリファの発言もあってか背中に触れる柔らかな感触を意識する。してしまふ。

そして結論から言えばそこまで大きくはないが決して小さくもなかった。
何がとは言わない。言えない。

「ねえ、旅人さん。リリファのおっきい？」

何故聞く。

どう答えろと。

「あー……何が、かな？」

「おっばい」

「リリファアツ！」

ヘリアンを中心にして、ドタバタと姉妹しまいが動き回る。

二人とも王族とあってか他のハーフエルフたちは手を出せない様子だ。

リーヴエやエルティナも、害意がないのが分かっているので傍観の姿勢である。

「ねえ、おつきい？」

「黙りなさいリリファ！」

逃げ回りながらもリリファはチラチラと視線を向けてくる。答えないと終わらない雰囲気だ。

大昔のRPGに出てくる、何度聞いても同じ返事しかないNPCノンプレイヤーキャラクターの固定メッセージを思い出す。

「……………私にはよく分かんが、年相応……………ではないのだろうか」

無難に答える。

実際にはそれよりも大きかったとは思うが、あえてどこにあるか分からない地雷を踏みに行く必要はない。ヘリアンには地雷原でタップダンスを踊る趣味などないのだ。

「そっか……………」

しょぼくれたようにリリファの声が張りを失う。

が、即座に気を取り直したように顔を上げたかと思うと、つぶらな瞳でヘリアンと視線を合わせて。

「でも、姉様よりはおっぱいおつきいよ？」

「……ッ！ リリファアアアアア——ッ!!」

姉の怒声が、狭い天幕内に響き渡った。

2.

「い、妹が大変失礼な真似を……………」

恐縮しきりで恥ずかしそうに隣を歩くレイファ。

畏まった会話を続ける空気ではなくなってしまったので一旦解散とし、一行は気分転換を兼ねて集落の中をテクテクと歩いていた。

「いや……気にしないでくれ」

他に言いようがあるだろうか。

いやない、と先ほどの惨状を思い返したヘリアンは内心で断言する。

おかげでヘリアンたち一行に対する追及も有耶無耶となったので、リリファの起こした騒動はある意味都合がよかったが、思い返してもまるで意味が分からない。

子供とはいえ、ある程度分別がつく年齢だとは思うのだが。

「リリファ殿は、年齢は幾つになるのだ？」

「年齢ですか？ リリファは今年で——」

「ふふーん、いくつでしょうか？ 旅人さん当ててみてー」

右手側を歩くリリファが口を挟む。

天幕を出てからここまで、リリファはヘリアンの右手をしっかりと握って歩いていた。始めはヘリアンの裾を掴んで付いてくるだけだったが、いつの間にか手を握らされていたのだ。

また姉妹のドタバタ劇を見るのも勘弁して欲しかったのでそのままにしているが、微妙にリーヴェたちとレイファの視線が怖い。

それぞれ視線に窺められた意志は異なるのだろうが、ヘリアンはどちらも怖かった。

「ん……十三歳くらいか？」

「ざんねーん！ 正解は十歳でした！」

………驚いた。

なにせ「外見年齢が実年齢よりも若い」がエルフ種の特徴だというのに、リリファはむしろ逆だったのだ。どこがとは言及しないが発育が良すぎる。

左手側のレイファに視線を——もちろん胸ではなく顔に——向けると、彼女は察したように「私は十五歳です」と自ら答えてくれた。レイファの場合は実年齢より若干だが若めだ。

「リリファは母様と同じで人間の血が濃いんだって。みんなからは母様とそっくりって言われてるんだよ」

「ほう」

「だから母様と同じで、リリファもおっぱい大きくなる予定なの」

二度ネタなので噴きはしなかったがヘリアンは黙り込んだ。

どんな返答をしてもセクハラになる気がする。そしてセクハラとは本当に恐ろしい。いかなる状況であれ男側が有罪判定を受けるのだ。

「もう！ この子はまた！」

「あ、姉様。向こうでウエンリが呼んでるよ」

「そんな嘘で誤魔化されるとでも……！」

「いや、本当だレイファ殿。ウエンリ殿が向こうから走ってきている」

リリファが指差す先にウエンリがいた。

小走りに寄ってきたウエンリはレイファに何事かを耳打ちする。

あまり良い用件ではなかったのか。ウエンリからの報告を受けて溜息をついたレイファは、自分の妹を窘めるような目つきでジロリと睨んだ。

「すみませんヘリアン殿、少々失礼します。……リリファ、姉様は用事ができました。この場を離れますがヘリアン殿たちに迷惑をかけてはなりませんよ」

「はい。姉様いつてらっしゃい」

パタパタと手を振ってリリファは見送る。

ニコニコ笑顔で見送られたレイファは、後ろ髪を引かれるような渋い表情で去っていった。「これでゆっくりお話しできるね、旅人さん！」

満面の笑顔だった。

まるで『やっとうるさいのがどっか行った』とでも言いたげな表情である。

……この子はちょっと黒いのかも知れない。

しかしお話といっても何を話せばいいのか。こんな子供が相手ではたいした情報収集にもならないだろう。さてどうしたものかと思案しながら、一旦気を落ち着かせるために水を口に含む。

「ねえ、旅人さん」

「ん？」

「リリファと結婚してくれないかな？」

噴いた。

気管に入った水を懸命に吐き出す。

早くも慣れたような手つきで、リーヴェがヘリアンの背をさすった。

「ゲフツ……！ ゲツホ……」

「大丈夫？」

「ゲホッ、だ、大丈夫だけ、ど、今、なんて？」

「リリファと結婚してほしいなって」

とりあえずヘリアンの耳が壊れたわけではないらしい。

だけど意味が分からない。本当に本気で欠片かけらも意味が分からない。それほど予想外の言葉だった。ヘリアンは女性と付き合った経験などない。である以上は、いわゆるアレな実戦経験もないわけだ。自分の顔はやや目つきが悪いものの可もなく不可もなくだと思いたいが、優しいだけが取り柄の草食系性格が災いしてかいい人止まりが常だった。

それがなんだ。何故こんな所で初対面の少女からプロポーズを受けてるんだろうか。しかも見た目中学生の中身幼女から。改めて思うが意味が分からない。というかコテコテすぎて既に妄想の領域であり、つまりこれは夢だという仮説が補強されたというわけだ。なび万歳いや俺おれもおかしいと思つてたんだよねだって異世界転移なんてあるわけないのだが少し待てこれが夢ならそれはそれで問題じゃなからうか何故ならこんな夢を見たということは幼女と結婚したいという欲求が潜在意識下に存在したということでありつまりヘリアンこと三崎司みさきつかずは紛れもない小児性愛者しょうせいあいしや即ちロリコ——

「——？ 旅人さん、大丈夫？」

「大丈夫だ。これは夢だ」

「……大丈夫じゃないね？ 夢じゃないよ。現実だよ」

少女がさらりと残酷なことを口にしたが、これは間違いなく夢だろう。

だつてありえない。

こんなトンデモ展開が現実起こるはずもないのだ。

「よし、いいかなリリファ殿。落ち着くんだ。こういう時は冷静になることが大事だ。勘違いをすると酷い大火傷を負う。俺はそれをよく知っているんだ。ぬか喜びしてたら罰ゲームでの告白だったとかいうベタで下衆な展開を味わった経験者を舐めてはいけない。だから落ち着いて素数を数えながらこれが夢であることを一つ一つ証明する作業に戻ろう」

「……旅人さんの方が落ち着くべきだと思うな」

「いや、落ち着くのは君の方であっている。だつて君、俺の名前も知らないだろ。なのに結婚を申し込むとか何の冗談だ？」

「冗談じゃないよ。旅人さんの名前は？」

「ヘリアンだ」

「ヘリアンさん、リリファと結婚して」

今度は嘖かなかつたが頭が痛くなってきた。

なんで自分は少女と顔を突き合わせて、こんな話をしてるんだらうか。

「リリファは母様似だから、きつとおっぱい大きくなるよ？ 母様のは犬のお姉さんのよりもおっぱいから、リリファもそうなるよ？ 巨乳だよ？」

「いや、胸が大きいからどうこうではなく、な」

「小さいほうがいいの？」

……誰か助けてくれ。

どうしてこんな所で性癖について幼女と語らねばならないのか。

そして何気に背後から漂ってくるオーラが怖い。護衛してくれている軍団長二人の顔を見たくなかった。特にリーヴェ。

ちなみにエルティナは比べるまでもないのか省略されたようだ。彼女は純血のエルフラしく、薄い体型をしている。

「それだとちよつと困るなあ……。姉様は父様似だからエルフの血が強くっておっぱい小さいし」

「そういう話じゃないんだ。第一俺にそんな性癖はない。小さいからダメということは無いが、どうせなら大きい方が……。いや、待つてくれ、俺は何を言っている。そういう話でもないんだ」

深い溜息をつく。

……もうやめた。馬鹿馬鹿しい。

頭を振って冷静に立ち返る。子供と無駄話をして貴重な時間を潰すわけにはいかない。

「リリファ殿。結婚というのはだな、ご両親の了解がないといけないものなんだ。だからそういうことは、ご両親を助け出してからの話にすべきだ」

日本人の伝統お家芸、問題の先送りである。

一応はこれでも王女らしいので機嫌を損ねることはできない。だから明確に答えずばかりにしていた。

条件に両親の救出を挙げたのはシビアな言い方だったかもしれないが、ヘリアン自身にも余裕なんてものはない。現状でさえ既に一杯一杯なのだ。子供相手に無駄に使える時間など欠片もない。

親の了解がなくても愛があれば大丈夫、的な返事が来た場合には『君が大人になってからな』と

いう子供に対する切り札で反撃してこの場を切り抜けよう。うん、そうしよう。

「うーん。母様や父様に会うのは難しいと思うな……」

案の定、少女は笑顔を浮かべつつも表情を曇らせた。

故にヘリアンは、用意していた先延ばしの台詞を口にしようとして、

「だって、母様も父様も、きつともう殺されてるから」

——心臓を鷲掴みにするような言葉だった。

「姉様や皆は『母様たちは捕まってるだけ』って言ってたけど、多分、もう死んじゃってると思う。エルフはハーフエルフを嫌ってるし、特に『エルフラしくないハーフエルフ』はすごく嫌ってるの。だから、母様はおっぱい大きくてエルフラしくないから、真っ先に殺されると思う」

リリファはそんな言葉を口にする。

それでも彼女は笑っていた。

ニコニコと。

明るい表情で。

「もし母様たちが生きてたら助けに行きたいけど、リリファは姉様と違って魔術はあんまり使えないし、弓も下手だし、何もできないの。だからね、せめて皆がぐらゝい気持ちにならないように頑張ろうかなって」

だから笑う。

彼女はニコニコと笑う。

頑張って、笑う。

それしかできないけど、せめてそれぐらいはしようと。

そういう種類の笑顔だった。

「……ああ。自分は勘違いをしていた。」

今の今まで彼女を子供だと考えていた。無垢な幼子だと思っていた。

——とんでもない誤解だった。

目の前にいる少女はハーフエルフの国であるラテストウッドのれっきとした王族だ。

ならいくら十歳そこそこだからとしても、そこら辺の幼子と同じであるはずがない。空気も読ま
ずに無邪気に笑えるような立場じゃない。それが理解できないことを許される境遇で育ってきたわ
けがない。

リリファはちゃんと理解していた。

今のハーフエルフたちの置かれた境遇を、ある意味誰よりも冷静に理解していた。そしてその現
実を受け止めていた。自分たちの国が滅亡の危機にあるのだと嫌というほど理解していた。

だから彼女は考えた。

自分に何ができるのかを。魔術も弓も大して使えず、かといってこの現状を打破するような案も

浮かばない無力な自分に、いったい何ができるだろうかと考えた。

——その結果がこの笑顔だ。考え抜いた結果があの一連のドタバタ騒ぎだ。

何もできない自分だけれど、せめてニコニコと笑って皆を安心させようと、明るくさせようと振る舞って。そうしながらも他に自分にできることがないか考えて。考えて考えて考え続けて。それでもたいした案も考えつかなくて……。

そんな中、彼女は敵国ノルウェーにも自国オーストリアにも属していない自由な戦力を見つけたのだ。

だから彼女は即座に行動した。『自分の身体』と『自分が王女である』という二枚のカードを使って、旅人一行を身内にしよう——ラテストウッドの味方にしようと同張った。エルフの価値観とは異なり、多くの人間は胸の大きい方が好きだと知っていたからあのような真似をした。そのやり方自体は実年齢相応に拙かったかもしれないが、それでも、未だ幼い彼女が今思いつく限りの方法でただひたすらに頑張ったのだ。

——なんて酷い誤解だ。

あろうことかあの笑顔を、無垢な子供の浮かべる大して意味がないものだと考えていたなどと。

あまつさえ覚悟を決めて発したであろう身を差し出すに等しい言葉を、子供の戯言ざれごとと安易に切り捨てようとしていたなどと。

「――、」

昔。まだ自分が幼かった子供の頃、両親に連れられて子供劇を見に行ったことがある。

幼児向けで勧善懲悪ものの分かりやすい物語の演劇だ。

確かどこぞのお姫様が身を挺して魔王だかなんだかの生贄になって国を救うとか、そういうお話

だったはずだ。それを不意に思い出した。

今日の当りにしているコレが演劇と違うのは、残酷なまでに現実感に溢れているというその一

点のみだ。

「あれ？　ヘリアンさん？」

急に俯いたヘリアンの顔をリリファが心配そうに覗き込む。

その大きな瞳からは、こちらを気遣う色が見え隠れしていた。

……何故今日会ったばかりの他人の心配などする。自分のことだけで精一杯だろうに。

ヘリアンはまたそんなことを考える。考えてしまう。そうすると、自分自身が一杯一杯な状況で

あることも相まって、なんか、もう、色々と、キツかった。

「……………」

目頭が僅かに熱くなるのを自覚する。だが醜態を晒すわけにはいかない。

エルティナやリーヴェの前では王として振る舞わなければいけないだとか、そういう保身とは別

にして、今ここでみっともない姿を見せるわけにはいかなかった。

だってリリファは笑っている。

自分の感情に蓋をして、自分にできるせめてもの努力として精一杯に笑顔を作り続けている。

ならば彼女よりも年上で、なおかつ男であるところの自分がみつともない様子を見せていい道理はない。

ヘリアンのチツボケな男の意地が、幼い少女の前で無様を晒すことを許さない。

「……ねえ、ヘリアンさん」

その幼い心で何を想ったのか、ポツリとリリファは眩く。

「リリファと結婚してラテストウッドを守ってほしいな」

はつきりとそのお願いを口にする。

これは彼女にできる最大限の努力だ。

力のない王族であるリリファが、現状で最大の効果をあげられるであろう努力がコレなのだ。

「姉様は女王をしないといけないからダメだけど、リリファで我慢してくれないかな？」

そう告げる彼女の頬はほんのりと赤く見えた。

きつと陽の加減のせいだろう。

何故ならコレは、そんな甘酸っぱいものなんかではない。

断じて、そんなものではなかった。

「ダメかなあ？」

いつもニコニコと笑い続けていたリリファは。

その時だけは眉尻を下げた、困ったような微笑みで、そんな台詞を口にした。

「……………結婚は、ちよつと、できないかな。俺も、しなきゃいけないことが、たくさんあるから」

同情に流されてはいけない。

リリファが一国の王女であるように、ヘリアンもまた一国の王だ。

だから安易に手は伸ばせない。

いくらヘリアン個人が助けたいと思おうが、ヘリアンの王としての立場がそれを許さない。

ましてや自分たちの置かれている状況把握すらままならず情報収集も不十分な現状では尚更だ。

「……そっかー」

リリファは仕方がなさそうに呟いた。

元々、本気で結婚してくれるとは思っていないなかったのだろう。断られると覚悟していたのだろう。

ただ、ダメかもしれないからとやらなければ可能性はゼロだ。

ダメかもしれないけどやってみようと、彼女は僅かな可能性に賭けて試みた。幼い姫は自分で
きることを全部しようとして、精一杯に努力したのだ。

そして予想していた通りダメだった。彼女の努力は失敗に終わった。

これは、ただそれだけの話。

ただそれだけの話なのだ。

——だけど。

「だけど……俺にできる範囲でなら、助けになりたいとは思う」

「ホントにッ!？」

リリファは俯きかけていた顔を跳ね上げた。本気で驚いたような表情だった。

「ああ、本当だ。でも、俺にできる範囲でだけどな。今の俺の状況だと、してあげられることなん
て殆どないけど……」

「それでいい！ できるだけでいいよ！ ホントに助けてくれるの!？」

「あくまで、できる範囲で、でなら本当に本当だ。その証拠に……そうだな、指切りしようか」
右手の小指を出すと、リリファはコテンと首を傾げた。

少々育ちすぎた彼女の外見だと不相応に映るが、実年齢を知っていれば年相応だと思える仕草だ。

「あー、指切りは知らないか……。お互いの右手の小指を絡ませて大事な約束をすることだよ。この約束は、破っちゃいけませんよーって」

「破ったら小指を切り落とすの?」

「……………それはちよつと、物騒すぎるかな」

平然とそんなことを口にするあたり、生きてきた境遇の違いとやらを頭に叩き込まれる気分だった。ああ、でも指きりげんまんの元ネタも針を千本呑むんだったか。どちらにせよ物騒な話だ。唄はなしでいいだろう。

リリファは促されるままに小指を差し出す。銀色の小ぶりの指輪をつけているのが印象的だった。ヘリアンはリリファと右手の小指を絡ませてから、唄を省略して『指切った』とだけ口にする。

「これで約束できたの? 大丈夫?」

「ああ、ちゃんと約束できたよ。それじゃ早速約束を果たしに行こうか」

え? と首を傾げるリリファの手を引く。

「集落の皆はお腹が空いてるみたいだからさ。ここで俺たちが集落の人たちにご馳走してあげて、皆がお腹一杯になって元気になれたとしたら……それは君たちの助けになるかな?」

ヘリアンの問いに、リリファは会心の笑みで答えた。

輝き弾けるような歓喜のそれは、恐らくはヘリアンが初めて見たであろう、彼女の本当の笑顔だった。

3.

ハーフエルフの国、ラテストウッドの集落。

その中心地となる広場にて、リーヴェは主に命じられた仕事を始めようとしていた。

集落に住まう人々は遠巻きにその様子を見ている。

「獣人？ 誰だアレは？ うちの民じゃないぞ。まさか冒険者が戻ってきてくれたのか？」

「いや。あれはレイファ様が言っていた旅人一行のうちの一人だろう」

「あの獣人族の他にエルフと人間。合計三人の旅人だそうよ」

「エルフ!? 集落に入れて大丈夫なのか!？」

「なんでもレイファ様の命の恩人らしい。レイファ様自らが招き入れたそうだ」

「レイファ様が……それなら仕方ないが……」

「……ねえ。ところであの獣人、いったい何をしてるのかしら？」

ざわめく群衆の中心で、リーヴェは薪と石で組んだ土台の上に大鍋をデンと載せた。

そして胸元からおもむろに《魔法の小袋》を取り出し、大鍋の上で逆さに振る。

すると小袋の口から大量の粒状の物体が滝のように流れ落ちてきた。

白い粒の正体は栄養価が高く味も良い、高パフォーマンスな食料アイテム——白米だ。

「え……ええっ!？」

「なんだありや!? どんどん出てくるぞ!」

「あんな小さな袋に収まるわけない……わよね?」

「魔法道具……? いや、それにしてもあの量は……」

ザラザラザララと音を立てて大鍋に撒かれていく米の勢いは止まらず、あつという間に大鍋の底が白一色に埋まった。続いてリーヴェは〈魔法の小袋〉の口を一度上に向けて数度振る。その後再び袋口を下に向けると、今度は大量の清涼水が勢いよく吐き出され始めた。

「……………」

その信じがたい光景を目にしてしまった人々は揃ってポカンと口を開けた。

もはや言葉もない群衆の視線など気にも止めず、リーヴェは基礎的な魔法を使って薪に火をつける。更に大鍋へいくつかの肉や野菜、調味料を投入してから、大ベラでその中身を掻き回し始めた。

そうして数分も経たないうちに、大鍋から良い香りが漂い始めてくる。

「……なんだ? 炊き出しでもしてるつもりか?」

「お母さん、いい匂いがするー」

「しっ。ジツとしてなさい」

遠巻きに観察していた人々も匂いに惹かれるように集まり始め、あつという間にリーヴェは百人を超える民衆に囲まれることになった。しかし誰もが遠巻きに見るばかりで、得体の知れない旅人に対し一步を踏み込む者はいない。

そんな中、顔を見合わせて様子を窺う群衆の隙間からひよこりと抜け出たのは一人の少女だ。

「犬のお姉さんー、もうご飯できたの?」

リリファだった。

ニコニコとした明るい微笑みを浮かべながら、リーヴェの下へと無造作に近付いていく。そのあまりの自然体に、民衆は制止することすら忘れて彼女の動向を見守った。

「犬ではありませんがそろそろ完成ですよ。味見されますか？」

「いいのー？」

「ええ。ヘリアン……さんの、指示ですので。はい、どうぞ」

妙なところで言葉に詰まりながらも、リーヴェは栄養満点のお粥を鍋から碗に移した。肉や野菜といった具もちゃんと多めに掬ってある。

リーヴェは民衆に見せるようにして毒味を溶ませてから、リリファに碗を手渡す。

「わー、美味しそう！ 神樹の恵みに感謝します！」

食事前の礼儀として、エルフ族特有の祝詞を口にしてからリリファはお粥を口にした。

途端、先ほどまでの微笑みとは異なる種類の笑顔——驚きと歓喜の入り混じった表情を浮かべる。

「美味しい！ なにこれ!? すっごく美味しいよ犬のお姉さん！」

「犬ではありません。ですが、美味しく感じていただけただようでなによりです」

「ほら、皆も食べよ！ これお城のご飯よりも美味しいよ！ ほらほら！」

満面の笑顔のリリファに急かされるようにして、遠巻きに見ていた民衆が一人、また一人とリーヴェの下へ足を運ぶ。リーヴェはその一人ひとりにお碗を手渡し、炊き出しを民衆に配り始めた。

一度流れがきたらもう止まらない。

集落の中央広場に、あつという間に長蛇の列ができた。

+ + +

(……どうにか受け入れてくれたみたいだな)

憎きエルフ、そして人間が含まれている旅人一行の仲間ということでも少なからず警戒されていたが、これでもうにか炊き出しを成功させられそうだとヘリアンは安堵の溜息を吐く。

集落の民を刺激しないよう遠く離れたところから見守っていたが、リリファが率先してお粥を食べてくれたおかげで民衆に受け入れられたようだ。

今もリリファは体全体を使って、どれほど美味しかったかを民に説明しようとしている。まるつきり子供の振る舞いだ。微笑ましいその姿は見るものの心を穏やかにさせる。彼女と約束を交わしたあの一連の出来事さえなければ、ヘリアンもまたリリファのことを天真爛漫な子供としか思えなかったに違いない。それほど自然な演技だった。

迂闊にもその事実を意識してしまい、ヘリアンの良心が僅かな軋みをあげる。

「———」

一線は弁えろ。

ヘリアンは自らが置かれている状況を思い返しながら自分に言い聞かせる。

確かに『できる範囲』で助けると告げた。そしてこれはその約束の履行だ。満足な食事が取れないであろう民衆への炊き出しが、今のヘリアンにできる範囲の援助だった。これ以上踏み込めば自国の窮地に加えて新たな問題を抱え込む羽目になってしまう。アルキマイラの王として、それ

だけは赦されなかった。

そしてやはりというべきか、ラテストウッドの食糧事情は厳しかったらしい。首都から逃げ延びた人々を受け入れた結果、この集落では許容人数を大幅に超えた人々が暮らしていた。その状態が三週間も続けば、食糧事情が悪化するのも無理もない話だ。

浮かびかけた負の想いを振り払うかのように首を振り、ヘリアンは傍らの少女に問い掛ける。

「——では、深淵森には魔王にまつわる逸話があるのか？」

人々の群れから距離を置いた集落の一角。

そこでヘリアンは、情報収集のためにレイファと話をしていた。

最初はウエンリや他のハーフェルフに訊こうとしていたのだが、レイファ本人が話し相手を買って出たのだ。曰く『助けられた件と炊き出しのお礼に少しでもご協力を』とのことだ。

最高指導者ともなればやることは幾らでもあるのではと思ったが、ヘリアンはあえてそこには触れないことにした。

仮にレイファになんらかの思惑があろうとも関係ない。

ヘリアンが協力するのは、あくまでリリファと約束したとおり『できる範囲』でだけだ。

故に今は余計なことは考えず、引き続き情報収集に努めるべき場面だろう。

否、そうしなければならぬのだ。

「ええ。エルフ族の言い伝えとしては、魔王がかつて存在していた領域だとされています。他にも『迷いの森』『稀人の出る地』『禁断の幽世』などと多種多様な伝承があるので真偽は定かではありませんが、遥か昔から深淵森は禁忌の土地とされています」

問い掛けに対し、レイファは教科書を読んでいるかのように流暢な口調で答えていく。

「もつとも、そんな伝承や言い伝えがなくとも、わざわざ深淵森に近付くような物好きはエルフやハーフエルフの中にはいませんが」

「……と言うと？」

「深淵森からは時折魔獣がやってくるんです。それも、普通の森に住む魔獣が東になっても勝てないほどの強力な魔獣が。討伐隊が組まれることもありませんが、成功する例は稀ですね。大抵はその進路を曲げるので精一杯というのが現状です」

「討伐されなかった魔獣はどうなる？」

「大抵は一頼り暴れ回ってから深淵森に消えていきます。森に住む者にとっては自然災害のようなものですが、身を隠して去ってくれるのを待つしかありません。無論、私たちにとってもそれは同様ですが……」

この集落は深淵森にほど近い。

だが『何故こんな危険な場所に街を作ったのか』と訊くのは愚問だ。

迫害に遭ってきたハーフエルフたちにとって、この一帯ぐらいしか拠点を築くことのできる土地がなかったのだろう。

「しかも深淵森は人を惑わせるとされています。あまりに深入りしすぎると、二度と帰ってこられなくなります」

「ほう……深淵森に近づく物好きはエルフやハーフエルフの中にはいない、ということは他の種族ならばいるのか？ その物好きとやらが」

「人間の中にはいるんです。いわゆる冒険者と呼ばれる人たちですね。深淵森からは特殊な素材が採れるので、それを目当てにやってきました」

冒険者。

気になるキーワードが出てきたが今は記憶の片隅に書き込んでおくに留め、まずは深淵森に関する情報の収集を優先する。

「中には深淵森の魔獣をわざわざ探しに向く高位冒険者もいます。深淵森の魔獣は豊潤な魔力を含んでいるせいか、特殊な素材となる個体が多いようなので」

「ということは、それなりの数の冒険者がラテラストウツドにやってくるということか？ 人間の領域と深淵森の両方にほど近いこの国なら、彼らの往來があるのではと察したが」

「ええ。私たちからすれば正気の沙汰ですが、一攫千金を夢見たり名を上げようとする人たちはいつの時代でも一定数がいるようです。もともと、彼等は立ち寄った際に貴重な外貨を落としてくれるので、来てくれること自体はありがたいんですけどね。……なんとも身勝手な意見ですが」

「為政者なら当然の意見だろう」

後ろに立つ配下の視線を意識してそれらしい台詞を口にする。

実際のところ国家運営をしてきた王の視点で言わせてもらえば、物好きだろうがなんだろうが自国の経済を潤してくれる貴重な客だという考えには同意見だった。

国内だけで金を回してもどこかで成長限界は来る。【交易】は必須だ。ヘリアンも「タクティクス・クロニクル」で一度経験したことだった。

「しかし……その冒険者とやらの姿が見えないようだが」

「一ヶ月ほど前から、近隣の境界都市に魔獣の群れの襲撃があったそうなんです。それに伴う緊急招集がかかって、冒険者の皆さんは揃って境界都市に行ってしまった。なんでもかなり規模の大きい襲撃とのことで、向こうは向こうで大変な様子です。ノーブルウッドが我が国に戦争を仕掛けてきたのは三週間前のことでしたので、その直前ですね……間が悪かったとしか言えません」

「境界都市？」

「人間の領域と、魔族の領域を隔てる国境線に建設された人間の前線都市のことです。人類の盾とも呼ばれます」

「……なるほど」

ある程度予想はしていたことだが、やはりゲームでは聞いたことのない話ばかりだった。

魔族という種族は「タクティクス・クロニクル」にも存在する。実際に第六軍団長のカミーラも大きな分類でいえば魔族の一種だ。だが一方で『魔族の領域』なんてものは聞いたことがない。NPCの魔族が治める国があったが『領域』とはニュアンスが違うだろう。

……他にも色々聞きたいことはあるが、そろそろ頭がパンクしかけてきた。

これは自分の頭のできの問題ではないと思いたい。短時間でこうも立て続けに大きな出来事に遭遇したら誰だってこうなるだろう。既に薄っすらと頭痛がする。かと言って情報収集をやめるつもりは毛頭ないが、こころで一旦気を落ち着かせる必要があった。

水で喉を潤しながら広場の光景を見渡す。

広場に集まった人々は、リーヴェの振る舞う炊き出しに頬を緩めているようだった。

「どうやら好評を得られているようだ……なによりだ」

国王側近であるリーヴェは近接格闘戦を極めている傍ら、様々な分野で使える万能キャラとしても育ててきた。自然、戦闘以外のスキルも手広く修めており、その中には料理関連のスキルも存在する。

神経を張り詰めさせていた兵士たちも代わる代わるお椀を片手に鍋へと突撃し、この時ばかりはホツとした表情を浮かべていた。

その殆どがハーフエルフだが、中には別種族の者もいる。

「アレは……随分と小柄だが、ウエアキャットか？」

「はい。小柄なのはハーフリングとのハーフだからですね。比較的最近、我が国の民となった者です」なるほど。小人の血を引いているとなれば納得のサイズだった。

他にも兎耳うさぎみみの獣人や、数は少ないがドワーフさえもいた。

普通のドワーフよりも髭ひげが多少薄いので、ひよつとすると彼もハーフなのかもしれない。

「色々な種族がいるんだな。ハーフが多いようだがドワーフもいたのには正直驚いた。エルフとドワーフは基本的な仲が悪いはずだが、君たちの場合だと違うのか？」

「ええ。この国はハーフエルフが中心になって建国したのは確かですが、当時の色んな種族が寄り集まってできたものでして。そうして皆で頑張むなって興おこした国がラテストウッドなんです」

「多民族国家ならぬ多種族国家ということか」

そんな立派なものでもありませんけどね、とレイファは苦笑した。

「力を持たない、それこそ頼る相手が誰もいない弱い種族が身を寄せ合って……国ができたのはその結果ですから。まあ、そんな経緯があるので種族間の嫌悪はありません。一緒に生活していると種

族ごとの習慣でぶつかり合うこともあります。お互いの歩み寄りで解決してきました。助け合わないと生きていけませんから」

レイファは卑下するかのよう言うが、要は誰も頼らず、自分たちの力だけで国を一つ創り上げたということだ。

そこに途方もない苦労があったことはヘリアンでも予想がついた。

……いや違う。予想などできない。それこそ語り尽くせないほどの苦労を味わったはずだ。それをさも知ったことのように語ろうとするのは、彼等の努力に対する侮辱でしかないだろう。

故にヘリアンは「凄^すい国だな」と口にするだけに留めた。

レイファは少し驚いたような表情をしたものの、慎ましやかな胸を張って「自慢の国です」と柔らかに微笑む。

それからリーヴェエが炊き出しを配り終えるまで、ヘリアンとレイファは他愛^{たあい}もない会話を続けた。ヘリアンは彼女が何事か要求を——リーヴェエとエルティナという戦力提供を求めてくるのではないかと警戒していたが、意外にもそういった話題には触れることすらしない。好きな食べ物だとか、趣味だとか、リリファは昔から甘えん坊でマナーの覚えが悪かっただとか、本当に何でもないような話ばかりだった。

こんなに厳しい状況に置かれてもそうして笑顔を作れるあたり、さすが一国の指導者だと感じた。自分が同じ状況に追い詰められたとして、果たして同じように振る舞えるだろうか。自信は欠片もない。

(……そういえば、^{アルキマイラ}自分の国はどうなってるのかな)

ラテストウッドや王女姉妹のことを考えていると、ふと自国のことが気になった。

軍団長を六人も残してきたので今すぐどうこうということはないだろうが、国外へ旅出てから半日程度が経過している。そろそろ第一報ぐらいは連絡を入れておくべきかもしれない。

折よく会話が途切れたところでヘリアンはレイファから視線を外し、物思いに耽るかのように見せかけて空を仰いだ。

そのまま彼女に気取られぬよう思考操作で〈通信仮想窓〉を開鏡。

空中に半透明の〈仮想窓〉が投影されたが、これはレイファには見えていない。「タクティクス・クロニクル」では〈仮想窓〉は本人にしか見えない仕様だからだ。たとえば他の王であつても他者の〈仮想窓〉を覗き見ることはできないようになってい

る。
(形式・選択。文章会話)

続いて、思考操作でチャットモードをテキストチャットに設定。

プレイヤー 王 同士ならボイスチャットで会話することが可能だが、NPC相手では発声操作による〈指示〉を出すことはできても音声で報告を聞くことはできない。文章でのやり取りが基本だ。

これはサーバのデータ容量の都合によるもので、流暢な会話ができるレベルのAIを設定できるキャラクター数については国家の規模に応じて上限数が定められている。全てのキャラクターが自然な会話をするのができない以上、テキストがベースとなるのは仕方のない話だろう。

眼前に浮かぶ〈通信仮想窓〉を直視する。

そして接続先候補から軍団長のグループを視線操作で選択し、更にグループの中から第二軍団長のバランを選択して呼び出しをかけた。ややあってバランが呼び出しに応じる。深淵森を隔てても通信できるか不安だったが、幸いなことに問題はないらしい。

従来通りやりとりを行うならば『状況』を『報告』せよ』と入力するところだが、今更
〈鍵言語〉に拘つても仕方がない。人間を相手にしているつもりで文章を打ち込む。

『こちらはヘリアンだ。どうにか現地人との接触到に成功したが、こちらは何か変わったことはあつたか？ 新たな問題などは起きていないか？』

テキストの送信に成功すると、数秒と経たずしてバランからの返信がヘリアンに届いた。

さすがは生真面目を持つ騎士団長殿だ、と感心しつつ、ヘリアンはバランから送信された返事に目を通し——息を呑んだ。

レイファがすぐ近くにいることも忘れて目を見開き、ただただ立ち尽くす。

「……ヘリアン殿？」

訝しむレイファの声もヘリアンには届かない。

宙に浮かぶ半透明の〈通信仮想窓〉。

そこにはバランからの返事が反映された、たった十文字のメッセージが無機質に表示されている。青褪めたヘリアンが凝視する〈仮想窓〉には、こう記されていた。

《——反乱が発生いたしました——》

——ヘリアンが最も恐れていた反乱が、いとも容易く勃発した。

ヘリアンたちは即座に集落を發つた。

道中でマーキングを施したヘリアンの〈地図〉と、森への地形適性が高いエルティナの誘導を頼りに、来た道に戻る形で本国に急行している最中だ。

高速移動ができないヘリアンは再びリーヴェに抱えられている。プライドなどはとうに捨てた。そんなつまらないものに拘る余裕などない。一刻も早く国に帰還しなければならなかった。

『魔法道具に仲間からの救援要請が入った。すぐに仲間を迎えにいかなければならない。急ぎこの場を辞めることを許してほしい』

集落を飛び出る直前、レイファに対しそのような旨を矢継ぎ早に告げた。

穏便な別れ方かと問われれば微妙もいところだったが仕方がない。多少怪しまれてしまったとしてもまだ取り返しはつく。だから今はこちらだ。自国の問題について、ヘリアンは全力を尽くさなければならぬ事態に陥ってしまった。

バランには『王座を死守しろ。私が戻るまで何人たりとも玉座に触れさせるな』とだけ急ぎ命令を発信した。玉座だけは奪られるわけにはいかない。叛徒による玉座奪取が即滅亡に繋がるわけではないが、『幸福度』や『士気』が低下する上に〈権能仮想窓〉をはじめとした王の能力に著しい制限が生じる。それは現在のヘリアンにとって命取りに繋がりがかねない凶事だった。

しかも今回反乱が発生したのは地方都市ではない。国家の要たる首都だ。これが反乱軍により制

圧され、幾つかの条件を満たして支配権を奪われた際には【革命成功】と判定されてしまう。

——そうなれば終わりだ。国の終焉だ。

人間の王が治める国としては【滅亡】となり、該当プレイヤーのキャラクターデータが完全に削除される。そしてこのゲームにセーブポイントなどという優しい概念はない。革命の成功とは即ち、完全なる滅亡を意味した。

「ちくしょう……ッ！」

ヘリアンは声を絞り出す。

いったい何故だと叫びたかった。話が違くと喚きたかった。

だって第二軍団長を残してまで治安維持を優先したのに、反乱が起きるなんて詐欺だ。

治安は保てていると言ってたはずだ。転移現象の影響で浮き足立っていたのだった。第二軍団長と第五軍団長の働きで落ち着かせたと確かに報告を受けていた。それに加えてリーヴェとエルティナ以外の全軍団長を首都に残してきたというのに、なんでこんなことになる。

——裏切ったのは誰だ。

balan は味方だ。もし balan が裏切り者なら、ヘリアンからの通信など無視して玉座を狙えばいいだけの話だ。反乱が発生したことを伝える必要性などどこにもない。

同様にリーヴェとエルティナにも裏切りの気配はない。もしも叛意があるのなら今ここでヘリアンを殺しているだろう。しかしそうはせず、首都に向け全速力で戻ろうとしてくれているからには間違いなく味方だと断言できる。

第一軍団長、リーヴェIIフレクウルズ。

第二軍団長、バランIIザイフリート。

第三軍団長、エルティナIIヴェルザンデイ。

黎明期からヘリアンと同じ道を歩み続けてきた、始まりの三体。
現状、確実に信用できるのはこの三体だけだ。

……ならば他の軍団長はどうだ？

軍団長の中には人物特徴に【自分勝手】や【エゴイスト】を持っている者がいる。それに加えて性質傾向に【混沌】を持つている者もいた。人物特徴がキャラクターの性格や行動パターンに詳細な影響を与えるのに対し、性質傾向は大筋の方向性という形で影響を及ぼす。

たとえば性質傾向に【調和】を持つエルティナは、配下同士の軋轢を解消させるといった良い影響を及ぼす行動を好む。一方で【混沌】は、他への影響を軽視、あるいは無視して突拍子もない行動を起こす可能性があった。更に八大軍隊長の中には、一体だけが性質傾向に【邪悪】を持つ者すらいる。これは【邪悪】特有のレアな固有能力を習得しやすいという特徴がある一方で、えげつない行動を選択しやすい傾向にあった。

……コイツらは要注意だ。何を考えているか分からない。

リーヴェであれば一対一の近接戦闘に持ち込めばどうにかなる。伊達に国王側近として長年愛用しているわけではない。最も集中的に育てた彼女の総合レベルは全配下の中でも随一を誇る。

第七軍団長だけはリーヴェですら近接戦闘に持ち込んででも危ういが、ヤツ本体を先に仕留めればいい話だ。それが叶わなくともヤツ一人が裏切り者ならどうにでもなる。となれば問題は複数の軍団長が裏切った場合か。

……いや待て。何を考えているんだ俺は……ッ！

まだ軍団長が裏切ったとは限らない。 balan からは『反乱が起きた』としか聞いていない。もしかしたら全軍団長が健在で、裏切り者は兵士の一部だけなのかもしれない。

どうかそうであってくれ。頼む。軍団長だけは味方でいてくれ。

「ぐ……ッ！」

祈りながらリーヴェにしがみついていると、圧迫された肺から呻き声が漏れ出た。

本気で疾走するリーヴェの乗り心地は端的に言って最悪だった。なにせ冗談抜きに世界が廻る。

つい先ほどは頭上に地面が見えたほどだ。これは最短最速での帰還を命じたがための挙動だが、密林の木々を縫って高速で駆け抜けるその走りに人間の貧弱な三半規管が悲鳴をあげる。

そうして必死にしがみつくとヘリアンの時間感覚が狂い始めた頃、ようやく首都の大門に辿り着いた。

「第一軍団長リーヴェ!! フレキウルズだ! 開門せよ、今すぐに!」

リーヴェが声を張って扉の守りに人に告げると、ややあって大門が重い音を立てて開き始めた。

その僅かな隙間に身体を捻じ込むようにしてリーヴェとエルティナは首都内へと飛び込む。

目指すのは首都の中心地、アルキマイラの王城だ。

到達するまでの道中で街の様子を確認するも、火の手が上がった様子はない。

高速で移動しているために視界が安定していないが、それでも遠目に見る町並みに異変は見受けられなかった。

だが油断はできない。

反逆者は街のことなど気にも留めず王城を目指しているのかもしれない。

もしかしたら既に城門が破られているかもしれない。

今頃は玉座の間に詰めかけているのかもしれない。

気がかりが焦り、不安の波が押し寄せてくる。

「跳びます！ ご注意ください、ヘリアン様！」

警告を受け、殊更必死にリーヴェの身体にしがみついた。

直後、猛烈な重力加速度がヘリアンの身体を襲う。

月狼の強靱な脚力が二人の身体を地上三十メートルの高度まで押し上げたのだ。

そして跳躍による最高高度到達後、僅かな浮遊感を経て城の東テラスへと着地する。

そのまま間髪入れずに窓を蹴り破って城内へと侵入。

細やかな刺繍が施された赤い絨毯を踏みつけながら大廊下を駆け抜ける。

そうしてようやく目的地たる玉座の間の扉前に辿り着いた。

リーヴェが素早くも丁寧な動作で主の身体を降ろし、ヘリアンは若干よろめきながらも再び居城の地を踏んだ。

「状況は!？」

扉が開かれるなりヘリアンは叫んだ。

部屋の中にいたのは獣人や騎士職を中心とした近衛兵、そして第二軍団長のバランのみだった。最奥に鎮座する玉座は空いている。

誰も座っていない。

無事だ。

間に合った。

「しゅ、主上……!？」

バランと兵士たちが、すわ乱入者かと咄嗟に構えていた武器を下ろす。

「状況はどうなったと訊いている！ 玉座には誰も触れていないだろうな!？」

「——ハッ！ ご命令いただきました後、即座に玉座の守護に就き、同時に精鋭部隊を追加参集いたしました。何人たりとも玉座には触れさせておりませぬ」

「他の軍団長は!？」

「反逆者に対応すべく、第五軍団長が自らの手勢と第六軍団の一部戦力を率いて独自に行動中でありませぬ。他の軍団長は引き続き王命に従い行動中です」

八大軍団長は全員健在だということか。

軍団長が誰一人として裏切っていない事実には思わず胸を撫で下ろす。

だが、第五軍団長のみが反逆者の対応をしているというのはどういうことか。

何故他の軍団長は動かない。

いくら王^{ヘリアン}が出立前にそれぞれ指示を下していたからといって、こんな緊急時にまで愚直にその命令を守る必要などは——……いや待て、ひよつとして違うのか？

これは、もしかして、緊急事態ではないのか？

「……反逆者の様子は？ 反乱を起こしたのは誰だ？」

「オーガでもあります。反逆者の頭目は……名前は特にありません。珍しく赤い肌をしておりましたので、レッドオーガとでも呼称しましょうか」

「オーガだと……？」

第五軍団所属のか？

いや、そういえばオーガといえば……つい先日無謀にも攻め込んできた一派がいた。まさか。

「反乱を起こしたのは、つい先日併合したばかりのオーガの一派か？」

「はい」

「それ以外に反乱を起こした者は？」

「おりませぬ」

安堵のあまり、フツと気が遠くなった。

人目がなかつたらそのままへたり込んでいただろう。

(……ああ、そういえばいたよ。混乱に乗じて反乱を起こしそうな奴らが)

八大軍団が集まる建国祝賀祭の直前、というタイミングで無謀にも攻めてきた馬鹿がいたことをヘリアンは思い出す。軍団長を投入するまでもなく返り討ちにしたあたりで降伏されてしまい、

洪々オーガ一派を併合したのだった。

降伏を無視してそのまま皆殺しにすることも可能だったが、これまでヘリアンは降伏した敵は丁重に扱ってきた。ゲームのプレイスタイルとして、たった一度の例外を除けば専守防衛を貫いてきたのだ。いくら建国祝賀祭の直前という水を差すタイミングに攻め込んできた無粋者だとしても、降伏されてしまった以上は彼等を併合するしかなかった。

しかし、併合した直後の魔物は【忠誠心】や【幸福度】がゼロの状態なので、反抗心を削いでおかなければ何らかのバッドイベントに乗じて反乱を起こすことがある。元々は建国祝賀祭のイベント効果で反抗心を削る予定だったのだが、その建国祝賀祭が強制転移の影響で開催できず、結果としてオーガ一派の反抗心は全く減っていなかった。

そんな状況下での、首都丸ごとの強制転移という過去に類を見ない特大のバッドイベント。彼等が反乱に打って出る下地は十分にできてしまっていたというわけだ。

だがヘリアンは安心した。

心の底から安堵したと言ってもいい。

何故なら反逆者がオーガ一派だけなら何の問題もないからだ。

ハッキリ言って軍団長が出撃するまでもない。

第五軍団長が直々に対処に乗り出しているとのことだが、それすら過剰戦力だ。

他の軍団長らが反乱に構わず各々の仕事おのをしているのも当然であり、彼我ひがの戦力差を測る程度の知能がオーガにあれば彼等も反乱など考えなかっただろう。

(急いで戻る必要なんてどこにもなかったことか……なんか、ドツと疲れた)

せめて反乱を起こしたのが何者かぐらいは事前に確認しておけばよかったと悔いる。

国への帰還を最優先にするあまり、バランスに最低限の命令を伝えただけで状況確認を殆どしていなかったのだ。その上、移動の邪魔になる（通信仮想窓）もすぐに閉じてしまっていた。

いかに自分が冷静でなかったかという話だろう。あまりの醜態に頭を抱えなくなる。

「主上？」

「いや、何でもない。少々疲れただけだ」

緊張感から解き放たれたからか、今更のように疲労を思い出した足が震える。

ただしがみついていただけなのに貧弱な、と言うなかれ。なにせそこいらの自動二輪を置き去りにするような速度域で、アクロバティックな挙動に振り回され続けたのだ。

リーヴェの身体に目一杯に密着して、振り落とされないようにするだけで必死だったのである。

「む？ ……リーヴェ、気のせいもお主、なにやら妙に機嫌が良さそうだな」

「……何を言っているのだバランス。反逆者が取るに足らない雑魚ざごだということは分かったが、今なお反乱が起きている最中だぞ。そんな状況でこともあろうに機嫌が良さそうなどと……お前らしくもない妄言だな。いったいどこをどう見ればそうなるのだ？」

澄ました顔でリーヴェはバランスに反論する。

瞳に宿る色は冷ややかだが、そんな冷静沈着な国王側近さんの後ろではふさふさの銀尻尾しっぽがバツサバツサと振られていたりした。

『どこをどう見れば』と問われれば『その尻尾を見て』と返すしかないと思うのだが、リーヴェ本人は無自覚らしい。バランスは微妙に困った顔をしていた。

……まあいい。

何故機嫌が良いのかは分からないが、緊急事態ではないことが解ったのでリーヴエの緊張感があろうがなかるうがどうでもいい。

疲労感が凄まじすぎて、そんなものは些事^さとしか思えなかった。

「叛逆者の鎮圧状況はどうなって……いや、いい。第六軍団の手勢が出ているんだったな？ ならばこちらで情報を吸い上げる」

発声操作で戦術仮想窓を表示し、〈地図〉^{マップ}を呼び出した。

空中に投影された王城の見取り図から、城の専用室に常駐している第六軍団所属の配下のユニットマークをタップする。そこにいるのは蝙蝠^{こうもり}を使った独自の情報ネットワークを構築するスキルを持つ、ヴァンパイア族の配下だった。

彼はそのスキルを活用し、第六軍団所属の各魔物から情報を集約する役目を任されている。叛逆者の鎮圧状況もほぼリアルタイムな情報を持っているはずだ。

しかしながら規定の近接範囲内——王^{フレイヤー}から五〇メートル圏内にいないため、自動的に〈情報共有〉^{データシェアリング}することはできない。手動で操作して情報を吸い上げる必要がある。

「権能仮想窓…開錠^{オpend}。能力行使…情報共有…直接接続^{ダイレクト接続}。対象入力…直接選択^{ダイレクト選択}」

コマンドを実行して〈情報共有〉を要求すると、数秒と経たずして〈地図〉^{マップ}や勢力図などの情報が更新された。リアルタイムで推移を見たいので「接続^{アクセス}」したままの状態を維持する。

「叛逆者は……殆ど殲滅^{せんめつ}済みか」

〈地図〉^{マップ}の一角で戦闘中を意味するマークが点滅^{てんめつ}していた。

そのエリアでは敵を意味する赤い光点が友軍である緑の光点に囲まれ、徐々にその数を少なくしている。(地図)から赤色が完全に消えるまで残り五分もかかるまい。

「現場に向かわれますか？」

balan が伺いを立ててくる。

王自らが反逆者共の討伐に、という頭の悪い話ではなく、あくまで殲滅後のことだ。というのも、反乱制圧時には現場で殊勲者を称えることにより治安状況を回復させる効果があるのだ。

反乱が起きること自体が極めて稀であり、起きたとしてもいつも現場の近くにいるわけでもないが、やれることはやっておくスタイルのヘリアンは可能な限り現場に赴き、『反逆者討伐の報奨』イベントを行うことにしていた。

それだけに、今回に限って現場に出向かぬようでは配下から変な目で見られかねない。ここは行かざるを得ないだろう。鎮圧後であれば危険は何もないはずだ。

「……そうだな。鎮圧が完了したら現場に向かうとしよう。 balan は私が鎮圧成功の宣言を行うまでは継続して玉座の守護を、リーヴェとエルティナは引き続き私の護衛を頼む」

「ハッ！」

それから三分少々で(地図)から赤い光点が消えた。

反乱の鎮圧成功だ。

ヘリアンは疲労に喘ぐ身体に鞭を打ち、玉座の間を後にして現場へ足を向けた。

踵かかとを合わせて敬礼する城兵に見送られながら——今度はちゃんと城門を通つて——ヘリアンは街の様子を窺うかがつた。

さすがに人通りは殆どない。ごくごく小規模とはいえ反乱が起きたことにより、住民は皆屋内に引つ込んでしまつていた。いつも賑にぎわつてゐる市場に人々がいらない光景は新鮮だったが、同時にひどく不気味に思えてしまふ。

確か現場はこのあたりだったな、とヘリアンは（地図マップ）を開いた。見れば、友軍を意味する緑の光点が角向こうに集中している。一際ひととき大きい緑の光点に視線でカーソルを合わせると第五軍団長がその場にいることも確認できた。どうやらこの先で間違いないらしい。

そうして角を曲がり、ヘリアンたちは大通りに出た。

過去の大規模区画整理で再整備され、二十人は並んで歩けるであろう広さの大通りが視界一杯に広がる。

——そこには、赤が溢れていた。

普段は買い物客で溢れている大通りに一般人の姿はなく、代わりに角が生えている人型のなにかがバラバラのパーツとなつて転がっている。

そしてその周囲には、ペンキでもぶち撒けたかのように赤い液体が飛び散っていた。

あまりに無機質すぎて最初はそれが何なのかよく分からなかったが、手を伸ばせば触れるような距離にまで近付いてようやく、その正体に理解が至る。

「これ、は……」

オーガだ。オーガの死体だ。右手は根本から荒々しく引きちぎられて両足もあらぬ方向を向いているが、それは壊れた人形ではなくオーガの死体だった。

そして視線を上げて大通りを一望してみれば、一体や二体どころではない数の死骸が散らばっているのが見て取れた。

自慢の特産品を多く取り扱っている南大通りに、普段の姿は見る影もない。

菓屋の商品棚には鎮圧に使用したのであろう血塗れの斧が無造作に転がっており、人気の高い精肉店の軒先にはどこの前衛アートなのかと問いたくなる奇怪なオーガの肉塊がぶら下がっていた。

よほど強い力で殴打されたのか、腹部がひしゃげて白い物が背中から飛び出ている。

また黒焦げになったり首が刎ねられている死体などは序の口で、原型を留めている方がむしろ少ない。バラバラに爆散した肉塊や、数体のオーガがぐちゃぐちゃにかき混ぜられてハンバーグみたいになっている死体すらあった。

そしてそれらは圧倒的な現実感を携えてヘリアンの五感を容赦なく刺激した。血風が肌を撫で、鉄錆びた死臭が鼻腔をくすぐる。

「……………っ」

喉までせり上がりかけたモノをすんでのところで飲み込む。

胃酸が舌を刺激したがリーヴェとエルティナの目がある中で嘔吐などという醜態を晒すわけにはいかなかった。根性で吐き気を堪えて、ヘリアンは知らず退がりそうになっていた己の足を叱咤する。……想像が甘かった。

そんな言葉しか出てこない。無粋だ何だのと散々叩かれていた倫理規定による表現規制が、どれほどプレイヤーの精神を守っていたのかを嫌になるほど理解した。

こんなものを日本人の一般ゲーマーが日常的に体験していたら、すぐさま精神に異常をきたすに違いない。現実と虚構の境目が分からなくなったゲーマーが路上で刃物を振り回しているとのニュースを見たところで「当然だ。無理もない」とあっさり納得できてしまうことだろう。

それほどまでに目の前の光景は、普通の日本人でしかない三崎司にとつて衝撃的すぎる代物だった。「これが、あの大通りなのか……」

普段は外国客で溢れかえっている南大通り。

そこには至る所にオーガの死体の残骸がぶち撒けられている。何故か。

ヘリアンがそう望んだからだ。

他ならぬ王が、治安維持を——反乱が鎮圧されることを望んだからだ。

だから第五軍団長率いる討伐部隊はそうした。治安維持という命令通りに己の役割を果たした。その結果が、これだ。

「……第五軍団長は、あそこか」

何かから逃げるようにヘリアンは大通りの奥へ歩を進めた。

一際大きい巨体を持つオーガの死体の前、派手な肩掛けを身に纏う大男の姿が見える。鬼族や巨人族が中核となっている第五軍団の長——ガルデイだ。

「おお、総大将。見ての通り鎮圧完了しましたぜ」

ガルデイはマフィア顔負けの悪人面ながらも、どこか人好きのする笑顔を浮かべて王を出迎えた。魔獣素材のジャケットアーマーに身を包み、首元がファーで覆われたマントを身に着けているその姿はどこの蛮族かと問いたくなる様相だが、これでもれつきとした軍団長の一人である。

彼はリーヴェとは異なる方向性で近接戦闘に特化した前衛職のキャラクターだ。現在は二メートル超えというかなりの大柄ながら人間形態を取っているが、その正体は巨人族である。

大雑把すぎる能力と性格が玉に瑕だが、その体格から醸し出される威圧感と独特のカリスマを持つガルデイは、バランにこそ及ばないものの治安維持および鎮圧能力において高い適性を誇っていた。そしてその高い鎮圧能力を存分に発揮した結果がご覧の有様というわけだ。

王の望み通り配下は任務を遂行し、かくして鎮圧は完了した。

「……よくやった、第五軍団長」

「いやいや、とんでもねえよ総大将。そもそも反乱の発生を防ぐことができなかつたとくりや、こいつは俺様とバランの手落ちだろうよ。ある程度の罰は覚悟してらあ」

「いや、オーガ一派には反乱を起こす下地と条件が整いすぎていた。これは仕方のない結果だ。お前たちを責めることなどできん」

鷹揚に手を振ってみせる。

部下の落ち度を許せる器である、とのアピールも兼ねているが、実際にこの反乱は不可避だった

だろう。なにせ悪条件が整いすぎている。

せめて建国祝賀祭だけでも開催できていたらなら反乱を未然に防げた可能性は高いが、首都がまるごと強制転移させられるなどという馬鹿げた出来事を誰が予測できるものか。

「反乱の主導者はどこだ？」

「ああ、その武器屋の店先に転がっているのがそうだし」

ガルデイが指出す先には赤い肌のオーガがいた。突然変異種のオーガだ。原型こそ留めているものの、今はもう物言わぬ肉塊となつて転がっている。

……できれば、見たくない。

だが、これはある意味、自分の望んだ結果なのだ。

ならばその末路をきちんと見届けるべき義務があるだろう。

「……………」

覚悟を決めて反乱^{レフド}主導者^{オウガ}の死体に近付いてみれば、その腹部には拳大^{コノ}の風穴が空いていた。

視線を上げて顔を直視すれば、そこにはまるで打ち上げられた魚のように白く濁った瞳がある。

こみ上げる吐き気を堪えながら、反逆者の成れの果てを目に焼き付けた。

「……おいガルデイ。さつきから黙って聞いていれば、ヘリアン様への言葉遣いになっていないぞ」

「まあその話かよおりーヴェ。バランといいオメエさんといい飽きねえなあ。第一、他ならぬ総大将が言葉遣いについては許してくれてるんだぜえ？ 今更だろうによお」

「限度がある。ましてや兵の前だぞ。最低限の体裁ぐらい取り繕え」

「へーへー。あ、総大将。俺様あ死体の処理とか後始末があるんでこの場は退散させてもらわあ」

「オイ待てガルデイ。まだ話は終わってないぞ」

「あらあら。二人とも喧嘩けんかはいけませんよ」

ガルデイは面倒ごとから逃げるようにして、小走りにその場を去ろうとする。

小言を言うリーヴェは逃がすまいとその肩に手を伸ばそうとした。

エルティナはその様を見て、どのタイミングで止めようかと思案する様子を見せている。

——だから、誰も、間に合わなかった。

「牙G啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A啞A々A——ツ!!」

咆ほうせう声。

赤い肌を持つオーガの死体が何かの冗談のように跳ね起きた。

「は??」

ガルデイは場を離れようと背を向けている。リーヴェはその背に手を伸ばそうとする体勢。エルティナはそんな二人に向き直っている。そしてヘリアンはオーガのすぐ傍に立っていた。

故に、オーガの死体は握りしめたままだった己みづかの得物いを。

最も近場にいたヘリアンに対して、無造作に繰り出した。

+ + +

——ああ、これ死んだな。

目の前に迫ってくる無骨な鈍器を前に、他人事のようにその事実を認識した。

現実には凄まじい勢いで振るわれているはずの鈍器が感覚的にはゆっくりと迫ってくる。

これはアレだ、死の間際には全ての物がスローモーションに見えるとかいうヤツだろう。

原理としては防衛本能がどうにか身体を動かして死を回避させようとして体感速度を超圧縮する、
だったのだろうか。

だが無意味だ。

そもそも自分に大層な身体能力など備わっていない。

いくらスローモーションに感じられようが死から逃れる手段はなく、現実是非情である。

間延びした視界の中、必死な形相をしたリーヴェが下手人の頭を碎いたのが分かった。しかし
下手人の握る凶器は些かも速度を落とすことなく、それどころか臂力任せにさらなる加速を果たした。

頭がないのに何故そんなことができるのか。どこか他人事のようにぼんやりとした思考が疑問を
生む。けれどその疑問が晴れることはない。零秒後の死が透けて見える。

正直怖くて堪らない。

身体が動くなら情けなく泣き叫んでいたことだろう。

命乞いをして助かるというのなら躊躇いもなく這いつくばっていたに違いない。

何故だ。

何故こんなことになった。

どうして俺がこんな目に遭わなければならない。

理不尽に喘ぐ感情がそんな憤りを生むも、しかし結末は変わらない。

刹那せつなが引き伸ばされた世界の中、文字通り目と鼻の先に凶器メイイスが迫っていた。

そうしてまず風圧が届く。

続いて前髪にメイイスの先端が触れた。

凶器メイイスの表面に赤黒い錆が浮いているのが見て取れる。

きつと血が固まったものだろう。

哀れな犠牲者の先達がいたらしい。

このメイイスの錆になるのは俺で何人目だろうか。

ああ、ダメだ。もう死ぬ。すぐ死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。死にたくない。誰か助け——

グチャリ、という異音。

そこで思考すら終わりを迎えた。

ただの人間でしかない彼の頭部すいかは西瓜すいかのように弾け飛び、粉碎された頭蓋ずがいの中身が汚いケチャツ
ブと共に地べたにぶち撒けられる。

——こうして、最弱の王であるヘリアンは。

自らが統治する国の民に反逆され、死亡した。

第四章 もはやユメではなく

夢を見た。

多分コレは夢なんだろうなと臆おぼろげ気に自覚できた。

しかしその自覚は確信には至らない。つまりは夢だと確定してはいないということ。ならば後先考えず好き勝手やっていい道理はない。手抜きを許される状況でもない。だから行動を起こす。やると決めたなら全力を尽くせ。後悔は残すべきではないのだ。

「——」
どうやら敵軍が迫っているらしい。しかも大軍勢だ。

エルフやドワーフ、悪魔に鬼人に妖精ようせいと魔獣、果てはスライムや死霊といった不定形の人外種族に竜の群れ。凡およそありとあらゆる種族が一同に介した——どこかで見覚えのある——多種族混成軍団だった。

対してこちらの手勢は少ない。

玉座の前には黄金造りの立派な椅子いすが並んでいたが、なんと八席中五席が空席という有様ありさま。おまけに残る三席中二席に乗っていた駒こまは既に壊れて残骸ざんがいと成り果てていた。きつとあの軍勢に壊されたのだらう。無理もない話だ。戦力差がひどすぎる。

残された最後の椅子には、見るも見事なクリスタルで作られた駒が載っていた。細部まで作り込

まれた立派な駒は狼の形をしている。どうやらそれが自分の持つ全戦力ということらしい。

……なんてハンデ戦だ。

向こうは多種多様な駒を取り寄せているばかりか十万を超える戦力を有しているのに対し、こちらの駒はたった一つ。唯一の手駒は頼りがいのあることに最強の駒だったが、数の差は歴然にすぎた。

古今東西、いかなる大英雄であろうとも単騎で万軍に勝てた歴史はない。

数の暴力はかくも偉大だ。

そしてだからこそ人は万夫不当の武勇伝に憧れ、単騎無双の英雄譚を夢想したのでらう。

旧きは口伝で、次には書物で、そして遊戯で、遂には仮想現実で、世界中の人々が『夢物語』に情景を灯し続けてきた。

だから三崎司もそうした。

夢のような世界でロマンを追い求め、愛すべき仲間と共に助け合いながら『そうありたい』と願う未来を一心に目指し、己の理想を追い求め続けてきた。

強きを挫き弱きを助け。

世界に平和を。

親しき隣人には愛の手を。

されど道を阻みし障害は実力で以って撃滅し。

勝利の味に酔いしれる。

そんな、現実には叶うはずもない夢物語を、三崎司は幾らかの幸運に恵まれながらも不断の努力で叶えてみせた。仮想現実という狭い箱庭の中ではあれど、彼は確かに理想を実現したのだ。少年時代の己が夢見た場所に辿り着くことができたのだ。

……だが、その輝かしき日々も遂に終わりを迎えるらしい。

狼の形をした唯一の手駒が果敢にも軍勢の群れに飛び込んでいく。その駒は一騎当千が如く暴れ廻ったが、しかし千騎を屠りし後に万の軍勢に碎き散らされた。無残にも散った狼の残骸を踏み碎きながら、万魔の勢力は進軍し、遂には王の居城へ至る。

これでヘリアンの手持ちの駒はゼロ。詰みだ。

何故なら王駒に戦う力などない。兵士と異なり成長の余地すら皆無だ。全ての手勢を失い、玉座に残されたのは最弱の駒だけという情けない有様。もはや盤面をひっくり返してもしない限りはどうにもならない状況。

けれど投了はしない。一手後に敗けるとしてもそれだけは駄目だ。無駄な足掻きでしかないが、ここで勝負を投げるのは最後まで付き従ってくれたあの狼駒と、ここまで己が歩んできた歴史に泥を塗る行為だと感じられたのだ。

とうに覚悟は決めている。自分だって他国を滅ぼしてきたのだ。いつか自分の番が回ってくるん

じゃないかと思ひながら百五〇年の歴史を紡いできた。いざその時を迎えた際には無様を晒すまいと、結末を受け入れる心の準備は済ませていた。

だけど怖い。どうしようもなく恐ろしい。実際に結末を目の当たりにした感情が叫ぶ。だつて、こんなのは約束が違う。三崎司の愛した箱庭にこんな酷い現実感はなかつた。

……嫌だ。死にたくない。どうしてこうなつた。こんな終わり方なんてあんまりだ。

その慟哭を嘲笑うかのように状況は推移し、見る間に万魔の軍勢が玉座を取り囲む。

人間では勝つどころか抗うことさえ赦されない、恐るべき魔物たちが王駒を睨んでいる。

その先頭、重そうな足音とともに万魔の軍勢から一つの駒が一步前に出た。

駒は角を生やしていた。

駒は鬼の顔をしていた。

駒は赤い肌をしていた。

駒は血に濡れた凶器を握り締めていた。

駒が得物を振り被る。無骨な鈍器が致死の速度で迫ってくる。回避する手段などはなく、その攻撃に最弱の駒が耐えられる道理もない。

かくして王駒は、血塗られたメイスにより粉碎され、その臓物をぶち撒けて――

「――あ、あ、あ、あ、ああああああああああ――ツ!？」

跳ね起きた。

荒い呼吸。

心臓が悲鳴をあげ、激しく脈動する。

「ぐ、う……ッ」

不整脈でも起こしたかのように胸が痛んだ。

右手で胸を押さえて身体をくの字に折り曲げると、清潔そうな純白のシートが目映る。
どこだ。

胸の痛みには耐えながらどうにか顔を上げる。

視界に入ってきたのは知らない天井ではなく、見知った壁画だった。

「……ここ、は」

一人が寝るには大きすぎるキングサイズのベッド。

豪華絢爛けんらんに飾り立てられたシャンデリア。

品の良い天蓋てんがい。

壁面に飾られているのは黎明期れいめいきの頃の写真スクリンショットを流用した巨大な絵画。

ここは白亜はくあの居城の一室、王専用の寝室だった。

「……ヘリアン、様？」

呆然ぼうぜんとしたような声を耳にして左を向く。

そこには今にも泣き出しそうな顔をしたリーヴェがいた。

これも初めて見る感情表現パターンだ、と場違いな思考が頭の片隅を過ぎる。

「ああ、よかった……ようやくお目覚めになった……！」

リーヴェの琥珀色の瞳が潤んでいる。

目の端に浮かんだ透明な雫はやがて涙となり、白い頬を伝った。

そこでようやく、ヘリアンは自分が寝室のベッドに寝かされているのだという事実を認識する。

「—— ゆ、め？」

迫りくる軍勢の姿はない。

玉座を取り囲む魔物の群れもない。

部屋の中にいるのは、王の身を案じ涙を流す第一の配下だけだ。

「なんだ？ 何がどうなって……」

胸に当てていた右手を額に当てる。掌にはじつとりとした嫌な汗の感覚。

そうして思い返すのはここに至るまでの過程だ。

幾つかの記憶の断片が羅列で走る。

建国祝賀祭、転移、謁見、探索、エルフ、種族間抗争、集落、反乱、そして——

「——ッ！」

思い出した。

急激に覚醒する意識。

咄嗟に頭に手をやる。

辛いなことに頭蓋は原型を留めてそこにあった。

だがその事実は記憶と一致しない。自分は頭を潰つぶされて死んだのではなかったのか。

「——オーガは！ 反逆者たちはどうなった!? いったいなにが起きた!？」

最後の記憶は眼前に迫りくる血錆まびたメイスだ。

もしや、アレも夢でしかなかったのか。

「落ち着いてくださいいへリアン様。まだ身を起こされてはなりません。半日以上もお眠りだったのですから」

「……なに？」

馬鹿ばかな。眠った記憶はない。自力で床に就いた覚えなどない。

いや、ということとは……アレが夢ではなく自分の記憶が確かなら。

「俺おれは……あの赤いオーガに殺されたのか？」

恐る恐る口にした独り言のようなその言葉に、リーヴェは視線を下げて言い難むづかそうにしながらも、やがて「はい」と答えた。

その返答を受けて、へリアンは起こしていた上半身をベッドにドサリと倒した。

高級素材が惜しげもなく使われたベッドは音も立てずに沈み込み、勢いよく倒された身体を柔らかに受け止める。

……理解した。

オーガに殺された記憶は現実のものだ。王ヘリアンは反逆者オーガに殺された。だが、

「自動蘇生そせいが、働いたのか……」

ゲーム「タクティクス・クロニクル」において、王フレイトの死死即ゲームオーバーの図式は成立しない。

デスペナルティや回数制限があるものの王フレイヤは復活することができる。

だからヘリアンは復活した。

反逆者のオーガに殺されて、そして、復活したのだ。

「……………リーヴェ」

傍らかたわの配下の名を呼ぶ。

リーヴェはしなやかな指先で頬の涙を払い、短く「はい」と応えた。

「玉座は無事か？ 反逆者たちは、あの赤いオーガはどうなった？ あの後何が起きたんだ？」

「ご心配なく、玉座は問題ありません。今もバラン率いる第二軍団の精銳が守りを固めております。また反逆者どもは今度こそ確実に殲滅せんめついたしました。頭蓋を砕いた後に肉片一つ残さず消し飛ばしたので間違いありません。そして反逆者の頭目ですが……………固有ユニークスキル能力の保有者だったようです」

固有ユニークスキル能力。

種族や職業ジョブに依存せず、キャラクターが独自に持つ能力。

癖くせが強い上に滅多めったに発現しない希少な力だが、その分替えの利きかない優れた能力であることが多い。時には固有ユニークスキル能力一つで実力差をひっくり返すことすらある。それをあの赤いオーガが持っていたというのか。

僅わずかに震えが残る手で〈戦術仮想窓タクティカルウィンドウ〉を開き、〈人物情報キャラクターステータス〉を呼び出す。

眼前に浮かんだ半透明の〈仮想窓ウィンドウ〉。左側の小さな表示枠の中に赤いオーガの姿が表示される。

そして画面右側には、戦闘や調査、撃破ボーナスにより明らかになった各種ステータスや所持能力などが記載されていた。ヘリアンは所持能力欄に記載されている文字を読み上げる。

「ク黄泉からの一撃……死亡後に一度だけ反撃を行う能力、か」

その効果は、最接近敵に対し必中攻撃を行う、という代物だった。

最期の記憶が正しければ、あのオーガはスキル発動中にリーヴェによって頭蓋を砕かれていたはずだ。しかし必中攻撃である以上、固有能力が発動した時点で『最も近くにいる敵に対して攻撃が命中する』ことが既に決定されている。

そしてそのオーガの目の前には、不用意に近付いたヘリアンがいた。

……斃^{たお}してはいた。討伐^{とうばつ}自体には成功していた。第五軍団長ガルデイは確実に反逆者を仕留めていたのだ。だからこそリーヴェやエルティナも警戒を解いていた。

そして、あのような結末に至った。

「申し訳ございませんッ!!」

リーヴェは不意に膝^{ひざ}をつき頭を下げた。

隠しきれない悔恨^{かみごん}の感情が、謝罪の言葉に籠^{ひそ}められている。

「護衛を任じられたにもかかわらずこの不始末……言い訳の余地もありません。いかなる厳罰をも覚悟しております。どうか、罰を」

頭^{こぶ}を垂れたリーヴェは、どのような罰であれ甘んじて受け入れるつもりだった。

復活したとはいえ他ならぬ王を死なせたのだ。更には護衛を任せられた王の信頼を裏切った。形容し難いほどの大罪だ。彼女の価値観からすれば死罪が当然と思えるほどに。

故に、リーヴェは『死ね』と言われれば即座に首を落とす覚悟で王の言葉を待った。

「……リーヴェ、傍^{そば}に寄れ」

彼女は即応した。

失礼しますと告げて立ち上がり、ベッドの傍に歩み寄る。

「ベッドに乗っていい。もつと傍に来い」

彼女は主の言葉のままに動いた。

王の寝台ベッドに上がるなど無礼だ、との感情が頭に過ぎつたが王の言葉が最優先だ。

ベッドに乗り上げて王の傍に身を寄せる。

そして王の手が伸びた。

意図は分からなかったがどのような罰であれ構わない。

リーヴェは黙したまま微動だにせず自らに迫る手を見つめ——それが視界の上に消えると、予想だにできなかった王ヘリアンの行動に思考が停止した。

「——えっ……ええ、あ、うあ、え？」

思考は停止している。なのに口から声が漏れ出る。

つまりは素の反応であり『何が起きていますのか分かりません』と言いたげな困惑の声の原因は、頭頂部の狼耳に触れる感触だ。

ヘリアンのしたことといえはどうかということはない。ただリーヴェの頭に手を乗せたただけだ。

そして感触を確かめるようにその掌を滑らせ、頬へと右手を降ろしていく。

その過程で耳の上に乗った指がずれ落ち、お圧されて形を変えていた狼耳がピンと跳ね立った。困惑し完全に硬直フリーズしたリーヴェに構わず、ヘリアンは彼女の頬を撫なでる。

そうして掌に伝わる体温。やや熱い。

僅かに指先に力を入れれば、しっとりとした柔らかい肌が指の形に沈んだ。

そのまま掌を更に下へと滑らせて首筋へと到達。

銀のチョーカーを避けてその首元に指を当てれば、指先が感じ取るのは早鐘を打つ心臓の鼓動。

次いで細い首に腕を回し、凭れ掛かるようにしてリーヴェのうなじに顔を寄せる。

触れるような距離で息を吸い込めば仄かな香りが鼻腔をくすぐった。

しばしそのままの体勢でいると、腕に伝わる彼女の脈動が尋常ではない速度にまで倍加する。

そしてうなじから鼻先を離して視線を上げれば、瞳を大きく瞬かせたリーヴェの顔があった。

至近距離にある琥珀色の瞳の中に、表情のない己の顔が映っているのが見て取れる。

リーヴェの頬はほんのりと朱に染まり、吐く息は荒くなりつつあった。

「――」

そんな彼女の様子には一切構わず、最後の確認としてヘリアンはリーヴェの右目の端に浮かぶ涙を人差し指で拭った。指先に僅かに濡れた感触。その指を舐める。

――微かに、しょっぱい味がした。

「……………!! ……ッ! ……ッ!?」

リーヴェはもう言葉も出ないようだ。

突然このような奇行に及べば無理もないだろう。

当然の反応だと思おう。

リーヴェという女性が現実ほんとうに存在するならば、そのように困惑するのは当たり前で——ごくごく自然な反応なのだろう。

「——」
ヘリアンは一度目を閉じる。

そのまま一つ息を吐ついてから目蓋まぶたを静かに開き。

視覚、聴覚、嗅覚きゆうかく、触覚、そして——唯一、未確認のままにしていた味覚に至るまで。

そのいずれもがどう考えても本物でしかない感触を思い返しながら。

未だパクパクと口を開くリーヴェを見て。

その初見となる感情表現エモーションを見て。

零ゼロと一イチの組み合わせ組み合わせでは絶対に表現不可能な現実リアルのすぎるその様子を目にして。

そして、だから。

堪こらえ難いものが目尻こぼから零れ落ちないよう、彼は天井を見上げた。

「……ああ」

確かに迫りくる軍勢の姿はない。玉座を取り囲む魔物の群れもない。八大軍団長は健在であり国も無事だ。先ほど見たものはやはりただの夢だった。——

「こっちは……夢じゃないんだな」

目覚めても現実現実に還かえれていない。

故にその事実を口にしてしまった。遂に言葉に出してしまった。

そうして思い返すのは濃厚すぎる今日一日の出来事できごと。そこで思い知った「タクティクス・クロニ

クル」と乖離する数々の事実や事象。

——ゲームでは味気なかったはずの五感が本物になった。

掌を切れば血が溢れ、痛みもまた本物となって襲いかかってきた。

——鍵言語が意味を成さなくなった。

キャラクターは独自の意志で行動するようになり、紛れもない自我を宿した。

——見たこともない森でありえない情報を得た。

ゲームにはない歴史を聞かされ、王専用種族のはずの人間が大勢いると知った。

——目を覚ましても現実世界に還っていない。

今日一日で体験した出来事の数々には、夢幻ではない現実感に溢れていた。

——そして何より、今、目の前にいる人は。

今日一日、ずっと傍にいてくれた彼女は、どう考えても本物の存在だった。

味覚を含めた五感全てで、その事実を再観測してしまった。

故に、ここに至ってヘリアンは認めるしかなかった。この残酷な事実を受け入れるしかなかった。

——これは夢ではない。

居城ごと見知らぬ土地に転移したのも。現実世界に戻れなくなっていることも。

できの悪い三文芝居のような悲劇に直面しているハーフエルフたちも。

反乱を起こして無残な死体となったオーガたちも。

こうして目の前にいて、固有の人格を宿したN・P・Cたちの存在も。

その全てが本物だ。

もはやゲームなどではない。

そして夢でもない。

紛れもない現実である。

自分は今、見知らぬ場所で、漫画や小説でしかありえない出来事の只中ただなかにある。

——異世界に、来てしまったのだ。

「、」

……不思議と。

自分でも意外だったが、不思議と取り乱しはしなかった。

事実を受け止めきれず錯乱さくらんして喚わめき立てるかと思いきや、そうはならなかった。

案外もつと前から受け入れていたのかもしれない。そもそもこれは夢だと思い込もうとしていたという事実こそが、心の奥底では現実だと理解していた証左に他ならないのだろう。

だから涙は出なかった。

だから怒声も出なかった。

けれど、ちょっと、そろそろ、限界に近かった。

「……リーヴェ」

呼び掛ける。が、無反応。横を見れば完全にパニックになっているのか口をパクパクと動かしながら固まっているリーヴェの姿があった。

ほんの僅かに苦笑して、再度呼び掛ける。

「リーヴェ」

「あ………は、はい！」

今度は返事があった。気の毒に、顔が真っ赤だ。頭の上の三角耳は慌ただしげに動き、フサフサの尻尾がなんとも表現し難い振る舞いを見せている。

思えばとんでもないセクハラをした気もするが、その問題は後回しだ。

「オーガの反乱以外に、重大な問題はあったか？」

「は、はい！ あ、いえ！ え、えっと、あの……！」

「慌てて喋らなくていい。落ち着いてゆっくりと答えてくれ」

「だ、大丈夫です！ 落ち着いています！ ええ、私は冷静です！」

再び苦笑する。本当に落ち着いていたら『えっと』はないだろう。リーヴェは冷静沈着な、いわばデキなお姉さんキャラだったはずだ。『えっと』はギャップが凄すぎる。

「も、申し上げます。細かな問題は少なからず起きていますが、即座に国を揺るがすような重大な問題は起きておりません」

「そうか……。他の軍団長は？」

「引き続き王命を実行中です。第三軍団長と第五軍団長は自軍団に指示を出しながら、ヘリアン様の沙汰を待っている状態です」

「では、第五軍団長は引き続き治安維持に当たらせる。万が一再び反乱が起きた場合、別途私から指示が出ない限りは独自の判断で対処するよう伝えろ」

「……よ、よろしいのですか？」

反乱に対処しきれなかった第五軍団長に引き続きその任を与えてよいのか、という問いだ。

だが先ほどの一件……レッドオーガの反撃を、誰か他の者ならば予測できたかといえは否だ。

現にリーヴェとエルティナも察知できなかった。他の軍団長でもそれは同じことだろう。

そもそも他に回せる余剰戦力もない。

人材を余らせておく余裕など、今やどこにもないのだ。

「構わない。第三軍団長は……反乱による建物損壊や怪我人に関するフォローと、各軍団間連携の微調整を行わせる。私の指示に反しない範囲内で臨機応変に対処するよう伝達しろ」

エルティナは平時では内政担当の役割を帯びている。また【調和】持ちでもあるため、調整役を任せても問題ないはずだ。

本来ならば総括軍団長でもあるリーヴェの仕事だが、彼女は自分の手元に置いておきたい気持ちがあった。

「第二軍団長には反乱が終息したことを伝えておけ。玉座の守護については、もう通常の体制に戻してよい。それと……私は少し休むことにする。リーヴェは引き続き警護を頼む」

「承知いたしました。各軍団長に伝言を飛ばしました後、室内にて待機を——」

「いや、室外の扉前で頼む。少し一人になりたいのだ。用があればお前を呼ぶ」

「……承知いたしました」

少し間を置いて、リーヴェは頭を垂れながら拝命の言葉を口にした。彼女が扉を出る直前、心配げに揺れる瞳と目が合う。そしてどことなく悔しそうにも見える瞳を閉じ、リーヴェは音もなく扉を閉じた。

王の寝室は一種の聖域だ。扉を閉めてさえいれば完全防音で、正式な方法で扉を開けられる者はヘリアンを除けば国王側近であるリーヴェしかない。

だからヘリアンはだらしなく寝返りを打って枕まくらに顔を埋めた。

眠ったりはしない。

落ち込んでいる暇もない。

だけど、ほんの少しだけでいいから休みたかった。

何も考えずに休みたかった。

ただそれだけが、ヘリアンのささやかな……そして真摯しんしんな望みだった。

2.

それから、何分経たっただろうか。

最低でも十分か十五分、けれど三十分はまだ経っていないだろうなと思考する。

寝返りを打ち、閉まざしていたまぶた顔を明けければいかにも天井画が視界一杯に映った。

念のため、と傍らの枕を拾い上げる。幸いなことにといふべきか、先ほどまで顔を埋めていた面

に湿り気はなかった。

もし僅かでもそんな痕跡が残っていたら、男のプライドとかそういうものがマズかったかもしれない。理不尽に晒され嘆き悲しみ枕を濡らす、なんてのは悲劇のヒロインの役割であつて大の男のする真似ではないのだから。

……まあ、なんだ。

こんな下らない思考が頭に浮かび始めたということとは。

もうそろそろ、気持ち切り替えるべき頃合いだということだ。

「……よっ、と」

掛け声と共に、両手を振り下ろした反動で上半身を起こす。

何故か妙に心が凜いでいた。気持ちの切り替えにはもう少し時間がかかるかと思っていたが、不思議と落ち着いた気分になっている。

はてどうしたことかと首を傾げかけ、すぐに答えに行き着く。

「ああ……」

やはり薄々と気付いていたのだ。この現実には。

丸一日かけてありえない出来事を見続けた俺は、心のどこかでこのありえない世界を受け入れる準備を整え始めていたのだろう。

あるいは自我を守るために、本能が気持ちを切り替えることを強要したのかもしれない。

生物の根幹部に備わる自己保存能力はかくも偉大だ。とりわけ、人間のソレは生物の中でもかなり優秀な部類に入るのだと大学の講義で習ったことがある。

専攻外だが何かの役に立つかと、単なる興味本位で臨床心理学を受講しておいたのだが……。

「まさか異世界でそれを思い出すことになるとは、な……」

皮肉げな苦笑を一つ浮かべて、ヘリアンは両手を眼前に翳かざした。

そのまま両の掌を少しだけ顔から遠ざけ——思い切り頬たに叩たたきつける。

バヂィツ!! と、乾いた音が部屋に響いた。

……ちよつとばかり勢いが強すぎたかもしれない。

けれど、おかげで、目は覚めた。

「——なら、考えろ」

現実逃避は既に終えた。

ならばここからは現実と向き合うべき時間だ。

現実にはありえないはずのこの状況げんじつを正しく認識すべき時だ。

顔を上げろ。前を向け。できることから手をつけて具体的な行動つなへ繋つなげろ。ここでウジウジと悩

んでいたところで事態が解決するわけもないのだ。

「となれば、まず考えるべきは」

目的。

これから行動するにあたっての方針の決定だ。

「何故こうなったのかの原因追究……いや」

そうではない。

それはあくまで目的達成の過程であって、俺の目的自体は——。

「——現実世界への帰還」

そうだ。俺は帰りたい。現実に戻りたい。

確かに「タクティクス・クロニクル」には青春の殆どを捧げた。どこぞの掲示板では廃人候補に挙げたこともある。各ワールドの覇者ともなれば大なり小なりはあれ皆同じようなものだろう。

けれど、少なくともヘリアン自身の自覚としては廃人ではない。仮想世界に人生そのものを捧げる覚悟などしていない。

あくまで娯楽として、ゲームとして、「タクティクス・クロニクル」という箱庭を愛したのだ。

だから俺は、現実世界に帰りたい。

なんとしてでも帰りたい。

そのためには——

「帰還方法を探す」

ではどうやって探すのか。調査のための手掛かりは今のところない。

そこで『何故転移したのか』という冒頭の疑問に立ち返ることになるが、仮説を立てようにもその根幹となる情報が少なすぎる。

現状で分かっていることといえば、深淵森という物騒な森に囲まれているという事実と、ラテストウツドとノーブルウツドが種族間抗争の只中にあるということぐらいだ。

「しかも周辺の脅威すら図れてない。最低でも周辺国の軍事力ぐらいはある程度把握できなきや駄目だ。まずは自分の足場をしっかりさせないと方法を探すもクソもない」

せめて指針を決めるための判断材料が必要だ。

周囲に存在する勢力は判明済みの二国だけか。この世界に存在する各国のパワーバランスは。国力で対比較した際のアルキマイラの立ち位置はどのあたりか。

何もかも分かかっていない現状では、迂闊うかつにアルキマイラを動かすことすらできない。

「国内問題も長期間放置するのは無理だ。一度反乱が起きた以上、国外調査と並行して国内問題の対策も進めないとやばい。もしまた反乱が発生したら、今度こそ——」
と。

そこまで口にするなり、身体がおこりにかかったように震え始めた。

「……ッ」

両腕で身を抱くようにして勝手に震えだす身体を押さえ込む。

思い出すのは先ほど身を以って体感した『死』だ。

あれは怖かった。心の底から怖かった。怖くない者などいないだろう。復活こそしたものの、アレは紛れもない死の感覚だった。

言葉では表現しきれない。ご丁寧ていねいにもスローモーションで体験させられた『死』は人類の言語で表現可能な領域を超えていた。もうあんなのはご免だ。一瞬で死ねたからか痛みこそ感じなかったものの、二度と死にたくない。三崎司じびさんの精神が何度もアレに耐えられるとは到底思えなかった。

それに——

「復活回数は有限……。あと五回死ねば、そこで終わり……」

ゲーム「タクティクス・クロニクル」において、王フレイヤの死＝即ゲームオーバーの図式は成立しない。デスベナルティがあるものの、王フレイヤは復活することができる。

確かにそれはそうだ。

だがそのデスペナルティは相応に重く、王が死ねば軍に所属する魔物の全ステータスが二ランク減少する状態異常にかかる。これはほぼ戦力半減と同義であると言えた。また、減少したステータスが元に戻るまで死亡一回につき二十四時間という多大な時間を要する。

更に「命の貯蔵」は最大六つまで。

先ほど死んだため、残りは五つだ。あと五回死ねば滅亡条件に該当する。

ゲームでは死亡後に課金することで『命の補充』ができたが、システムサイトに繋がらなくなつた今ではそれも叶わない。

——そして「タクティクス・クロニクル」における滅亡とは即ち、キャラクターデータの削除を意味した。

そこに情け容赦などはない。データを復活させる課金アイテムなんてものもない。運営する会社はいくらクレームが来ようが『滅亡』終わり』という信念に似た考えを頑なに守り続けていた。簡単に滅亡しないよう幾つかの救済措置があるものの、一度滅亡すれば取り返しはつかない。泣こうが喚こうがゲームオーバーにより削除されたデータは復活しないのだ。

「じゃあ、この世界でゲームオーバーになったら。俺は、どうなる……?」

考えたくもないが。

そこに待っているものがヘリアンにとっての本当の『死』なのだろう。

ゲームオーバー条件は幾つかあるが、中でも一番やばいのが反逆者による【革命】だ。

一度国家が安定すれば他条件によるゲームオーバーはまずないが、どんなに栄華を誇ろうと反逆

者に首都を制圧されてしまえば【革命】判定が成立し、一瞬で滅亡するのだ。

「オーガの一派はともかく……すぐ裏切られるようなことは、ないはずだ」

ヘリアンは多少効率が悪くなるうとも善政を布くよう意識していた。

その甲斐あって国民の【忠誠心】と【幸福度】はかなり高いと言える。中でも軍団長らの【忠誠心】には人一倍気を使ってきた。更には城の防備も過剰なほどに固めており、並の魔物が反乱を起こしたところで首都が完全掌握される事態にはそうそうならないだろう。

しかし一方で、王ではないヘリアン、などただの一般人でしかない。

王の仮面を剥がされれば、そこには軍団長どころかゴプリンにすらあつさりと撲殺される最弱の男が残るだけである。

だからヘリアンは王でなくてはならない。名だたる魔物を前にして、王の仮面を被り続けなければならぬ。魔物の王を立派に勤め上げなければならぬ。

そうでなくては、この万魔の国の王に足る存在で在り続けなければ、自分はどうも、安穩と生きていくことすら許されないのだ――。

「――、」

――ダメだ。

今、これ以上この問題について考えるのはダメだ。

これを考え続ければ動けなくなる。恐怖で何もできなくなってしまう。軍団長や魔物たちと何も話せなくなってしまう。

それだけはまずい。だから建設的なことを考えろ。これからどうすべきかを己に問い、前に進ん

で歩いて行くための思考に己を費やせ。ここで心折れている余裕などないのだ。

「……他に、考える、べき、こと」

別の何かを思考しなければならぬ。建設的で、かつ逃避ではない何か。

そう、たとえば。

この世界における【ヘリアン】の能力検証……だとか。

「……復活することは、できた。ゲームと同じように【ヘリアン】は蘇生した」
では。

他にゲーム中でできていた能力についてはどうだ？

「タクティクス・クロニクル」と、この世界との違いは……？ ゲーム内で使っていた王の能力については、今でも全て使えるのか？」

まず、代表的な各種仮想窓は一通り使えた。

戦闘支援や情報参照に使う〈戦術〉。情報共有などの機能を使用する〈権能〉。遠隔地でも意思疎通を可能とする〈通信〉。ログ参照やカメラ等を使用する〈基本〉。

少なくともこれらは使用可能だ。

他人からは仮想窓が見えない点も「タクティクス・クロニクル」と同様である。

他の使用頻度の高い仮想窓としては、輝度調整や音声調整等の細かい設定を行ったり、離脱や管理者呼出を行うための〈設定仮想窓〉があるが……これについては今は殆ど意味がない。

「仮想窓…開錠」

発声操作で呼び出された仮想窓が空中に投影される。半透明の画面を指で操作すると、拠点情報

を呼び出すことができた。

直接操作、思考操作、発声操作。

仮想窓の呼び出し操作に関してはこの三種に大別されるが、いずれもゲーム通り機能するらしい。

「なら、〈情報共有〉に関して」

これも問題なさそうだ。

近接範囲内にいる配下からは自動的に〈情報共有〉が実行され、その範囲外にいる配下でも一キロメートル範囲であれば、手で情報を吸い上げることになっている。

同時接続数や戦闘状態下限定の特殊接続やその有効範囲、拠点間での特殊な情報共有能力などについては別途検証する必要があるだろうが、今現在必要な機能については正常に働いていることが確認できているので後回しにして構わない。

「〈通信〉や〈指示〉についても……一応は機能したな」

第二軍団長とはテキストチャットを使用した通信ができた。各配下への〈指示〉も転移直後に行った際にはきちんと機能した。これらも問題ない。

ただし「タクティクス・クロニクル」では配下に指示を出したからといって、必ずしも王が望んでいる結果が得られるとは限らない。NPCの性能や性格、その場の状況等により、NPCがどのような形で指示を実行し、どのような結果が得られるかが変わるからだ。

以前【人物特徴】の構成が色々残念な配下に対し、物は試しと敵拠点の偵察任務を命じたことがあるのだが、結果として大惨事になった。

この世界で同じ過ちを犯せば洒落にならない。

「〔配下蘇生〕^{フレンドリーリバイブ}についてはどうだ？」

「タクティクス・クロニクル」では、プレイヤーだけでなく魔物も蘇生可能だ。ただし王^{プレイヤー}のそれとは性質が異なり、また制約もかなり多い。

まず、蘇生可能な対象は自国か属国の国民のみに限られる。

たとえば野良^{のら}でレアな魔物を発見した際、捕獲に失敗し勢い余って殺してしまったからといって、それを蘇生することはできない。国民ではないからだ。

また蘇生可能なのはプレイヤーがフルネームを知っている魔物のみだ。というのも、蘇生対象の指定については候補^{リスト}からの選択式指定ではなく、名前を打ち込む入力式指定を採用しているためである。一文字でも間違えると蘇生はできない。数万以上の全配下のフルネームを覚えるなど人間業^{じんげんわざ}ではできないので、自然、主要な配下しか蘇生できないことになる。

更に、死亡してから二十四時間以上経過した魔物も蘇生対象外になる。

仮に百万体の配下のフルネームを覚えていたとしても、その名前を入力しているだけで二十四時間など簡単にすぎてしまう。

そして最後の制約として蘇生可能回数には上限が設けられている。一体の配下につき蘇生回数は二回までだ。アイテムや装備等で蘇生上限回数を増やすこともできず、三回目の死亡はその魔物のキャラクターデータ消失という無慈悲な死が与えられることになる。

ただし転生すればカウントされていた死亡回数は零^{ゼロ}に戻るので、二回死亡した後転生させれば再び二回蘇生できる余地ができる。しかし転生によりLV^{レベル}が一に戻るというデメリットがあるので、やたらと乱用することはできない手段だ。また転生の儀式は永世中立国にある専用の施設でしか行

えなかったことから、恐らくこの世界では不可能なものと思われる。

「使えるか検証……するわけにもいかないな。試しに死ねとかどんな外道だ。これも保留。他には」

——ぐう。

と、腹が鳴った。

「……………ああ」

そういえば。転移してからこのかた、食事をした覚えがない。

「こんな状況でも腹は減るんだな……」

当たり前すぎる自然の摂理だった。まずは自分の体調管理をしつかりするべき、ということらしい。

一つ苦笑を零して、唯一部屋の外に音を伝えることのできる呼鈴マジックアイテムを鳴らす。

三秒と経たずに静々とノックが鳴らされ、リーヴェが入ってきた。

3.

——時は少し遡る。

リーヴェは王の寝室を後にして音もなく扉を閉めた。

できれば傍に侍って守護の任につきたかったが他ならぬ王の命令だ。仕方がない。

しかしながら悔しさと得体の知れない感情が入り混じり、退出時には良からぬ感情を顔に浮かべてしまっていた気がする。

それは国王側近として相応しくないと振る舞いだ。王を直接補佐する榮譽ある立場に任命された自

分は常に冷静沉着であることが求められる。

ましてや王の目の前で感情を表に出すなどもつての外だと深く自省し、リーヴェは溜息を零す。

「第一軍団長。我が王のご様子は……」

「お目覚めになられた。用向きがあれば呼ぶとのことだ。王命が別途下されているので、各軍団長に伝令を出せ」

扉前で待機していたリビンググアーマー——中でも真銀の鎧人と呼ばれる上位種族の一つ——のうちの一団に、王の指示を伝え伝令を任せる。リーヴェ自身は守護兵のリビングアーマーたちと同様に廊下の壁際に並んで立ち、待機の態勢に入った。

しかし、とリーヴェは不安を覚える。用があれば呼ぶとは言われたが、果たして王は本当に呼んでくれるだろうか。なにせ王を死なせるという最低最悪の大失態を犯したばかりの身だ。信用して呼んでもらえるかは分からなかった。

「……そういえば」

失態に対する罰が下されていない。

沙汰は後で下すとのことだったが……と、つい先ほどの出来事をリーヴェは思い出し、赤面する。最初は叱責かと思った。

しかし頭に乘せられた掌に殴打の勢いはなく、むしろその掌の動きからは優しさすら見いだせた。頭を撫でられている、と自覚するまで数秒を要した。

それほどに望外の出来事だった。

しかしあんなご褒美を貰える出来事があつただろうかいやないとリーヴェは刹那の思考すら必要

とせず否定する。

それどころか致命的とも言える失態を犯したばかりの身だ。

では何故自分はあるなにも美味い展開に恵まれたのかと首を傾げて考えるが、やはり思い当たる節はない。

「むう……」

それにしても王の手つきは実に気持ち良かった。

けれどその感触に酔うばかりに、こともあるうに慌てふためく無様な姿を王に晒してしまったのだった。

思い出すだけで頬が熱くなる。二度と醜態を晒さぬように猛省せねばなるまい。

……だがそれはそれとして、アレは実に良いものだった。

「……………あの、第一軍団長」

「む？　なんだ？」

「何か良いことでもおありだったのでしょうか？　随分とご機嫌が良さそうに見受けられますが」
居並ぶリビングアーマーのうちの一体が、脈絡もなくそんな言葉を口にした。

何故かその視線はリーヴェの腰の辺りを向いている。

「……貴様、寝ぼけているのか。国が未曾有の事態の只中にあるというのに、よりにもよって機嫌が良さそうだと？」

「あ、いえ、も、申し訳ありません！　小官の気のせいだったようです！　たった今動きも止まりましたので、はい！」

「動き？ 貴様は何を言っている。意味が分からん」

ジロリと睨みつける。

わけの分からないことをほざく木偶でくの坊ぼうに、榮譽ある王の寢室の守護業務が務まるのだろうか。

この個体は第二軍団長の手勢故にリーヴェに解任権はないが、自分の配下であるならば即刻解任して蹴り飛ばしているところだと苛立ちを覚える。

「……それにしても、今回は長かったな」

考えるのは復活した王のことだ。不遜かもしれないが心配でならない。なにせ半日以上も眠り込んでおられたのだ。玉座で復活した場合、意識を覚ますまでに多少の時間を要すると経験則で知っているが、今回は殊更それが顕著だった。

ただでさえ王は自身の身をまるで消耗品か何かのように扱う。そして重要な局面においては、どれほど危険な戦場だろうと最前線で指揮を執るのだ。今回の国外調査の件もその一例でしかない。もう少しご自愛いただければと歯齧はがみしたことは一度や二度では済まなかった。

確かに誇らしい背中だ。この方が王でよかったと心から思える雄姿であることに疑いの余地はない。けれどそれでも、もう少しだけ自分を大切にしておしかなかった。

そして先の一件。勇敢なる王は愚かな叛逆者によって弑逆された。なにもかも全て自分たちの力が足りていないためだ。精進しなければいけない。リーヴェは心の底からそう思う。

「——」
しかし。

たとえば、仮の話として。

そう。これはあくまでたとえ話としてなのだが。

精進に精進を重ね、王の役に立ち、華々しい活躍を果たして褒賞を賜う機会に恵まれたとしたならば。

また先ほどのように頭を撫でてくれるだろうか……？

「……………第一軍団長？」

装備は既に最高峰のものを下賜されている。最近の褒賞といえは金銭ばかりだったが大した使い道もなく貯まる一方だ。

つと考えてみる。金銭の代わりに頭を撫でてもらうことは可能だろうか。

いや、これは決して己の欲望のために言っているのではない。

国がこのような未曾有の事態に遭い、経済が大打撃を受けている状況下ではこれまでのように大量の金銭を国庫から放出するわけにもいかないだろう。

だからこの提案は、国の経済にダメージを与えない形での褒賞を頂ければ、という国を想つてのことなのである。

「……………あのー、第一軍団長？」

自分は確かに失態を犯した。

王を死なせるという大失態から挽回するには並大抵の成果では足りない。

下手すれば何十年とかかるだろうが、しかしその何十年か後に、王に要求した時のことを考えてみる。

王は困惑されるだろう。幼かった頃はまだしも既に立派な大人となった自分だ。それが頭を撫でて欲しいなどと戯言を口にするのだから不審がられるのは当然のことだとは思ふ。

けれどその願いがもし叶えられたとしたらどうだろう。

場所は謁見の間になるだろうか。

できれば誰の邪魔も入らない私室か執務室あたりがよいのだがいかがなものか。

王の寝室などで高望みはしない。先ほどののはあくまで例外中の例外である。けれど気持ちよかつた。わしゃわしゃと髪をかき混ぜられる感覚は何十年経とうとも忘れることはない。

「……………第一軍団長、先ほどから貴女様の尻尾が小官の足に……………その、バシバシとですな」
耳を触られたのも久しぶりだった。

右耳しか触ってくれなかったためにバランスが悪い。

次は左耳から撫でてはくれないだろうか。できれば摘んでくれると嬉しい。人差し指と中指の間に挟み込むようにして擦ってくれたならもう最高だ。

それに首元に手が降りてきたのは新鮮だった。人間である王は獣人種に比べて体温が低く、触られた瞬間はそのヒンヤリとした感覚に身体を震わせてしまった。

国の紋章を刻んでいる首輪チョウカを伝って首筋に触れた指先は、しかし落ち着いて感じ取ってみればしつとりと冷たくて気持ち良かった。

「……………第一軍団長？ 聞こえておられますか？」

しかしその後が問題だった。

なんと王は私の首筋に顔を埋められたのだ。

ずっと王の警護をしていた私は丸一日湯浴みゆあびをしていなかった。

今更のように気になる。

僅かに汗をかいていたが臭くはなかつただろうか。

あんなことになるのならエルティナに洗浄の魔術をかけてもらうのだった。

次もし機会があるならば念入りに身体を洗っておかねば。

香り付けについてはカミーラに相談すべきだろう。

彼女はある意味その手の専門家だ。

個人的には相性の悪い人物だが背に腹は替えられない。

正直言うと鼻の良い自分は香水が苦手だが耐えてみせる。

いざとなれば完全人化形態になれば鼻の良さは誤魔化せるだろう。

なのでもう一度してほしい。

だがしかし待て。

してもらうのもいいが逆に自分がするというのはいかがか。

王の匂いは常日頃から嗅いでいるが首元に顔を埋めたことはない。

鼻先を王の首に触れさせたら私はどんな感覚を覚えるだろうか。

あまつさえ舐めることを許されたならどうだろう。

想像すると甘美な味がした。

嗚呼どうしよう。

頭が痺れそうだ。

国陥とし級の戦果をあげればねだっても許されるだろうか。

手頃な敵国があれば是非とも一番檜を頂きたい。

「第一軍団長。極めてご機嫌が良さそうなどころ誠に申し訳ありませんが、そろそろ尻尾で小官の足を叩くのをやめていただけると大変ありがたく——」

——チリン。

透明な鈴の音が頭頂部の耳に届いた。

刹那で壁際から扉の真正面へと移動する。同時に魔法の小袋から手鏡を取り出して身嗜みをチェック。今しがたの高速移動で髪型が少し乱れてしまったので手櫛で整えた。体臭については不明だが今更だと割り切る。しかしそれ以外については問題ない。

都合一コンマ二秒で己の完璧さを確認したリーヴェは、寝室の扉を静々とノックした。

何故かリビングアーマーのうちの一体が呆気にとられたかのようにヘルムの眼光を明滅させていたが、彼女がそれを気に留めることはなかった。

4.

『ロールプレイ』という言葉がある。自分で作った設定を演じるというものだ。

このゲームのプレイヤーというのは文字通り一国一城の主であるわけで、それが軽い口調でチャラチャラ話しているようだ和世界観的によろしくないだろう。

別にそんなことは気にしないというプレイヤーも多かったが、各ワールドの覇者となるような上位層にはこだわりの派が多く、程度の大小はあれどキャラにあった話し方や素振りをするよう心掛けている者が少なからずいた。

そして「ワールドNo.Ⅲ」の覇者であるヘリアンもまたその例に漏れず、王様らしい振る舞いを意識してプレイするようにしていたのだった。

ガチのロールプレイではないものの、たとえるならば『メイド喫茶店員のメイドっぼさ』と同程度以上には王様らしくしてきたと言えよう。そんなわけでネットで調べれば分かるような浅い知識ではあるが、それらしい振る舞いというものは身に付けているのである。

……なにが言いたいのかというところ、食事作法を勉強しておいて正解だったということだ。

「前菜、イクシオサーモンのカルパッチョでございます」

「……うむ」

肅々と気品のある仕草で白磁の皿が差し出される。

皿を置く音どころか微かな歩行音すら聞こえなかったのはプロの成せる技だろうか。

これで給仕される側がカトラリーの扱い方すら知らないようであれば、傍に控えている給仕人から侮蔑の視線を頂戴していたであろうことは想像に難くない。

味を感じる余裕もなかったが、どうにか食事自体はミスなく済ませることができた。

リーヴェがやたらと世話を焼こうとしてくるのには少々困惑したが、とりあえず腹は膨れたので良しとする。

そして食後の紅茶が運び込まれた際に『後はリーヴェだけで十分だ』と告げて給仕人を退出させた。せめて紅茶ぐらいいは、人目を気にせずゆっくり味わいたい。

「旨いな……」

紅茶を口にして思わず呟いた。

まず感じたのは仄かな香り。口に含めば深い味わいが舌を柔らかく包む。そのまま喉のどに迎え入れれば心地よい熱あつが胸へと流れ落ちた。

ゲーム「タクティクス・クロニクル」で飲んだ際にはここまでの味覚表現はなかった。

仮想現実で本物同然の食事を摂ることで脳が『食事済みだ』と誤認し、現実世界での食事摂取量が激減するという問題を受けて厳しく制限されていたからだ。たとい一切の規制がなかったとしてもこれほどの味わいを表現することは不可能だっただろう。

さすがは王室御用達の紅茶だな、と寂さびしく微笑ほほえむ。

そうして一通り紅茶を楽しむと、少しホッとした気分になる。思えば転移してからずっと神経を張り詰めっぱなしだった。先ほどの食事中もまるで気が抜けなかつたので、随分と久しぶりに気を緩ゆるめられた気がした。

ふと、傍らに立つリーヴェエを見る。

そういうえば彼女は部屋にいたままだったが、ヘリアンは自然体で紅茶を楽しむことができた。

「……？」

視線を向けられたリーヴェエは意図を窺うかがうかのように瞳を瞬かせた。

そんなリーヴェエを見て、ヘリアンはカップを受皿ソウザに戻し、柔らかな椅子の背に体重を預ける。

……思えば、リーヴェエは転移後も常に傍にいてくれた。

国王側近なので当然だと言われてしまえばそれまでだが、それでも彼女はヘリアンと行動を共に

し、力を貸し続けてくれていた。転移後の混乱の中で自軍団を取り纏め、王と各軍団長の間を取り持ち、護衛に看護に給仕にと縦横無尽に働いてくれている。

ヘリアンがそう望んだから、彼女はそうしてくれたのだ。

「——リーヴェ」

「ハッ」

「これから私はお前に対して一つの質問をする。意図が分からないかもしれないが……思うがままに答えてくれ」

「承知しました」

一つ、確かめるべきことがある。

「お前は……弱者をどう思う？」

問われたリーヴェは若干惑ったように瞳を揺らした。

「弱者、ですか」

「そうだ。自分より力の弱い者……そうだな、たとえば昨日助けたレイファについてだ。彼女のことをどう感じた？」

「レイファ……リム……ラテストウッドについて……ですか」

リーヴェは視線を下に向けてしばし思考した。

ややあつてから考えが纏まったのか、顔を上げ、真つすぐな瞳をして彼女は口を開く。

「強者だと感じました」

しかし、それはヘリアンにとって想定外の答えだった。

弱者として例を挙げたというのに、返ってきたのは真逆の言葉だ。

「……強者？ 私の見立てでは、彼女の戦闘能力はお前よりも随分と劣っているように感じたが」

「はい。仰る通り戦えば私が勝ちます。千度戦えば千度私が勝つでしょう。それはレイファ・リム・ラテストウッドも理解していました。しかしながらそれでも彼女は卑屈に振る舞うことなく、対等に我らと向かい合っておりました」

森で魔獣からレイファを助けた時のことだ。

あの時、レイファは自分より圧倒的に強い力を持つリーヴェとエルティナを前にして僅かたりと目を逸らさなかった。

戦闘能力の観点では圧倒的に弱者でありながら、強者である旅人一行と対等に向き合っていたのだ。「また集落に到着後、レイファ・リム・ラテストウッドは相当な疲労を抱えている様子でしたが、それでも休むことなく集落の人々を纏め上げておりました。望まぬ戦争を強いられ、圧倒的劣勢の只中にあってもなお、あの集落の者たちが絶望に至っていないのは、偏ひとよに彼女の振る舞いによる比重が大きいです。弱き身でありながら真つすぐに立ち続けるその様を見て、私は彼女を強き者であると感じ取りました」

「……在り方自体が強い、ということか」

「はい」

少なくとも、リーヴェは戦闘能力のみでその人物の価値を判断するわけではないらしい。

だが『弱者』そのものについてどう思っているのか、どのような価値観を抱いているか不明なままだ。更に踏み込んで問う。

「だが戦闘能力の観点で言えば彼女はお前にとつての弱者だぞ。弱肉強食の理ことわりで考えたりはしないか？　いかに心が強くとも力を持たない弱者ならば、自分より劣った存在だとは思わないか？」
少なくとも、「タクティクス・クロニクル」における野良魔物の設定としてはそうなっていた。

魔物の世界とは弱肉強食の世界だ。強ければ生き、弱ければ死ぬ。

それが摂理であり、弱い方が悪いが魔物たちの常識であつたはずだ。

ならば手塩にかけて育ててきたとはいえ、魔物であることに変わりのないリーヴェの常識も、そうではないかという疑念をヘリアンは抱いていた。

しかし、

「いえ。特には」

と、リーヴェはあっさりとした口調で首を横に振った。

「確かに魔物の一般的な考えとしては『強さは尊く弱さは悪』となるのですが、私自身はそういうには思いません」

「何故だ？」

「私がアルキマイラの国民だからです」

さも当然のように即答された言葉に、ヘリアンは思わず息を呑んだ。

「黎明期の頃の私はか弱い魔物でした。弱肉強食の理において、私はさほどの価値もなかったでしょう。しかしヘリアン様は私を見捨てることなくここまで育て上げてくださいました。そんな私が弱者を喰くい物にしようなどと宣のたまうのは、ヘリアン様に対する冒瀆ぼうとくでしかないでしょう。故に私が従うべきは弱肉強食の理にあらず、ヘリアン様が布かれたアルキマイラの理であると確信いたします」

答えるその声に嘘偽りの響きはない。少なくともヘリアンにはそう感じられた。その琥珀色の瞳は、今も真つすぐにヘリアンの姿を映している。

ヘリアンはしばしリーヴェの瞳を見続けた後、徐に腕を組んで目を閉じた。

「——そう、か」

吐息と共に言葉を零す。

確かめるべきことを確かめられた。ヘリアンと共に同じ時間を刻み続けてきた第一の配下は、ヘリアンが欲しかった答えを返してくれた。

「そうなのか」

なら決めた。もう、決めた。

——今後、リーヴェだけは疑うまい。

ゲームでは【反乱】という仕組みがシステムとして存在した。

そしてそれは実際に一度発生し、オーガ一派は魔物の常識に従って弱き王を弑そうとした。

今回の反乱はあっさりとして鎮圧されたものの、ヘリアンが王足り得ないと判断されれば再び反乱が起きるだろう。

軍団長が反乱しないとも限らない。そうなれば軍団長が指揮する各軍団も合わせて蜂起することだつて考えられる。それがなくとも、戦いは数と一騎当千が両立する「タクティクス・クロニクル」では、数人の軍団長に裏切られただけで一気に国家存亡の危機に陥りかねない。

だが、一方で全てを疑って行動するのは正しい方針ではない。全ての軍団長を疑ってかかってはまともな軍の運用など不可能だからだ。裏切られるかもしれないと怯え、配下の顔を窺いながら国を運営したところでいつか必ず破綻する。それは緩やかな自殺でしかないだろう。

だからヘリアンは決めた。

全配下の中で唯一、リーヴェエに対しては「裏切るのではないか」という疑いを抱かないと決めた。ヘリアンの目からはリーヴェエは忠臣に見える。ヘリアンが全配下の中で最も信頼しているのは彼女だ。彼女は「タクティクス・クロニクル」を始めてから、ずっと付いて来てくれる最古参の一人であり、今この時に至るまで忠義を尽くしてくれている。

だから信じる。リーヴェエだけは何かあるうと信じる。

それにどの道、この忠臣にすら見限られるようであれば、この先自分が魔物たちの王として君臨し続けることなど到底不可能だろう。

「よく分かった。下らんことを訊いたな。許せ」

「い、いえ。下らないことなどは……」

「そういうのはいい。今ここには、私とオマエしかいないのだから」

告げると、リーヴェエの背後で白いものがバツサバツサと動き始めた。

言うまでもなく彼女の尻尾だ。フサフサのそれが左右に勢いよく振られている。

一方で表情はといえば、無表情に近い澄まし顔をしていた。

(……多分、自分では冷静沈着のつもりなんだろうな)

どこか微笑ましさのようなものを覚えて、少し笑えた。

尻尾を振り始めた理由はいまいち分からないが、彼女の機嫌が良いに越したことはない。

「そういえば……身体の調子はどうだ？ 私が死亡したことによる影響が出ているだろう」

まだヘリアンが死亡してから二十四時間が経過していない。

あと数時間の間は、全ステータスが二ランク減少したままのはずだ。

「体調はさほど問題ありません。確かにお亡くになられたことによる能力減少は感じておりますが、私はヘリアン様の傍にいてお力をいただいておりますので」

「……ああ。なるほどな」

「……ああ。なるほどな」
王自身には何の戦闘能力もないが、配下を強化する方法はある。

リーヴェが言っているのは〈王軍〉と呼ばれる、王から約五〇メートルの近接範囲内に存在する配下の全ステータスを一段階向上させる能力のことだ。また約一キロメートル範囲内に存在する配下の最も高いステータスを一段階向上させることが可能だが、効果の重複はしない。

この能力によりデスペナルティが幾分かが相殺され、他の魔物と比べてまだマシな低下率に収まっているということなのだろう。正直焼け石に水だと思うのだが、ステータス低下が体調不良に直結するというわけでもないようだ。

また、戦闘関連では〈王軍〉とは別にもう一つだけ、配下の力を引き出す能力がある。

「リーヴェ。ここでも クリムゾンムーン 紅月ノ加護は使えるのか？」

「それは……はい、使えますが」

「そうか。なら試したいことがある。今ここで使ってみせてくれ」

「承知いたしました」

配下の力を引き出す^{プレイヤー}王専用能力。

それは王の半径五十メートル以内にいる配下のみ〈秘奥〉を使用できる、というものだ。

ここで言う〈秘奥〉とは、いわゆる必殺技だとか切り札だとか極大魔法などと呼ばれるもの総称である。高威力の攻撃を行ったり特別な効果を発揮する能力を使用できる。

ただし^{プレイヤー}王の許可がなければ使用することはできず、また使用時には王の【生命力】が一定量削られるという代償がある。

中には圧倒的不利な戦況をひっくり返すことのできる〈秘奥〉もあるが、そういった類^{たぐい}のものは大抵一発で【生命力】を全損したりするので乱用はできない。

また王の【生命力】はゲーム初期から一律だ。

最大値を増やすことができない以上、^{プレイヤー}王にはここぞという使い所を見極める技術が求められる。いわゆるプレイヤースキルというやつだ。

ちなみに、^{クリムゾンムーン}紅月ノ加護^グは〈秘奥〉の中でも使い勝手がよい。

自分自身の全ステータスを強化するという単純な効果で、王の【生命力】消費量も一割以下と低コストだ。検証にはちょうどいいだろう。

「では、使用します——^{クリムゾンムーン}紅月ノ加護^グ」

リーヴェの全身から赤い燐光^{りんこう}が立ち昇る。^{クリムゾンムーン}紅月ノ加護^グが発動した証^{あかし}だ。リーヴェの身体に力が漲り^{みなぎ}、一時的な高揚感と万能感が彼女の身を満たす。

——同時に、ヘリアンの身にも異変が現れた。

「……ッ、カ、ハ」

身体から大切な何かが引き抜かれていく。

咄嗟に胸を押さえ付けた。

それでもしなければ際限なく奪い尽くされるのではないかとの恐怖心に駆られたのだ。

まるで内臓を素手で弄くられたかのような悍ましい感覚。

熱中症にかかったかのように目が眩み、視界が歪む。

「——ッ、ヘリアン様!？」

「だ、大丈夫だ……」

悍ましい感覚は一瞬で通り過ぎていったが、目眩と倦怠感だけは今も残り続けている。

考えてみれば文字通り「命」が一割近く奪われた状態なので体調不良なのはある種当然なのかもしれない。

しかし一割でこれなら、九割消費の〈秘奥〉を使おうものならどうなってしまうのか。ましてやそれが戦争中ならば、と想像して血の気が引いた。

……事前に検証しておいて正解だった。

「それよりも効果はどうだ。正常に発動しているのか？」

「……はい、問題なく発動しています。今の状態ならば、巨人状態の第五軍団長と殴り合っても勝つてみせます」

「そんな日が来ないことを祈ろう。軽く想像するだけでも周囲の被害が甚大すぎる。……とにかく、確かめたかった結果は得られた。もう解除していい」

〈秘奥〉は乱用できない。それが身に沁みてよく分かった。使い所を間違えれば自滅しかねない。

まだまだ調べたいことはあるが、死亡したせいで既に丸一日近くを無駄に消費している。悠長に検証をし続けられるような余裕はなかった。

ハーフェルフの国、ラテストウッドの集落のこともある。急に集落を飛び出してしまったので何らかのフォロワーをする必要があるだろう。下手に日にちを開ければ要らぬ疑惑を与えかねない。

二度と関^{かか}わらなければそのような心配は不要だが、未だこの世界について無知なアルキマイラにとつて彼等は重要な情報源だ。友好関係を保つ必要がある。

しかしながら不測の事態を考慮すると、行動を起こすのはデスペナルティが明ける五時間後以降にすべきだろう。

と、来れば――。

「リーヴェ。これから五時間後に各軍団長との謁見を執り行う。現場の手が離せない軍団長を除き、全軍団長に集まるよう伝達せよ。その後、お前は休息を取れ」

「ハッ、伝達について承知いたしました。しかし私の体調は特に問題ありませんので休息は不要です。このまま御身の守護に就かせていただきます」

「駄目だ。お前は昨日から働き通しだろう。何かと便利に使っている私が言うのもなんだが、少し休め。その間の護衛は近衛兵のみで構わん」

「しかし……」

「命令だ。五時間後のお前に万全の体調でいてもらわなければ私が困る」

少し卑^{ひきょう}怯^{けつ}な言い方だとは思ったが、働かせっぱなしなのは事実だ。この後も命を預けることにな
るのだから、彼女には休息を取ってもらわないとヘリアンとしても困る。

ややあつてから折れてくれたのか、リーヴェは「承知いたしました」と肅々と頭を下げた。最後に紅茶を入れ直した後、扉前で一札をして退出していく。

「さて……」

残り五時間。それなりに睡眠欲はあつたが、未だ国が落ち着いていない状況にあつては悠長に寝ている暇などない。

紅茶をサツと飲み干して、早速国内状況の確認作業を始める。

「データ分析ソフト…開錠。オプション。選択…ベースステータス…対象入力…直接選択」

〈拠点情報〉で首都の状況を閲覧すると、以前確認したときよりも国民の【幸福度】が低下していた。転移現象により国民がストレスを感じている状態が続いているためだろう。低下率は誤差のようなレベルではあるものの、

「このまま放置するわけにはいかないな……」

何か手を打たなければ緩々と【幸福度】は下がり続けるだろう。

そして【幸福度】減少が最終的に行き着く先は反乱だ。まだまだ安全圏でかなりの猶予があるものの、傷口が広がる前に対策を講じなければならぬ。

ベストな対策としてはストレスを感じる原因そのものの排除だが、今すぐ元の世界に帰れるわけでもなし、失った領土が今すぐ取り返せるわけでもない。むしろ元の場所に帰れるならヘリアンは即座にそうしている。

しかしそれが叶わない以上は次善の策を取るしかない。

こういう場合は演説イベントを行い、国民の不安を払拭はらいつくするのがベターな手段である。

「……うん？ 演説？」

ふと思う。

「タクティクス・クロニクル」での演説イベントでは、ある程度の〈鍵言語〉を口にして、後はそれなりな言葉を喋っていれば演説成功と判定されてイベント効果を得られた。

そしてゲームとは大抵攻略方やテンプレがあるので、使うべき〈鍵言語〉もある程度決まってくる。従って演説イベントでは毎回似たような〈鍵言語〉の組み合わせを使用して、後はヘリアンがその場のノリで適当な言葉をくつつけて喋っていただけだった。

しかし、この世界での演説ではそうもいかない。

〈鍵言語〉が意味をなさなかったことは、執務室でのレビューとの会話などで既に確認済みだ。

故に演説をするならば〈鍵言語〉を当てにせず、その全てを自身の力で遂行しなければならない。ヘリアン自身の言葉で、国民の感情を揺り動かすに足る演説を行わなければいけないということになる。

「いや、無理だろ……」

できる気がしない。だが今後、演説の機会が多かれ少なかれ巡ってくることは確実だ。

たとえば——考えたくもないが——戦争が行われる際には戦意高揚のための演説をしなければいけない。今この難題から目を背けたところで、問題の先送りにしかならないだろう。

「……けど、演説っていつてもどうすりゃいいんだよ……」

最低でも国民の感情に訴えかけ、賛意を得る必要がある。

それでいて魔物の王としての威厳を保たなければいけない。

叶うなら『この王にこそ付いていきたい』と国民に思わせられればベストだ。

言うまでもなくその難易度は極めて高い。だが、やらなければならぬ。そんな名演説の台本が自分の頭ですぐに浮かぶとは思えないが……。

「待てよ？ なにも自分で一から考える必要はないのか？」

既存の名演説ならば幾つか知っている。

漫画やアニメ由来の知識が始のだが、それでも心動かされた演説というものはあった。そして史実であるのが創作物であろうが、良いものは良いのだ。

少なくとも三崎司ヘリッアンが幾つかの演説シーンを見たときには心痺れるものがあったのは確かである。ならば、それを参考にするというのはそう悪くない手に思えた。

記憶を掘り返す。

聞く者の感情に訴えかけ。指導者としての威厳を示し。

それでいて『この人にこそ付いていきたい』と思わせられる名演説の数々を。

……。

……………。

……………。

……………ふむ。

「——国民よ、私は戦争が好きだ」

馬鹿かな？

馬鹿なのかな俺は？

どうしてよりもよってこれを選んだ。

名言であることは欠片も否定しないが戦争煽^{あほ}つてどうする。

「と言うか真っ先にコレを思い浮かべるとか……本気で頭大丈夫か、俺」

このゲームのプレイヤーである以上、大なり小なり戦争好きが殆どだ。それは否定しない。

しかしヘリアンのプレイスタイルとして。己の持てる力をぶつけ合い確かめ合うような戦争は大好物だが、弱国を一方的に殲滅したり他国を無差別に巻き込むような戦争はむしろ嫌いだった。

戦争にもルールはある、がヘリアンの信条なのである。

従って霸王になるつもりなどないヘリアンの方針としては、いかに名演説とはいえ戦争好きの少佐殿の名言など間違つても使えない。

確かに心が躍る素晴らしい演説ではあるのだが、国家滅亡待ったなしだ。

「他には……公国の総帥^{そうすい}とか？」

あえて言おう。ザコである。

……戦争を煽るという意味では少佐と一緒だ。

「総帥その二」

諸君らが愛してくれた王は死んだ。何故だ。

……俺が間抜けだったからとしか言いようがない。あるいは事故。

「赤くて三倍早い人」

私はこの場を借りてアルキマイラの遺志を継ぐ者として語りたい。

……既に国が減んじやつてるじゃないか。

「……………疲れてるのかな、俺」

あまりにチヨイスが酷すぎる。自分の馬鹿さ加減に頭を抱えた。これならばいつもやっていたような、その場のノリで作った即興演説のほうがまだマシな気がする。

「本気でそつちを検討すべきか……」

少し考え方を変えてみよう。

〈鍵言語〉を使つても意味がないと思うのではなく、〈鍵言語〉に縛られる必要がないと考えればいいのだ。

そう考えればかなり自由度は増す。

ゲーム時代は〈鍵言語〉以外の演説部分は大きくして意味がなかったが、ロールプレイをしている以上はそれなりに聞ける文面を考えて演説していた。しかし幾つかの〈鍵言語〉を入れて、なおかつ自然な文章にしようと思えば、自由度はその分狭まる。そこにヤキモキしたこともあるぐらいだ。

だが今は何の縛りもない。あくまで各々の名演説は参考程度に留め、そこから自分の言葉で文面を構成していけばいいだろう。それこそ民衆を前にした演説キャラになりきった気分で文章を考え抜けばそれなりの台本は作れるはずだ。

空想ならばお前の得意分野だろう、と自分に言い聞かせる。いつものロールプレイの延長線だと考えてみれば、ほんの少しだけ気が楽になった。

体調は万全とは言い難い。

精神状態もあまり優れない。

けれど頑張つて考えてみよう。

それが、アルキマイラの国王であるヘリアンに課せられた仕事なのだから。

5.

それから五時間。

演説を考えるヘリアンは、ああでもない、こうでもない、と頭を捻^{ひね}っていた。

はつきり言つて難しいなどというものではない。ただ演説をするのでさえ一介の学生でしかないヘリアンには荷が重たいというのに、聴衆は人間ではなく魔物だ。

日和見^{ひよりみ}な演説で心動かすことができるとは思えず、かといつて戦争を煽るような真似はヘリアンの望みではない。

どうにか演説文の原案ぐらいは形になったが『それで望み通りの反応を得られるのか』『アルキマイラの国民を纏め上げられるのか』と問われれば自信がない。更に改良が必要だろう。

そうこうしている間に予定していた五時間が経ちタイムアップとなった。

一旦^{いっぺん}演説の文面を考えるのを中断し、気持ちを謁見の方に切り替える。

なにせこれから自分は名立たる軍団長らに国の方針を伝えなければいけないのだ。到底他のことを考えながらこなせる作業ではない。

「——八大軍団長、揃そろいましてございます」

謁見の間。

豪華な椅子に腰掛けているヘリアンに対し、八体の魔物が頭を垂れる。

——第一軍団長。

各方面における国王補佐が主任務の少数精鋭部隊、別名「親衛軍」の長。

国王側近、並びに総括軍団長の任に就く【月狼】のリーヴェ。

——第二軍団長。

獣人族や騎士職を中心とした陸戦戦力を保有する、別名「獣騎士団」の長。

純白の全身鎧フルプレートアーマーで身を固めた獅子頭の騎士である【劍獅子】の balan。

——第三軍団長。

回復と援護のスペシャリストが集められた、別名「聖霊士団」の長。

腰まで届く黄金色の髪が特徴的な【神代の白妖精】のエルティナ。

——第四軍団長。

魔術分野に秀でた純後衛型の魔物により構成された、別名「魔導軍団」の長。

黒い肌と気の強そうな吊り目が印象深い【異端の黒妖精】のセレス。

——第五軍団長。

圧倒的な打撃力を誇る純前衛型の鬼族や巨人族が集う、別名「超重鬼団」の長。

見上げるほどに大柄な筋骨隆々の偉丈夫である【始祖巨人】のガルデイ。

——第六軍団長。

諜報活動や妨害工作等を一手に引き受ける魔族中心の軍、別名「妖魔軍団」の長。

深い瞳と妖艶な出で立ちが目を惹く【夢魔女帝】のカミーラ。

——第七軍団長。

製造分野に特化した多くの職人を抱える、別名「機工戦団」の長。

子供と見紛う矮軀ながら決戦級の切り札でもある【混合種】のロビン。

——第八軍団長。

竜族のみで構成された空戦戦力にして最大火力、別名「天竜軍団」の長。

燃えるような赤髪の際に鋭い眼光を覗かせる【黄昏竜】のノガルド。

アルキマイラの軍勢の頂点、その八角が勢揃いした。

現場の手が離せない軍団長は来ないでいいとの旨は伝えたはずだが、八人全員が揃っているのは果たして良いことなのか悪いことなのか。

治安維持の指揮を任せている第二軍団長や第五軍団長、それに首都結界の展開を担当している第四軍団長あたりは現場に残るだろうと予想していたが、彼等がいなくとも現場が回るレベルまで落ち着いたと見てもいいのだろうか。

王に呼ばれたからといって無理して現場を離れているようだと困るのだが……まあ今更だ。今ここで追及するよりも手早く謁見を終えろとしよう。

「ご苦労。面を上げよ」

王様らしく、と頭の中で呪文のように繰り返しながら鷹揚に告げた。王の許しの下、顔を上げた八人の軍団長の視線がヘリアンを捉える。

改めて思えば大学でのスピーチ練習でもこのような熱烈な視線を浴びたことはなかった。量はともかく質と熱量が比ではない。緊張感に息が詰まりそうだ。ゴクリと唾を飲んで切り出す。

「集まってもらったのは他でもない。現在の状況と今後の方針についてだ」

まずは今現在の状況。

国外の探索で分かった幾つかの事柄の再確認だ。

「まず、ここは我々が知る大陸ではない。国外での探索で他勢力のエルフ、及びハーフェルフと接触したことについてはリーヴェから聞いているな？ 我々は彼らから幾つかの歴史や周囲の情勢についての情報を得たがどれもこれも私が知らないものばかりだった。念のために各種〈仮想窓〉でも確認したが、やはり該当する情報はなかった。更に私の〈地図〉で見知った土地が確認できなかったことから、ここが我々の大陸とは別の場所なのは明らかと言っている」

正しくは大陸どこか世界までも異なる可能性が非常に高いが、あえて言及しない。わざわざ問題を大きく見せて混乱を招くこともないだろう。

要は孤立無援の状態であり、慎重な行動が求められるということが伝わればそれでいい。

しかし軍団長らはどこか困惑したような素振りを見せた。比較的落ち着きのない第七軍団長などは、しきりに他の軍団長の顔を窺っている。

……何かおかしなことを口にしてしまったのだろうか。

「どうした。何か聞きたいことがあるのか？ 今は情報を共有すべき場だ、不明な点があるのなら言えば。遠慮は要らん」

王への発言を許された軍団長らが、跪きながら互いに顔を見合わせる。

ややあって総括軍団長が代表として口を開いた。

「恐れながら申し上げます。〈仮想窓〉や〈地図〉とは何でしょうか？」

予想外の質問だった。ヘリアンは当然のように口にしたものの、彼らには〈仮想窓〉や〈地図〉という概念がないのだろうか。

「〈仮想窓〉というのは、私にしか見えない……まあ、画面のようなものだ。演説の時には、映像投影玉を使って空中に映像を表示しているだろうか？ あのように投影された「画面」を使い、私は様々な機能を使用することが出来る。〈地図〉とは〈仮想窓〉から参照できる情報の一つで、とある特別な地図のことだ。その地図はお前たちが集めた情報を元に随時更新されていく。そうして判明した地理情報や敵味方の位置情報、それに現在地などを正確に把握できるのだ」

おお……！ と、ざわめきの声が謁見の間に響いた。

心なしか、ヘリアンを見る軍団長らの視線に一際熱が籠った気がする。

……プレイヤーの基本能力なのでそんな目を向けられても困るんだが。

というか、探索時に自分が敵の位置を把握していた件については、どう解釈されていたのだろう。まさかリーヴェの嗅覚やエルティナの聴覚並みに優れた感覚器官を備えているとも思われていたのだろうか。そんな真似は人間であるヘリアンには絶対に不可能なのだが。

「……と、とにかくだ。私がその〈地図〉を確認したところ、首都以外の地理情報が全く得られな

かった。先日までは大陸全体の地理情報を詳細に把握できていたはずの〈地図〉が、一瞬で白紙に戻ったというわけだ。我々のいた大陸のどこかにいるならばこんな状態にはなり得ない。これこそが、全く別のどこかへ転移されたという事実の証明だ」

「なるほど、承知いたしました。幾つかの力をお持ちとは存じていましたが、その秘術の一端を我々に公開いただけるとは……光栄です」

「……うむ」

え、どういうことだ。

〈仮想窓〉や〈地図〉だけではなく、王の能力は誰にも説明していないことになっているのだろうか。少なくともステータス強化や〈秘奥〉については知っていたはずだが……。

（もしかして……王の能力はどれも説明されたことがないから知らないってことか？）

ステータス強化や〈秘奥〉は魔物たちに直接影響を及ぼすものであり、彼らは体験としてその存在を知ることができたが、魔物に影響を及ぼさない能力については知らない、ということなのかもしれない。

ゲーム時代、「タクティクス・クロニクル」にて仮想窓や離脱、通信などの基本機能について魔物たちに説明したことはない。というか説明するはずもない。だから〈地図〉についても、聞いたことのない未知の能力だったということなら納得できる。

つまるところ、今初めて王の知られざる能力が軍団長らに明らかにされたということなのだろう。どうやら八大軍団長の中のヘリアン像には秘密主義者の面があるらしい。

「まあそれはいい。まず、ここが我々の知る大地ではないということについては理解してもらえた

と思う。次にハーフェルフの国……ラテストウッドから得られた情報についてだ」

ノーブルウッドやラテストウッドの種族構成。両国の関係と状況。それに判明した限りの歴史や、深淵森アビスと呼ばれる森の伝承など、判明した主要な情報について説明を行った。

「我々は彼らから様々な情報を得た。しかしそれは十分ではない。何より、我々に抵抗しうる勢力が周囲に存在するのかどうか、まるで情報が足りていない状態だ」

ラテストウッドについてはアルキマイラの現有戦力でどうとでもなる見通しが立ったが、ノーブルウッドについてはどの程度の戦力を保有しているのか全く分かっていない。

また他の勢力の存在についてはエルフ族の他の国や人間の都市があることが判明しているが、それらについては接触すらできておらず規模どころか位置すらも不明な状況にある。

「これは由々しき事態だ。我々の立ち位置と長期的方針を定めるためには、更なる情報が必要であることは明確な事実である」

状況を説明しながら各団長の反応を見る。

演説の練習を兼ねてあえて演出気味な喋り方をしたが、八大軍団長らの反応は今のところ悪くない。悪くないと言っても、訝いぶかしげな視線を向けられていない。程度のことしか分からないが、ここまでは上手うまく話せていると思う。そう思いたい。

「では今後の短期的方針についてだ。とはいえやることは先日とほぼ変わらない。国の防備を固めつつ、周囲の勢力に我々の存在を感知させることなく情報収集を進める。ここまではよいな？」

否定の言葉は返ってこない。

八大軍団長らは沈黙したまま首肯する。

「よし。ではその上での、軍団長及び各軍団の運用についてだが……第二軍団長」

「ハッ！」

「治安について状況はどうだ？ 今のところ落ち着いていると報告は受けているが、お前の口から見解を聞きたい」

「ハッ。先日 of 反乱の一件により一時的な混乱はあったものの、反乱鎮圧とその後の顛末の報を受け、現在は落ち着きを取り戻してございます。むしろ反逆者どもの末路がほどよい見せしめとなつたためか、鎮圧後は小競り合いもぱったりとなくなりました。また、主上が城の〈魔法の貯蔵庫〉を開放されたことにより食糧問題も起きておらず、当面の生活は保証されておりますので、民草が今すぐ問題を起こすことはないでしょう」

〈魔法の貯蔵庫〉とは〈魔法の小袋〉と同様の、亜空間収納能力を持つ魔法具のことである。

城の〈魔法の貯蔵庫〉には一年間籠城が可能な食糧を放り込んでおり、その一部を国民に開放したのだ。

〈魔法の貯蔵庫〉は設置型アイテムなので動かせないという欠点はあるが、その収納力は〈魔法の小袋〉を遥かに凌駕している。また城のそれはアルキマイラの技術の粋を尽くして製造した代物であり、保存の技術も当然付与されている。従って、当面は中身が腐る心配をする必要もない。何かの時のために、と備えておいた食糧備蓄が役に立った。

「ただ、一方で国民や軍のストレスが少々気がかりですな。我が軍団の部下の様子を見るに『自分たちの力では解決不能な重大問題を抱えている』という状況下にあることがストレスの元となっているようです。これまで我が国が直面した危機といえ、己の力で切り開くべきものばかりでした

もので。その点で言えば今回の転移問題は勝手に違いますな」

「……なるほどな」

魔物の本質は力の信奉者だ。アルキマイラの国民といえど、そこは変わらない。

ただその本質の上にアルキマイラの規律ルールといったものが被かぶさっており、その結果弱肉強食の理とは一線を画するモラルが生まれている。

そこは先ほどのリーヴェとの会話でも確かめられたことではあるのだが、自分たちの力でどうにもならない状況に陥っているという事実は魔物である以上は多かれ少なかれストレスになるということなのだろう。問題解決への道筋がはっきりしているなら結果は異なるのだろうが、状況打開のための明確な方針を国が打ち出せていない状況ならば無理もない。

かつて日本が大災害に遭ったときも似たようなことが起きたと聞く。事態解決の見通しが立たず、自分たちの力ではどうにもならない状況に長期間晒されると、ストレスというものには加速度的に増加する。事態解決が長引くほどにこの問題は深刻さを増すだろう。

「後は……住居の問題が発生していますな。元から首都に住んでいる国民はともかくとして、建国祝賀祭のために首都に参集した者たちには住むべき場所がありませんね」

課報担当である第六軍団からも同様の報告を受けていた。

一般の宿屋は既に満室で、元からある軍用の宿営地についても許容量を大幅に超えている。

「泊まれる場所がない者たちは、交代制で夜間見回り等の任に就き仮眠を取るに留めましたが、これも多少ながらストレスの原因になっております。無論、我らアルキマイラの魔物であればその気になれば数ヶ月単位での野宿も可能ですが、他にもストレスを感じる問題が多い現状を鑑かんがみるに、

何らかの手を打つ必要があるかと……」

「ふむ。他には？」

「ありませぬ。吾輩わがはの見解は以上です」

宿営地の問題については手が打てる。

転移そのものの問題についてすぐに解決できない以上、他のストレス要因はできるだけ取り除いておきたいというのはバランと同意見だ。

仮説宿営地を建設すれば当场しのぎにはなるが、誰に任せるか……。

「ガルデイ」

「……ハッ」

第五軍団長のガルデイが頭を垂れて返答する。

その声には勢いがなく、気落ちしているように見受けられた。

「先日の反乱鎮圧ではご苦労だった」

まずはねぎらいの言葉を贈る。細かいことかもしれないが上司と部下の円滑なコミュニケーションには大切なこと、らしい。濫蓄うんちく好きの教授がそう言っていた。

「……とんでもねえ。むしろ、むざむざと総大将を死なせちまいやした。言い訳の余地もありやせん。

厳罰を覚悟しとります」

「そうか。では罰を下す」

あえて淡々とした態度を保つ。唇を舌で軽く濡らしてから、一息に告げた。

「第五軍団長並びに第五軍団は、第七軍団長の指揮の下、仮説宿泊地の建設に着手せよ。治安にお

ける問題が発生した際には臨時で第二軍団の指揮下に入り、第二軍団長の指示に従うこととする。……一時的とはいえ他の軍団長の指揮下に入ることについては言いたいことがあるだろうが、これを罰として命ずる。よいな？」

「なっ……」

驚いたようにガルデイが顔を跳ね上げた。

……やばい。罰が厳しすぎたか。

あの出来事はどうしようもなかった。対処が非常に難しい問題であることについては理解している。だが信賞必罰の姿勢は王として必要だと思っただけで罰を命じた。一方で理不尽な罰にならないように、比較的軽い内容を考えてつもりだ。

だと言うのにガルテイのこの反応は何だ。

あまりにも予想外の言葉を叩きつけられたかのような顔をしている。もしかすると、軍団長であるにもかかわらず国王側近以外の軍団長の指揮下に入れというのは、魔物のプライド的に屈辱にすぎるとも思えない。

前言撤回したい思いに駆られたが、一度通告してしまった以上は押し通すしかないだろう。吐いた唾は飲めないのだ。いかにガルデイの顔がマフィアのボスより怖かろうと、怖気づいた姿など見せられない。

あくまで王様らしく、そう、王様らしく……。

「どうした、返事がないぞ？ まさか不服とでも言いたいのか？」

……違うそうじゃない。

まずい。やばい。明らかに高圧的すぎた。王様らしさを心がけたもののこれでは完全に脅した。じわりと背中に嫌な汗が浮かび始める。

「……お願いだから今だけは黙って従ってくれ頼む後で必ずなんかフォローするから……！」
ヘリアンがそう祈り始めた頃、ガルデイは驚愕の表情をそのままに口を開いた。

「いや、不服なんてことは……けど、本当にそんなことでいいんですかい？」

「……そんなことだと？」

ヘリアンは目を細めて聞き返す。

つまりは思っていたほどの罰ではなく、むしろ温情措置と受け取ってくれたということか。不服に思われていると感じたのは自分の勘違いだったらしい。

……よかった。

思わず胸を撫で下ろしそうになったが、軍団長に見られていることを思い出し踏み留まる。

しかし、ヘリアンの返答をどう受け取ったのか、ガルデイは厳しい顔にダラダラと脂汗を流し始めた。
……こ、今度はなんだ？

「い、いや、失言だった！ すまねえ総大将、そんなことなんて言ったのは取り消す！ なにも国民や宿营地の問題を軽く見てるわけじゃねえんだ！」

慌てふためきながらガルデイは再び頭を垂れた。

何やら勘違いされている気がするが……罰として宿营地建設に回ってくれるならもうそれでいい。
「……分かったなら構わん。では次に、リーヴェ、エルティナ」

呼ばれた二人の女性軍団長が面を上げる。両名の顔には厳しい表情がありありと浮かんでいた。

罰については覚悟済みということらしい。

「レッドオーガの固有能力は予測不可能のものであった。例外中の例外であった、と私は認識している。だがお前たちは護衛の任を帯びており、そして護衛対象が死亡したのもまた事実だ。現在の状況では謹慎等の罰を与えるわけにはいかないが……沙汰については後日下す。それまで己の任を全力で果たせ」

「ハッ」

二人は厳かに是の意を返す。

ガルデイにはちよいどいい仕事が続がっていたために罰を兼ねて命じたが、この二人に対しては具体的な罰が何も思い浮かばなかった。軍団長級に対する罰と言えば、指揮権剝奪や謹慎、降格や場合によっては死罪もあるが、現在の状況ではいずれも適用するわけにはいかない。

この危機の只中で軍団長二名分の戦力喪失など到底容認できない以上、この問題は先延ばしにするしかないだろう。

「次だ。他の軍団で何か大きな変化、あるいは問題が起きたところはあるか？」

八大軍団長は沈黙する。しばし待ったが誰も発言する気配がない。

ならば次だ。

ボロが出ないうちに手早く話を進めなければいけない。

「では今後の八大軍団長の役割について告げる。とは言うものの、第六軍団長以外については基本的に今まで通りだ。私は再びラテストウッドに向かうので、リーヴェとエルティナには引き続き私の護衛を命ずる」

「……ヘリアン様。恐れながら、それは」

「聞け。今現在、我が国にとってラテストウッドは唯一にして重要な情報源だ。そして旅人に扮して接触し、かつ交渉については私が一手に受け持っていた以上、再びラテストウッドを訪れるならば私の存在は必須だ。違うか？」

リーヴェとエルティナは悔しそうに俯いた。言いたいことは解る。戦闘能力のない足手まといな王は玉座でじっとしておいて欲しい、といったところだろう。

だが、何もせず玉座でふんぞり返って各軍団長の報告を待っていることなど不可能だ。国の命運を左右しかねない折衝役を自分以外の誰かに任せる勇氣はまだない。それに旅人としてラテストウッドに向かうのなら自分の存在が必須と言ったのも嘘ではない。紛れもない事実だ。

……レイファやリリファたちのことも気にかかる。

「それと——カミーラ」

「ハッ」

ナイトメアクイーンの第六軍団長が、真紅の瞳でジッと見つめてきた。

「お前も私と共にラテストウッドに来てもらう。旅の途中ではぐれた仲間という設定にするが、そのあたりの細かい話は後ほど説明する。そしてお前の役割についてだが……私の護衛に注力する必要はない」

「……と、申されると？」

「お前にはラテストウッドの集落における、ありとあらゆる情報の収集を命じる。主に住民を通じた情報収集活動となるだろう」

「なるほど。つまり妾の専売特許と」

艶やかな笑みを浮かべ、カミーラは了承の意を告げる。

「頼むぞ。言うなればお前はアルキマイラの耳だ。こと情報収集の分野についてお前ほど頼りになる者はいない。十分にその能力を発揮し、我が国の耳としての役目を果たしてくれることを期待する」

告げると、カミーラはブルリと身体を震わせ、陶然とした表情を浮かべた。そして肅々と頭を垂れながら「必ずや、そのご期待に応えましょうぞ」と厳かな面持ちで諸の意を告げる。

ヘリアンがその返答に満足しながら頷いていると、他の軍団長らがジッと熱視線を送ってきた。

……なんだ？

何かを期待するようなその視線。他の七人全員からの視線が集中し、若干気圧された。

「フン」

カミーラが他の軍団長のそんな様子を見て、まるで自慢でもするかのように形の良い鼻を鳴らす。

すると、他の軍団長らの視線に籠められている熱量が増した。後は二言三言告げて解散でいいかと思っていたが、七対の瞳に射抜かれたこの状況ではそうもいかない。

何を期待されているのか……としはし考え、もしやと思ひ至る。

「……リーヴェ。国王側近として私と同じ時間を共有してきたお前は、アルキマイラの瞳だ。私と同じ時を刻み、同じモノを見届けてきたお前は、最も私の考えを理解していると思っている。これからもアルキマイラの瞳として、その全てを私と共に見届けてくれることを願っている」

告げると、熱視線が六つに減った。

どうやらこれで正解だったらしい。

内心で慌てながらもフルに頭を働かせ、それぞれの軍団長に相応しい比喩表現を脳裏で検索する。「バラン。あらゆる武装を使いこなし、数多の敵を屠るお前はアルキマイラの爪だ。今後、何が起ることも分からん。有事の際にはその爪が十全に振るわれるものと期待する。

エルティナ。治療や支援の役割は勿論のこと、内政の中核を担い他国へとその威を知らしめるお前はまさにアルキマイラの鬣だ。今後の他国との交渉でも、その美しき鬣は遺憾なく威を示してくれることだろう。

セレス。飽くなき探究心で真理を追い求め、その果てに魔導を窮めたお前はアルキマイラの舌だ。こと広域殲滅においてお前の右に出るものはいない。また、研究や解析といった知的分野についても大いに頼りにしている」

喋りながら脳内で比喩を探す。

感慨深げな軍団長たちの様子から、言い淀むことも下手な比喩も許されることがよく理解できた。懸命に頭を働かせる。

ここまで使ったのは耳と瞳と爪と鬣と舌だ。

咄嗟のことだったが、鬣は我ながらよく思いついたものだと思う。

残り三人。残された部位は……。

「ガルデイ。誰よりも突き抜けた剛力と巨体を誇るお前はアルキマイラの腕だ。陣地構築や大規模開拓等ではお前の軍団の力は必須であり、またその豪腕の前にはどんなに堅牢な城塞であろうと砕けぬものはないと私は信じている。

ロビン。超大国たる我が国の巨軀きよくを、数多の道具により支えるお前たちはまさにアルキマイラの脚だ。他の追隨を許さない最先端技術で生み出された武具は、我が軍に更なる力を与えてくれている。また、お前たちの存在なくして民の豊かな生活が成り立たないことを、私は誰よりも知っている。

ノガルド。名立たる竜を束ねたば、空という戦場を支配するお前はアルキマイラの翼だ。どのような敵を相手にしようとも、そのたくま尽くを殲滅する戦闘力は絶大の一言に尽きる。これからも我が国の最大火力として、その力を遺憾なく發揮してくれ」

なんとか言い淀むこともなく言い切った。

軍団番号順に、瞳、爪、鬣、舌、腕、耳、脚、翼。

付け加えるならば国民が軀で、自分が頭といったところだろうか。

期せずして一匹の獣にたとえることになったが、それぞれの軍団の役割に応じた部位を連想できたはずだ。熱視線がなくなったのは各々がきちんと納得してくれたからだと信じたい。

とにかく、これで現在の状況の情報共有と今後の方針と各軍団の当面の仕事については割り振れた。もう十分だろう。これで謁見を終わりにする。終わりにしたい。頼むからもう終わらせてくれ。「では行動を開始しろ。我が国は未だ危機の只中にある。それを踏まえた上で、各々が役割をしっかりとこなしてくれるものと期待する。以上だ」

「——ハッ！」

八つの声が唱和で響く。

その音を背に、ヘリアンは厳かな足取りを意識しながら謁見の間を立ち去った。

……余談だが、カミーラがちよつとしよんぼりしたような空気を醸かし出だしている気がした。

王が謁見の間を去った。

しかし謁見の間に残る軍団長らは、前回同様しばしその場に留まり続ける。

そして王の足音が完全に消え去ったのを確認することにより、ようやく緊張感から解放された軍団長らは深い息を吐いた。そして、

「ひゃっほーい！ 王様直々の称号ゲット——！」

まず真つ先に、最も小さな身体をした軍団長が飛び跳ねて歓喜の声を上げた。

小人とドワーフの血を引く、混合種族のロピンだ。

第七軍団長の椅子を与えられたロピンは、外見的にはまるで子供である。身長が一二〇センチ程度しかなく、子供服のようなオーバーオールがよく似合ってしまった。髭はなく、外見的には殆ど小人ヘリリッヅそのものだが、ドワーフの血を引いているとあってモノ造りや機械には滅法強い。

そんなちんまい軍団長であるロピンは王の前でこそ頑張つて大人しくしているものの、普段の振る舞いは見た目相応であることが多い。種族柄、いたずら好きで陽気な元気印なのだ。

しかし喜んでいるのが彼だけかといえそうではない。

前回の謁見時にはいなかった軍団長メンバについては久々の謁見で気疲れもあっただろうが、それを上回る満足感に浸っていた。

「フム、翼か。悪くない」

「腕たあ分かってんじゃねえか。さすが総大将」

「アタシは舌か……いいわね。カミーラの真似じゃないけど舌に紋章刻もつかないかな」

「ボクんとこなんて脚だもんねーだ！ ボクらがいなきゃ立つことすらできないってことだからね、君たち！ 縁の下の力持ち、第七軍団をどーぞよろしくっ！」

久々の拜謁の榮に預かった四人が、万魔の王から賜った称号についてガヤガヤと感想を述べ合う。癖が強い、とバランに評された彼らだが、同僚意識ぐらいはそこそこ真っ当に持ち合わせており、このような話をする程度には友好的な関係を結んでいた。そして、始まりの三体、もまた声にこそ出さないものの、各々が得た称号を思い返しながら感慨に浸っている様子だった。

しかし、残りの一人といえは……。

「よくも……よくも便乗してくれおつたなあああ……ッ！」

おどろおどろしい声で恨み言を呟きながら瘴気を発していた。

その美貌から発せられたとは思えないカミーラの声に、他の軍団長は誰ともなく視線をそらす。

「ちよ、ちよっとカミーラ。瘴気漏れてる、瘴気。落ち着いてっば」

「これが落ち着いていられるとも思うてか——ッ!!」

カミーラのあまりに形相に、声をかけた黒い肌の女性——最後の女性軍団長である第四軍団長のセレスが後退した。

彼女はエルティナ同様、エルフに属する配下だ。ただしエルティナが支援系に優れた白エルフ系統であるのに対し、第四軍団長の彼女は攻性魔術に秀でた黒エルフ系統の種族である。

また吊り目が印象的なセレスは、窮屈そうなボンデージ風の服にメリハリの利いた身体を押し込

めていることもあり、見た目の印象はいわゆるダークエルフに近い。事実、転生進化を繰り返す以前のセレスは【黒妖精】だったこともある。

普段は気の強い彼女だが、今回ばかりはカミーラに対して多少の負い目もあり、やや及び腰ことなっていた。

「け、けどアタシら、誰一人として陛下にねだったりはしてないからね？」

「何を白々しい！ 視線で訴えておつたろうに!? ヌシらが余計なことをしなければ、妾だけが称号を貰っていたものを……！」

今にも齒軋はぎしりしそうな形相でカミーラがセレスを睨む。

色気のある女性が美貌を歪めて睨んでくる絵面というものは、相当に迫力があつた。

「あー……。でもさ、仮にアタシらのうちの誰か一人だけが称号貰つてたとして……アンタそれを脇わきから見て黙って引き下されるの？」

「有り得ぬ!!」

「ほら。そうなるでしょ？」

「ぐぬぬ……ッ！」

理屈は解る。だけど納得したくない。

そんな複雑な感情が渦巻くカミーラは、ただただ齒嚙みするしかなかった。

「あらあらまあまあ。喧嘩けんかはいけませんよ、カミーラ、セレス」

そこにはわほわとした笑顔で仲裁に入るのは、いつも通りのエルティナだ。

癖の強い軍団長同士が揃つても本格的な衝突が起きずに済むのは、彼女あつてのことであるとい

うのが八大軍団長の共通認識だ。

そのため、エルティナに止められたらそれ以上は踏み込まないでおくというルールが、八大軍団長の中で暗黙の了解として存在している。

「ぬう……まあよい。これから妾は我が君と一緒にの仕事だから。ヌシらは首都で仕事に勤しみつつ、妾の活躍を遠くから見守っておることじゃな」

カミーラはせめてもの意趣返しを口にしてから矛を収めた。

「つうか、総大将はまた自分から体張るんだな。いつも最前線に出張るようなお人だから今更だけどよ、総大将は自分に替えが利かねえってことをイマイチ分かってねえんじゃねえか？」

「でも王様らしいっちゃ王様らしいよねー。当たり前のことみたいに言うあたりが特に。ただでさえ危険な役回りなのにさ。なんていうか、さすが王様って感じ？」

「フン。王の悪い癖だ」

鼻を鳴らして呟くのは第八軍団長のノガルドだ。

種族が【黄昏竜】である彼の本来の姿は、全長四十メートルを超える西洋竜だ。

しかし現在は人化しており、長い赤髪に鋭い眼光を隠す、気難しそうな男の容姿をしていた。
軽装鎧サキコトに身を包んだノガルドは腕を組んだまま、眉まゆを顰ひそめて佇ただすんでいる。

「ノガルド。お主は主上に対して文句があるというのか」

そんなノガルドに対し、真っ先に反応したのがバランだ。

「我は文句など口にしておらん。悪い癖だと述べたまでだ」

「それは文句を言ったも同然であろう。少なくとも忠誠を誓う主上に対する言葉ではない」

「我は間違ったことは言っていない。それとも、貴様はアレが良い癖だとしても言いたいのか？　これで王の身に何かあればどうする」

「両者の視線が剣呑な空気を帯びる。

ノガルドは人物特徴として【傲慢】を保持しているが、これはバランの【規律】とは相性が悪い。しかもバランは【頑固】も有しており、両者は衝突しやすい傾向にあった。

更に、ノガルドはプライドが極めて高い。ただでさえ傲岸不遜の傾向がある竜族、その頂点に立つ存在だ。肩が当たった、という理由だけで味方の巨人族を半殺しにしたこともある。

意見がぶつかったところで彼が自分から折れることはない。

「まあまあ二人とも、今は言い争っている場合ではありませんよ」

険悪になりかけた雰囲気エルティナが遮る。

セレスもこれ以上のゴタゴタは御免だと言わんばかりに援護射撃を行う。

「エルの言う通りよ。陛下からそれぞれの仕事をきっちりこなすよう釘刺されたの、聞いてなかったわけでもないでしょ？　仕事のすり合わせをするならともかく、くだらない言い合いで時間を無駄にしているのが陛下の耳に入ったらタタじゃ済まないわよ」

「む……確かにお主らの言うとおりだ」

「……一理あることは認めんでもない」

ようやく場が落ち着いたところで、黙って様子を見守っていたリーヴェがパンパンと柏手を打って注目を集めた。

「ならば馬鹿騒ぎはこれで終わりだ。総括軍団長として、速やかに各自の任に就くよう要請する。

——エルティナ、カミーラ。私たちもそろそろ出立の支度したくに移るぞ」

言うなり、リーヴェは謁見の間から足早に退出していく。エルティナとカミーラもその後が続いた。

「んじゃ、俺様も準備すつか」

「フン。今度は失態を晒すなよ」

「うっせえなノガルド！　ンなこたあ言われなくても分かかってんだよ！」

「兩名、言った傍いなかから諍いざかい事か？　特にガルディ、お主は治安維持側であろうに」

「チツ……。おいロビン！　後で手下連れて現場行くから、受け入れ準備頼まあ！」

「ほいほい。んじゃ後でね」

続いて、軍団長の男性陣もゾロゾロと謁見の間を出ていく。

残されたのは、一人のとある女性軍団長だけだ。

「あれ？　そういえば、女性陣で陛下に置いてかれてるのってアタシだけ……？」

唐突にその事実を意識してしまい、謁見の間を出ていこうとしていたセレスの足が止まった。

褐色の頬に、たらりと一筋の汗が伝い落ちる。

「……て、適材適所の結果よね？　リーヴェとエルは旅人一行の設定だからメンバー入り確定として、カミーラは情報収集で必要だったから追加で選ばれただけだし……別にアタシが陛下に避けられてるからじゃない……はず」

うん、そのはずだ。セレスは内心で再度肯定し一つ頷く。

しかし理性としてはそれで納得できたが、どこことなくモヤモヤとした感情が胸の奥に残っていた。

「……し、仕事しよう」

不安を振り払うように、彼女はいそいそと自軍の陣地に向かった。

第五章 選択と決断

三崎司ヘリアンにとって「タクテイクス・クロニクル」は、己おのれの夢や浪漫ろまんを叶える理想的な箱庭だった。キャラクターで言うなら第八軍団長がいい例だろう。何故なぜなら竜ドラゴンは男の浪漫だからだ。異論は認めないし異論などあろうはずもない。竜に浪漫を感じない者など男ではないのだ。

——だから仲間にした。

数多あまたの障害を乗り越え、理不尽な試練に打ち勝ち、遂に竜帝を仲間にした際にはワールドカップでゴールを決めたストライカー並みのガッツポーズをかました。

また当初はそのようなつもりはなかったが第七軍団長も浪漫の塊と化した。何故なら決戦兵器は男の浪漫だからだ。最終とか決戦とか機動兵器だとかの字面に浪漫を感じない者など男ではない。

——だから造った。

古代遺跡を発掘し、湯水のように資金を投じ、遂にソレが完成した時にはWBCで決勝打を放ったメジャーリーガーの心境で力の限りに絶叫した。

そして第六軍団長。

当時冷戦状態にあったアルクマイラには、情報戦や絡め手から、妨害工作等に関する戦力を必要としていた。しかしながら適性の高い配下がおらず新規作成か捕獲けんとうを検討していたその折、運営チームの広報によるとある告知をヘリアンは目にする。

レアガチャに新規の魔物が追加されたとの告知だった。そしてその中に【淫魔】なる種族が存在した。

淫魔とは異性の夢の中に現れて所謂大人のアレをするという悪魔のことである。

当時思春期真っ只中だったヘリアンはどうしようもなく男であった。

——つまりは、そういうことだった。

「いやしかし、我が君の供をするのは実に久しいのう。最後に供をさせてもらうのは、果たしていつのことだったじやろうか」

「む……さて、な」

至近距離。肩が触れ合うような間合いで第六軍団長のカミーラが話しかけてくる。

カミーラを加えたヘリアンたち扮する旅人一行は、再び集落を目指して森を歩いている最中だ。

しかしながらその道中、すぐ隣を歩くカミーラの存在により、ヘリアンの精神状態は正常とは言い難いものになっていた。

彼女は謁見時に身に着けていた扇情的な服装から一転、実用性重視の探索用装備に着替えている。装備のランクはかなり落ちるものの、いつもの服装では上品すぎて旅人という設定が罷り通らな
いがための処置だ。

しかし、それで実際に目立たなくなったかといえは断じて否である。なにせ無骨で地味な装備を以ってしてもその身から漂う色気を隠しきれしていない。一行は集落へ向けて歩みを進めているが、歩く度に揺れる彼女の特定位がヘリアンの精神を容赦なく乱し続けている。

「妾は滅多に首都まで呼ばれぬからの。ましてや我が君とこうして連れ添って歩いたことなど殆ど

記憶にない。なにやら新鮮な気分じゃ」

「そ、そうか」

彼女もまた軍団長である以上、幾度となく転生進化を繰り返して、高位種族まで育て上げてきた。

元は【淫魔】だった彼女は夢魔系最高位の【夢魔女帝】に至り、戦闘力こそ他の軍団長に一步及ばないもののこと情報戦や妨害工作について右に出る者はいない存在と化していた。そして情報戦の一環として、敵兵士を籠絡して情報を手にするような作戦にも従事していたりする。

そんな色気溢れる女性であるところのカミィラは、ごくごく自然な仕草でヘリアンの左腕に自らの腕を絡ませた。それも片手だけでなく両手で纏り付くようにしてだ。一見歩きづらそうに見えるのだがカミィラはそんな素振りなど一切見せず、何も問題などないように歩みを進める。

問題があるのは、むしろヘリアン側だった。

(感じるな、考える……！)

ヘリアンは自らにそう言い聞かせるが、効果はさほどもない。

何が問題かと言えば当たるのだ、腕に。それも密着という表現で。何が当たっているのかは口が裂けても言えないが、その密着具合はびったりという表現がしつくり来る。

それはふんわりと柔らかく、ヘリアンの想像していた感触を遥かに凌駕した。

ゲーム時代では触ることが許されなかった双丘の片割れが腕に押し付けられたことによりむにゅりと形を変え、時に弾むような動きをみせるどころかあまつさえほんのりと温もりまで感じられるときではもうゴメンナサイ許してくださいでいい心だったんですマジで勘弁してください。

「どうかされたか、我が君？」

「いや。なんでもないとも」

ヘリアンは心中の動揺を全力で隠蔽する。

バレてはいけない。絶対だ。

万が一悟られたら死ぬ。威厳が。

「……おい、カミーラ。さつきから黙って見ていれば、偽装のためとはいえいくらなんでもヘリアン様に馴れ馴れしすぎるぞ」

さすがに見咎めたのか、仕えるべき主にベタバタと絡むカミーラに対しリーヴェは苦言を口にした。そしてヘリアンは内心でリーヴェにエールを送る。全力で。

「何を言う。妾は己にできる最大限の努力をしておるまでよ。なにせ妾は、危険が満ちる深淵森で単身はぐれたか弱い仲間という設定じゃ。ならばようやく再会できた仲間の存在を少しでも感じられるよう、こうして肉体的接触を積極的に求める様は至極当然のことではないか」

「だが、なにもヘリアン様に——」

「護衛である設定のヌシやエルティナに縋っている姿の方が自然とでも言いたいのか？ それこそ愚かぞ。男女の機微を分かっておらん。長く森を彷徨っていた女が縋り付く相手として相応しいのは、唯一の男である我が君以外考えられぬ。専門家である妾が言うのだから間違いない」

「ならば、集落に近付いてからでも——」

「素人考えじゃな。こういうものは事前の雰囲気作りが肝要よ。ここから演技を始める、と線を区切ってどうにかなるものではない。それは些細な違和感となって見る者の無意識に潜み、時として不都合な作用を働かせる。国の命運がかかる王命である以上妾はそのような可能性は潰せるだけ潰

し、打てる手は全て打つつもりじゃ。それともまさか妾に手抜きをしろとも言うのか？」

「そのようなことは——」

「だったら黙っておれ。雰囲気作りの邪魔じゃ」

完封だった。完敗だった。最後まで台詞を言い切ることもすらできなかった。反論を封じられたリーヴェは歯嚙みしながらも渋々引き下がる。

リーヴェとてこの再びの来訪が重要な意味を持っていることは理解しているのだ。だが主人にベタベタと引つ付くカミィラの表情を目にして、物申さずにはいれらなかつただけの話である。

「と、ところで……設定は覚えたな？ カミィラ」

話題を変える意味も兼ねて、ヘリアンは旅人一行の設定について確認する。

「勿論じゃ、我が君。既に完璧に記憶しておる」

「ならばよい。そろそろ集落も近付きつつある。三人とも心して掛かれ」

ヘリアンは供の三人に告げ、自身もまた意識を切り替える。

——設定はこうだ。

ヘリアン率いる旅の一行。彼らとはある古城を探索中、突如として謎の光に包まれるという不可解な現象に襲われた。トンネルを抜けた先は……もとい眩いばかりの光が晴れた先は、深い森に覆われた全く知らない土地だった。

しかもその森には人を惑わせる効果がかかっており、そのせいで仲間とはぐれ、五日も彷徨った果てによりやく人と——ラテストウッドの民に出会えた。遺跡で発見してきた様々なアイテムによりなんとか生き延びてこられたものの、一行は周辺地域の情勢をはじめとした様々な常識を知ら

ない状態である。

その後、秘蔵の魔道具マジックアイテムによってはくれた仲間からの連絡を受け、仲間と合流するために急遽ラテストウッドの集落を飛び出した。無事かどうかも分からなかった仲間からの知らせに、いても立ってもいられなく、まともな挨拶あいさつも交わさず去ったことについては陳謝ちんしゃする。

幸いにも仲間と無事に合流することができたので、ついでには先日の詫わびと今後の付き合いについて話がしたいと思っっている。また前回の食糧支援については好評を頂けたと思っっているので、今回も同様に振る舞わせてもらおうつもりである。

——以上が設定であり、簡単に纏まとめてしまえば、

『いきなり集落飛び出してスイマセン』

『決してノーブルウッドの手先とかじゃありません』

『でも無礼だったのは事実なんで、お詫あやまびの証あかしとして食糧支援します』

『旅人という居所もままならぬ身で物資を提供することが我々の誠意です』

『あと、まだよく分からないことがあるので色々教えてください』

という主張がラテストウッド側に伝わればそれでいい。

正直、再び集落を訪れた際にどのような反応が待ち受けているのか想像もつかない。

しかし唯一にして貴重な情報源であるラテストウッドと関係を絶つことなどできない以上、遅かれ早かれ再接触をする必要があるのなら一刻も早い方が良いと判断した。

様々な問題を抱えている中でこの決断がベストかどうかは分からない。

だが、だからといって何も決断しない王など置物と変わらないだろう。指導者とは決断すること

が重要な仕事なはずだ。そして一度決断を下した以上、後はその選択が正しかったことを証明するために最善を尽くすしかない。

(……もうすぐ集落が見えてきそうだな)

視界に浮かべた〈地図〉には、前回の探索で判明した限りの地形情報や位置情報等が表示されている。小規模な村や集落を示す記号が大分近付いてきた。集落まであと三分程度という距離にまで近付いたところで一際強い風が森を撫でる。

すると、不意にリーヴェエがその鼻をヒクつかせた。先ほどまでは進行方向に向かって風下だったが、今の風は逆から流れ込んできている。つまりは集落方面の匂いを運んできたということだ。

何かを察知したのだろうかとヘリアンが〈地図〉に映る集落の詳細情報を開こうとした時、リーヴェエは不快げに眉を顰めて眩く。

「……ヘリアン様」

「どうした？」

「集落のある方向から、血臭が」

「——ッ、急ぐぞ！」

聞くなり駆け出した。

〈地図〉で集落の詳細情報を表示させれば生物の反応がある。白い光点が幾つも灯っていた。

問題なのはその数が、前回集落を訪れた時のそれと比較して随分と目減りしているということだ。追従するリーヴェエが以前のようにヘリアンの身体を抱え込もうと手を伸ばす。

「ヘリアン様、お身体失礼を——」

「要らん！ それよりも周辺警戒を厳にしろ。集落で大規模な戦闘があった可能性が高い！」

リーヴェの両手は空けておきたい。

前回は数体しか敵戦力がいなかったたので移動を優先したが、今回は敵の規模が分からないためだ。
〈地図〉に映る白い光点が全て敵の場合、リーヴェの片腕が塞がっている状態では一抹の不安がある。ならば急行せずにまずは遠くから様子を窺うべきだ、と頭の中の冷静な部分が告げてきたが無視した。集落が襲撃を受けている真っ只中だとすれば、一秒の遅れが取り返しのつかない事態を呼ぶことだってありえる。

脳裏に浮かぶのは、我が身を棄てて民を救おうとしていた姉妹の姿だ。

未だ彼女らの問題には深入りしないというスタンスのままであるにもかかわらず、咄嗟に助けようとしている自分の軽拳さと偽善者ぶりに反吐が出る。しかしだからといって今更止まるワケにはいかない。自分は既に走ることを選択したのだ。

「——ッ！ そのの者、止まれ！ さもなくば射つ！」

制止の声が正面から飛んできて足を止めた。

集落の門前に誰かが立って弓を構えている。だが逆光のせいで何者か判別するまでには至らない。ノーブルウッドのエルフか、それともラテストウッドの民か。あるいは第三勢力か。

「貴様は………!？」

弓を構えた人影は啞然としたような声を漏らした。その声色で気付く。

「……ウエンリ殿、か？」

ラテストウッド女王であるレイファの側近、ウエンリだ。

よかった。

彼女が門番の真似事まねごとをしているということは、集落おちいが陥ちたわけではない。

〔地図〕に表示されている集落の白い光点アンノウンはラテストウッドの民のものだろう。

「無事だったか。よかつ——」

「貴様らがああア——ッ!!」

歩み寄ろうとした一歩は怒声で縫い止められた。風を切る音が鳴り、何かが飛来する。

射られたと気付いたのは、リーヴェに鷲掴わしづかみにされて止まった矢を眼前に認めてからだった。

「よせッ! 殺すな!」

反射で叫んだ。

リーヴェとエルティナ、そしてカミィラが跳び出そうとしていたその身を固くする。

……危なかった。

制止の声が一瞬でも遅ければウエンリが殺されていたかもしれない。

「クソッ! 皆みなの者、出会え! 敵襲だ!」

「待ってくれウエンリ殿! 私わたしはヘリアンだ。先日世話になった旅人の——」

「何が旅人だ白々しい! ノーブルウッドの手先めが!!」

第二射。再びリーヴェが矢を掴つかみ取る。

「……ッ、誤解だ! 我々はノーブルウッドとは無関係だ!」

「黙れ! 本当ほんとうに無関係だと言うのなら何故我々がこのような目に遭う!? 何故貴様あなたらがいなくなったその後、ノーブルウッドの兵士が押し寄せてくるというのだ!」

陽光が雲に隠れた。そうして逆光で見えなかつたウエンリの表情が明らかになる。

彼女の表情は酷く歪んでいた。見たことのない表情をしていた。その顔はヘリアンの——三崎
司の十八年という人生の中で一度も見たことのない、純粹な憎悪の色に染まっていた。

「何事ですか!？」

何人かの兵士に守られながら小柄な人影が出てきた。

その声、その姿、見紛うハズもない。

「レイファ殿! 私だ、ヘリアンだ!」

声を張り上げる。どうにか誤解を解かなければ話にならない。

それに配下たちの様子も怪しく、今にもウエンリに襲いかかろうとしているように思えた。

ヘリアンの命令で止まってくれているが、カメラからは特に不穏な気配を感じる。

第三射が事態悪化の引き金になりかねなかつた。

——ヘリアン殿——

どこか呆然とした様子でレイファはヘリアンの名を口にする。

その声に宿る感情は酷く希薄だつた。何を思っているのか全く読み取れない。

冷静なのか、そうでないのか。敵対的なのか、話を聞いてもらえる余地はあるのか。

ヘリアンの頬を一筋の汗が流れ落ちる。

「……ウエンリ。弓を下ろしなさい」

「なりませんレイファ様! 奴らはノーブルウッドの手先です!」

「弓を下ろせと私は言いました。従いなさい」

「レイファ様は騙だまされているのです！ 弓兵、構え——」

「ウエンリッ!!」

レイファはヘリアンが聞いたことのない厳しい声で叫んだ。

右手を真つすぐに突きつけ、翳かげした掌てのひらには魔力の光が灯っている。

そしてその手は……己の側近たるウエンリへと向けられていた。

「……レイファ……さ、ま?」

ウエンリは信じられないモノを見たかのような瞳ひとみで、自分に魔術を放とうとするレイファを見ていた。

「ウエンリ。弓を下ろしなさい」

「……何故……何故なのですレイファ様。コイツらは……コイツらのせいで、リリファ様が……!」

「今現在この国の女王は私です。私の言葉に従いなさい。どうしても従えないとあらば、私を殺して貴女が新たな王になりなさい」

「なっ……!」

「幼少の砌みぎりから私たち姉妹の面倒を見てもらっている貴女には感謝しています。姉のように思っています。ですが、今の貴女は正気とは思えません。私を女王とするこの国にとってこれ以上害となる行為を続けるようであれば……私は容赦はしません」

「……………」

「これが最後です。弓を下ろしなさい」

ウエンリは一瞬、躊躇ためらった。

ヘリアンに向けられた瞳ははまだ憎悪に染まっている。

「……………ッ」

それでも彼女にはレイファと敵対するという選択肢だけはなかったのか、忌々しげな表情はそのままだに、しかしその弓を静かに下ろした。

ヘリアンもまた、配下たちを制止するために掲げていた右手を下ろす。

これでどうにか一触即発の事態だけは避けられた。しかしヘリアンが安堵あんどの息を吐くことはなかった。安堵できようはずもなかった。いきなり攻撃されたこともそうだがそれ以上に、彼女らのやり取りの中にどうしても聞き流せない言葉があったのだ。

「——リリファが、どうした？」

ウエンリが咄嗟に口走った台詞。

彼女は「コイツらのせいでリリファ様が」と確かに言った。

ならば、その後にくる言葉は、何だ？

「……ヘリアン殿、再びお会いできて嬉うれしく思います。まずは我が方が働いた無礼について深くお詫び申し上げます。私が謝罪したところで納得などはできないとは思われますが、何卒なにしろご寛恕かんじょを」
違う。聞きたいのは謝罪の言葉ではない。

そんなどうでもいいことよりも、

「ノーブルウッドに襲われたと言ったな？ あの後いつたい何があった？ リリファ殿がどうした？ どうなったというのだ？」

何かに突き動かされるように、矢継やつぎ早ばやに問い掛ける。

するとレイファは、感情が読み取れない能面のような表情のまま、端的な事実を口にした。

「——ノーブルウッドの兵士に、攫さらわれました」

2.

こんな所で立ち話も何ですので話の続きは集落の中で、と。

無表情のまま促すレイファに連れられたヘリアンたちは再び集落の中へと足を踏み入れる。

集落の中は酷い状況だった。

襲撃を受けたと言っていたが集落のあちこちにその傷跡が残されている。天幕は殆どが破壊され、元からあった家屋も半分近くが全壊状態になっていた。

そして生々しい傷跡が残されているのは何も建物ばかりではない。周囲を見渡せば、屋内の居住スペースに収まりきらなかったのか、負傷者が簡素な布を敷いただけの地面に寝かされていた。少し見渡しただけでも、骨折している者や頭に血の滲じむ布を巻きつけている者が見受けられる。

だが、それでも彼らは未だ怪我人の中ではマシな方なのだろう。

その推察を裏付けるかのように、幾つか残った天幕からは苦しげな呻うなき声こゑが聞こえてきた。

「ノーブルウッドの大攻勢があったんです」

集落の中心部に歩きながらレイファはポツリポツリと零こぼすように告げる。

まるで罪を懺悔ざんげする告解者ごかいしやのようにも感じられた。

「昨晚のことです。ノーブルウッドの狩人長が軍を率いて集落に攻め込んできました。交渉の余地もなく、魔術まじゆ射しやで防御柵ぼうえいさくが破られ……我々も必死の抵抗をしましたが力及およばず、ご覧の有様ありさまです」

「狩人長？」

「人間の軍で言うところの將軍ですね。エルフの戦士たちの幹部に位置する立場です。より上位の地位には『長老』や『大長老』が存在するのですが、戦時下において戦士を率いるのは狩人長です」

「……被害規模は？」

「我が国に残されていた兵力の半分を喪失しました。残り半分も負傷者が少ないとは言えません」

完全な敗戦だ。五割の戦力喪失というのは『壊滅』を意味する。組織としての戦闘能力をほぼ完全に失った状況だ。

現代の戦略観点に照らし合わせれば、兵力が補充されて軍が再編されればまだ抵抗の余地はあるだろうが……ラテストウッドはハーフェルフを中心に弱小種族が寄り集まってできた国だ。誰も頼ることができない者たちが、自分たちだけできるとかするしかないとして創られた国なのだ。

補充される兵力のアテなど、あるわけもない。

「……リリファ殿は、どうなった？」

「リリファを含む一部の者たちは攫われました。攫われた人数は百人あまりでしょう。死者の人数すら把握しきれしていない状況ですので、詳しい人数は分かりかねますが」

最悪の状況だった。聞けば聞くほどに悲惨な状況があらさまになる。

だからといって耳を塞ぐわけにもいかない。油断すれば脳裏に浮かびそうになる少女の顔を頭を振って消し去った。今の自分には冷静な対処が求められているのだと己を叱咤する。

「……レイファ殿」

「はい」

返事をするレイファの顔には感情の色がない。能面のような顔に薄ら寒いものを覚えた。

聞きたいことは山ほどあるが、疑いの目に囲まれながら無遠慮に尋ねるわけにもいかない。

ならば質問よりも先に、今すべきことは……

「私の連れのエルフ、エルティナは治療術を少しばかり扱える。治療の手が足りていなければ彼女に怪我人の治療をさせてやりたいと思うのだがいかがだろうか？ 無論、エルフであるエルティナによつて治療されることに納得できればの話だが」

「それは——そうですね、お気遣い感謝いたします。こんな状態ですのでご温情に甘えたいと思います。是非ともお願いしたく」

「受け入れてくれて感謝する。では……」

「重傷者はあの天幕の中に集められています。魔力が及ぶ限りで構いませんので、そのうちの何人かだけでも命を救っていただければ幸いです」

やはり屋外に寝かされている負傷者はまだマシなほうだったらしい。

推測はできていたが、それでも多少は身構えさせられる。

「……聞いての通りだエルティナ。負傷者の手当をさせていただこう。私も一緒に行く」

付き添いを自ら申し出たのは、この集落の中でエルティナに単独行動を取らせることが不安だったからだ。

以前炊き出しをした際にはエルティナがエルフといえど、そして自分が人間といえど、集落の住人はある程度友好的に接してくれた。しかし今現在集落の人々から向けられる視線は決して友好的とは言えず、その多くからは敵愾心てんがいしん一步手前の強い猜疑心さいぎしんが感じられた。

そんな状況下での単独行動はお互いにとつて不幸な結果を呼び込みかねない。

現にレイファの後ろを歩くウエンリの視線は未だ剣呑なままだ。他の兵士にしてもそれに近いものがある。レイファの制止命令がなければ、いや、それどころか彼女の目の届かぬところに行けばそれだけで不幸が起きかねない。

そうして一触即発の空気を抱えたまま、レイファの案内で集落の中心近くにあつた天幕に入る。そこには予想通りの、否、予想以上に凄惨な状況があつた。

「……う」

覚悟はしていたはずだった。

漏れ聞こえる苦しい呻き声から、ある程度想像力は働かせたつもりだった。

——甘かった。

天幕の中では狭い敷地を目一杯に使つて負傷者が寝かされている。ベッドが足りなかつたのだから、二十人ほどは地面に身を横たえていた。足の踏み場が少なくなつた天幕内を悲愴な顔をした看護者がせわしなく歩き回っている。

まず目に入ったのは入り口近くに寝かされた負傷者。

彼……いや、彼女は苦しげな呻き声を上げ続けている。性別がすぐに分からなかつたのは素顔が見えないほどに包帯が巻かれていたからだ。

もしかすると素顔を隠すために、あえてこのような包帯の巻き方をしているのかもしれない。酷い傷を負つた女性の顔を晒すわけにはいかないという心遣いなのかもしれない。推測しかできないものの、右耳が今にも千切れそうなほど深く切り裂かれているのを目にして、恐らくその推察は当

たっているのだろうとヘリアンは思う。

だが彼女はまだマシな部類だった。天幕の奥にいくほどに酷さが際立つ。

腕や足がない者、未だ腹部から血を流し続けている者、永遠に光を失った者などがそこら中に寝かされていた。中には負傷が酷すぎて壊れた人形のようにしか見えない者すらいる。

このまま放っておけば長くはないだろう。

「レイファ様？ ……こちらの方々は？」

入り口付近に立っていた小柄な女性が声をかけてきた。怪我人を気遣ってか小声だ。体格が随分と小さい。ハーフェルフではないようだが……小人種だろうか。

「ご厚意で治療を申し出てくれましたが、ヘリアン殿と旅の御一行様です。こちらのエルティナ殿が治療術に心得があるとのことですよ」

「……恐れながらそちらの方は？」

「言いたいことは分かります。ですが我々にこれ以上治療の施しがありますか？ 魔力に余裕のある者は未だ残っていますか？」

レイファが問い質すと、女性は悔しそうに唇を噛んで俯いた。

そして行く道を空けるようにして一歩横に退く。

それが答えだ。

「……エルティナ、彼らの治療を頼む」

「承知しました」

エルティナは天幕の奥……最も酷い怪我人の下へ歩み寄ろうとする。

「お待ちください。入り口から離れている者ほど怪我の度合いが酷いので、まずは入り口に寝かされていものから治療していただければと」

「逆ではないのか？ 最初に治療が施されるべきは奥の怪我人のように思える。一刻も早い治療が必要だろう」

「ですがこれだけの怪我人です。ならば私は指導者として、命の選択をしなければいけません」

レイファは怪我人たちに聞こえない声量で女王としての台詞を口にする。

どうやら全員の治療は無理だと諦めて（あきら）いるようだ。この中の幾人しか治療ができないであろうと、そして数に限りがある以上は確実に救える命を選ばなければいけない義務があるのだと、彼女の態度はそう告げている。

しかし実際にはエルティナならばこの場にいる全員の治療が可能である。ここで全員を治療するようエルティナに指示すれば彼女はそうするだろう。

そしてその結果、レイファたちにとっては常識外れとなる力を晒してしまうことになる。

——だから何だ。

別に問題はない。もはやこの国にはアルキマイラと戦う力は残されていないからだ。つまりラテストウッドに対しては実力を隠すことによる戦力隠蔽の意味は殆どない。ならばここは恩を売る。少しでも敵愾心を削いでおかなければ情報収集も何もあったものではないだろう。

故にこれは同情ではない。安っぽい正義感からの行動でもない。あくまでアルキマイラのための行いだ。そうでなければいけないのだ。

「エルティナ。この場にいる全員の命を救うことは可能か？」

エルティナの青い瞳がヘリアンの姿を映す。

その視線には「よろしいのですか？」との意が含まれていた。

ヘリアンは黙して首肯する。

「可能です」

「では、そのように——」

「ふざけるな……ッ！」

憎々しげな声で呟くのはウエンリだ。

重傷者に考慮してか小声ではあったが、その声に籠められた感情は門前での問答の時と何ら変わらない。

「これだけの人数をどうやって治療するつもりだ。どれだけ優れた治療術士であろうが最低三十人は必要な数だというのに、それを一人で治療するだと？ 寝言は寝て言え。貴様らの妄言で彼らにありもしない希望を与えるな……！」

「ウエンリ——」

「構わぬよ、レイファ殿」

再びウエンリへ厳しい視線を向けるレイファに手を翳す。

無駄な問答で時間を費やしたくない。

「ウエンリ殿、私たちは妄言を口にしていないつもりはない。とはいえ今の貴女に何を言おうと意味を成さないだろう。よって、我々は行動で以って証明するまでだ。——エルティナ」

「畏まりました」

眩き、エルティナは一步前に出て、祈りをあげるように両手を組む。

「天雨よ、慈悲あらば癒光と成りて彼の者らを満たせ——
癒光キユアレイ・フオリスの慈雨シアメ」

完全詠唱によって紡つむがれた範囲回復魔術。それは深い緑の光となつて天幕内を覆い尽くした。

癒やしの光は瞬く間に全ての怪我人の身体を包み込み、負傷を負つた箇所を緑光で埋めていく。

そうして光が晴れた後に残つたのは、傷跡一つない綺麗な肌だ。

先ほどまで呻き声をあげていた怪我人たちが、驚いた表情で傷の消え失うせた身体を見ている。

「なっ……!?!」

ウエンリもまた、その瞳を目一杯に見開いて驚愕きょうがくを露あらわにする。目の前のソレはそれほど受け入れがたい光景だった。

聞いたこともない詠唱が眩かれたかと思えば、一瞬で天幕が光に包まれた。そこまではまだいい。異邦人ならば自分たちの知らない魔術を修めていることもありえるだろうと理解を示せるからだ。

しかし詠唱者たるエルフの女はその手に何も持っていなかった。つまり杖つえや輝鉦石などの触媒なしに高位の魔術を行使したことになる。

高位な魔術の行使には媒介物を要するのが世界共通の常識だ。魔術に長けたエルフ族でさえその常識からは逃れられず、貴重な触媒を持つている者はそれだけである程度以上の権力者と言えた。

レイファもまた、切り札として触媒結晶はの嵌め込まれた腕輪を身につけている。

にもかかわらず、目の前の女は触媒もなしに高位魔術を行使してみせた。

それだけでもウエンリの常識からすれば十分にありえない現象だというのに、更に天幕内の全ての者の怪我が同時に——それも瞬時にして癒やされる光景を見せつけられてしまったのだ。

ありえない現実を目にしたウェンリは目の前の光景を呑み込めず、ただ立ち尽くすしかなかった。「い、痛くない……？　なんで？」

現実を受け入れられていないのは、ベッドに寝かされていた者も同じだった。

先ほどまで激しい痛みを訴えていたはずの身体が一瞬で治癒し、今では身を起こしても何の違和感もない状態にまで快癒していた。

喪った手足や瞳はさすがに元通りになってはいないものの、体に巻かれていた包帯を取ってみれば何ヶ月もかけて丁寧に治療されたような健康的な肌が視界に入ってくる。喜ぶよりも先にまず呆然としてしまうのも無理からぬことだろう。

看護にあたっていた者たちもそれは例外ではない。いや、むしろ治療術の使い手だからこそ彼らの驚愕の度合いは大きかった。

なにせ自分たちの全魔力を費やしても命を繋ぎ止めるのが精一杯だった怪我人たちが自力で起き上がるまでに回復しているのだ。そのありえない現実をまともに受け止めることができず、中にはその場にへたり込む者すらいた。

「素晴らしい腕前ですね。お見逸れしました。ご厚意に深く感謝いたします」

故に、旅人一行に対して平然としたまま感謝の言葉を紡ぐレイファのことを、その場にいたラテストウッドの者たちは誰一人として理解することができなかった。

これだけのありえない現象を見せつけられて、どうして平静でいられるのかと。

何故、我々の常識を否定した目の前の現象を受け入れられるのかと。

「いえ。たいしたことではありません」

謙遜けんそんしたように、否、本当にたいしたことではないとも思っているかのように、エルティナもまた淡々と応こたえる。

「命に別状はありませんが、部位欠損については治療が叶いません。ご容赦いただきたく」

「命を救っていただいただけでも十分です。心より感謝いたします」

「それと血に汚れたままの包帯は変えた方がよろしいでしょう。現時点では感染症等のリスクはありませんが、衛生状態が悪いと何らかの問題が起きることは否定できません。わたくしにできたのは怪我の治療だけです」

「なるほど、承知しました。——その貴女。聞こえていましたね？　すぐにそのようになさい」

呆然と立ち尽くしていた小人種ハエクリンの女性。彼女はレイファの指示を受けて初めて我に返ったのか、あたふたと動き始めた。

それを皮切りに固まったままだった者たちも各々の作業を再開する。

驚きのあまりへたり込んだまま動けない者もいたが、年長者の看護者に促され、己がすべきことを行動に移していく。

「……レイファ殿。話の続きは外で行いたいと思うが、よろしいか？」

「勿論です」

天幕の外に出た一行はレイファの先導で集落を歩く。

そして「この辺りでよろしいでしょう」と彼女が足を止めた場所は、集落のちょうど中心地だった。そのとき、カミィラがウエンリの瞳に視線を合わせたのをヘリアンは察知した。

彼女が幾つもの魔眼能力を所有しているのを思い出したヘリアンは、下手へたな真似まねはしないよう、

こちらからの手出しは固く禁じる旨の（指令）^{オーダー}を思考操作で発信する。

ややあってカミィラは形の良い眉を僅かに擻めた。何をしようとしていたのかは分からないが、今この状況でこちら側からなんらかのアクションを起こすのはまずい。いざとなれば強硬策も必要だと理解はしているが今はまだその段階ではないはずだ。

周囲を見回す。

（地図）^{マップ}を見れば……否、見るまでもなく集落の人々が遠巻きに集まっているのが分かった。

まるで取り囲まれているようにも思えてしまい、否応なく重圧^{プレッシャー}を感じる。

ヘリアンは意を決して話を切り出した。

「レイファ殿。ノーブルウッドの大攻勢があったことは分かった。被害状況も分かった。だが、それに関して我々は一切関与していない。我々はノーブルウッドの関係者ではないのだ。今更ではあるが、まずそこを明確にしておきたい」

治療を施した。

恩を売った。

行動で身の潔白を証明したつもりだ。

レイファの様子を見てもこの言い分を受け入れてくれるはずだとは思う。

それでも僅かに、膝^{ひざ}が震えた。

「はい、承知しております。貴方がたがノーブルウッドと無関係であるという事実について、私は一切の疑いを持ちません」

「……レイファ様、それは早計ではないでしょうか」

案の定というか、ウエンリが口を挟んできた。

「確かに怪我人に治療は施されました。驚くべき腕前でした。多くの命が救われました。それは認めましょう。しかし、その行いにより彼らの疑いが晴れたわけではありません。先の襲撃で多くの命を失ったこともまた事実なのです」

「何が言いたいのですか、ウエンリ?」

「自作自演ではないかと申し上げております。先立っては持ち帰った情報をノーブルウッドに流し、その後でも無関係を装って現れ、治療を行うことで我々に対し恩を売ろうとしている……その可能性が否定できません」

本人らを前にしてよくも言う。

そのような気持ちで湧き上がらなかつたと言えは嘘になるが、レイファの後見人のような彼女の立場からすればその可能性を疑うのはも当然のことなのかもしれない。しかし、

「随分と面白い戯言を口にするのですね、ウエンリ」

レイファはその忠言を真つ向から否定した。

戯言と吐き捨てた。

ウエンリを見る翠緑の瞳には、僅かに負の感情が混じっている。

「戯言とは……。レイファ様、私はこの国のことを想って」

「では問いましょう。貴方が言うようにヘリアン殿がノーブルウッドの関係者だとして、我らラテストウッドを欺き取り入ろうとしているとして、そこに何の意味があるのですか?」

「何の意味が、と申されますと……」

「ヘリアン殿たちが何か得をするのですか？　ただでさえ劣勢にあった我らを欺き、内部工作をすることにどれほどの効果が？　そんなことをせずとも我々が抵抗できないほどの戦力で力押しをすればよいだけでしよう。ノーブルウッドにはそれが可能です」

「……ッ!?　レイファ様、それは……ッ!」

「今更言葉を濁してどうなるというのです」

「民が聞いております……!」

「そのようなことは、貴女に言われるまでもなく承知しています」

ウエンリは額に汗を浮かべて諫めようとする。

しかし、レイファは聞く耳を持たない。

「まあ可能性自体は否定できませんね。それは貴女の言う通りでしょう。だから貴女が主張したように、先ほどエルティナ殿が施してくれた治療が『我々に対し恩を売るための売名行為』とやらであつたと仮定しましょうか」

「……レイファ様?」

「ですが、我々に恩を売ることにはどれほどの意味が？　最後に残された拠点であるこの集落は大打撃を受け、戦力はほぼ壊滅状態。ただでさえ乏しかった物資も今回の襲撃で底を尽きました。そんな我らにヘリアン殿が何を求めるといいます？　我々から何を奪えるといっています?」

「……それ、は」

「更に仮定を重ねましょうか。貴女が懸念している通り、ヘリアン殿たちが我々の敵であつたとし
て——だから?」

鼻で嗤うようにして問われ、驚愕のあまりウエンリは身を凍らせた。

レイファは感情のない表情で淡々と言葉を紡ぐ。

「勝てますか、彼らに？」

刺すような言葉だった。

「私は先日の救出作戦から撤退の折、彼の狩人長サラウィンⅡウエルトⅡノーブルリーフから追撃を受けました。ですがその狩人長を、ヘリアン殿たちは歯牙にもかけず撃退されました」

レイファは己の目で見届けた。

狩人長の攻撃に対し、エルティナが未知の高位魔術を瞬時に展開し容易く防いだ光景を。

レイファには視ることすらできなかった。

リーヴェが目にも止まらぬ速さで狩人長に肉薄し、拳を振り抜こうとした姿を。

「ヘリアン殿が止めなければリーヴェ殿の拳は狩人長を死に至らしめていたことでしょう。そして今日初めてお会いしましたが、新たなお仲間の方も、きっと同等の力をお持ちなのでしょう」

レイファはカミィラに視線を移した。

カミィラは向けられた視線など気にも留めず、周囲を警戒し続けている。

既に『はぐれていたか弱い仲間』との設定が意味を成さなくなっていることを理解しているカ

ミィラは、リーヴェたちと同様、主人の護衛役に徹していた。

「私たちを害する意図があるのならヘリアン殿たちはいつでもそれを実行できます。そして一度実行に移されれば我々に抗う術はない。ヘリアン殿たちと戦うことになった時点で我々の負けなのです。わざわざ我々を騙す必要がどこにあるのですか」

「……………ですが、リリファ様たちを攫ったノーブルウッドの要求は、彼らの……！　そもそも彼らがこの集落へ訪れなければ！」

「論点がずれています。貴女は先ほどまでヘリアン殿たちがノーブルウッドの手先だと主張していました。確かにノーブルウッドの要求は彼らに関するものでしたが、それは即ち、彼らがノーブルウッドとは無関係だという裏付けではありませんか？」

貴女がそれを理解できないはずはないでしょう？

レイファは視線でそう問い掛ける。

対するウエンリは青褪めた表情で、レイファを見ていた。

「そもそもヘリアン殿たちが助けてくれなければ、私もまたノーブルウッドに囚われるか、もしくは殺されています。貴女はそれをよしとしますか？」

「そ、そのようなことは決して……！」

「ノーブルウッドの手先だと主張しておきながら、そうではないと自分の中で認めている。にもかかわらず、貴女はヘリアン殿たちを糾弾しようとしている。まさかヘリアン殿たちを諸悪の根源に仕立て上げ、ノーブルウッドへの生贄に捧げようとする？　ラエストウッドの残存戦力全てを動員しても敵わない相手に言うことを聞かせようとも？　事はそう簡単な問題ではないのです。我々はどういうことができる段階を、既に逸しているのです」

「……………」

「貴女があえて憎まれ役を買って出ていることについては私も理解しています。ですが、もう黙りなさい。これ以上は話の邪魔にしません」

ウエンリは氣^け庄^おされたように一歩退き、俯いた。

その口が何かを紡ぐことはもうない。

——一方、ヘリアンもまた薄ら寒いものを覚えていた。

話を聞いてくれるのはありがたい。

ノーブルウッドの手先ではないと周囲に知らしめてくれたのも僥^{ざん}倖^{しやう}だ。

だが、わざわざ人の集まる集落の中心地でそれを口にしたのが腑^ふに落ちない。

それも声を大にして周囲にあえて聞かせるように喋^{しゃべ}り、かつ集落の者たちに伝えなくてもいいであらう情報を聞かせているのは何のためか。

「見苦しいものをお見せしました。重ね重ねの無礼、どうかお許しください」

「……っ、いや、構わないとも。ウエンリ殿の立場上、その忠心から我々を疑うのは理解できる。我々としては疑いが晴れたのならばそれでいい」

頭を下げようとすするレイファを慌^{あわ}てて遮^{かざ}る。

民衆の前で女王が頭を下げるなど何を考えているのか。嫌な予感が止まらない。

「それよりノーブルウッドの要求とは何だ？ 話の流れから我々が関係していると受け取ったが」

「はい。お察しのとおりです。リリファたちを攫^{さら}ったノーブルウッドの要求はただ一つ——」

——『明日の日が沈むまでに、ハイエルフを連れた旅人の一行を引き渡せ』

それが、ラテストウッドの集落を襲ったノーブルウッドの要求だった。

「ハイエルフを連れた旅人の一行を引き渡せ？」

オウム返しに口にする。

ノーブルウッドの要求が自分たちの身柄などとは思ってもよらなかった。

しかし『ハイエルフを連れた旅人』との指定が解せない。

「はい。『旅人一行』と引き換えに、ラテストウッドの国民を……リリファたちを返還するのとこのです。しかも『神樹の名に誓う』との誓約まで口にしました」

「……『神樹の名に誓う』とは？」

「古よりエルフ族に伝わる誓約の文言です。そして神樹とはエルフ族にとつての御神体——神の依代よりしろです。その名に誓うということはエルフ族にとつて絶対の誓約となります」

森の民や辺境部族にありがちな偶像信仰か。

いや、現実世界の常識で考えるべきではないだろう。実際に神が宿る樹があるのかもしれない。

「もしもこの誓言を口にしておきながらそれを反故ほごにした場合は『これを破ればエルフにあらず』『我らが神の名を穢けがす者なり』として全てのエルフ族を敵に回すこととなります。何よりエルフとしての矜持きょうじが誓約を破ることを許しません。それほどに重い言葉なのです」

なるほど。要は旅人一行を引き渡せば確実にリリファたちを救える、ということか。

……ウエンリが必死になるわけだ。

「つきましてはラテストウッドの代表者として、貴方様をお願いしたことがございます」

「言ってみてくれ」

「今回攫われた民を——リリファたちを、ノーブルウッドより奪還していただけないでしょうか？」
大体予想通りの言葉ではあった。しかし、

「奪還と言ったか？ 黙って引き渡されてくれ、ではなく？」

「はい。あくまで奪還です。貴方がたをノーブルウッドに引き渡すつもりはありません」

チラリと周囲の様子を窺うが、ヘリアンたちを無理矢理拘束しようという動きは見受けられない。
先ほどのレイファの話を目にした彼らは、こちらが戦っても敵わない相手だという事実を正しく認識しているのだろう。

「……三点ほど確認したいことがある」

結論は早計には出せない。

「まず一つ目だが、『神樹の名の誓い』はノーブルウッドとラテストウッドの双方が合意した契約、と受け取っていいのか？ それともノーブルウッドが一方的に宣告しただけか？ 前者ならば、貴国としては『旅人一行』を引き渡す義務があると思われるが」

「いいえ、後者です。一方的な宣告でした。それも言い捨てて行ったに等しいような状況であり、我々は旅人を差し出すなどという誓約は口にしておりません。従いまして我々がヘリアン殿たちを差し出さずとも『神樹の誓約』を破ることはありません」

やはりか。この場合、ノーブルウッドだけが誓約違反の罰則を負うリスクを抱えている。

わざわざ合意を取らなかったのは、下位種と決めつけているハーフェルフが自分たちに従わない

という発想がそもそも浮かばなかったからなのかもしれない。

彼らとはことん、ハーフエルフたちを見下しているようだ。

「二つ目だ。そもそも何故ノーブルウッドは我々の身柄を要求するんだ？ しかもわざわざハイエルフを連れだした旅人」と指定してきたということは、エルティナが標的にされていると解釈したが……何故ハイエルフと？」

「不明です。私の目からは只者ではないとしか分かりません。……やはりエルティナ殿はハイエルフなのでですか？」

違う。エルティナは白妖精でも高位の白妖精でもない。エルフ種最高位の神代の白妖精だ。

だが、それをこの場で言っても伝わらないだろう。問題はノーブルウッドがエルフの上位種を標的としているということだ。

その上、ラテストウッドのハーフエルフたちよりも優先すべき標的と見做されてしまっている。

「普通のエルフでないことは確かだが、エルティナが標的になっているのが不可解だ。先日……サラウィンだったか？ アレとの揉め事が原因であれば、人間である私や彼を殺そうとしたり、ヴェが名指しにされているはずだ」

むしろエルフにとつての蔑視対象である人間——ヘリアンを旅人一行の代表者として指定する方が自然に思える。

昨日の揉め事の際に、交渉役として会話の矢面に立っていたのもヘリアンだったのだから。

「だが要求の言葉を聞く限りは、標的とされているのはエルティナで、私とリーヴェはただのオマケのように聞こえる。何故、ノーブルウッドはエルティナを標的にするんだ？」

「私にも本当に分からないのです。そもそも此度の開戦の言い分としては、彼らはハーフエルフそのものを敵と見做しているようでしたが」

「耳を見てもらえば分かる通り、エルティナはハーフエルフではない」

「承知しております。恐らくは彼らよりも豊富な魔力を持った、もしくは高位の魔術を修めているという事実からハイエルフと推測したのでしょうか……何故ハーフエルフではないエルティナ殿を狙うのか、私には皆目見当もつきません」

嘘は言っていない。当惑しているのはレイファも同じことのようにだ。

少なくともヘリアンからはそう見えた。

「では三つ目だ。心して答えて欲しい」

「はい」

「貴女は我々に捕虜の奪還を求められた。だが、その要求に応えることで我々が得られるものはあるか？」

問うなり、ウエンリが睨み殺すような視線を向けてきた。

だが気圧されるわけにはいかない。ここが正念場だと、ヘリアンは腹の底に力を入れる。

——ヘリアンはアルキマイラの王だ。

情に流されてはいけない。非情にならなければならない。「可哀想だ」とか「助けてあげたい」だとか、そう願う個人の意思に国を巻き込むわけにはいかない。

それは王として相応しくない行動だからだ。個人的意思で動くなど『王の器』ではない、と配下たちに思われかねないからだ。だから見返りもなしに火中の栗を拾う真似はしない。できない。助

けたくても助けられない状況なのだ。

——だが、見返りがあるなら話は別だ。

国として助けるに足る理由があればヘリアンは動ける。「心して答えて欲しい」とはそういう意味だ。

リーヴェたちに見られている以上そんな本音は口に出せないが、それでも想いの丈を籠めて告げたくもなかった。

物資もなく、敗戦寸前のラテストウッドに差し出せるものがあるのかは分からない。むしろ先ほどのレイファとウェンリのやり取りから察するに、見返りとして差し出せるものなど存在しない可能性が高いだろう。

更にノーブルウッドの戦力も測りきれっていない状況だ。個人戦闘能力ならばアルキマイラが勝っているであろうことは先ほどの会話から察することができたが、敵勢力の総戦力値は未だ不明のままである。夕刻までに敵戦力を把握し、かつそれを上回る戦力を捻出できるかどうか分からない。勝てる保証もないのに手を貸すというのは決して利口な選択ではないだろう。

だけどそれでも、ないはずの『差し出せるもの』を捻^{ひね}り出^だしてくれるなら。そしてそれを国家として動ける理由に仕立て上げられるなら、ヘリアンは助けたい。そういう一縷^{いちる}の望みをかけた問い掛けたかった。

何故ならばヘリアンはあの日交わした指切りを忘れていない。

精一杯に頑張って、心を削って、民を救おうとしていた少女と交わした約束を。

あの細い小指を覚えている。

だから頼む、と。

神に祈るような気持ちでヘリアンはレイファの言葉を待った。

「――」

レイファは僅かに俯き。

躊躇いと呼ぶには短すぎる時間を経た後に顔を上げ、ヘリアンの瞳を真っすぐに見た。

そうして彼女は答えを紡ぐ。

「私自身を対価として、貴方様に差し上げます」

返ってきたのは最悪の言葉だった。

初めから覚悟を決めていた表情だった。

「ハーフェルフは、ノーブルウッドと人間の国家との間に起きた戦争の結果、生まれた者たちです。そしてその中には、人間に捕まった『ノーブルウッドの女王』の子ども含まれます。それが三代前の初代ハーフェルフ……私の曾祖母にあたる人物です」

つまり、私は『ノーブルウッドの女王』の末裔にあたります。レイファはそう口にした。

「ノーブルウッドの中で、彼の女王の血を引く直系の子孫は現国王のみです。従いまして女王直系の血には希少価値があります。また私は処女ですので、付加価値は更に高まります。奴隷商人に売却すればかなりの金額がつくのは確実でしょう」

一例として最近人間の国で取引されたハーフェルフには金貨五八〇枚の値がついたそうです、と。

レイファは平然と事実を語り、契約の言葉を綴つづっていく。

「小国とはいえ仮にも王族であり、かつノーブルウッドの女王の血も引く私であれば、それほど低く見積もろうともその百倍の値はつくはずです。また売却するまでの間、私にできることであれば何でもお申し付けください。当件をお受けいただければ、その瞬間より私の全権を貴方様に差し上げます。どのようなご要望でもお応えします。それが、我が方からの対価です」

淡々とした口調のまま、ラテストウッド国の女王は取引材料の説明を終えた。

レイファ「リムラテストウッドという商品の価値を貨幣に換算してみた。

更には白紙のカードまで添えて差し出そうとしてきている。

……吐き気がしそうだ。

「馬鹿ばかげている……仮にこの取引が成立したとして、その後のラテストウッドはどうなる？ 貴女はこの国の最高指導者だ。それを失った後の国のことをどう考えているんだ？」

「レイファが治めます」

即答だった。

奪還したレイファに、ラテストウッドの指導者を……女王の座を任せようというのだ。

「レイファもまた、私と同じくあの父と母の血を継ぐ者。ならば必要に駆られれば、あの子は王族としての役割をしっかりと果たしてくれます。今でこそ幼い振る舞いを見せてはいますが……姉である私がいるからこそ、わざとああしている節があります。ならば私がいなくなれば、あの子も立派な女王として国を導いてくれることでしょう。私はそう信じています」

真つすくな瞳まぶただった。

本当にそう信じているように感じられた。

攫われた民を奪還したところで、国としては延命策にもならないということは、ヘリアンでさえ容易に想像がつく。

それでも、レイファ・リム・ラテストウッドは妹を信じると口にした。

嘘偽りなくそう告げた。

「ですから何卒……何卒、ラテストウッドの民をお救いください」
言って。

レイファはその場にひざまずに跪き、更には両手と頭を地面に突いた。

「——私にはもう、これぐらいしかできないのです」
集落の中央で。

多くの民衆の視線が集まる只中で。

ラテストウッド国の女王であるレイファ・リム・ラテストウッドは、一介の旅人であるヘリアンに対し、は這いつくばって懇願した。

「他に手がありません。もう、どうしようも、ないのです。もはや貴方様に頼るしか、道が残されていないのです」

懺悔するような言葉だった。

罪を告白するような声色だった。

紡ぐ言葉の数々には隠し通せない悔恨かひごんが滲んでおり、嘘偽りのない事実を口に出しているのだと否応なく理解させられた。

……ああ、知っていた。

そのようなことはとうに知っていたとも。

本当はヘリアンとて以前から薄々と理解していたのだ。

ラテストウッドが既に国として終わっていることなど、とっくの前に気付いていたはずだった。

既に国としての体裁を成していない。

なにせ側近とされるウエンリでさえ、感情に任せて行動してしまうほどに追い詰められている。

レイファも口にはしていたが、あの時のウエンリは正気ではなかった。今は幾分か持ち直しているよ
うだが、きっかけ一つであのような凶行に及んでしまうほど、彼女たちの精神はすり減ってしまっ
ている。

そもそも希少な魔術を有するとはいえ、そして救出対象に王族がいるからとはいえ、囚われた仲
間の救出に女王自らが出陣しなければいけないという状況に追いやられている時点で既に国として
末期だ。絶望的という表現ですら生温い。なまぬる

恐らくは最後の手段という位置づけだったのだろう。

宣戦布告拔きの奇襲攻撃により軍力の大半を失い、三週間に及ぶ襲撃により疲弊しきっていたラ
テストウッドには、それしか手が残されていなかった。そして、賭け^かでしかない最後の手段を実行
し——案の定、失敗したのだ。

結果、ラテストウッド国の女王レイファ・リム・ラテストウッドは、一人の手勢も伴うコトなく

単独で森を逃げ回る羽目になり、危うくノーブルウッドのエルフに捕まる寸前だった。そして本来ならばその時点で国として終わっていた。それが最後の手段であった以上、何もかも全てそこで終わっていたはずなのだ。

——しかし、そこに誰もが予想していなかった第三勢力が現れた。

ノーブルウッドを含めたいずれの勢力にも所属しておらず、かつノーブルウッドの狩人長に勝る戦闘力を保有し、更にはハーフェルフに対して偏見意識を持たないというこの上なく都合のいい戦力が——ヘリアン達が現れた。

その時のレイファの気持ちはいかなるものだったろう。

救出に失敗し、両親を救えず、自らの命運も尽きようとしている中、国の滅びを食い止められる可能性のある人物を見つけた際の彼女の心境はいったいどんなものだったのだろうか。

ヘリアンには想像もつかない。否、知ったかぶりの他人には想像すること自体が許されるようなものではない。けれど、彼女が友好的に接してくれた理由については合点がいった。更にはヘリアンたち一行の素性を怪しみながら、全くそれを追求しなかったことについても理解できた。

なんてことはない。

ヘリアンたちが何者であろうとも彼女には関係がなかった。

そんなことは、ひたすらどうでもよかつたのだ。

レイファがヘリアンたちに出会ったその時点で既に、ラテストウッドを救うためには、見るも怪

しい旅の一行とやらに助けを求めるしかなかっただけの話だった。

ただ、それだけの話だったのだ。

だが――

「何を……何をしてるんだ!? 頭を上げてくれ、レイファ殿! 貴女はそんなことをしてはいけない人だろうに!?!」

「できません。色良いお返事をいただけるまでは」

レイファはひれ伏したまま動かない。

一介の旅人に対して頭を下げ、縋り付く情けない姿を衆目に晒している。

それは王として絶対にしてはならないことだった。民の頂点に立つ者が他人に遜り媚を売る姿など、どのようなことがあっても見せてはならないものだった。

何故ならば王は万能ではないからだ。民意を得られなければ国の運営などできるわけがない。

そしてだからこそ必要なのだ。

権力などという下らないものが。

権威などという巫山戯たものが。

人の上に立つ者には必要不可欠なのだ。

それは地球上の歴史が証明しており、教科書にも嫌になるほど詳細に記されている端的な事実である。

だが、レイファはあえて民衆の前で無様を晒すことを選択した。

民衆の誰の目にも留まるよう、わざわざ集落のど真ん中で、それも皆に言い聞かせるような声で

現状を説明した上で、余所者よそもものに対して地に頭を擦り付けている。

この時点でレイファ・リム・ラテストウッドの女王としての求心力は地に落ちただろう。自分の力ではどうしようもないと敗北宣言をしたのだから当然のことだ。そしてそれが分からぬ女王ではない。にもかかわらず、あえて彼女がこのような暴挙を犯したのはただ一つの理由から。

——民を救うためだ。

自国ラテストウッドの国民をヘリアンたちに救わせるためだ。本当に他の手段が残されていないという実態を、ヘリアンの脳髓たまに叩き込むためだ。

そして事実、ヘリアンは正しく理解した。レイファのこの行為が示す意味を理解してしまった。

それは『もう貴方しか頼れる者がいない』という懇願であり。

そして『もう自分ではどうすることもできない』という事実説明であり。

更には『見捨てられればここにいる全ての民が死ぬのだ』という脅迫であり。それらの全てが紛れまぎもない真実であるという証明行為だ。

たとえ他力本願になろうとも。

第三者の善意に付け込んででも。

民衆を脅迫の材料に使ってでも。

それでも、国と民だけは救う。

国民を救うためには手段を選ばない。

それがレイファアリムラテストウッドが示した在り方だった。

一介の旅人ごときにひれ伏すその姿こそが、ラテストウッドの女王としての最後の仕事だった。

「……………客人殿……………いえ、ヘリアン様。今までの非礼をお詫びいたします。何卒お許しください」
黙り込んだままだったウエンリは、その場で膝を突き、固く閉ざしていた口を開いた。

「レイファ様の代わりに我が身を捧げます。どうか我が身で取引に応じ——」

「なりません、ウエンリ」

地に頭を突いたままのレイファが、その言葉を遮る。

「貴女にはリリファの後見人となってもらわなければいけません。あの子一人だけではラテストウッドを率いることは不可能です。貴女が必要です」

「ですから、私の代わりにレイファ様がこの国に残って頂ければ……ッ！」

「ハーフェルフの成人女性の標準単価は金貨五〇〇枚前後。ヘリアン様たちに、そのような端金はしがねで命を張れと言うつもりですか？ それで納得していただくことが可能だとも？」

「……………レイファ様……………！」

「貴女の気持ちは嬉しく思います。しかしこれは私の仕事です。何もできなかった私の最後の務めです。邪魔を、しないでください」

その言葉に遂に堪こたえ切れなくなつたのか、ウエンリは綺麗なその顔をくしゃくしゃに歪めて涙を流した。そして泣き顔はそのままに、ウエンリもまた地面に手を突き頭を下げる。

それどころか、様子を見守っていた民衆もまた一人二人と頭を下げ始めた。憎きエルフを連れた

人間であるヘリアンに対し、顔を伏せて一様に哀願する。

——売れ、と言うのだ。

彼女を奴隸商人に売れと。

売って、命を張るに足る金銭を得てくれと。

女王の身柄を担保として攫われた者たちを助けてくれと、民が総出で頭を下げている。

誇りもなにもかもを投げ打って、地に跪いてそう伝えている。

そこにどれだけの葛藤があつただろう。守るべき主を人間に差し出す心境というものはどういふものなのだろう。自分の手で守れぬ民を他人の手で救ってくれと嘆願する心境は、どのようなものだろうか。

ヘリアンには分からない。分かりたくもない。分かっている確かなことは唯一つ。

それは今ここで彼女らを見捨てれば、彼女らの命運はその時点で尽きるといふ事実^{こと}だけだ。

「——」
なにこれ。

なんなんだこの状況。

気持ち悪い。

吐き気がする。

脳が理解を拒んでいる。

この状況を受け入れるなどと無茶振りにも程があつた。

たかが二十年も生きていない自分に、この場にいる全ての人の命運が預けられているなどという、

あまりに馬鹿げたこの現状を受け入れたくない。

ヘリアンはアルキマイラの王だ。

アルキマイラの国民に命じることができる立場であり、また命じた結果により生じた全てに責任を負わなければいけない立場でもある。

軽率な判断は許されない。

滅亡寸前の勢力に手を貸すなど馬鹿げている。

ましてや差し出されたモノと提供するモノの価値がまるで釣り合っていない。

自分の立ち位置すら定まらぬ身で他国の採め事に首を突っ込もうなどと愚か者もいいところだ。

そもそもお前ごときに手を差し伸べる資格があるのか。

他人を救えるほど高尚な人間のつもりなのか。

そんな自問にすら答えられない。

答える勇氣もありやしない。

強い人間ではないだろう。

身も心も弱すぎる。

立派な人間でもない。

それどころか矮小わいしょうですらある。

自信もない。

ちっぽけな臆病者おびやうものだ。

王の器には程遠い。

——けど、それでも。

それでも外道に落ちるつもりはない。

そんな生き方をするのだけは絶対に嫌だ。

今ここで彼女たちを見捨てようものなら、自分は生涯、その選択を悔やむことになる。

だって、俺おれの、この指は、あの日の約束ゆびまきりを、覚えている——

——だから。

「リーヴエ、エルティナ、カミーラ」

「ハッ」

「我、ヘリアンⅡエツダⅡエルシノークが汝なむらに問う」

圧を持ったかのような主の言葉に、三人の臣下は揃そろって膝をついた。

「ラテストウッド王国女王、レイファⅡリムⅡラテストウッドから我が国への救援要請を確認した。彼の国は多くの種族が共存する多民族国家であり、その成り立ちの経緯から相互扶助の建国理念、弱者救済の尊い精神性、そして最後の最後まで諦めることのない不屈の国民性を有している。これ

らは我が国の思想と大いに通じるモノがあると云えよう。

また彼の国の女王は我が国の救援活動に対し最大限の対価を約束しており、礼節も十二分に弁えて^{わかま}いることをこの私自らが確認済みである。

ならばたとえ彼の国が差し出す対価と我が国が提供する戦力との価値が釣り合わなくとも、中長期的戦略観点で将来を見据えた場合、彼の国とは良き縁を結ぶ必要があると私は考える。

この考察について否があれば今ここで答えよ」

偉大なる王の御言葉に対し、三体の従僕は沈黙を以つて答えとする。

「——結構。ならば命ずる。リーヴェは私と共に帰国し、ラテストウッド使節団の受け入れ準備を整えろ。エルティナは我が国へ来訪される使節団の案内とその護衛を任せる。カミーラは可能な限りの情報収集を行い、仮想敵^{ノイブルツド}国の戦力分析にあたれ。無駄にできる時間は一分一秒もない。各位迅速に行動を開始せよ」

「ハッ——！」

唱和で返ってくる答えを背に。

ヘリアンⅡ エツダⅡ エルシノークは未だ頭^{コニス}を垂れ続けるレイファⅡリムⅡラテストウッドに対し、一歩を踏み込んだ。

「面を上げられよ。ラテストウッドが女王、レイファⅡリムⅡラテストウッド」

強い意志が窺められた声で促され、女王は静々と顔を上げた。

額を土で汚したその顔には、ヘリアンが配下らに告げた言葉の意味を呑み込めないでいるのか困惑の色が浮かんでいる。

構うことなくヘリアンは告げた。

「此処に契約は成立した。此方が身分を偽っていたことについてはご理解いただきたい。我が国も少しばかり問題を抱えていた故、慎重に動かざるを得なかったのだ。許されよ」

そして名乗る。

「改めて汝に我が名を告げよう。我こそは万魔国ばんまこくアルキマイラが国王、ヘリアンⅡエツダⅡエルシノークである」

困惑の色を驚愕に変えて、ラテストウッドの女王は目を見張った。

「歓迎しよう、盛大にな。この日この刻を以ってラテストウッドの民は我が国の同胞はらからとなる。

—— 異世界国家アルキマイラへようこそ」

第六章 王の演説

その日、アルキマイラに住まう魔物たちは浮ついていた。

王が直々に演説を行うとの公式発表があったからだ。

「よお。聞いたか、例の話」

「ああ、勿論だ。我らが王が演説をなさるといふ話だろう？」

「おうよ。もう城前の広場は人ばかりで埋まつてる状況だぜ。オメエさんはこんな所でのんびりしてていいのかよ？」

「自分は《遠視》持ちだからな。屋根上にも上がって拝聴させていただくつもりだ。お前の方こそいいのか？」

「俺あ巨人族だかんなあ。時間が来たら人化解いて元の姿に戻ればいい。前に立っているやつがどんだけデカかろうと巨人族よりデカイつてこたあねえだろ。元の姿なら視界を遮るものはねえ」

「……お前、何メートル級だ？」

「三十」

「絶対やめとけ。第二軍団に目をつけられる。騒ぎを起こすような真似は本気でよせ。万が一演説の邪魔になるようなことがあれば第二軍団長に斬られるぞ」

そんな会話があちらこちらでされている。演説が行われる旨が発表されて以降、城前の大広場へ

向かう人々の列が途切れることはなかった。

なにせ首都丸ごとの転移などという前代未聞の異常事態だ。アルキマイラに住む魔物は多かれ少なかれ、この出来事に衝撃を受けていた。

街ごと未知の土地に飛ばされたということは、他の衛星都市や地方都市を全て失ったということだ。属国も失い、外部との流通に関しては完全に停止した状態にある。当然のことながら各種産業も大打撃を受けており一次産業はほぼ壊滅、二次産業も一部は麻痺しており、三次産業はなんとか機能しているが長期的視点で見るといつまで保つものか怪しい。

幸いにも国庫が開放されたことにより当面の生活は保証された。この先一年間は問題ないとお墨付きも得ている。だがその先はどうなるのか。

多くの脳筋種族は「まあどうにかなるだろ」と楽観的に考えていたものの、目端の利く高位な魔物ほど現在の危機的状況を察してしまっていた。

「まあ確かに、皆ひりついた雰囲気出してるよなあ。実際、小競り合いがいつにも増して多かつたって話じゃねえか」

「警備兵の愚痴でも聞いたのか？」

「馬鹿言え。第二軍団の警備兵はお硬いオツムの奴しか採用されねえんだから、仕事に関するボヤきなんて聞けやしねえよ。単なる風の噂だ」

「風の噂か……。まあ確かに、暴れてどうにかなるものでもない状況というのは、色々と溜まるものだな」

そう、それが問題だった。

魔物は基本的には力の信奉者だ。アルキマイラの国民は弱者であっても尊重する気質を持ち合わせているが、それでも本質的には力での解決を求めるといふ方向性に変わりはない。

故に、これが暴力で解決する問題であれば国民たちもストレスを感じることはなかっただろう。

『いざ力を振るえ』と言われた時のために備えてただ待つていればそれでよかつたからだ。

待つという時間は戦うための準備期間であり、そこにはストレスどころか心地よい高揚感すら与えてくれるものだった。

だが今回は勝手が違いすぎる。なにせ力を振るつたところで解決するような出来事ではないからだ。問題の焦点が『転移』となれば魔術に特化した第四軍団、もしくは呪術を修めている第六軍団の専門分野となるが、その専門家たちも芳しい成果を出せていない。

これが魔力が足りないなどの問題であれば遠慮なく第四軍団らの下へ押し寄せ、ありつただけの魔力を無理矢理提供する所存だが、そもそも解決の糸口すら見えていないときではどうしようもない。当然、腕力や物理能力でどうにかなるものでもない。

しかも国としては慎重に立ち振る舞わなければいけない状況下にある以上、国外で暴れて鬱憤を発散するわけにもいかず、狭い国内で悶々とした時間を過ごすしかない状況だった。その時間は少しづつ、しかし確実に国民らにストレスを与えていた。

——そんな状況の中、王の演説が行われる旨の公式発表だ。

国民全てがその発表に飛びついた。外敵からの守りを固めている守備隊以外の全ての魔物が、既に城前の広場へと集結しつつある。

城前の広場には十万を超える魔物たち全てを受け入れる許容量はなく、首都の各所に遠隔地の映

像を届ける映像投影玉が設置されているものの、王の姿を生で見たいという想いは皆一緒だったらしい。

あぶれた者は近くの建造物の屋根上に陣取ったり、《遠視》や《念視》を駆使したり、はたまた翼を持つ種族については宙に浮くなどして、思い思いの方法で城のバルコニー前の場所取りをしながら王の登場を待っていた。

城のバルコニーから周囲を見渡せば、どこに視線をやろうとも魔物の姿で埋まっている状態である。その光景はまさに万魔の集いと言えらるだろう。

「しかしまあ、俺らが言うのもなんなんだがこうして見ると壮観だなあ」

「全くだ。普段は首都にこれだけの戦力が集まることなどないからな」

「八大軍団長が揃い踏みなんてのは、今や建国祝賀祭の時ぐらいだからなあ。見ろよ、あそこには第一軍団長がいるぜ」

「……本当だ。第一軍団長が我らが王のお傍を離れている姿は珍しいな」

広場の中心に立つ高台。

それを囲むような形で円周状に第一から第八までの各軍団が配置されている。

その隙間を市民が埋めているような格好だ。

八大軍団長もまた、各々の軍団の下に姿を現している。国王側近たる第一軍団長が国王の傍を離れている姿は珍しく、近くにいる者は無遠慮な視線を向けていた。

そして、そんな喧騒も次第に鳴りを潜めていく。

予告されていた時刻が……アルキマイラの国王が姿を現す時間が近付いてきたからだ。

誰ともなく口を閉ざし、十万を超える民衆が集った大広場は静寂へと包まれていく。

——そして、その時が来た。

城のバルコニーから広場へと一条の光が伸びる。

光は広場の中心部——円柱状の演説台に接続されるなり結晶化し、道を成した。

そしてバルコニーから現れたのは一人の青年。

国の紋章が刻まれた外套を纏い、悠然と歩みを進めるその姿。

見紛うはずもない。

彼こそは民衆が待ち望んでいた万魔を統べし絶対者。

アルキマイラが国王、ヘリアンⅡエツダⅡエルシノークだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオ——ッ!!」

地鳴りのような声が広場を満たす。

ついに姿を現した王を民衆は歓声を以って出迎えた。

一步、また一步と王が歩みを進める。

その度に、城から伸びる結晶の通路が再び光へと姿を変え、天へ舞った。

散りゆく燐光を背にして歩みを進めるその様は優雅にして厳肅だ。

アルキマイラの国民に見守られる中、王は悠然と歩みを進める

そしてその身が演説台に辿り着くと同時、結晶の通路は完全に消失した。

待ちわびた王のその姿に民衆は誰ともなく身体を震わせる。

「——諸君、よく集まってくれた」

ヘリアンが言葉を発すると同時、先ほどまでの喧騒が嘘のように静まり返った。

王の言葉を聞き逃すわけにはいかないと、民衆は固唾を呑んで見守る。

「一五〇年……アルキマイラが建国して以来、一五〇年という長き年月が過ぎた。振り返ってみれば一瞬の出来事のようにであり、しかし濃密な時を諸君らと共に刻んできた」

王はつと天を仰いだ。

何かを思い返すかのような仕草だった。

「始まりの一步は三体の魔物と共に刻んだ。小さな狼獣人が一体、低位の魔猫が一体、白妖精が一体、それに古ぼけた木造の民家。それが私の持つ全であった。たった三体の魔物がヘリアンという男の持つ全戦力であり、容易く壊れそうな安っぽい民家一軒がアルキマイラの唯一の拠点だった」

第一軍団長が。

第二軍団長が。

第三軍団長が。

「始まりの三体」が耳を澄ませる。

「武器はなく道具も碌なものがない。頼れるのは三体の配下の素の身体能力のみ。野良ゴブリン一体を狩るのにすら神経を削った。奇襲を仕掛け、三体同時に襲いかかることでなんとか勝利した。倒した野良ゴブリンから手に入れた刃毀れの著しいナイフが、アルキマイラが手に入れた最初の武器だった」

全身鎧の獅子頭が腰に下げている短剣に手をやる。

一度錆潰され、アルキマイラの刀匠により鍛え直された鈍らがそこにあった。

「来る日も来る日も戦いに明け暮れる毎日だ。そうして戦いながら少しづつ仲間を増やし、鍛えあげた。そして一方で拠点を築き始めた。古ぼけた木造の小屋の中、狭い部屋に身を寄せ合い雑魚寝をするしかなかった日々だったが、ようやく、始まりの三体に小さな家を与えてやることができた」

古ぼけた木造民家はその後改築され、一軒のとある酒場として営業を始めた。

アルキマイラに作られた初めての娯楽施設だった。

建て替えられてから既に百年以上が経過している。

「その後、戦乱の時代が訪れた。誰もが生き残りに必死だった。戦いに明け暮れる日々は続いた」
だがアルキマイラは生き残った。

時に敗北し時に勝利しながら、周辺諸国らと凌ぎを削り、あの厳しい時代を生き延びたのだ。

始めは弱かった魔物たちも度重なる戦いを経て実力者となり、第一軍団、第二軍団、第三軍団という戦闘組織を構築した。

各軍団の団長には、始まりの三体が据えられた。

「そしてある日、我が国の資源を狙って急襲をかけてきた国があった。我らは彼の国の侵攻を辛くも退け必死の交渉により和平を結ぶことに成功したが、戦争による被害は甚大だった。当時のアルキマイラの軍事力は乏しく、その少ない軍事力も先の防衛戦により大半を失った。急速な軍拡が求められた」

第四軍団が作られた。

魔術方面に特化した軍団だ。

しかし、それでも他国より軍事力は劣っていた。

第五軍団が作られた。

巨人族や鬼族などで構成された重装軍団だ。

ようやく、周辺諸国と渡り合える程度の戦力が揃った。

「しかし、軍拡を進めた我が国は、更なる発展の道を進むに足る土台が作られていなかった。内政を二の次にするしかなかった我が国の技術力・経済力は他国に水をあけられており、近い将来、他国に呑み込まれる未来が見えていたのだ。

故に私は、アルキマイラを滅びの道から救うため……内政大国であった隣国への侵攻を決めた。

幸いにもその侵攻作戦は速やかに達成され、その結果として一人の王が世界を去り、残された高水準の技術と国民は我が国の一部となった」

ヘリアンにとつては苦い記憶だ。

唯一、アルキマイラ側から仕掛けた侵略戦争だった。

以降のアルキマイラは専守防衛に務め、しかし一度戦争を売られたならば容赦せず撃滅し、併合した。「災厄の時代があった。災神と呼ばれる存在が世界を滅ぼそうとしていた。過去の怨恨を忘れ、国と国が手を取り合ってこれに抗い退けた。しかしいずれの国も甚大な被害を蒙り、もはや戦争どころではなくなった。その後冷戦の時代が訪れた。表面上は穏やかな時代だったが、水面下での妨害工作や諜報活動が活発化した」

第六軍団が作られた。

妨害工作や情報戦に特化した軍団だ。

彼女らの活躍により、熾烈化した水面下の戦いを生き延びた。

「その後も戦いは続いた。主要大国が周辺諸国を巻き込んで相争った。後に第二次戦乱期と呼ばれる時代だ。そして長きにわたる戦いの時代を経て、列強諸国は数を減らした。三大大国の時代が訪れた。我が国もまた、そのうちの一国として他国と鎬を削った」

第七軍団が作られた。

発掘した古代文明の遺産の管理、およびそれを参考にした更なる技術革新を彼らに任せた。

彼らは想定以上の成果を叩き出し、国力ならびに軍事力は飛躍的に増した。

第八軍団が作られた。

竜種を中心に構成された軍団だ。

絶大な戦闘力を持つ彼らはアルキマイラの切り札となり、その後の戦場で多大な戦果を上げた。

「そして、再び災神が出現した。しかも、以前よりも遥かに強大な存在となって現れた。大国並びに中小国家は戦力を総動員してこれに抗い退けることに成功する。だが、いずれの国も少なからぬ被害を被った」

しかし、とある大国だけは力を温存しており被害は軽微だった。

災神を退けた後に世界の覇権を握らんと画策し、戦力を出し渋ったのだ。

「とある大国は災神により弱った我らにその牙を剥こうとしたが、その国は災神という世界の危機を傍観する、世界の敵と見做された。

どれだけ絶大な力を持つ超大国だろうが、世界の全てを敵に回して勝てるわけもない。その国は自国以外の全ての国を……文字通り世界そのものを敵に回してあっさりと滅んだ。大国と呼べる国は二つにその数を減らした」

そして、もう一方の大国の国王と会談した結果、世界の覇者を争う決戦を行うことになった。

時を決め、場所を決め、持ちうる全ての戦力を可能な限り鍛え上げ、アルキマイラはその決闘に文字通りの全戦力を投入した。

「世界の覇者を巡る一大決戦が行われた。戦いは激しかった。かつてないほどに大規模で、かつてないほどに厳しい戦いだっただ。しかし我々は幾らかの幸運に恵まれながらも、その決戦に勝利し、世界の覇者の称号を手に入れた。アルキマイラは唯一無二の超大国となり、黄金の時代が訪れた」
その後は一時的に平和な時代が訪れた。

災神が現れたとあらば中小国家の盾となり世界を守った。

近隣に新興国が作られても、その発展を妨害することなく見守った。

中小国家群が同盟を組んで戦争を仕掛けてきた際には正々堂々と受けて立った。

決して自ら攻め入ることはなく、他国から挑まれた戦いだけを覇者として迎え撃った。

そんな時代が、三十年程過ぎた。

「そして今——我が国は未知の時代を迎えている」

アルキマイラの王ヘリアンは、一度そこで言葉を区切った。

「皆も知^{みな}つての通り、我が国は首都ごと強制転移されるといふ事態に襲われた。しかも転移させられたのは城と城下町に留まり、街道を隔てた先にある施設等については転移してきていない。その後の調査により、今我らが立っている大地は未知の大陸であることが判明した。それどころか、我

らがあった世界とは異なる世界——異世界に飛ばされてしまった可能性が極めて高い」

静まり返っていた民衆が、堪え切れないようにざわめきの声を漏らす。

「首都以外の都市は転移されていない様子で連絡がつかない。当然、衛星都市に滞在させていた軍についても同様だ。つまり我々は完全な孤立無援状態にある。我々が保有する戦力は今この首都にいる軍隊のみ。首都在住の民も含め今ここに集った諸君らがアルキマイラが保有する全人口であり、また総戦力というわけだ。転移前と比較すればその数、実に百分の一以下になる」

ざわめきの声が大きくなる。

一部の耳ざとい者や知恵の働く者は、ある程度予測していたのか動揺の声こそ漏らさなかったものの、深刻そうに眉を顰めた。

「元の場所へ帰還する手段については目処すら立っていない。魔術的、呪術的な観点から調査をしているものの解決の糸口すら掴めずにいる。長期戦の構えを取らざるを得ない状況だ。しかしながら首都に備蓄している食糧は一年間分のみ。それを過ぎれば、ここにいる全員を国が食わせてやることはできなくなる。

しかもそれだけではない。森に住まうハーフエルフの国、ラテストウッドと接触した我々が得た情報によれば、我が国が転移させられたこの地は禁忌の土地とされており、強力な魔物が徘徊する危険地帯であるとの事実が判明した。

更に、我が国を取り囲む森全体が幻惑効果を帯びており、近距離ならまだしも遠距離の調査魔術は尽くが妨害されている。そのため、周囲の地形の把握すらままならない。国としては目隠しをされたも同然の状態に追いやられているということだ」

隠すことなく滔々と、王は国の現状を述べていく。

そして民衆の纏るような視線を一身に集めた王は、一際沈痛そうな表情を浮かべ、

「——絶望的だ」

と、そう言った。

「危険地帯へ強制的に転移させられ、孤立無援の状態に追い込まれた。転移の原因は分かかっておらず、解決の見込みも立っていない。産業は尽くが機能不全に陥り、備蓄している食糧も一年が過ぎれば底を尽きる。更には、国土も人口も軍事力も、その殆どを喪失している状態だ。総合的な我が国の国力は、転移前と比較して百分の一も残っていないだろう」

王の言葉に、民衆は声をあげることすらできなかった。

薄々と察しはついていたものの、王の口から直接放たれるその言葉の数々は現実味を帯びており、衝撃を受けずにはいられなかったのだ。

危機的な状況に追いやられているという現実を否応なく突きつけられた民衆の多くは、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

「どうしようもない。抗うことすらできない。この国は……アルキマイラは、終わりだ」
遂に放たれたその言葉に民衆は俯いた。

中には肩を震わせる者すらいた。

世界の覇者たるアルキマイラの国民として相応しくはない姿だ。

だが誰も責め立てることはできない。

誰も彼もが王の言葉に衝撃を受けていたからだ。

沈鬱な静寂が広場を満たす。

その民衆に向け、王は問うた。

「——そのように考えている者はいるか？」

民衆は弾かれたようにして顔を上げた。

その殆どが多かれ少なかれ、不意を打たれたような表情を晒している。

「そのように考える必要がどこにある？」

再びの問い。

答える言葉を持たなかった民衆は、思わず横に立つ者と顔を見合わせた。

「アルキマイラは多民族国家だ。同時に、度重なる試練を皆の力を合わせることで乗り越えてきた『世界の覇者』でもある。これまで我が国が乗り越えられなかった試練など一つもない。戦争、天災、神の試練、災神……いずれの困難も自らの力で打破してきた」

それは歴史が証明する事実。アルキマイラが今ここに存続していることが何よりの証拠となる。

その証左だとしても言うように、王は国民の抱く不安を一つ一つ糺していく。

——危険地帯へ強制的に転移させられ、孤立無援の状態に追い込まれた。

「だから何だ？ ここには八大軍団という最精鋭部隊が集結している。戦う力は十分に残っている」

——転移の原因は分かかっておらず、解決の見込みも立っていない。

「ならば調査を継続し解決の糸口を見つけなければいけないだけの話だ。軍の垣根を超えたアルキマイラの調査能力は伊達ではない。いつか必ず帰還を果たす」

——産業は尽くが機能不全に陥り、備蓄している食糧も一年が過ぎれば底を尽きる。

「だったら開拓し、食糧を生産すればよいではないか。周囲には大自然が満ちており獲物も生息している。少々危険地帯とのことだが、我らの力を以ってすれば切り拓けない道理はない」

——総合的な国の国力は、転移前と比較して百分の一も残っていない。

「それがどうした。たかが百分の一になっただけだ。その程度の国力損失で何を絶望するものか。動乱期の危機に瀕した際には滅亡寸前にまで追い込まれたが、今もこうしてアルキマイラは存続しているぞ」

故に諦める道理はない。絶望するに足る理由がない。

王は言外にそう告げていた。

「我が国は未曾有の危機の只中にある。なにせ首都ごと強制的に転移させられたのだ。極めて危機的な状況であると言えよう。だがこれは乗り越えられない壁か？ これは我々の滅びを意味するのか？ アルキマイラはここで終わりなのか？」

今度の問いには答えを得た。

しかし民は己の声で王の言葉を遮ることを嫌った。

故に彼らは心中で叫ぶ。

否、と叫ぶ。

「ああ、否だ。断じて否である。そんな事があつてたまるか……ッ！　こんなところで終わつてたまるものかッ!!」

語気は強く。

国民の声を代弁する王に、民衆は我知らず拳こぶしを握りしめる。

胸のうちに巢食う何かが湧わき上がった。

「確かに未曾有の危機だとも。認めよう。だがそれがどうした？　この程度の艱難かんなん辛苦しんくなど我らは幾つも乗り越えてきた。それが今回に限つて乗り越えられない道理などどこにある？　そんな道理はあるものか！　あつてたまるものかッ!!」

叩たたきつけるような王の叫び。

力強い言葉。

放たれるそれは断言の勢い。

「眼前に立ちほだかる遙か険しいこの道は決して踏破成し得ぬものではない！　黎明期れいめいきに歩んできた道なき道の悪路を思えば、この程度の障害など何のことがあろうか!？」

ああそうだ。

確かにそうだったと民衆は思い出す。

アルキマイラは先人なき道を、自らの力で切り拓いて来たのだった。

「無論、私一人ではどうすることもできない。何故なぜなら私は弱いからだ。最弱の人間だからだ。戦術すべを知らぬばかりか、鶏ガラのように細いこの腕では剣を持つこともままならん。それどころかゴブリンの赤子にすら負けるだろう。だが、こんな私が今ここに立っているのは何故だ？　最弱の

私がアルキマイラの国王としてここまでやってこられたのは何故だ？」

問うまでもない、と言葉を挟んで。

王は誰かを迎え入れるかのように両手を広げながら、聴衆に対し視線を走らせ、

「——諸君らがいたからだ」

と、民に向けてそう告げた。

「強き諸君らが私を支え続けてくれたからだ。弱き私を王と認め、付いて来てくれたからだ。皆が手と手を取り合い、力を合わせることを良しとしてくれたからだ。故に、この危機に瀕して我らが必要なのは唯一つ——！」

王は全ての民衆に見えるよう、右手を高く振り上げて、

「戦うのだッ！」

握った拳を演説台に叩き落とした。

静まり返った広場に打撃の音が響き渡る。

「手と手を取り合い戦うのだ！ この危機に立ち向かうのだ！ たったそれだけを為すだけで我らはこの危機を乗り越えられる。強き諸君らにはそれができる。アルキマイラならば、それが可能だッ!!」

嗚呼、もう限界だ。

民衆の誰もがそう思った。

口端から熱い吐息が零れる。

身体が熱病に浮かされたように熱い。

胸の奥底に灯った火が爆発的に膨れ上がる。

喉元まで迫り上がった衝動は最早留まることを知らない。

行き場を求める熱が身体の中で暴れ狂い今にも溢れ出しそうだ。

「故に国民よ！ 誇り高きアルキマイラの民よ！ 諦観も絶望も振り払い、この危機と戦わんとするならば！ 弱き王たる私に付き従い、この危機に立ち向かわんことを願うならばッ！ —— いざ、咆哮を以って答えとせよッ!!」

そして、万魔の王のその言葉に身体中の熱が炸裂した。

そこにいた種族性別無機物有機物の区別なき全ての魔物が、溢れんばかりの是の意を籠めて魂の限りに絶叫する。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ——ッ!!」

怒号にも似たその咆哮。

ありとあらゆる叫び声が首都を満たす。

咆哮は砲声と化して外壁にまで届き、首都を覆い隠す結界が雷撃を受けたかのように震えた。

演説台に立つ王はしばらくその様子を見守り、頃合いを見て右手を翳す。

たったそれだけの動作で万魔の民衆は誰ともなく口を閉ざした。

身を焦がす熱はそのままに、周囲は再び静寂に包まれる。

「諸君らの気持ちは、よく分かった」

王は厳かに頷いた。

その一挙手一投足を決して見逃すまいと、その場を集った全ての魔物の視線が王を射抜く。

「……この森の北東部に、この地の国を発見した。名をラテストウッドと云う。ハーフエルフを中心に建国された多民族国家だ。調査を行ったところ、彼の国の理念は我が国に通じるものが極めて多いことが判明している。親しき隣人となれるであろう素晴らしき国だ。

そして、そのラテストウッドから我が国に救援要請が届いた。訊けばノーブルウッドという名のとある国が彼の国を滅ぼそうとしているとのことだ。ノーブルウッドはエルフ至上主義を掲げており、人間やその血が混ざったハーフエルフを迫害している」

迫害。

それはこの国では決して許されないものだ。

多民族国家アルキマイラが許容不可能な悪行だ。

しかも迫害対象に偉大なる王と同種族である『人間』が含まれている。

許してなるものか。

許せるわけもない。

民衆の胸の奥に燃る熱が、吐き出されるべき場所を見つけたかのように鎌首をもたげ、蠢く。

「侵略者、ノーブルウッドの兵士はラテストウッドの民を攫った。そして厚顔にも攫った民の返還条件として、旅人に扮していた第三軍団長を差し出せと要求してきている。——だが、奴らの要求に唯々諾々と従うつもりなど毛頭ない！」

当然だ。

アルキマイラは屈しない。

力で以って害そうとしてくるならば力で以ってこれに抗う。

そんな魔物たちの胸の奥を代弁するかのように王は語った。

王の御心みこころは自分たちと共に在る。

その事実を確認した民衆は、胸に一つの充足感を得た。

「我々は断固抗う！ 対話を拒み、自らの都合を押し付けようとしてくる者どもに——理不尽に振る舞う暴虐へと抗う！ 我々はそのようにしてここまで歩みを進めてきた！ そしてその歩みはこれからも続く！」

アルキマイラの歩んできた歴史。

強きを挫き弱きを助け、世界に平和を、親しき隣人には愛の手を。

されど道を阻はばみし障害は実力で以って撃滅し、勝利の味に酔いしれる。

「故に私はラテストウッドを新たな同胞と認めると共に、ノーブルウッドの暴虐に抗い、これを撃退することを決意した——ッ！」

王の宣言に、民衆は歓声で以って賛意を示した。

民衆を見下ろす王は鷹揚おうように一つの頷きを送る。

「無論、ノーブルウッドには対話を試みるつもりだ。我らは法を知らぬ蛮族ではないからな。言葉を用いず、獣ケモノのように振る舞うことを良しとはしない。しかしながら彼の国が対話を拒み、交渉が決裂したその時には力を振るわざるを得ないだろう。その際、並大抵の戦力では一抹の不安を覚えずにはいられない」

我知らず、民衆は拳を固くする。

その場にいる全員が「我こそが」との想いを強くした。

最近の戦では全八軍団から幾つかの軍団が選出され、出撃するのが常だった。

ならば我こそが。

我が軍団こそがこの地での初陣に相応しい。

否、我が軍団以外にはありえない。

興奮の熱に焦がされそうになった魔物たちは本気でそう考えていた。

最早この熱は戦いの場でしか散らせぬことを悟っていたからだ。

「ノーブルウッドの戦力は未だ不透明だ。敵の数、兵種構成、装備、防備状況、戦力規模の一切が不明である。しかもいざ戦となればこの地における初の大規模戦闘となるだろう。決して油断はできない。よって私は——アルキマイラ国王ヘリアンⅡエツダⅡエルシノークはいずれかの軍団に任せるのではなく、最も信頼している、とある魔物にこの戦を託すことにした」

広場がどよめきに満ちた。

近くにいる者と顔を見合わせ「そんな魔物がいたか」と、「未知なる勢力との戦争をたった一体に任せられるような魔物がいたか」と、視線で問いを交わす。

王が最も信頼を寄せる魔物と言えは、真つ先に思い浮かぶのは国王側近たる第一軍団長だ。

しかし第一軍団長は対単体戦闘において優れている魔物であり、彼女よりも対軍戦闘が得意な魔物は他にも大勢いる。

現に第一軍団長は戸惑った表情を浮かべていた。極めて珍しい表情だった。

単騎として強大な戦闘力を有し、更に対軍戦闘に長けている魔物としては第七軍団長や第八軍団長が該当する。しかし民衆の視線を集めた二人もまた、困惑の色を隠せないでいた。

単騎で行け、と王に命じられれば一も二もなく出撃する所存ではある。だが無駄死にを嫌うあの王が、保有戦力すら不明な敵勢力に対し単騎で呐喊させるわけがないとの確信があったからだ。では誰が？

その答えを持たぬ民衆は続く王の言葉を待った。

「私はその魔物を信じている。彼の者に討ち滅ぼせぬ敵など存在しない。彼の者こそが最強であると躊躇なく断言できる。最早その魔物を信仰していると言つても過言ではないだろう」

我が王にここまで言わせるほどの魔物がいる。

その新事実民衆は堪えがたい嫉妬の感情を覚えた。

しかも軍団長たちですら心当たりがなさそうだ。

つまりは国王側近にすら隠している国の切り札ということになる。

いったい如何なる魔物なのか。

固唾を呑む民衆に向け、王は告げる。

「其の魔物は世界を見届ける瞳を有している。

其の魔物は剛敵を斬り裂く爪を有している。

其の魔物は万物に威を示す鬣を有している。

其の魔物は絶大な魔を紡ぐ舌を有している。

其の魔物は城壁を打ち砕く腕を有している。

其の魔物は最果の音を聴く耳を有している。

其の魔物は巨軀をも支える脚を有している。
其の魔物は大空を支配せし翼を有している」

謳い上げるような王の言葉に八大軍団長は鋭く反応した。

瞠目する八体の魔物が思い出すのは、謁見時のとある出来事。

「この有事において私が最も信頼せし魔物とは……十万以上の魔物により構成された巨軀を持つ、
一体の融合魔獣である」

そして王は叙事詩を詠うかの如く言葉を紡ぎ、

「その融合魔獣の名は——アルキマイラ——」

遂に明かされた魔物の名に、八大軍団長を除く民衆は一瞬我を忘れた。

その空白の思考に斬り込むようにして、ヘリアンが——万魔の王が声をあげる。

「問おうアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、全てを見届けるその瞳は何処に在る!？」

王は演説台の真正面に対して問いを放った。

そこには国王側近の任を与えられた月狼がいた。

彼女は心のままに叫んだ。

「アルキマイラの瞳、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は一！ 偉大なる王に代わり、
全てを見届ける瞳なり！」

王と目が合った。

情動のあまり涙が溢れる。

しかし彼女はそれを恥とは思わなかった。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、敵を裂くその爪は何処に在る!？」

連なる問い。

応えとして韃走りの音が広場に奔る。

獅子頭の騎士の姿がそこにあつた。

「アルキマイラの爪、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は二！ 勇壮たる王に代わり、

敵を裂く爪なり！」

更に腰の短剣を引き抜き天に翳した。

逆の手に持つ聖剣に比べ、その短剣は見窄らしくすらある。

しかし主から初めて下賜されたその武器を、獅子騎士は誇らしげに掲げた。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、威を示すその鬣は何処に在る!？」

続く王の問い。

視線を受け止めたのは一人の女性。

「始まりの三体に名を連ね、唯一の希少戦力として黎明期を支えたエルフ。

「アルキマイラの鬣、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は三！ 深慮なる王に代わり、

威を示す鬣なり！」

彼女は胸の前で両手を組み、瞳を閉じた。

腰まで伸びる美しい黄金色の髪に陽光が煌めく。

神代の聖女は、深い慈愛に包まれた表情で祈りを捧げる。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、魔を紡ぐその舌は何処に在る!？」

高らかな問い。

応じるように進み出たのは黒い肌を持つエルフ。

宝物のように抱えているのは、国の紋章が刻まれた一冊の魔導書。

「アルキマイラの舌、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は四！ 至高たる王に代わり、

魔を紡ぐ舌なり！」

至高の王手自ら、細部を創造された初の軍団長。

彼女は豊満なその胸に埋めるようにして下賜された魔導書を掻き抱く。

胸の奥には確かな灯火を感じていた。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、壁を砕くその腕は何処に在る!？」

問いに、重機で地を打つ音が応じた。

否、一人の大男が地面を踏みつけた音だった。

彼は丸太のように太い両腕を突き上げ力の限りに吼え猛る。

「アルキマイラの腕、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は五！ 雄々しき王に代わり、

壁を砕く腕なり！」

その背後に居並ぶ鬼や巨人が地を鳴らした。

武器を持つものはその柄頭で、武器を必要としないものはその足で。

己らを率いる長と共に三度の打撃が地を揺らす。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、果てを訊くその耳は何処に在る!？」

愛しき君の問い掛けに。

とある女性かみすは鴉かみすのような黒翼を広げた。

蕩けるような微笑を浮かべ、艶つやのある声で彼女は詠う。

「アルキマイラの耳、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は六！ 穢れなき王に代わり、果てを訊く耳なり！」

想いの丈を言葉に籠めた。

恐らくは億分の一も伝わるまいがそのもどかしさすら愛おしい。

国の紋章が刻まれた下腹部を撫なでながら、彼女は熱い吐息を零した。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、その巨軀を支えし脚は何処に在る!？」

進み出たのは小人ハトリシツクサイズの小柄な体軀たいく。

十万以上の魔物から成る巨軀を支えし軍団の長。

少しでも王の瞳に映るよう飛び跳ねながら、此処にいるぞと彼は叫ぶ。

「アルキマイラの脚、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は七！ 先駆けし王に代わり、

巨軀を支える脚なり！」

彼の率いる職人たちが己の工具を手に突き上げる。

工具を持たぬ者は『この街を見よ』とでも言いたげに胸を張り両手を広げた。彼らの前に聳え立つのは職人たちの技術の結晶、魂を籠めて創られた白き王城の姿がある。

「ならばアルキマイラよ！ 弱き王に代わり、大空を統べしその翼は何処に在る!？」
虚空を打つような音とともに大翼が展開された。

人の身のまま竜翼を翳すのは赤髪の男。

彼は今、自身が英雄譚の只中に存在している事実を確信し、昂奮に身を焦がした。

「アルキマイラの翼、此処に在り！ 我らが軍勢に授けられし聖数は八！ 孤高なる王に代わり、大空を統べる翼なり！」

その背に控えた並みいる竜族のうち、幾体かが高揚の余り人化を解いた。

竜の姿が天に舞い、放たれた咆哮が首都の結界に直撃し轟音を打ち鳴らす。

それでも足りぬとばかりに叫び、数秒と経たず蒼穹が竜の身で埋め尽くされる。

——そして、その場に集う全ての者が理解した。

全軍出撃

アルキマイラの総戦力、全八軍団の全力投入。

それが王の下した決断だった。

加えて王は最も信頼する融合魔獣は十万以上の魔物から成ると口にした。

その数は現在のアルキマイラ軍の総数を超えており、それは即ち、軍に所属していない国民まで

もがその教のうちに含まれているという事実を意味する。

つまり、融合魔獣^クを構成するのは軍人のみにあらず。

国民一人一人に至るまでが王が信頼を置くに足る者なのだ。

万魔の王が信じるに値する存在であると宣言されたに等しいということだ。

—— 然らば、これに奮い立たぬ者などアルキマイラの民ではない—— ツ！

「ならばッ！ 嗚呼、ならばアルキマイラよ！ 王たる我が唯一絶対の信頼を預けし最強無双の融合魔獣^キよ！ 汝^メが意思^ラを司^ナりし、最弱の王ヘリアンが命^カずる!!」

ここに至り、民衆の氣勢^{ホウキウジ}は最高潮に達した。

王が紡ぎしその命令を、一言一句たりとも聞き逃すまいと耳を澄まし、

「—— 撃滅せよッ!!」

遂に下された王命に総身を震わせた。

「我らが征^ユく道を阻む者がいるならば是非もなし！ いつも通りだ、何も変わらない！ 立ちほだかる障害はただ実力を以って撃滅するのみ!!」

そうだ。いつも通りだ。何も変わらない。民衆はそれを言葉ではなく心で理解した。たとえ世界を違^タえようとアルキマイラが為すべきことは決まっている。

—— 強きを挫き弱きを助け、

——世界に平和を、

——親しき隣人には愛の手を。

——されど道を阻みし障害は実力で以って撃滅し、

——勝利の味に酔いしれる。

故に——ッ！

「故に征け！ 征きて力を振るえアルキマイラよ！ 最弱の王の命の下、最強無双の力を以って、我らの新たな同胞を一人も残さず救い出せ——ッッ!!」

言葉に、感情が爆発した。

誰も彼もが叫びを上げ、固く握りしめた拳を天高く突き上げる。

拳を持たない魔物^{モノ}たちは激しく足踏みを鳴らし、手足を持たぬ魔物^{モノ}は叫びに魂を乗せた。その咆哮は首都の結界を砕きかねないほどに強く、猛々^{ただけ}しく、誇らしげに世界を揺らす。

「雄々オオオオおお雄おオオオオオオオオお雄々おおオオ——ッッ!!」

最強無双の融合魔獣^{アルキマイラ}が、異世界で産声を上げた。

……とんでもないことになった。

案内された王城のバルコニー。

そこからの光景を目にして、ラテストウッドの女王レイファは足を震わせた。

初めて会った時から只者ただものではないと思っていた。その予測はノーブルウッドの狩人長を歯牙にもかけず撃退したことで確信に変わり、ラテストウッドに取り込めないかと画策した。

友好的に接し、問われたことには誠実に答え、少しでも好意を持って貰もらえるよう振る舞った。

旅人だと自称する彼らに怪しい点は山ほどあったが、あえて追及しなかったのもそのためだ。

単なる旅人ではないことなど最初から承知している。だがたとえ何者であっても構わない。なんとしてでも味方につけなければいけないことに変わりはないからだ。その正体がたとえ魔王であろうとも、ラテストウッドを救ってくれるならば魂を売り渡す覚悟だった。

何故ならば父や母の救出作戦に失敗した時点で……否、自分などが指導者にならなければいけない状況に追い込まれた時点で、ラテストウッドの滅びは確定していたようなものだったからだ。

そんな絶望的な状況とつじよに突如現れた救い手たすけびと。

もはや彼らの力を頼るしか手段がなかった。

勿論、彼らの力だけでノーブルウッドを退けられるとまでは思っていない。

だが攫われた国民を救い出すだけなら可能性はゼロではないだろうと思えた。

それだけに突然集落を去られた際には絶望しそうになった。

その直後、ノーブルウッドからの襲撃を受けたことにより心が折れかけた。

しかし、彼らは再び集落を訪れに来てくれた。

正直に告白すれば言いたいことは山ほどあった。ウエンリがそうしたように激情に身を任せ

かった。八つ当たりをしたかった。なんで今更と叫んでしまいたくなくなった。

けれど、自分は今やラテストウッドの女王だ。小国だろうが一国を背負う立場にある。

だからこそ心を殺して、冷静に振る舞うよう徹し、何もできなかった女王として最後の仕事を全うしようとした。

そしてその行いは幸運にも実を結び、『旅人一行』との協力が取り付けられた。

攫われた者たちのうち、せめて何人かだけでも救えればいいと思っていた。

そう、思っていたのだ。

なのに——自分は今、何を見ているのだろうか？

見たこともないような絢爛豪華な城に連れて行かれたかと思いきや、その城のバルコニーから一連の流れを見届けるに至った。しかし瞳に映るこの光景が信じられない。あまりにも現実離れしすぎた目の前の光景を受け止めきれない。

呆然と眺める視界の中、再び形成された結晶の通路を旅人が——否、万魔の王が足を踏み出し、太陽を背にしてレイファたちのいるバルコニーへと歩みを進める。まるで一枚の絵画になりそうなその背景にはありとあらゆる魔物の姿と熱狂があった。

『雄々オオオオ雄々オオオオ雄々オオオオ雄々オオオ——ツツ!!』

感情が爆発したかのような咆哮が比喻抜きに地を揺らしている。

視界を埋めるアルキマイラの国民。それはいずれも計り知れない実力を持つであろう魔物ばかり

だった。あろうことかその中には竜の姿すらあった。

そんな強力無比な魔物に囲まれる中、ヘリアンは悠々と歩みを進めている。何故そのように平然としていられるのか、レイファには欠片も理解できなかった。

連れてきた従者の多くは既に気を失って倒れている。唯一意識を保っているウエンリですらその場にへたり込んでおり、魔物らの砲声を受けた際には股の間から生暖かい液体を漏らしていた。

しかし、その様を唾う気にはなれない。むしろその反応が当然とさえ思える。幾らか耐性がある自分でさえ、今こうして意識を保っていられるのは奇跡に近かった。

蒼穹を埋める竜の群れ。

そのうちの一体でも差し向けられればラテストウッドは瞬時に滅ぶ。

いや、それどころかノーブルウッドでさえ、あの竜の一群に襲われただけでひとたまりも――。

「ご覧の通りだ。ラテストウッドが女王、レイファリムラテストウッドよ」

呆然としてるところへ、バルコニーまで戻ってきた万魔の王が言葉放ってきた。

「我が国は総力を動員し、此度攫われたラテストウッドの民を一人も余さず救い尽くすことを誓おう。できれば色々話をしたいところだが今の我々には時間がない。その後のことについては全てが終わってからの話とさせてもらいたいが、構わないか？」

——とんでもないことになった。

半ば放心状態でそんなことを思いながら、レイファは青褪めた顔で機械的に頷くしかなかった。